

Muv—Luv 関東絶対防
衛圏

八式健吾

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

1998年8月、BETA日本上陸

僅か一週間で帝都・京都を失った帝国軍は凄惨極まる撤退戦を行いつつも、是が非でも戦線を維持せんと大規模な学徒出陣を強行した。

徴兵された少女「直江神流」と生き残った帝国軍人「千葉春久」。

希望の見えない戦況の中で、それでも彼らは生き残るために抗い続ける。

目次

第2話	直江神流	2
第3話	千葉春久	6
第4話	直江親子の再会	20
第5話	大臣直轄対テロ・反オルタ勢力	276
鎮圧部隊『S』		59
第6話	第二機械化歩兵連隊第三中隊	67
第7話	鉄拳制裁	87
第8話	お金で買えない玉の輿	118
第9話	土下座は一時の恥、童貞は一生の恥	154
第10話	理想と現実の天秤	182
第1話	誰かが誰かのために	206
第1話	直江神流の親友たち	291
第1話	移動開始	232
第1話	強化外骨格概要	249
第1話	恩師と母校	265
第1話	現場レベルの人事問題	276
第1話	デートの約束	312
第1話	ソ連の銀狐	339
第1話	神流の親友	351
第1話	帝国軍情報本部	363
第1話	情報統制の残滓	383

第22話 五十嵐上等兵と真木野たち

393

第23話 燻る火種

417

第24話 Slice of Life

430

第25話 星に願いを

447

第26話 第一戦術機甲連隊第三中隊、

前哨基地展開完了

465

第27話 藤本中佐

484

第28話 笠原と東野

497

第29話 ミッションミーティング

536

第2話 直江神流

「……………」

目を覚ました直江神流の第一声はそれだった。

夢すら見なかった眠りから徐々に意識が覚醒し出すと、柔らかいベッドで仰向けに寝ていることに気付いて、身を包む倦怠感が薄れてくる。

次に、その大きな瞳に入り込む夜明けの陽光。

その光で自分を覆うような白い天井に気が付いた。

ぼんやりとする神流の意識が状況を正しく認識することを妨げていたが、窓から差し込む朝日が次第に意識を鮮明にしていく。

日の光が神流の瞳を瞬かせ、否応なく感じる違和感が周囲に視線を向かわせる。

上を見れば、視界一面を埋める白い天井と消灯している蛍光灯。

左右に目を向ければ、ページュの壁と朝日が差し込むガラス窓。

枕元の近くには水差しが置かれた病院特有の小さい棚。

首を捻れば、頭の直ぐ近くに長いコードで繋がれたナースコールの押しボタン式のスイッチが置かれ、胸元を見ればいつの間にかパジャマ代わりのジャージを着ている。

そうして、何となく自分が病室で寝ていることを理解した。

けど、感じる違和感が、もっと根本的な何かが違うと心に訴えかける。

不意に、いつもの——戦場で身に染みついた癖で、左手首の厳つい軍用腕時計を確認しようとして、神流は愕然とした。

慌てて上半身を撥ね起こすと、まじまじと何も無い自分の右手首を凝視する。

千葉に拾われてから、ほぼ外したことがない大切な——古びた黒い軍用腕時計が見えたら、心の底から止めようがないほどの焦燥感が込み上げてきた。

零れかける悲鳴を飲み込んで、神流は狼狽えながら首を振って周囲に見回した。

そして、すぐさま安堵の溜息を吐いた。

なんてことはない。

彼女の近くの小さい柵の上で、水差しに半ば隠れるようにして、アナログの黒い軍用腕時計が置かれていた。

まるでひつたくるように腕時計を掴み、素早く左腕に巻き付けるとその傷だらけの表面を愛おしく指先で撫でた。

大好きなあの人から貰ったお古の腕時計は、ただそれだけのことで少女の宝物だった。

あの人があ初めてくれた物。

生き残ることを決意したあの時からのお守り。

その時計の針を確認し、感じていた違和感の正体に気付くと神流は独りごちた。

「……そっか、起床ラツパが聞こえなかったから……」

だから、違和感があつたんだ……。

そんな言葉は口の中で消えた。

強制的に徴兵され、二週間もしないで最前線に送り出され、周りの同級生が虫けらのように死んでいく地獄のような日々。

その中でも鳴り続けた、忌まわしいとさえ感じるけたたましいラツパの音。

皮肉なことに、それは僅か二ヶ月足らずの内に神流の日常の一部になっていた。

時計の針が示す時刻は午前六時四二分。

「……千葉さん……」

意識しないで口から出た名前に、あつという間に涙腺が緩んだ。

幻のような記憶の断片。

『たった一度だけ』自分の名を呼ばれ、痛いぐらいきつく抱き締められた感触と温もり。

目を覚まして一分経つか経たないかのうちに別れ際の記憶を思いだして、そして気付いてしまった。

あの人は——千葉春久は生きていた。

だけど、私の近くにはいない。

ここには帝国軍がない。

愛していると思いの丈を伝えたあの人は常に戦場を求める。

いいえ。それも違う。

どんなに言葉を重ねても、本当は、きつと殺された妻子を忘れずに復讐のためだけに最前線を求めている。

妻子が殺されたという事実を知った今では、彼なら絶対にそうするだろうと確信してしまう。

悲しいと思うよりも早く、神流の両目からぼろぼろと涙が零れ落ちた。

それを止めたくて固く目を閉じる。が、それは全く意味を成さなかった。

こぼれ落ち続ける悲しみと悔しさに満ちた涙はまるで五月雨のように手に落ちては弾け、少女の嗚咽が津々と降る雨音のように、朝の光で満ちた病室に満ちた。

まるで山の木々を覆い隠す霧雨のように、深く、静かに――。

そんな悲しみの渦の中で、微かに残る幻のような記憶に縋りながら、神流は大事な腕時計をきつく握りしめて――。

「……………うそつき……………」

たった一言だけ呟いた。

第3話 千葉春久

一九九八年一〇月一〇日 一〇時五五分

帝国陸軍習志野駐屯地のとある建築物の喫煙所

帝国陸軍第一特殊作戦団歩兵中隊先任 上杉准尉

元帝国陸軍第三〇機械化連隊第一中隊第三小隊第二班長 千葉一曹

数個の机と椅子が置かれ大した装飾も広さもない殺風景な喫煙所兼談話室に男の声
が響く。

アイボリーの床、白い天井、部屋を照らす蛍光灯。

何もかもが無機質な部屋は小綺麗なであることが何となく異質だった。

「すまん。お前の配属先だけは希望通りにいかなかった」

「いえ。——神流の件で問題ないなら、それほど……。俺への件はそのままに借り
りにでもしておいて下さい」

高さ一メートルはありそうな円筒型の灰皿を中心に立つ二人の男達。

すまなさそうに事実を告げる黒い戦闘服に身を包んだ第一特殊作戦団歩兵中隊先任
である上杉准尉に、帝国陸軍標準戦闘服である緑を基調とした戦闘服を着込んだ元第三

○機械化歩兵連隊第一中隊第三小隊第二班長だった千葉一曹は事もなく答えた。

そういうってお互いに口に唾えた煙草から紫煙を肺に入れ、それから長く静かに吐き出した。

千葉が男達の間で置かれている灰皿に灰を落とす。次に上杉も灰を落とした。

最初に話を切り出したのは全身黒ずくめの戦闘服を着こなす男。

見た目は四〇歳ほど。

時代劇にでも出てきそうな武将のような厳つい顔と、年齢からは想像が付かないほど膨れ上がった二の腕。

精悍な顔に刻まれた深い皺が、見る物全てにこの男が生きてきた人生が如何なる物かと想像させる。

戦闘服の下に隠れた固く引き締まった肉体に無駄はない。

遠くから見れば飄々としていて、近くで見ればその全身から溢れる精气に誰もが驚く。

全身の筋肉を一分の隙もなく鋼のように練り上げた下士官の最高位、帝国陸軍准尉である上杉影虎。

受け答えたのは三〇歳ほどの男。

身長一八〇センチ近い、まるで武者修行を繰り返した格闘家のように引き締まった肉

体。

日に焼けた浅黒い肌。短く刈り上げた黒髪。

ガツチリした顎に見える無精ひげはこの男の性格を表すようでとてもよく似合う。

時折野生の獣を想起させる黒い双眸は鋭い眼光を宿し——悪く言えば目つきが悪い男、帝国陸軍所属の実戦経験豊富なベテラン一等軍曹、千葉春久。

特に落胆もなく、かといって相手に対して煽るようでも、優位に立ったような口調でも無い。

ただ、普通通りの返答であり、口調だった。

それに対する上杉も、事実を伝えた後は最初から何も気にしていないように言葉を続けた。

「そうだな。そうしておこう。言うまでもないが、あの娘に関しては完璧だ。自ら志願しない限り、もう二度と銃を持つことも戦場に立つことも無いだろう」

「だったら、十分です。准尉。そういうえば、選抜試験の結果はどうでした？」

千葉は三日前に受けた帝国陸軍国防大臣直轄の対テロ・反オルタ鎮圧を主任務とする帝国軍ただ一つの対人戦専門部隊の第一特殊作戦団——通称『S』の選抜試験の結果を訊ねた。

彼が受けた経緯は、単純だった。

理由の一つは上杉に受験を勧められたこと、もう一つは日本帝国陸軍最強部隊の選抜試験で自らの限界を試してみようと決めたからだ。

もつとも今回の選抜試験自体は日本帝国滅亡の危機に瀕している現状を鑑み、正規の試験ではなく簡略化された短い――だが、激しい試験だった。

どんな時も冷静さを失わない上杉は、試験の結果を伝える時も何も変わらない。

「^{オペレーター}戦闘員としては不合格。射撃が即戦力のレベルに達していない。特殊作戦教育課程に進める実力はあるが、それでも最低レベルへ仕上げするには少なくとも半年は掛かるだろう。お前が望むなら本部要員等として、歩兵以外のポストなら無いわけではないが……、ただ今の状況では第一^お特殊作戦^た戦団^ちにお前を^{オペレーター}戦闘員として鍛え上げる余裕も時間もない」

少しの躊躇いも無く結果を言い切る上杉に、千葉は感謝した。

彼個人としては今現在の実力を客観的に見ただけでも十分だった。

無論、彼は落ちるものとして選抜試験を受けたのではない。

受験する以上は合格を目指し、本気だった。

本気で実力を出し切ったからこそ、不合格という結果を素直に受け入れていた。

「いえ、十分です。受けるだけでも価値がありました。で、最終的には俺の配属先はどこになりました？」

選抜試験に悔いはなくても、今度配属される部隊は否が応でも関心を持たざるを得ない。

逸る心を抑えて、千葉はその先の言葉を待った。

「第二機械化歩兵連隊に確定だ。連隊のことは知っていると思うが、相馬原で再編中だ」「よりにもよって——。一二師団隷下の部隊じゃないですか」

上杉の言葉に千葉は露骨に嫌そうな表情を見せた。

無理もない。

ほんの二週間ほど前まで同じ第一二師団隷下の第三〇機械化歩兵連隊に所属していたが、直属の上官や司令部よりも現場の『S』を信用した。

その上、新潟では半ば命令無視に等しい独断専行を行い、戦略的要衝である万代橋爆破にも協力している。

その結果、日本海側のBETAに大打撃を与え、いま日本海側でBETAが集中しているのは一五万人が喰い殺された佐渡島しかない。

結果は良い方に出たが、そこに至った正確な過程を知っているのは極僅かであり、そのもの達には千葉はただの命令違反者にしか見えない。

実際には国防大臣直轄部隊である『S』が動いている以上、万代橋爆破は国防大臣ひいては内閣総理大臣の意志が裏にあることは確実なのだが、本来の日本帝国軍最高司令

官である政威大將軍を形骸化するような背任行為でもあるため、大声で言えるようなものでもない。

致し方がないところがあるとはいえ、千葉にとつて早くも新しい職場は碌でもない場所になりそうな心配がしてくる。

「容赦なさ過ぎじゃないですか？」 上杉准尉

少々不機嫌な口調となるが無理もない。

後ろ指を指されるであろう場所に喜んで行くような人は普通いない。

上杉准尉も、それはさすがに悪いとは思っているらしい。

少々言い訳がましく状況を述べた。

「そこでへそを曲げるなよ。俺たちとお前らで成功させた日本海側BETA殲滅作戦『ユキツバキ』で、だいぶ戦線に余裕が出来た。お陰で東北方面軍と北部方面軍で徴兵された人たちに対する訓練は一週間も延ばすことが出来て、今や三週間にまで増えたぞ。再編部隊が前線投入されるまでの時間も数日とはいえ増えたんだ。上出来な結末だ」

上杉はそこで言葉を句切り、また煙草を吸った。

「第二機械化歩兵連隊は京都攻防戦から親不知防衛戦、それに続く上越撤退戦で事実上の壊滅状態だ。同じ師団隷下とはいえ、お前のことを知っている奴なんて、ほとんど生き残っていないさ。ほとんど、壊滅した部隊と徴兵された新兵による実質的な新編部隊

になるから、まあ、ある意味「安全だ」。正直に言うのと、あそこの先任に同期がいてな。少し前に原隊が壊滅しても生きていたような腕利きのベテラン下士官が余っていないかと連絡があつてな。その時はそんな都合の良いことがあるものかとお互いに笑つていたが、丁度お前が転がり込んできた。だから、お前を推薦したんだ」

最後はにつこり笑つて言う。

そのどこか楽しそうな笑顔は、強すぎる古参兵ベテランである上杉に似合い過ぎていた。

「だからといって——」

その先の言葉は飲み込んだ。

上杉のような人物が己の腕を高く評価してくれるのは嬉しいが、本当に複雑だ。

陰口を叩かれるぐらいならどうでもいいが、しつこく事実を追求してくる士官がいたら、また『いろいろ』と動かなくてはならない。

BETAとの戦いだけでも疲れるのに、そんなくだらない士官相手に労力を割くような部隊には行きたくないというのが千葉の本音だった。

「門倉には——向こうの先任には、俺の方からお前の立場を先に伝えておくから安心しろ。不都合なことなど何も無い。良い奴だぞ、あいつは。考えようによつては、お前は運が良いんだ。一から部隊を作るような苦しさはあるが、それでもわざわざ再編成される部隊だ。人の名前を覚える前に最前線に突っ込まれることもなく、部下とコンビネー

シヨンを練習する時間もある。どうせ、寄せ集めの部隊だ。気兼ねなく動けるだろ」
「しようがない……。腹括りますか」

そういつて遠方を眺めながら、千葉も大きく煙草を吸い込む。

そんな千葉に上杉が突っ込む。

「おいおい。そんなことを言うなら、なんで中央^C即^R連^R隊を断つた？ お前ならレベル的に問題ないし、今すぐ行っても何ら困ること無いだろ」

「あそこは個人的にいろいろあるんで止めておきます」

そういつて千葉はこの話題を打ち切った。

中央即^R連^R隊とは戦略予備兵力として編成・運用されている帝国陸軍参謀本部直轄中
央即^R連^R隊下の機動性を重視して編成された歩兵連隊である。

無論、参謀本部直轄とあつて選り抜きの隊員が集まる精鋭部隊の一つであつたが、そんな部隊と自分との間にある確執は余りにも個人的かつ、くだらないものなので千葉は絶対に言わないだろう。

「ならば、観念しろ。お前らしくもない」上杉の駄目押し。

「……了解。他の奴等はどうです？」

千葉は次の話題として、新潟で別れ別れになつた部下のことを訊ねた。

千葉を含めた全員が書類上は第一特殊作戦団所属となつていたが、受け入れた側とて

一〇〇%彼らを信用出来るわけが無く、また信用してもならない。

よつて、彼らは別々の場所に匿われていた。

その指示を下したの当然、千葉の目の前にいる上杉である。

「——ああ、そうだな。お前の部下たちも確定した。怪我した——松元か。彼は今、自宅療養中だ。病院が満室で追い出されたつてな。次の配属先はお前と同じ第二機械化歩兵連隊だが、全治一ヶ月の怪我で現場復帰はまだ先の話だ」

千葉は、その言葉に何も言わずに頷いた。

妻よりも共に過ごした戦友だ。

何となくではあるが、そうした理由が分かる。

太平洋側の最前線を避けて再編部隊を選んだのは、愛妻と過ごす時間を少しでも長くしようとしての決断だと容易に想像が付く。

幸いなことは怪我が脱臼だったことだ。

脱臼は生体部品を使った交換治療が出来ないので自然治癒を待つことになる。

その為、完治するまでは戦場に出ることがない。

その上「ある程度安全」だから、上杉は松元の配属先も第二機械化歩兵連隊に決めたのだろう。

「あとの二人は……」

「水沢と久田です」

名前を思い出そうとする上杉に千葉は助け船を出す。

それに「ああ、そうだった」と少々ワザとらしく答えると、千葉は苦笑を浮かべた。何もそこまでする必要がないだろうに。

「水沢三曹と久田一等兵は、お前が言っていたとおり、に東北方面軍の教育団に叩き込んだ。二人とも一ヶ月もしないうちに異動になるかもしれないが、実戦経験ある軍曹が新兵どもに戦訓を伝えるのは良いことだし、あの学徒にとつては基礎を学び直す良い機会だ。悪い考えじゃなかったの、本人達には無理矢理納得して貰ったよ」

そう言つて、上杉はまた笑う。

その笑顔につられ、また上出来過ぎる結果を聞いた千葉も笑つた。

水沢は志願して軍人となった職業軍人だが、久田はこの間まで高校生だった少年だ。

神流と同じように徴兵され、最前線に送られた彼らの教育期間はたった二週間しかなかった。

衣類や装具を与えられ、最前線への移動等を換算すると教育を受けた実質的な期間は僅か十日間。

日本が滅亡の危機に瀕している非常時故に仕方がないとはいえ、そんな短期間で覚えられるのは軍人としてどうしても必要な基本的号令を体得することと、小銃の扱いを覚

え、軍隊で軍人として活動する場合や戦いの場面で欠かせない文字通り最低限の知識を詰め込むだけだ。

無論、二度も三度も訓練を繰り返すような時間的余裕もないので、それらを覚えないうまま戦場で死んだ者達も多いだろう。

久田はこの先何があるろうと——BETAが地球にいる限りと、結局は再び戦場に立たねばならないのだ。

ならば、彼自身の戦闘能力を向上させて生き残りを図る方が堅実だった。

そういう考えから、水沢を教官の補助をする助教として、久田は出戻りの新兵として教育部隊に異動させた。

あとは個人の努力と運次第だ。そう、煙草を啜えたまま千葉は呟いた。

「それで俺の異動はいつ頃ですか？」

最後まで迷惑をかけた部下達の将来も、一応ではあるが筋道をつけた。

次は自分が生き残り、戦い抜くために全力を尽くす番だ。

「四日後の一四日〇八〇〇にヘリポートから相馬原へ移動だ。ちようど訓練でヘリを群馬に飛ばすので、途中で相馬原に寄る。それでいいな？」

「了解です。重量制限は？」

ヘリコプター等で移動する場合、積載重量は重大な問題となる。

大人数で移動する場合、その割当量は無視できない問題であった。

「そんなところで余計な気を遣うな。特戦団おれたちのへりはパワーが違う。お前一人で運べる分なら、何キロでも問題無い」

「それじゃ、カスタマイズされたS専用強化外骨格も——」

「それは手荷物じゃなくて、装着装備だろうに」

意味もなく、大の大人たちが笑い合う。

たわいもない言葉は会話を打ち切るための前座。

急に真顔になった千葉は煙草を灰皿で揉み消してから、世話になった恩人に向き直った。

「いろいろと、ありがとうございます。これから身辺整理を始めます」

「何か必要なものはあるか？」

笑っていたのが嘘のような真顔で上杉が問うと、千葉は一瞬だけ悩んだ後に述べた。

「落とし物の八九式小銃改と実弾二七〇発。それとMOLLEの装具を少々貰えますか？」

「非常用の員数外か？」

その言葉に上杉は喜び、唇をつり上げた。

結果的には不合格とはいえ、自分の目利きに間違いはなかったと、とても満足そうな

笑みを浮かべた。

強化外骨格を失っても武器ある限りBETAと戦うという千葉の決意を耳にするのは、彼のように生まれついでての兵士にはとても心地よい言葉だ。

「ええ、新潟で強化外骨格ごと捨ててきたので」

心底残念そうに伝える。

その中には安月給を遣り繰りして無理に買った海外製のナイフや装具、さらには員数外の自動小銃まで沢山あった。

幾度となく繰り返した訓練と実戦を潜り抜けた愛用の小道具たちは、戦友と同じように愛着が湧くものだった。

「——分かった。戦場で回収した小銃が倉庫にあったはずだ。消毒してから、それを渡す。それでいいな?」

「はい。お願いします」

「ああ、あと、これは貸しのうちに入らん。何か要望があれば素直に言えよ。俺たちの補給庫から好きなものを持って行け。持って行くものはちゃんと員数さえ教えてくれれば、何の問題もない」

「分かりました」

少し笑いながらそう言うと、千葉は少し崩れた敬礼をしてから踵を返して部屋を出

た。

新たなる戦場。

関東絶対国防圏日本海側防衛拠点の要衝、帝国陸軍相馬原駐屯地。

再編中とはいえ、通称「韋駄天連隊」とその名も高き第二機械化歩兵連隊。

四日後には顔を会わすことになるだろう新しい九人の部下と、数名の上官達。

いつかまた戦場で戦友たちと出会い、共に戦うだろう。

そして、その場に、あの少女は——神流はいない。

それで十分。

俺は戦う。生きている限り、戦い続ける。

魂を削るような戦いの場に身を置く。

だから——。

神流の事を思い出す余裕も無くなるだろう。

千葉春久はそんな独り言を誰もいない廊下で零した。

第4話 直江親子の再会

一九九八年一〇月一〇日 一三時二〇分

新潟県村上市某所

遠くに見える蒼い稜線とその近くに漂う白い雲。

遙かな高見から地を照らす太陽はまだ高く、その光を楽しむように小鳥の群れが飛ぶ。

収穫の終わった田んぼの上では蜻蛉たちが踊るように飛び、森を眺めれば紅葉を始めた木々が美しい景色を作り出す。

山々を流れる風は穏やかに吹き、時折枯れ葉が宙に舞い、優しい日の光に包まれた平和な田園風景。

そんな中、紺のスカートと白いブラウスに青い淡色系のカーディガンを着込んだ神流が、田舎町を走る市営のバスから降り立ち、見慣れていたはずの景色を一瞥する。

彼女は入院していた村上市の病院から母親に付き添われ、生まれ育った故郷に約二ヶ月ぶりに戻ってきた。

神流の目に映る故郷の景色は何も変わらず、移り変わったのは季節だけ。

もう最後だと思つて故郷を見たのは、夏のある日。再び戻つてきた今日の季節は秋。生まれてから幾度となく過ごしたはずの故郷の景色は何も変わっていない。

なのに、何かが違うと感じる。

その違和感の正体を神流ははつきりと言葉に出来なかつた。

どうしても思い付かない。

もしかしたら、思い出したいのかもしれない。

そう考えながらも次第に考えるのを止めた。

そんな神流の鼻腔を刈り取られた稲穂の匂いがくすぐる。

無意識に神流は一息吐いた。意識よりも体の方が、緊張感を先に抜いた。

非日常的な戦場から、日常的だつた高校生活を過ごしていた故郷への帰還。

彼女の心はその事実を正しく認識していなかつたが、その変化は劇的であり、そして、その可能性は有り得ないはずの出来事だつた。

娘を追うようにバスを降りてきた神流の母親——直江君江が、幼子を連れて歩くように神流の左手をしっかりと握つた。

半ば無意識の動作では会つたが、母親である君江はもう二度と愛娘の神流を戦場に送りたくないと思つている。

それは無理もないことだったが、彼女——君江には別の心配もあり、それが彼女にそのような行動を取らせていた。

君江はつい先ほどまで居た村上市の病院で、幾度となく精神科の医者から釘を刺された注意事項を思い出す。

彼女の娘——神流は重度のPTSDにより、戦場にいた間に記憶の欠落または混乱や錯乱等の症状が確認されており、特に酷い場合は周囲の状況を全く認識せずに過去の出来事を思い出してパニック状態になるという。

君江は神流のパニックを見たことはない。

その目で見たことがあるのは入院中に凄惨な出来事思い出した——君江は経験した出来事を具体的にはまだ何も聞いていない——神流が全身に脂汗を浮かべて嗚咽しているのを何度も見ている。

心配した彼女が娘の背をさすりながら励まし手を握ると、アザが残るのではないかと思うほど強さで握り返された。

何もかも拒絶したように娘が毛布にくるまり、誰かに詫びながら泣き続けるのも繰り返し見た。

深夜に悲鳴を上げながら飛び起きたのは一度や二度ではない。

身も心もぼろぼろに傷つき、それでも確かな自我を保って生きているのは、不十分と

はいえ比較的早い段階で強制暗示を受けたお陰ではないかと医者からは説明されていた。

そして、その医者が囁いた忠告は母親である君江を恐れおののかすには十分すぎた。もう一度神流が戦場に行ったら、命尽きる前に精神的なストレスで廃人になりかねない釘を刺された。

それと同時に医者は無情な現実も母親に伝えた。

重度のPTSDではあるが、彼女の娘はまだ完全に実施していない強制催眠暗示等で――つまり、具体的には錯乱して銃乱射等をしない程度まで回復すれば、間違いなく帝国軍は復員候補者リストに載せると言い切った。

この一言が、母親を震え上がらせた。

戦場に行ったことのない君江にはどのような事が起きたのか、経験したのか、想像しか出来ない。

まして、娘が廃人になりかけてしまうような凄惨な出来事を具体的には想像できない。

だが、共感は出来る。

想像も出来る。

医者が分析する限り、神流のPTSDは友人や知人など大切な人を失い、さらに生命の危険が連続して経験した為のものだと聞いている。

君江は徴兵されたことはないが、大陸に出兵した夫がBETAより殺された過去がある。

さらに言えば、今年の夏に起きたBETAの日本侵攻では三人娘の長姉である智美も戦死した。

その悲しみを思い出す度に泣きそうになるが、その経験が残された三人の娘のためになるならば何度でも思い出そうと、彼女は覚悟していた。

そんな母親の決意とは無関係に、神流は右手を誰かに向けて降ったのち、はっと何かに気付いたように動作を止めた。

「……………？ 神流、どうしたの？ 誰か来たの？」

少し緊張しながら君江は神流に問い掛けた。

素早く、だがその動きを悟られぬように目を左右に走らすが、辺り一帯には誰もいない。

真つ昼間に時間を持て余しているような人は今の日本にはほとんど居ない。

健全な者は戦場に向かうために軍に入り、何かしらの技能を持つ者は忙しなく働き、子供は将来の為に疎開先の学校に通う。

誰もいない中での神流の行為も、この現象も、既に予想された事象の一つ。

ゆっくりと娘の正面に立ち、その瞳を覗き込む。僅かではあるが母親より娘の方が背が高い。

君江の視線は少しだけ上を向いた。

「……………うん……………。ごめん。見間…違…い」

ぼそぼそと言葉を零す神流を見た君江は有無を言わせず、繋いだ手を引つ張つてバス停のベンチに向かった。

娘をそこに半ば強引に座らせてから、血の気を失い青ざめた娘の頬を両手で優しく包んで、その瞳を覗き込んだ。

彼女が恐れていたとおりに娘の瞳には生気が無く、虚ろな眼差しを母である自分に向けていた。

それから数秒後。神流は何も言わず、ゆっくりと下を向いた。

何も言わぬ娘に掛けるべき言葉が出てこない。

話しかけることを躊躇う自分に、どうしようもない苛立ちが生まれる。

それでも一瞬たりとも娘から視線を放さない。

「どうしたの？」

深呼吸一つ挟んでの母の問い掛け。

遠い昔、神流がなかなか泣き止まない子供だった頃のように優しく落ち着かせる声で訊ねる。

神流はその声で不意に溢れかけた涙に、はっとなつて素早く指先で拭つた。躊躇う。

——言つて良いのだろうか？

そんな戸惑い。

下唇を噛み締めて、溢れかけた嗚咽を堰き止める。

君江は神流の癖で何か意地になつた時は下唇を噛み締めることはよく知っている。

そして、早くも主治医が告げた起こりうる現象が生起している。

だから、君江は静かに深呼吸した。

逃げてはいけない。

娘を救うためならば、母親は逃げてはならない。

だから、一言で核心を突いた。

深く、途方もなく深く——娘の幸せだった日常と思ひ出を掘り起こして扶る。

何もかも吐き出させるために——。

「神流が見たのは、佐知子ちゃん。——でしよ？」

優しい言葉を並べて見て見ぬ振りをするのは容易い。

その後のこと考えなければ、誰もが選ぶだろう選択肢の一つ。

その一つである誤魔化すという行為を、神流の母親である直江君江は投げ捨てた。

言葉の刃で間違いなく愛娘の心を抉ったことを、握りしめた娘の手の震えから感じ取る。

本当は母として怖い。

何も知らない自分が、娘に再び地獄を思い出させて苦しませるのだから。

それでも娘に辛い思い出を話させなければならぬ理由がある。

このまま、神流の精神こころを深く傷つけた出来事を何ら解決する事なく過ごしていったら。

——心の中で猛毒のような記憶が消えることも薄まることもなく。

思い出すたびに健全な心を削っていったら、娘の精神こころはどのようになっていくだろうか？

主治医が君江にしつこく注意していた点はそこだった。

何が何でも悲しい思いを口に出させなくてはならない。

そして、ごく僅かでも良いから精神科医のカウンセリングがまともに機能するようにしなくてはならない。

下手にまごついていたら、娘は強制的に『催眠療法』を実行され『戦場に再び立たなければならなくなる』可能性が高い。

それが何時なのかは分からないが、精神科医のカウンセリングが意味を為さないと判断されてしまったら、神流に対する『治療』は打ち切られ、戦場に立たせるための『処置』に切り替わってしまう。

ならば――。

道は一つしかない。

どうかかけてでも、たつぷりと時間を掛けながら解決しなくてはならない。

直江君江は病室で愛娘と再会した日の事は今でも鮮明に思い出せる。

あのとき正直に言えば再び愛娘と抱き合えるという幸運が、現実のものだとは信じる
ことが出来なかった。

始まりは、九月二八日の深夜に掛かってきた一本の電話。

その電話の音で布団に入ったばかりだというのに叩き起こされた、あの瞬間。
なぜか予感があった。

虫の知らせと言うものだろうか。

やけに電話が気になる日だったことを覚えている。

電話が鳴った瞬間に跳ねるように飛び起きて、慌てて電話を取った。

『夜分遅くに申し訳ありません。帝国陸軍の者ですが、直江君江さんはいらつしやいますでしょうか?』

落ち着いた男の声——それも明らかに二十歳を超えていそうな男性の問い掛けに、君江の体は堅くなった。

その瞬間、母の脳裏に掠めたのは、どこかの見知らぬ戦場でボロボロの戦闘服を身に纏い、四肢を食い千切られ、虚ろな瞳のまま、血の海の中で物言わぬ骸と成り果てた三女——神流の姿。

背筋を走る悪寒に体が震えた。滑り落ちかけた受話器を慌てて掴み直すと、どもりながらも必死になって言葉を探した。

まるで縫り付くように、離さないように、受話器を両手で握り、耳を澄ます。

あつという間に乾いて張り付いてしまった唇の皮を、剥ぐかのようにして声を絞り出す。

『——は、はいっ! わ、私が直江君江ですけども……。どちら様でしょうか……?』

そこから話が進まない。

いや、進ませることが怖い。

脳裏に掠めた不吉な想像が現実のものだったとしたら、もう耐えることが出来ない。

そんな考えがその身を浸す。

夫は満州で死んだ。

長女も対馬海峡で死んだ。

次女は無事だが、今日も太平洋側のどこかで戦術機を操り戦場を駆け巡っている。

そして三女はこの数日間、全くの音信不通。

またも脳裏を掠めるあの想像——愛娘の死。

早鐘の様に鼓動を刻む心臓が痛い。

あまりの緊張に胃が締め付けられるように痛み出す。

そんな事は夢にも思わないのだろう。

電話から聞こえる男の声は、あくまでもいつも通りという感じだった。

喋り出しに力みもなく、初めての相手でも動じた様子は全くない。

それが訳もなく——否、自分が娘のことでこれほど苦しみ、心配し、怯えているのに、

全く関係なく喋る様がとても心を苛立たせる。

『初めまして。自分はご子息の直江神流上等兵の上官だった千葉春久と申します。直江上等兵に関して緊急かつ重大な事態が発生しており、電話致しました。メモ帳など筆記用具の用意をお願い致します』

『——なにがあったのですか?! 神流に何があったのですか?! あの子は無事なんですか?! 生きていますか?!』

千葉に対する返答よりも、メモ帳の準備よりも、矢継ぎ早に叫び声に近い言葉が出た。
『教えて——』

『——生きています』

性急に返事を求めるあまり続けて喋ろうとする君江の声を、千葉の落ち着いた力強い声
が遮った。

はつきりと事実だけを述べたその一言が、君江の動きを何もかも——心臓の鼓動さえも
ままるで一瞬だけ止めたようだった。

そして再び心臓が鼓動を響かせたとき、涙と共に感情が溢れた。

——歓喜。

たった一つの感情が母親の身も心も埋め尽くす。

生きている。

その一言だけで涙が出た。

娘が生きている。

その事実を胸の中で反復するだけで、涙が溢れて止まらない。

今まで意識しないようにしていた不安がもたらす緊張は、本人の想像を遙かに上回つ
ており、それが切れた反動は激しかった。

体が震えて、声は嗚咽に変わった。

それが聞こえないようにと片手で口を塞いだ。大した意味はなく、その声は千葉の耳によく残った。

ありがとうございます。ありがとうございます。

と、言葉にならない言葉で、ただ娘が生きていると伝えてくれた人物に何度も繰り返した。

正確に言ってしまうと、君江は千葉という存在を忘れかけていた。

止めどなくこぼれ落ちる涙で歪む視界には、薄暗い室内も電話器も映っておらず、脳裏に浮かぶ神流が幼子だったときの姿しか見えていない。

その情景——幼稚園帰りの神流が、母親である自分に気付き『おかくさあくん!!』と無邪気に大声で上げてはしゃぐ姿。

夫を失い、それでも四人の娘を育てねばと日夜の別無く働いていた、精神的にも肉体的にも辛い日々。

それでも耐え切ったのは亡き夫と交わした約束と一重に娘達の笑顔と愛情の賜に他ならない。

夫との愛、親子の愛、家族の愛。

直江君江にとって、己の全てと感じていたほどの大事なもの。

だが、それは最早、彼女には決して取り戻せない。

昔、君江のすぐ側にあつた家族の団欒という幸せは、既に修復不可能なほど壊れてい
る。

夫は満州で喰い殺された。

愛した男の体は、肉片一つ髪の毛一つ異国の地から帰つてこなかった。

長女は対馬海峡で戦死した。

陽気で母親思いだった娘は、対馬からの光線属種の攻撃で乗り込んでいた軍艦ごと海
の藻屑になった。

次女は京都防衛線を生き延び、今も五体満足で生きているが、人が変わってしまった。
神流と遊びながら、妹たちの面倒を見ていた次女は二度と笑わなくなってしまった。

三週間前に突如帰郷し、自室に残っていた全ての物を形見分けして処分すると、座敷
の机に書き上げたばかりの五つの遺書を茶封筒に入れて置き、静かに口を開いた。

『お母さん、御免なさい。これから私は復讐の為に戦います。だから、私は——直江律子
はもう死んだと思つて下さい。神流が無事に帰つてくれるように、私が今までよりもつ
と、もつとBETAを殺します。必ず、日本を守ります。だから——。だから——。ど
うか、三人で仲良く暮らして下さい』

それだけを告げると次女は振り返りもせず戦場に向かった。

それ以来、手紙も電話も一切無く、完全に音信不通である。

四女はまだ中学生だ。

まだ疎開していないため今は一緒に暮らしているが、次々と姉を失い、本来の無邪気さは影を潜めた。

そんな日々を過ごしていた君江は無意識に三女の神流が生きているという可能性を諦めかけていた。

その様々な悪い予感を否定した、神流の生存という確固たる証言。

まるで低く立ちこめた雨雲が瞬く間に消え去り、辺り一面を眩しい太陽が照らしたかのような錯覚。

それはある種の幸福感にも似たものを君江にもたらしたが、続いて千葉が発した言葉はそれをいとも容易く半壊させた。

『直江上等兵を重度の精神疾患等により強制的に一時除隊させます。お母さんである貴女には申し訳ありませんが、いろいろと勝手に手を打ちました。詳しいことはお話することが出来ませんが、明日にでも処理し終える必要書類等は後日郵送致しますので、それを見て冷静に対応して下さい』

『——重度の精神疾患って！ 何があつたのですか!?!』

『重度のPTSDです。詳しく説明する時間はありません。メモの用意はよろしいですか？ 直江上等兵が入院している病院と部屋番号を言いますよ』

少しでも細かく知りたいと食い下がる君江に対して、千葉は素っ気なく応じた。それに得も言えぬ不気味さを感じて、慌ててメモ帳を手探りで探す。

この僅かな会話で君江の中での千葉の心象は最低に位置するものとなった。

無論そんなことは一言も言わず——もう四〇年近い人生経験があるのだから当然でもある——準備できた旨を伝えると、千葉は村上市内の総合病院の名と部屋番号を念のためにと二度繰り返した。

君江も書いた後、二度確認を取った。それから千葉は最後に、と付け加えた。

『今の状況のままならば、直江上等兵——いえ、神流は自ら希望しない限り、もう二度と戦場に立つことはありません。後日郵送する書類でその点は理解できると思いますが、それを見て貴女は俺を恨むかもしれませんし、憎むかもしれません。ですが、これが俺に出来る精一杯です。今のうちに娘さんの心を癒して下さい』

『……？ 貴方は一体、神流に……何を、したのですか？』

真意と真実を隠した訳の分からない言葉に胸がぎわつき、思わず眉間に皺が寄った。そうして発した言葉にすら、千葉は無関係のように応えた。

『害を為す様なことは何もしておりません。強いて言えば、ただの自己満足です』

その言葉で君江の眉間にさらに深い皺が出来た。

何も無いならば言うような言葉でもない。

さらに問い質そうとする気配を察したのか、千葉はそれを無視して言葉が続けた。

『病院の当直には一報入れておきましたので、今からでも面会は可能です』

『——分かりました。すぐ病院に行きます』

千葉の一言で君江は病院に駆け付けけることに決めた。

神流がどの部隊に所属しているかは既に知っているので、この上官に詳しいことを問い質すのは夜が明けてからでもいい。

駐屯地に電話を掛ければ済むことだろうと即座に判断する。

深夜なので交通手段は限られるが、通勤用のスクーターなら問題無い。

ガソリンが配給制になったため納屋に放置しているが、燃料タンクにはまだ残っている。
る。

そう決断すると一言だけ礼を述べて電話を切った。

それから三〇分後——もうすぐ日付が変わる頃に、君江は麻酔で寝たままの神流と深夜の病室で再会を果たす。

次の日の昼に娘が所属していた部隊に電話を掛けたが、応対した軍人には千葉と名乗った人物は確かに居たが、数日前の戦闘で行方不明になったと告げられた。

不可解に思う君江ではあったが、男が言ったとおりに神流は入院しており、様々な書類が入った大きな封筒も二日後には彼女の家に届いた。

封を開き、その書類を見て最初に感じたことは、千葉という男への嫌悪と侮蔑。

いかがわしい男で本当に実在の人物なのかとも疑ったが、書類の存在自体が千葉が実在していたことを確固と証明している。

今となつては、あの男が生きているのか死んでいるのかは分からない。

目の前の愛娘は、今も悪夢に苦しんでいる。

神流に実在するかどうかも怪しい男との関係を問い質したい気持ちもあるが、PTS Dに苦しむ様を見れば、聞くのも躊躇ってしまう。

千葉が行つたことに関しては嫌悪もするし侮蔑もするが、彼自身は少なくとも悪人ではないと感じている。

間違つても、娘の命を危険に曝すようなことはしないだろう。

その証拠に神流は君江の元に生きて帰ってきて、さらには一時除隊——予備役扱いになつている。

これらの現実の前では、出会つたことも無い男の詳細など気にする程の余裕も無く、また必要性も高くない。

その結果、次第にそのこと自体を忘れてしまうこともある意味、無理のないことだった。

そうして、直江君江は神流の前に居る。

だが、なぜか目の前にいる三女が幻のように感じた。

霞か霧か、まるで掴みきれない何かのような気がする。

再会してから二週間近いのに、君江は神流がどこかに行ってしまったかのように感じることもある。

なぜなら――。

生んでから、つい二ヶ月前まで、自分の傍らにいた愛娘は明らかに変わっていた。

その間にも、神流の震えは次第に大きくなり手から腕に、腕から足にと広がり、顔からは血の気が失せ、額には見えるほどの脂汗が浮かび上がった。

泣き出しそうに戦慄わななく唇から零れる音は言葉になることはなく、ただ浅く早い息だけが漏れた。

そう、直江君江の三女――神流は怖がっていた。

心をじわじわと締め付けるように増え続ける恐怖で考えが纏まらない。

少しでも気を抜けば意識が遠のきそうになる。

訳もなく叫びたくなる衝動を必死に押さえ込むと、胸が文字通りに締め付けられるような痛みを発した。

勘違いでもなく、幻想でもなく、本当に胸部の中央が押し込まれ、締め付けられるように痛い。

それで意識が途切れてしまえば楽なのかもしれないが、意識を失うことも、目を閉じて暗い闇に落ちることも、今すぐ目の前にBETAが出てきそうで怖い。もう二度と目覚めることが出来ないのではないかと思ひ込んでしまふ。

BETAが此処にいるわけがないのに、根拠のない被害妄想のような恐怖がどうしても拭えない。

(言つていいの？ 本当に全て話していいの？ 私は——)

神流はただ純粹に怖かった。

無条件に自分を癒そうと努力して、毎日介護してくれる優しい母親。

戦場で過ごした日々の中で忘れかけた暖かな温もり。

それらを感じながらも、それに縋り、頼り切ることが出来ない。

(私は——!!)

神流は母親の視線から逃げるように顔を伏せて下唇を噛み締めた。

泣き叫びそうな自分を、下唇を噛み締めて必死になって抑える。

いつも——高校に進学して徴兵されるまでの二年半の間、ほぼ毎日このバス停から通学していた。

朝に中学一年生からの友人である横山佐知子と待ち合わせて乗り、夕方にはここで共に降りる。

そうして他愛もないことを少し——時には長時間——話し込んでから、ここで「バイ」と別れて家族が待つ我が家に帰る。

二ヶ月前に途切れた、もう二度と繰り返すことがない日常。理由なんて特にない。

原因なんて分からない。ただ見えたのだ。

バスを降りた神流には、友人の佐知子がいつものように「バイバイ」と手を振っているのが見えた。

その一瞬後、佐知子は消えた。

まるで死んでいることを神流に見せつけるように幻と消えた。

神流にも分かっている。

今見えたものは幻。

自分が見たのはただの幻影。

その証拠に儂く音もなく消え去り、痕跡一つ残さない。

あの初陣の日、いつも隣に居て、そして戦車級に喰われて死んだ友人が生きているわけがない。

頭から飲み込まれた佐知子が肉片と成り果てた、あの一瞬は今もこの目に焼き付いている。

戦車級の口から嘔き出た佐知子の生温かい血を全身に浴びたことは忘れられない。

呆然とする自分の唇を濡らしたドロリとした赤い血。

髪を濡らし、滴り落ちた鮮血は神流の戦鬪服にさらに深く染み付いた。

耳を劈き、脳裏にこびり付いた甲高く、そして悲壮な友人の絶叫。

二度響いた絶叫の一つはハッキリと、そして二つ目は戦車級の口の中から聞こえた。

佐知子は飲み込まれる直前、恐怖で悲鳴を上げた。

甲高く、鼓膜を破りそうなほどの悲鳴。

戦車級に頭から一口で飲み込まれた佐知子は、足首だけを残して、神流の視界から消

えた。

そして不幸にも、即死出来なかった少女は戦車級の奥歯で噛み砕かれた時、激痛と逃れられない死により二度目の悲鳴を上げた。

ばりばりと骨が噛み砕かれ磨り潰される乾いた音と咀嚼音、そして絶望の、声にならない泣き叫ぶ悲鳴。

それは神流の耳にはくぐもった音で聞こえた。

戦車級の口の中から響く友人の絶叫は、その口が咀嚼で開く度に大きく聞こえ、噛み砕かれる度に小さくなり、瞬く間に聞こえなくなった。

ただ、不気味な口が友人だった肉塊を咀嚼する間、骨がボキリと折れる音が途切れる

ことが無く、筋繊維が切れながらブチンブチンと微かに不気味な音を発した。

咀嚼の回数が増える度に、佐知子だったものから絞り出された赤い液体が、強大な口から溢れ出て大きな水たまりを作った。

神流の友人であった横山佐知子は、戦車級の中で生きたまま嘔まれ、砕かれ、磨り潰され、骨を砕かれ、苦痛を味合わされたあげく、絶望のまま絶命した。

その時、神流には絶叫したような記憶がある。

なんと叫んだのかは分からない。

言葉になつていなかったのかも知れない。

ただ叫んだような気がする、曖昧な記憶。

目の前の光景だけが脳裏にこびり付いて、それ以外のことが曖昧になっている。

おそらく、その直後に手に持っていた小銃を撃つたはずだった。

そうでもしなければ生きてはいないだろう。

結局のところ、友人の死の直後から神流にはハッキリとした記憶がない。

思い出したくない。

きつと思ひ出したくないから無意識に封じ込めた記憶。

本当ならば、友人の死すらも忘れ去りたい。

だが友人の死に様は、それ自体を忘却することを決して許さない。

千葉たちと共に過ごしていた間は滅多に見なくなっていた悪夢の一つを、郷愁漂う生まれ故郷で見ただけのことに過ぎない。

その事実が、神流の心に軋みを上げて苦痛を生む。

その事実には、少女の心が恐れおののき恐怖で満ちる。

(——いつまで私は正気でいられるの?)

消えぬ思い出と、それが心身を蝕む恐怖。

今だつてそうだ。

真つ昼間から幻覚を見るような自分がまともだとは思えない。

自分は大了した自覚症状もないまま、徐々に壊れていつている証拠ではないだろうか。

そう考えると、背筋を走る戦慄で思考が凍る。

皮肉な事に、神流は自らの状況を半ば客観的に眺めるように努力していた。

それ自体は神流自身が無意識に死にたくないと考えているからに他ならないが、その考えが行き着く先の治療方法や対処方法までには少女の思考は達していなかった。

彼女自身で出来たことは付け焼き刃の自己暗示だけだ。

それでも、その努力のお陰で、戦場でBETAを見た途端に狂乱するようなことも気絶するようなことも無かった。

否。死の恐怖が、過去の恐怖を上回っただけかもしれない。

正気を失うかもしれない恐怖が少女の心身を蝕む。

まるで鉄に浮く錆の様に、食べ物に浮かぶカビのように侵食して、神流を形作る有形無形のを音もなく、ゆっくりと、だが確かに蝕み続ける。

神流は戦場での出来事を思い出としては、心身共に疲弊していく自分をはつきりと自覚していた。

そして最終的に行き着く先は、発狂して正気を失うであろう事に恐れおののいてい

る。
目眩がして、視界が霞む。

恐怖で萎縮した体が勝手に震え始めて、神流は縋るように母の腕を掴んだ。

それに応じて母の手が背中に優しく慰めるように撫でてくれるが大した効果はなく、怯えた自分の指先が母の腕に食い込んでいく様を知りつつも、それを押さえることが出来ない。

優しく抱き締めてくれることに縋りつつも、泣き出しそうな顔を見せられなくて、顔を上げることが出来ない。

サチが死んだことは理解しているのに！

人が生き返らないことは知っているのに！

今、目に見えたことは幻にすぎないのに！

——怖い!!

神流の心が悲鳴を上げた。

母親をこれ以上心配させたくなくて、下唇だけは噛み締め続けて嗚咽を消す。

溢れ出す涙は出るに任せた。

瞳を閉じれば闇が出来る。

それすら、怖い。

私は怖い。

BETAが怖い。

いつも私のすぐ側や物陰にあの異形の怪物達が潜んでいるような気がして、疑心暗鬼になる。

いつかどこからとも無く現れて襲いかかって来るような気がして、目を凝らす。

あの異形を思い出すだけで殺された人たちの最後を思い出して、身が竦む。

いなくなった人たちとの何気ない会話を振り返っては、二度と戻らないと虚無を感じる。

この先の人生で、未来を感じる事が無く生きていくことに意味を感じられなくて、何もかも投げ出したくなる。

不意に友人だった佐知子の悲鳴や幼馴染みだった智美の死に様を思い出せば、理由も

なく殺される恐怖で周囲を見回す。

何にでも恐怖する自分。

理屈や理論で、説明も解決も出来ない本能的な死への恐怖。

徐々に自分が正気を失っていくのではないかという恐怖。

だが、それだけが神流を苦しめているのではない。

(サチを助けられなかったのに……)

そう。

あの状況下で、神流は友人を助けられなかったと悔やんでいる。

自分は助けることが出来なかったと後悔している。

絶命の悲鳴が鼓膜を劈いたあの数秒間で、救出出来たはずだと考えている。

確かに理論的には不可能ではない。

だが、あまりにも非現実的でもある。

皮肉な事に生き残るために有効に機能していた彼女の冷静すぎる思考の一部が、まる

で自らを罰するかのようになっている。

その上、その思考はまるで駕籠の中のネズミが風車の中を走り回し続けるような堂々

巡りから抜けられない。

サチが襲われる直前、あの戦車級を見て二人とも硬直してしまった。

神流はサチが戦車級の口の中で二度目の悲鳴を上げる前に、あの戦車級を殺すことが出来なかつた。

あの時はまだ生きていたはずなのに、救い出すために撃ち殺すことが出来なかつた。そう、悔やんでいる。

富山での初陣で半ばパニック寸前に陥つた神流と佐知子は、戦いの最中同時に弾切れを起こした。

無理もない。

今まで見たこともない異形の怪物たちとの生死を賭けた戦い。

まるで砂浜に押し寄せては引く波のように延々と続く攻撃。

時速五〇キロ以上の速度で突進してくる戦車級の群れ。

それらは彼女たちが装備する六四式自動小銃の一発では絶対に倒せない。

必然的に連射が多くなつたが、素人に毛が生えただけの学徒兵では無駄弾も馬鹿にならない。

狙つた敵に弾を当てる事も、本当は簡単なことではないのだ。

ほんの二週間前まで、学校の教室の中でときには将来を語り合い、ときに他愛もないことで笑い合っていた一八歳にもならない学徒兵達。

命令一つ、葉書一つ。

意思の確認など一度もなく、国家と人類と家族のために命を賭けると徴兵された。

神流も見も知らぬ厳しい軍人達に迎えられ、手荒く戦闘服などの個人装具を渡されると、腰まであつた自慢の長い髪は乱雑に切り捨てられた。

たった一〇日間の訓練。

その内容は六四式自動小銃の分解と結合、そして射撃訓練。

それですら最初は怖かった。

耳栓をしていなければ難聴になるほどの銃声と、その体を貫く火薬の反動。

それらが怖くて反射的に目を瞑れば教官に怒鳴られた。

短い訓練期間で教えられた号令はごく僅か。

教えられたのは『射撃用意』『撃て』『撃ち方止め』『伏せ』『突撃』『着剣』程度の号令
——基本的な集団行動の号令は、教育基本法の改正により小学生の頃から教え込まれている。

短い訓練の間で特徴的だったのは、初めてBETAの映像を見たことだった。

初めて画像ではあるがBETAを見たとき、現実感がなかった。

いや、正確にはそれらは失せていた。

異形としか言いようのない生物たちの群れが、市街地と人々を襲う記録映像はおぞましすぎた。

徴兵された学徒達は、大型種のようなサイズの生き物が実際に存在できるのだろうか、まず自分の目を疑った。

四階建てのマンションがそのまま走ってくるような突撃級の迫力。

蟹のように巨大な両腕——全幅は約三〇メートルを超える黒い前腕部を振り回してビルを打ち砕く、人の顔のような感覚器を付けた四本足の要撃級。

巨大な目玉に人の足が二本だけ付いたような重光線級は全高約二一メートルを——つまり七階建てのビルに相当する高さ。

一番大きいと言われる要塞級至つては全高約六六メートルと二〇階建てのビルを超える高さともなれば、それが進撃する様は山が動くのと大差がない。

小型種が小型とか言われても、それは嘘だと思った。

言葉こそ小型だが、それは大型種と比べてのことであり全高約三メートルといえば、建築物で言えば二階の高さと大した差異はない。

至近距離なら見上げねばならないほどの大きさ。

赤い体躯で人と同じような歪な腕で襲い掛かり、人と同じような形をした巨大な——開けば一メートルは優に超える口で兵士や兵器を噛み砕く六本脚の戦車級。

多少はボカされていたが、人が喰い殺されるという衝撃的なシーンでは、ほとんどの者が気分を悪くし——神流もその一人であり、吐き出す者も結構いた。

さらに駝鳥だちょうのような二本の脚と象の鼻のような腕を持つて跳ね回る闘士級。

巨大な白いキノコのような歪に膨れた頭部と人の顔を模したとしか思えない顔が生理的嫌悪感をもたらす兵士級に至っては、その姿を正視することすら苦痛だった。

生々しくも凄惨な記録映像を見せられた夜は、徴兵された少年少女たち全員が不安に駆られて深夜まで話し込んだ。

そして、それが目的だったのだろう。教官達はこの日だけは深夜一二時まで、それを許可した。

その結果、次の日の訓練から誰も不満を言わなくなった。

元々表立って言うことなど無いが、影で言うことすらなくなった。

訓練で強くなって生き延びなければ、数日後にはBETAに喰い殺されてしまう現実を映像で見せつけられたからだ。

それら僅か六日後。

神流たちの初陣は、帝国本土防衛軍が富山市街地外縁に急遽構築した即席の塹壕での迎撃戦となった。

市街地を阿鼻叫喚、死屍累々の餓鬼道地獄に作り替えたBETAどもが、新たな獲物へ目掛けて——つまり迎撃しようとしている神流たちに目掛けて突進してきた。

神流たちが数キロ離れたところにいるにも関わらず、視界を埋め尽くし、砂煙を立て、

地響きを響かせて迫り来る大小様々な異星から来た怪物たちの群れ。

人類を喰い殺し、地球を食い尽くすために到来した異形の怪物達が、神流たちを喰い殺そうと迫り来る。

それは遠近感が失せ、現実感が消失する、あまりにも非日常的な光景。コマ送りのように迫る地獄からの使者。

いや、BETAなら地獄すら食い尽くすだろう。

そう思わせるような信じがたい世界。

これが神流が生きている世界だという現実。

事前に見せられた映像など嘲笑うかのような現実の恐怖と絶望。

銃を生まれて初めて手にしてから、僅か一二日目の初陣。

六四式自動小銃の弾倉交換が素早く出来なくて視線を手元に落としながら——小銃を見ながら、必死に新しい弾倉を交換し終えたとき、佐知子の目の前には覆い被さるよう一匹の戦車級が大きな口を開けていた。

薬室に初弾を送り込むために槓桿こっかんを引いたが遅すぎた。

何もかも凍り付かすような佐知子の甲高い悲鳴は、最後まで言うことすら叶わず異形の怪物に飲み込まれて途中で途切れた。

もう一度、くぐもって響く友人が発する絶命の悲鳴。

嘔み砕かれる骨の乾いた音。

生きながらにして肉が嘔み切られ、肉片に変わり続ける形容しがたい重く湿った音。巨大で汚い歯の隙間から嘔き出た鮮血。

それを全身に浴び、髪の毛からはまだ温かい血が滴る。

歪な口元から絞り出されるように血が滴り落ち、鉄の臭いを充満させる。

浅く掘った塹壕内に充満する血の臭いが鼻を突いた。

それはまるで友人の血肉を飲み込んだかのような錯覚を神流にもたらし、瞬時に込み上げた吐き気押し止める。

神流の意識がどこかに飛んだ忘我の一瞬。

ただ、その瞳と耳は目の前の出来事を何一つ見落とすことは無かった。

(怖い——!!)

あの時を思い出して怖い。

手足が震え、呼吸が浅くなる。

心臓が早鐘を打ち、意識が朦朧となりかける。

(お母さんは……。本当にお母さんは私を責めない？ 私を軽蔑しない？ 蔑まない？)

私は助けられなかった。

大の親友であつた横山佐知子を助けることが出来なかつた。

母も彼女のことは知つている。神流も佐知子の両親を知つている。

この真実を告げたら、母は自分を責めないか？

そんな事すら考えてしまう。

(サチは私の隣で死んで——、私はサチの隣で生きていて——。……一体、何が違つたの？)

それは運命のいたずら。

そうとしか言いようのない戦場の現実。

それを神流は知らない。

知つていたとしても納得出来ない。

結果、神流がどんなに考えても、その事を理解出来ない。

だが、これこそがこの世の理。

歴然たる事実。

不変の真理。

サチの両親のことを思えば、心が痛む。

自分の母がそうであるように、サチの両親だつて娘の無事を願い、無事の帰還を待ち侘びていたことは間違いない。

彼女の両親や幼馴染みの両親も、神流の母親と共に徴兵された自分たちを見送つてくれたのだ。

あの徴兵された日、駐屯地に運ばれるバスの中で神流とサチ、それに由利香はもう二度と両親を見ることが無いだろうと泣いた。

両親達も泣いていた。

誰が愛する家族と死に別れたいと思うものか。

そうして、潜り抜けた数え切れない実戦。

あの時、同じバスに乗った友人知人は誰一人生き残っていない。

あのバスで生き残った者は——全員が同じ部隊の配属ではないため——神流の他にも居るかもしれないが、ごく僅かであることは疑いようがない。

少なくとも神流が生まれ育ったこの村で生き延びた学徒兵は彼女一人しかいない。

(もしかしたら、助けられたかもしれない——)

そう思うのが自然かもしれない。

だが、これは神流の錯覚。

戦場で生き延びた者たちの多くは死んだ者たちのことを思い出し、その当時を様々な角度から思い返し、考え抜き、ひよつとしたらどうにか出来たかもしれないと悩み、悔やむ。

それはある意味、正常な精神の働き。

だが、一人は非力。少女一人でどうにか出来る事は限られている。

死の因果をやり直すことなど出来やしない。

(どうして——、どうして私は生き残ったの!?)

戦場で生き残った者たちは様々な場面でそう己に問い質す。

それは人と戦おうが、BETAと戦おうが変わらない。

(喋ったら、喋れたら——!!)

もしかしたら、気が楽になるかもしれない。

もしかしたら、叱責を受けるかもしれない。

自分の母親がそんな事を言うわけ無いと理性では信じていても、生き延びるためにエゴを剥き出しにした人々の中で生き抜いた神流はそれすらも疑うようになっていた。

あの僅か数日間で何人の女性が強姦された？

輪姦をされて殺された？

犯されるのが怖くて毎晩毎晩、学徒兵や女性が身を寄せて寝ていたのは己の身を守るためだ。

その後、何人の男達が処刑された？

憲兵は手っ取り早く規律と風紀を維持するため、犯人達を逮捕すると三日もしないう

ちに公開処刑にした。

犯人の多くは徴兵されたばかりの普通の男たちだった。

もう明日がないと思つた彼らは他人を傷つけるだけ傷つけ、最期まで身勝手に死んでいった。

最も彼らのような者は生きていてだけで軍隊の部隊活動に悪影響を及ぼすので、素早く処刑した憲兵たちの判断は正しい。

事実、その直後から部隊の規律は目に見えて良くなった。

神流がそんな心配をせずに眠るようになったのは千葉に拾われてからのことだ。

千葉に拾われた直後、どのような暮らしをしていたかと聞かれたことがある。

彼としては補充兵である神流が、どのような事を経験したかを確実に理解し、善後策を立てる為の質問だったが、神流がさめざめと泣き出すと問い質すことを止めて優しく頭を撫でてくれた。

悩みを打ち明けたのはそれから三日近く経ってからだったが、母親があゝの戦場の心理と現実を理解してくれるだろうか？

千葉にあつて母親に無いものは、戦場という極限状態で築き上げた信頼関係。

母の愛情はきつとそれよりも深いと思いつつも、それに裏切られたら本当に気が狂つてしまうと神流は恐れていた。

今はまだ話し出すことが怖くて堪らない。

(結局……私は、自分の事だけを考へてる……)

母親すら信じ切れない自分を心の中で嘲笑いたくなる。

私はいつの間になんか人間になつてしまつたのだろう。

惨めで――。

愚かで――。

悲しくなる。

私は本当に運が良かっただけなの？

本当にそれだけだったの？

そんな疑問が渦巻き続ける。

悲鳴と血の香りを思い出す度に、その渦は大きくなる。

在りし日の幸せの断片を夢想すれば、それを無くした悲しみに打ち拉《ひし》がれる。

だから神流は悩み苦しむ。

身を引き裂くような悲しみと溢れ出る涙と嗚咽を漏らし続ける。

――私は本当に生きていいの？

そう、ここは神流の幸せだった頃の記憶がある故郷。

それは決して元には戻らない大切さを今まで感じる事がなかつた幸せだった日常と、

当たり前のように側にいると思つた友人と、自分をいつも導いてくれた姉との、幸せだと感じた記憶があつた場所。

だが、しかし――。

少女の故郷にその幸せは何一つ残っていない。

第5話 大臣直轄対テロ・反オルタ勢力鎮圧部隊『S』

一九九八年一〇月一四日 一三時四五分

帝国陸軍習志野駐屯地のとある建築物内

第一特殊作戦団歩兵中隊事務室

帝国陸軍第一特殊作戦団歩兵中隊先任 上杉准尉

第一特殊作戦団の各中隊事務室は基本的に味気ない事務用机が幾つも並んでいる。

壁面に並んだ壁面書庫もシンプルなデザイン。

数個あるホワイトボードには各人の予定を書き込むスケジュール表等があり、他には地図を広げたりする際に使用する大きな机が数個。

一つの机には一台ずつパソコンが置かれ、壁際の棚には無線機なども見える。

情報収集用と表記されたテレビとラジオが数台。

見れば見るほど、飾り気がない機能性だけを求めた少し広めの室内。

日光を取り入れる大きな窓が特徴的だが、それもただの窓ガラスではない。

防弾処理が施された分厚い窓ガラスにはスモークが張られ、外からは内部を覗き込むことが出来ないようになっていいる。

その中で事務室全体見える場所に陣取っているのが、日本帝国国防大臣直轄帝国陸軍第一特殊作戦団歩兵中隊先任である上杉准尉。

部下達を直ぐさま掌握出来る場所が彼の定位置である。

事務室内にはもう一人の男が事務用椅子に座っていた。

その場所は彼の定位置ではないが、元々椅子が少ない事務室なのだ。

事務仕事をする人物がいなければ誰が使っても問題はない。

一九〇センチ以上の上背に女子供の太腿よりも太い上腕二頭筋を持ち、筋骨隆々という言葉すら生温いと感じさせる、彫りの深い造形の顔に静かな雰囲気を漂わす男——第一特殊作戦団歩兵中隊所属帝国陸軍二等軍曹内藤正毅が、下士官の長である上杉准尉に正対していた。

「——機械化歩兵ならば合格していた千葉を、何故放出したのですか？」

内藤の一言目はそれだった。

新潟攻防戦の最中、万代橋で少女を救助する際に左肩を負傷した内藤が、その腕を三角巾で吊したまま上杉に訊を尋ねた。

特戦団は確かに入団志願者に対し、要求するレベルが高い。

その中でも最も高いレベルを要求するのが生身一つで戦う歩兵と、対BETA戦に於ける人類の切り札の一つである衛士である。

千葉が最も得意とする強化外骨格を扱う第一特殊作戦団機械化歩兵小隊は極めて高い死傷率のため——その影には戦力として「使い易い」という側面もある——損耗が激しく、人員が常に頭数が不足しがちな部隊である。

確かに今の千葉は部隊内の平均レベルの技量ではなかったが、鍛え上げれば直ぐに要求される技量——つまり、千葉は技量的には選抜試験自体には合格している——に達することは、それほど難しく無いように内藤には思っていた。

それに溜息一つを挟んでから、上杉は内藤に答えることに決めた。

今となつては特に隠すようなことでもない。

「真実は、ただ単に俺たちと千葉と陸軍と政府が絡む程度の理由だ。千葉には悪いが特戦団おれたちとしては新潟の一件で情報省に痛くもない腹を探られるのは好かん。あの鎧衣とかに動き出されてはこちらも骨が折れる。代わりと言つては何だが、これでもその分いろいろと優遇した。無論これからも必要とあれば多少は「手を回す」。だから、それほど不機嫌になるな、内藤」

「……正直、納得しかねます。もしかして、彼にはそれ以外にも問題があつたのですか？」

顔に浮かべた不満の表情を隠しもせず、内藤は質問すると、上杉は少し戯けた表情を浮かべたようと片目を大きく見開いて口元を大きく歪めて口角を上げた。

「正直に言えば、何も無いわけではない。奴にはどうしても一点だけ、性格的に特戦団おれたちに向いていないところがある」

「――？」

「あいつはBETAを憎み過ぎている。それ自体は正常なことで、普通とも言えるがな。だからこそ、難しい。俺たちの仕事に耐え切れない公算が高い」

上杉の言葉でふと納得出来たような表情を内藤は浮かべた。

そうだ。

その通りだ。

千葉春久の性格ならば。最終的に特戦団から自ら出て行ってしまう可能性は否定できな

くない。「納得がいったか、内藤。千葉は確かに俺たちの一員になれるかもしれない有望株なんだが、彼の様な男には最前線で戦って貰う方が日本の為になる」

内藤が浮かべた表情に、上杉は満足したように続けた。

「俺たちは帝国軍ただ一つの対人戦専門部隊であり、国防大臣直轄の対テロ・反オルタ勢力鎮圧が主任務の第一特殊作戦団『S』だ。BETAと戦わない日々を千葉が耐えられるとはとても思えん。一応説明はしたが、こればかりは経験しないと分からないしな。京都防衛戦ですら、与えられた任務は要人警護と救助任務、迎撃対処しかなかった俺た

ちだぞ」

「——それは。ある意味、そうでしょうね」

対人戦専門部隊とはいえ、今は国家滅亡の危機。

彼らもBETA戦を行う事は珍しくないのだが、直属の上官たる国防大臣——ひいてはその上の内閣総理大臣にとって特戦団の無意味な損耗は許容出来る損害ではない。

その為、他の部隊に比べれば対BETA戦の回数は少なく、千葉のようにBETAを心底憎んでいる男には容易く我慢できるような職場ではないかもしれない。

上杉も内藤も新潟攻防戦では一週間ほど千葉と一緒に戦っている。

学徒兵が配属された機械化歩兵部隊を率いながらも、その損耗が大して無かったことは注目に値する。

新潟攻防戦時の最終段階では日本海側BETA殲滅作戦『ユキツバキ』発動条件を『S』と共に整える為に命令無視と独断専行。

ほぼ孤立無援のまままで部下六名と共に市街地戦闘を繰り広げ、最後の突撃で五名の戦死者を出しつつも生還。

全滅しても何らおかしくなかった状況だっただけに、その高い生存能力と戦闘能力は目を引いた。

何よりも絶望的な状況下で戦闘行動を支える精神的要素——特に戦意が極めて旺盛

であり、正に不撓不屈と形容出来る精神力がある。

精神力は軍人にとって重要な素質の一つである。

死と恐怖、苦痛と疲労、危険と困難が間断なく続く実戦を潜り抜け、なおも戦い続けるには強靱な精神力が必要不可欠である。

その点、千葉は逆境においても衰えぬ戦意を持ち、周りを鼓舞し続ける精神力がある。そこに注目していた上杉は選抜試験を通して、千葉の強靱な精神力の源はBETAに対する憎悪であると見抜いた。

選抜試験の試験官でもあつた上杉は、千葉はBETAを憎み殺したいが故に驚異的な戦闘力を発揮していると判断し、最終的に不合格の判定を下した。

それはある意味、第一特殊作戦団という部隊の性質上致し方ないとも言える。

『S』は日本帝国の国益を守る為に人類——他国の軍隊やテロリスト、または日本政府が誘致したオルタネイティヴ4計画に反対・妨害する勢力と戦うための部隊である。

彼らの敵は人間だ。

BETAも敵だが優先順位が違う。

滅亡の危機に瀕する人類ではあるが、今も一枚岩で団結しているわけではない。

BETA襲来以前と変わらず、国家間の覇権争いは継続中であり、むしろ滅亡の危機にあればこそ外交や国際会議を主体とした駆け引きや情報戦は裏切りと欺瞞とともに

激しさを増し、その影で合法非合法を問わない破壊工作を伴う熾烈な諜報戦が人知れず繰り広げられる。

つまり『S』に所属するということは、BETAでは無く、日本に敵対する人間と戦うということだ。

きつと千葉ならば『S』の重要性を理解して問題無く任務を遂行するだろうが、対BETA戦ほどの能力を発揮するのだろうか、上杉は疑念を持った。

最終的に千葉のような男には己が戦いたいように戦わせる方が、個人と日本のために良いと判断した彼は、今回の特殊作戦訓練課程選抜試験では千葉を不合格にした。

優秀な人材の確保が難しい今日では勿体ないと思ったことも確かだが、千葉と部隊の事を考えればその方が最善だと判断した結果でもある。

上官がそのような考えで千葉を不合格としたのであれば致し方ないと、半ば無理矢理納得して内藤は溜息を吐いた。

「補充人員はまた当分の間、無しですね」

「ああ、仕方がない。だが——」

そう言いながらも上杉は、巨体に似合わない諦観を浮かべた内藤に一言述べた。

「俺たちが帝国最強であることを望まない人間も、当然いるのさ」

そう言うってから上杉は椅子から立ち上がり、書類仕事を片付けるために壁面書庫を開

けて分厚いファイルを取り出した。

会話が終わった内藤は音もなく立ち上がり、事務室を後にした。

人類はBETAに滅ぼされ掛けても一枚岩にならない。

国家間どころか国内すら纏まらない。

上杉らはこのことを当然のことと受け止め、今日も昼夜を問わず秘密裏に任務を遂行し続けるのだ。

第6話 第二機械化歩兵連隊第三中隊

一九九八年一〇月一四日 一五時二二分

帝国陸軍相馬原駐屯地 一一号棟

第二機械化歩兵連隊第三中隊長室

帝国陸軍一等軍曹 千葉春久

千葉県の帝国陸軍習志野駐屯地から群馬県の帝国陸軍相馬原駐屯地に移動した千葉春久は、駐屯地の一角にある第二機械化歩兵連隊第三中隊事務室に挨拶するために顔を出した後、直属の上司となる中隊長との面接のために中隊長室で待たされていた。

BETA日本上陸以前に調達されたソファセットの座り心地は驚くほど良く、軍属として配置されている事務員が出してくれた薄い緑茶を啜りながら、自分の目で確認できたことと用意されていた各種資料を整理していた。

まず、当然のことではあるが再編中である第二機械化歩兵連隊は極めて忙しい状態だ。

先ほど覗いた事務室では並べられた各係の机の上に関係書類が山積みで、武器や弾薬などの係業務に就いている下士官達は軍属として配置された民間人——その多くは年

年齢や健康上の理由により軍務に耐えられないと判断された人たちと共に必死になって書類業務を片付けている。

ここに来る途中にあった倉庫前では大型トレーラーで運ばれてきた装具——戦闘服やケブラー製のヘルメットを数名の作業員が慌ただしく荷下ろし中で、そこら辺のグラウンドや芝生の上では、原隊が壊滅したために各地から集められた軍人たちと徴兵課程を終了したばかりの新兵たちが一緒にトレーニングをして汗を流している。

ただ、その光景で汗を流すのはベテランばかりで、新兵は四つん這いになって反吐を吐いているというよくあるシゴキの一風景だ。

中隊長室に通されてから一〇分近く経つが、未だ中隊長が来る気配はない。

ついでにと持ってきた新しい部下達の人事資料ファイルを開く。

職業軍人である下士官一名、BETA日本上陸後に徴兵された新兵八名に自分を加えて一〇名。

班編制自体に欠員は無い。が、最初からこれか……。と、頭を抱えなくなつた。

階級は低くてもいいから職業軍人がもう一人欲しいのだが、それは最早贅沢な我が儘なのだろう。

以前はなんと恵まれていたのかと愚痴りたくなる。

一覧表にされた部下達の経歴を見れば、これはなかなか一筋縄では片付かないような

奴等が揃っているようだ。

……貧乏くじを引かされたか？

そう思いつつ、まずは同じ職業軍人である樽木三等軍曹の資料に目を通した。

樽木三等陸曹。壊滅した第七歩兵連隊に所属していた若手下士官。

日焼けした顔に天然パーマの短い髪。下士官として経験豊富とは言えないが、昇任して既に二年は過ぎている。

この人物を副班長に据えることは中隊人事としての確定事項であり、何よりも対戦車ミサイル等の重火器のスペシャリストである事が有り難い。

大型種相手ではその火力が命綱になる。

間違つても素人に破壊力の大きい火器を扱わせたくないという本音がある。

友軍誤射をされたらまとめて数人死んでしまう。

彼以外に職業軍人がいないのが正直きついと思いつつも資料をめくる。

なんだかんだと言つて生死を共にせざるを得ない仲間達だ。文句だけ並べても始まらない。

東野二等兵。一八歳。

記載事項を確認して、有り難いと思つた。

小規模戦闘ではあるが既にも実戦を経験している。

添付されている写真に写っているのは、短かいながらも精一杯逆立てた髪と童顔の少年。

ただ単に生意気盛りのクソガキにしか見えない。

真つ先に締め上げるのはこいつと心に決める。

どうせ運動神経はいいだろう。

こいつだけが八月に徴兵されているのも重要な点だ。

人手不足の現状を鑑みるに、このクソガキに部下を二人付けて組長を任すのも手かもしれないとチェックする。

坂上二等兵。二等兵と言っても年齢は三十一歳。

「なんだ、俺より年上かよ」と思わず口に出した。

元国語教師。四角い眼鏡にオールバック、太い眉毛に頭の良さそうな顔立ち。

学徒出陣により生徒が減ったために、余った教員も生徒共々徴兵されたということかと、当たりを付ける。

インテリで頭が固い奴だと苦勞する。

いや、こいつは間違ひなく古株どもが押し付けやがった『お荷物』だなと確信する。

体力は勿論無いだろう。

これで口だけ達者な小うるさい奴だったら、血反吐吐くまで吊し上げなくてはならな

い。

この男が体育教師だったらと思わずにはいられない。

胡桃沢二等兵。二〇歳。元公務員。

こいつも最初は徴兵制から外れていたが、駆り出された口らしい。

くるみさわとは珍しい名字だと、そのことだけが意識に残る。

体力的には普通の成人男性程度はありそうだ。

写真が背広姿の所為か、本当に特徴がない。

強いて言えば、黒縁の眼鏡を掛けて七三分けの髪型程度しかないが、どうせ今頃は坊

主頭のはずだ。

眼鏡を目印に覚えればいい。

田淵二等兵。一八歳。元高校生。科学部所属。

書類上、特にこれといって特徴がない。

少しぼつちやりとした性格の良さを表したような優しい顔。

写真を見れば内気そうに見える。

内気の奴は大概根性がない奴が多い。

体力は並でも、とりあえず根性があつて欲しいと願わずにはいられない。

それが生き残れるかどうかの分かれ目になる。

笠原二等兵。一八歳。元高校生。野球部所属。

坊主頭にくりつとした目の童顔。下手すれば中学生に見える。

運動部に所属していたというのは大きなポイントだ。

間違いなく、今まで見た奴等の中で一番体力がある。

訓練時間が十分にとれないことを考えると、兵士として絶対不可欠な体力が少しでもいいからある者の方が生き残りやすいだろう。

千葉としてはBETA小型種と白兵戦まで行いう機械化歩兵である以上、格闘技経験者が一人ぐらいは欲しいのだが今のところ見つからない。

少々落胆するが手の打ちようがない。

何らかの対応策を施す必要がある。

ここまで調子よくページを捲っていた千葉だが、次のページで盛大に顔を顰めた。

感情のまま「最悪だ」と思わず呟く。

職業軍人がいない程度で文句を言っていた自分がとてつもなく我が儘に思えたほど、見るのが嫌なページだった。

別に武家や財閥の子息が彼の班に配属されたのではない。

仮にそうだったとしても、その程度は差し障りなく捌く程度の分別は千葉にもちゃん
とある。

嫌々ながら記載項目に目を落とす。

真木野二等兵。一九歳。元モデル。

ウエーブの掛かった綺麗な黒髪に真っ白な肌。小さな顔に切れ長の目、薄くて形のいい唇。

モデルという肩書きを裏切らない美女。

つまり、最低。と、いうことだ。

面倒臭いこと、この上ない。

見るだけならば美人は最高だ。

女遊びするときも最高だ。

プロポーションが良ければさらに良い。

感度が良ければ文句の付けようがない。

性格も良ければ非の打ちようがない。

そんな女性ならば、男は誰もが一生の伴侶にしたいと願う。

ただし、部下となれば話は別だ。

女の部下には最低限の気配りをしなくてはならない。

いくら様々な施設を共用しているとはいえ、風呂の時間とか別にしなくてはならないし、寢床も別にしなくてはならない。

何でもかんでも一緒にしていたら、男の方が我慢できなくなつて「暴発」してしまふ。

わざわざ男の部下が犯罪者になる事は上官としては未然に防がなくてはならない。

が、今の帝国軍には女性専用の設備を用意するほどの余裕がないので、班長自ら様々な時間調整をして便宜を図らなくてはならない。

いくら軍隊が男社会とはいえ、女性に風呂とトイレはちゃんと気を配らなければ、健康や衛生面での問題を発生させてしまう。

不衛生が原因で病気になつて戦えないなど、言い訳にならない。

日本が滅亡するかもしれない、この戦況だ。

女は戦場に出るな、なんて戯言は言わない。

だが、せめて通信や衛生などの後方の兵科や、前線に出るにしても砲兵とか戦車とかの部隊にして貰いたい。

機械を大量に装備しているところは整備の関係で、補給とかもすっかりしているのだからいろいろと楽だ。

このまま行くと小隊本部に上げる補給要望一覧表に『ナプキン等生理用品一式』と、また千葉が書き込まなくてはならなくなる。

ああ、もう本当に面倒臭いと思ひながら次のページを捲り、千葉は遂にこめかみを押

さえた。

これは新手の嫌がらせか。

頭痛がしてきそうだ。次の新兵も若い女だった。

高井二等兵。二一歳。元保母。

肩辺りで切り揃えた黒髪、保母さんらしい優しい顔立ち。健康そうな肌の色。

そして、地味ではあるがそこそこ整った顔立ち。

他の項目はもう読む気にもならない。無言でページをめくる。

次のページにも女性。これで三人目。ここまで来るともう感想もない。

三輪二等兵。二〇歳。元文学部の大学生。

徴兵課程終了したばかりの出来たてほやほやの新兵。

きつとカフエテリア辺りで外国語の小説片手に涼やかな微笑みでも見せれば、男女を

問わず人気が出そうな、なかなか理知的な顔立ち。

長細いフレーム眼鏡が端正な顔によく似合う。

今のご時世、理系の大学生ならまだしも文系の大学生が徴兵を逃れることは難しい。

大学生の徴兵に関しては一応ではあるが除外規定もあり、杓子定規に全員を徴兵しているわけではない——軍人だけでは社会は機能しないからだ、BETA日本上陸後の戦況の悪化により運悪く入隊となったようだ。

実戦経験はもちろん無い。

軍隊生活一〇年を越える千葉でも、今まで三人も女性の部下を受け持ったことはない。

自然と苦虫を噛み潰したような顔になる。

軍隊は男社会だ。

近頃は少々変わったが、元々は九九%男しかいない組織が軍隊。

言い方は悪いが、どんなブスでも絶対もてる。

目に映る女は全て美女に早変わりする異常な世界が軍隊だ。

雌に飢えた雄が猛烈なアプローチをすることは目に見えている。

恋愛するなどは言えないが、誰が父親か分からない子供が出来ることだけは防がなくてはならない。

神流の場合は楽だった。

いつも彼女自ら進んで千葉の近くにいたので守るのも注意するのも簡単だった。

寢床等に関しても、戦っていた新潟市内は第三〇機械化歩兵連隊が駐屯する新発田駐屯地から三〇キロも離れておらず幹線道路も整備されているため、部隊の交代も頻繁だ。

その為、野営自体が少なかった。

ところが新しい部隊である第二機械化歩兵連隊は、元々は新潟県南部の高田駐屯地の部隊であり、群馬県の相馬原駐屯地では間借りの身である。

寝床の確保すらまともにも出来ているかどうか怪しい上に、近頃の徴兵で兵隊の頭数だけは急増している。

下手すれば女性隊員用の寝床すら確保できているか怪しいものだ。

戦いだけに集中したいのに、余計な仕事ばかりが増えていく。

千葉にはもう自分が受け持つ班が、ただ単にトラブルの種を集めただけのような気がしてきた。

目を閉じて少し気を落ち着かせる。

どうせ、これも『いつものことだ』。

不条理なのが戦場だ。

理不尽なのが軍隊だ。

そんな千葉の思考は、やっと来た部屋の主により破られた。

「おう、すまん。待ったか？」

言葉の割には全く気にしていない様子でドアを開け入ってきたのは、千葉の新しい上官である遠藤大尉。

中背中肉ではあるが、指揮官らしく自信に満ちた態度と表情で千葉の前に歩いてく

る。

入室と同時に素早く立ち上がり直立不動の姿勢をとった千葉は、上官に一〇度の敬礼と呼ばれるお辞儀のような敬礼を行った。

遠藤中隊長はそれを鷹揚に受けながら「気にするな、楽に座ってくれ」と、千葉に着席を促した。

特に断る理由もないので素直に腰を下ろすと、直ぐさま中隊長の面接——どのような部下か指揮官自らが直接確認する作業が始まった。

それと同時に千葉も新しい中隊長を観察する。

見た目の年は三〇代後半。

日本の成人男性平均身長より少し低い程度の身長に少し腹が出たような体躯。

だがベルトの上に贅肉が乗っていない所を見ると、案外はみ出ているように見える腹の肉は、相撲取りのように筋肉の塊なのかもしれない。

オールバックの髪型はパーマでも掛けているのだろうか。ちよつとやさつとの風では揺らぎもしないように見える。

「中隊長の遠藤だ。よろしく頼むぞ」眼光鋭く千葉と目を合わす。

「はッ！ こちらこそお願い致します」真つ向から受け止め、負けじと返す。

「念のため、一通り確認しようか。ご両親や親族関係、友人知人関係でも何でもいい。人

間関係等で何か心配事があるかね？」

「いえ、何も問題ありません」

本当は一人だけ気になるが、敢えて無視。

「健康状態に関してはどうだ？ 古傷が痛むとかは無いか？」

「いえ、何もありません」

これは本当に何も無い。素直に回答。

「三〇連隊ではいろいろあったようだが、それに関してはもう問題無いな？」

いきなりに本題に切り込んできた。お前のことは知っているぞ。という中隊長のストレート。

「はい。既に何も問題ありません。全て解決済みです」

中隊長が何かする必要はありませんよ。と、軽くカウンター。

「それは結構、結構」心からの笑みを浮かべる遠藤大尉。

「今は佐渡島のBETAから本州を守るのが最重要課題だ。余計なことはしないに限る。もつとも今は忙しすぎて寝る暇もない」

「お疲れ様です、中隊長。今日中に班員を掌握し、直ぐさま二連隊の戦力になれるように頑張ります」

中隊長という役職が忙しいのは真実だ。

ましてや、指揮する部隊が再編中である。

下手にその話題に突っ込むのはやぶ蛇というものだ。

千葉としても自らの居場所の確保、延いては生き残りのために周りとは上手くやっていきたいと思っている。

こんなときに我を出すのは非効率的だ。

「門倉が言う通りの男で安心したよ、千葉。正直言うと先任の推薦がなければ、札付きのお前を拾う気はなかったぞ」

そう笑いながら、中隊長が人事の裏話を——見せても問題無い範囲で手の内を曝す。

「門倉？ ああ、門倉先任ですね。初めてあつたばかりなのですが……」

札付きかよ。

全く、直属の上官には、やはりある程度は耳に入るか。

と、内心げんなりしつつも、千葉が狐につままれたような表情を浮かべて見せる。

門倉曹長に関しては、第一特殊作戦団の上杉准尉と同期だと習志野で説明を受けている。

一応驚いた様に受け答えてみるが演技が下手なのでどれだけ上手く出来たかは、中隊長のみが知ること。流石に結果を聞くようなことでもない。

『S』の選抜試験を落ちたお買い得がいるとな。珍しく門倉がゴリ押しするから、これ

幸いと拾ったんだよ。俺としては実戦経験豊富な下士官は一人でも多く欲しい。迷わず、手を打ったよ」

「拾って頂き、有り難う御座います。確かに再編中の二連隊では、本職が一人でも多く必要だと思います。期待に負けぬように全力を尽くします」

千葉が言った『本職』という言葉は自ら志願した職業軍人の事を指す。

以前から軍に志願していた者たちは、学徒兵以外の徴兵された者たちに対しては人類の危機に際して今さら来たのかという気持ち強い。

「ああ、京都防衛戦と親不知撤退戦で損耗率五割を越えて文字通りの壊滅だ。生き残った若年士官も戦時昇任でほとんど隊長クラスにまで引き上げた。が、どこもかしこも下士官を始めとするベテランの数が足りん。これはお前だけでなく全員に言っているのだが、直属の部下だけを見るのではなく、中隊全体を見るようにして欲しい。新兵どもは……徴兵課程を終えた奴等は銃の扱いだけを覚えた素人だ。中には実弾撃つただけで一人前の兵士になったと錯覚する救いがたい馬鹿もいる。そういう奴は締め上げて構わん。ド素人達をしつかりと掌握しろ」

「はッ！ 了解しました。少々手荒に締め上げます」

「戦えなくなるような怪我だけ負わなければいい。そこは上手くやれ」

「はッ」と答えて、本音は隠した。

どうやら相当に大変な状況だと思う。

中隊長がこんな事を言わなければならぬほど、二連隊は本職が少ないらしい。

自分の班に一人しか職業軍人がいない訳だと納得する。

日本帝国軍はユーラシア大陸派遣から、規模こそ様々だが休むことなくBETAとの実戦を繰り返している。

その中で陸軍——特に歩兵の死亡率は尋常ならざるほど高い。

死亡率だけを言えば衛士を軽く凌駕する。

貴重な衛士はそう易々と使い捨て出来ないが、掃いて捨てるほどいた歩兵は捨て駒としてユーラシア大陸各戦線で殿を務めた。

そのツケが今来たのだろうか。

歩兵は一見専門性が無さそうに見えるが、本当に強い歩兵——様々な武器を使いこなして、戦場で容易く死なない強靱な歩兵の育成は想像以上に時間が掛かる。

一つの武器だけを使いこなせれば生き残れるような生温い戦場は、人と殺し合おうが、BETAと殺し合っているようが存在しないからだ。

「——どうだ？ 新しい班員は？」

中隊長らしく鷹揚な態度で遠藤大尉が目聡く千葉が先ほど見ていた人事ファイルに目を移して問い掛けると、千葉は努めて無表情に答えるように努めた。

「実際に会っていないので何とも言えないですが、癖がありそうな奴らですね」

そう言つてから破顔した。こんなこと言つておいて、表情だけ取り繕つても意味がない。

素直に苦虫を噛み潰したような表情を浮かべた。

その表情の変化に驚いたのか僅かな間だけ目を見開いた遠藤大尉はゆつくりと苦笑を浮かべた。

「この戦況、この状況。日本帝国滅亡の危機だ。死力を尽くせ」ただし目だけが笑つていない。

「承知しております。中隊長」ここでいきなり本気かよと内心ぼやく。

さて。と新しい中隊長、遠藤大尉は咳払い一つして話題を変えた。

面接は最終段階に入ったという前振りだ。

「新しい部隊ではあるが、特に問題はないな、千葉一曹」

「今現在、何ら問題はありません。中隊長」

実質的にはまだ何も始まっていないのだ。

今から問題があつたら、逃げ出した方が早い。

「では、徴兵された新兵どもを可及的速やかに——一週間以内に軍人として戦^{つか}えるように鍛え上げろ」

思わず即答するのを躊躇った。

最終的に命令通りにするとはいえ、条件闘争もしないで安請け合いしたら自らの首を絞めかねない。

上官の心象は悪いだろうが、正面から当たるのが千葉の流儀だ。

「中隊長、正直に申し上げます。下士官二名で素人八名を一週間で『正規軍』並みに戦えるレベルにするのは不可能です。『動ける』レベルにするのが限界です」

「そんなことは知っている。だが、戦況がそれを許さない」

大きく頷き千葉の意見も一理あるとした上で、遠藤大尉はそれを却下した。

その程度、彼とて分かっている。

「了解しました。二つだけ要望してもよろしいですか？」

「出来ることならば、な」

にやりと中隊長は口を歪めた。

古今東西、戦争が計画通りに進んだことなど有りはしないのだ。

「訓練計画は全て自分の自主裁量で。そのうち完全休養を一日の内容取る方向で、班集中訓練を行いたいと思います」

「他（ほか）へ。」

いとも容易く要望は通った。

千葉が思っていた以上に二連隊の戦力化は時間が掛かる予定らしい。

これならば言うだけ損だったかと思わないでもないが、後の祭りだ。

「せめて、この間だけは実戦勤務を外して下さい。鍛え上げる前に死なれては意味がありません」

「それで諦めが着くな」

「はい。これで諦めます」

千葉は瞳に強い意志——確たる自信を込めて上官に返答する。

それに満足げな笑みを浮かべた遠藤大尉は大きな声で応えた。

「よし。一つ目は了解した。二つ目は確約出来ない。良くて五日だ」

「分かりました」

会話が止まる。

面接も要望も終了した。

次は実行に移す段階だ。

千葉が立ち上がると遠藤も立ち上がり、敬礼を交わす。

「では、これから直ちに班員を掌握。訓練に入ります」

「速やかに実施せよ」

「はッ！」

千葉は中隊長室から出るとまず中隊事務室に向かった。

中隊長の次は、小隊長と先任に挨拶しなければならぬ。

時間を無駄に出来ないと思うと、その足の運びは自然と速くなった。

第7話 鉄拳制裁

一九九八年一〇月一四日 二二時一一分

帝国陸軍相馬原駐屯地 一二号棟

第二機械化歩兵連隊第三中隊男性隊員用廠舎の下士官室の一つ

帝国陸軍一等軍曹 千葉春久 及び 帝国軍三等軍曹 樽木輝元

千葉と樽木に宛がわれた居室は帝国陸軍内では至って標準的なものだった。

鉄筋コンクリート製の建物にこれといった特徴がない殺風景な部屋。

白く塗られた壁面と少し汚れた白い天井。

蛍光灯の光を反射するポリッシュシャーで磨かれたリノリウムの床。

ベッドは三つあるが部屋にいるのは二人。空きがあるのは下士官専用の部屋として
いるためだ。

一人に対して衣類を入れるロッカーとパイプベッドが一つずつ。部屋の角には安物
のソファセット一式が置かれている。

千葉が持ってきた荷物を素早くロッカーに叩き込むが、約半分はFRP製のRVボツ
クスや市販の衣装ケースに入れたままだ。

それをそのまま箆笥代わりにして手間を省いた。

即応用の衣類や様々な小道具を背囊はいのうと雑囊ざつものう等に詰め込み直して、個人としての出撃準備を完了させてから、千葉は樽木との打ち合わせに入った。

樽木自身は千葉より三日早く着隊していたため、その手の準備は終わっている。

今日の夕方、中隊長を始めとする上官達との面接を終えた千葉は樽木と合流。

千葉はそのあと身辺整理と関係書類作成のため隊舎内に残り、樽木は班員達を連れての体力トレーニングを行った。

一応、班員との顔合わせと挨拶は千葉も終えているが、大した会話は何もしていないという状況であった。

お互いに明日から残業漬けの日々が始まるわけだが、今のうちに一杯ぐらいはやっておきたい。

ツマミはないが酒はある。

いつもは菌ブラシを立てているマグカップに安酒を注ぐ千葉と樽木。

たった二人しかない下士官同士の打ち合わせを兼ねたささやかな飲み会だった。

もう半分以上空いたウイスキーの瓶を傾ける——ユーラシア大陸が陥落した今、世界的に麦類を使用した酒類の方が入手しやすい。

千葉は今日のトレーニングの様子を樽木に訊ねた。

「どうだ？　ぱつと見た限りでは、もやししかないようだ——」

一目見ただけの千葉が齒に衣着せぬ評価を下すと、浅黒い肌と天然パーマが特徴的な——サングラスを掛ければ夏の砂浜が似合う樽木三等軍曹はそれを肯定した。

「もやしというか、根性無しというか、今のままじゃ兵隊としてはクソですね、クソ。道端に落ちてる犬の糞以下。気合いも根性も足りてないですよ。どいつもこいつも金玉付いてないオカマの群れ。明日にでも死ぬ可能性があることを真面目に考えていないんじゃないですかね」

機関銃のように喋り立てる樽木の言葉に、千葉が苦笑を浮かべる。

なかなか口の悪い男らしい。

裏表が大して無くてやりやすいが、これで傷付く繊細な部下がないことを祈る。

「BETAに殺されるかもしれないことより、軍隊生活の方がキツイと感じているんだろ。人間は辛ければ辛いほど、目の前のことしか見ないからな」

「まったく、そういっちゃ、そうなんですがね。モノには限度つてもんがあるつてもんですよ。ヘタレはヘタレで、こつちが言うこと黙って聞いてりや良いんですが、愚痴だけは眩きやがるんで、ちよつと切れそうですよ」

そういつて樽木がストレートのウイスキーを煽るようにして飲む。

なかなか酒も強い。

千葉もペースを合わせるように飲み干すと、樽木が素早く千葉のマグカップに酒を注いだ。

無論、片手で注ぐような無礼な真似はしない。両手で丁寧に注ぐ。

「誰だ、そんなボケは？ とりあえず、そいつから締めちまうか」

そう言った千葉の目が怪しく光るのはウイスキーの所為じゃなさそうだと、樽木は新しい上官を観察する。

「ほとんど全員ですよ。締めるのは、まず生意気な東野ですかね。どうします？ 手つ

取り早く私刑リンチでもしますか？」

「確かに手つ取り早いですが、一々集団ぶくろ暴行にしてたら時間が勿体ない。訓練中に適当なタイミングで殴ろう。全員殴るのも非効率だ。見せしめで一人に一回で済めば楽なんだがな……」

そう言って笑う千葉の表情は猛獣の類を彷彿させる。

悪乗りが分かる上官だと樽木も楽しくなってくる。そうですね。と相槌を打った。

「樽木、そのタイミングは俺もお前もチャンスだと思つたら直ぐさまやろう。東野なら一日ぐらい医務室のベッド寝ていても構わん。ボケどもに気合を入れる方が重要だ」「了解しましたッ！ 任せて下さい！ ……ですが、千葉一曹の方が先に殴るんじゃないですか？」

そう半ば茶化すように樽木が笑うと、千葉も笑って肯定した。

「その時はしようがない。お前は後から別の理由で殴れ」

そう言ってお互いに笑い合う。

ひとしきり笑うと彼らは話題を変えた。

「何か目に付く奴はいたか？」

「いや、なんとたつて真木野ですよ、真木野。美人、めつちやくつちや美人！ さつすがモデルしていただだけはありますね。眼福眼福」

「——で？」

「まあ、真木野は真面目……い、いや、今のは駄洒落じゃないですよ、真面目に話してますよ、本当に真面目に話してますよ、千葉一曹。今、班の中で一番真面目じゃないですかね。よくあるパターンですけど、女の方がこういう時は真面目ですから。ただ、体格通り体力なさ過ぎです。強化外骨格を着用していろいろがいますが、長時間の活動に耐えられるように思えません」

「こういう時は本当、女の方が真面目だよな。ヒステリーと我が儘だけは勘弁して欲しいがな」

そう答えながら視線で次を促す。

「ほんと、そうですね。ああ、あと高井なんですけど、写真より美人ですよ、なんつー

んすか、そこはかたなく女を感じさせるとタイプですかね？ 胸は真木野よりデカイ！

巨乳！ そう巨乳つてやつですよ！ あれ自体が犯罪ですね、犯罪ツ！」

「お前、彼女いないんならさっさと手を付けろよ。早い者勝ちだぜ」

「それも考えてます。ですけど、やっぱり体力はないですね。真木野、高井、三輪、坂上、胡桃沢は今日の持続走でよく分かりましたけど、ヤバイですね。こいつらは体力なさ過ぎです。東野は生意気以外、大きな問題なし。笠原、田淵はこれから鍛えるしかないでしょう」

そこで一区切りつけて樽木は酒精で喉を潤した。

「やっぱり一番やつかいなのは、坂上・三輪のインテリコンビですかね」

「頭でつかちか？」

そう言つて千葉も酒を煽る。

「大卒なのに士官になれなくてイマイチ納得出来ていない坂上に、大学生だから士官になれると思つていた三輪ですからねえ。高校中退の東野より下に扱われることは、彼らのプライドが許さないでしょう。全く、諦めが悪い」

「そんなプライドを持つほど、上等な大学を卒業しているのか？」

二人の学歴までは覚えてるが、どんな大学だったかまでは覚えていなかった。

「二人とも国立大学ですよ。東北大学の学生と福岡大学卒業の教師。まあ、確かに頭は

俺よりは良いんでしようけどね。体力がない中年を士官学校に入れるわけがないし、今まで大学生やっていた文系野郎にこの期に及んで甘い汁を吸わせる理由はないですからね」

「ただの教師が今さら士官になれるわけもなく、かといって教師には戻れない。時代の所為とはいえ憐れだな」

「何か特技があつたり、機械とかに強ければ、整備兵とかになれるんでしようけど、国語の先生と文学少女じゃ、救いようがないですよ。まあ、三輪は結構美人なんですけどね、なんかインテリぶっているんで俺はあまり好きじゃないですね」

そう言った樽木が、いたずらっ子のように白い歯を見せて笑う。

確かに樽木の学生時代を想像すると、教師が好む生徒だったとはとても思えない。

そう思う千葉も、とてもじゃないが教師に好かれるような生徒ではなかった。

「俺にとつて面倒臭いのは女どもの世話だな。さつさと教え込ませて自力でやらせないと、手間だけ増える」

「ああ、生理用品の調達だったら俺がしますよ。つーか、俺がやります。やります。やらせて下さい」

「好きにしろ。高井を狙うなら会話の機会が少しでも多い方が良いしな。ついで、だ。補給関係はお前に任すぞ」

苦笑を浮かべて千葉が言うと、損得勘定を素早く済ませた樽木は笑顔で了承した。「任せて下さい、千葉班長。ガッツリと員数確保しますよ」

右腕に力こぶを作って、やる気をアピールする樽木はなかなかの役者とも言える。

結構いいムードメーカーになりそうだ。

こういうのはセンスの問題で鍛えることが出来ないのです、樽木のような男の価値は本当に高い。

「任せた」

上機嫌の樽木を横目に、千葉は脇に置いておいた書類入れを手元に寄せると数枚の書類を取り出した。

それをそのまま樽木に渡す。

「——それは？」

「細かい事は省いてあるが、これから五日間の訓練計画だ。目を通しておいてくれ。都合な点があれば、明日の九時までに伝える。一時には中隊長に提出する」

樽木が興味深そうにパラパラと数枚しかない用紙を捲る。

訓練計画と言っても今はまだ御大層なことが書いてある訳ではない。

その日の時間割と訓練内容が書いてあるだけのものに過ぎないが、一通り目を通すと樽木は真剣な表情で千葉にその所見を述べた。

「千葉一曹、この訓練計画だと相当な不満が出ますよ」

樽木の忠告ももつともだ。

千葉自身もその問題点は理解しているので、その言葉に大きく頷いた。

だが、千葉には訓練内容を大きく変える気はなく、変えることが許されるような状況でもない。

荒療治でも何でも良いから、班員をまともな戦力にしなくてはならない。

「俺が鞭で、お前が飴だ。不平不満は陰で言わせろ。それをお前が汲んでやれ」

そういう事まで決めていたのか。と樽木は内心唸った。

着隊してからまだ半日も経っていないが、ここまで考えているとは思っていないかった。

「分かりました……。失礼ながら、器材と訓練場の調整は大丈夫ですか？」

樽木はいくら何でもそこまで手が回っているとは思えなくて確認を取った。

「武器と訓練場に関しては問題無い。射撃訓練に関しては明日、補給幹部と調整する。ということ、明日の朝礼後は昼間までお前一人で奴等の面倒を見てくれ」

「問題無しッ！ 計画じゃ午前中は武器の分解結合訓練ですけど、何か特にさせておくような事はありますか？」

「そうだな、銃の分解結合に問題がないようなら、血反吐が出るまでハイポートさせと

け。いきなり暗闇で分解結合出来るようなレベルまで鍛え上げなくて良いぞ。とりあえずの目標は、ちゃんと言うことを聞く素直な兵士に育てよう」

「了解しました。精神要素に重点を置いてシゴキますが……」

そう言いかけていた樽木の言葉が言い淀み、少々躊躇いがちに述べた。

「……本当にこれぐらいしか、手はないんですかね」

「これしか方法はない。……たった一週間で一人前になれる職業なんて、この世にない。どこかで無理させるしかないだろう」

「分かりました。俺も全力を尽くします」

「頼むぞ」

そう言うってから盃代わりのマグカップを打ち合わせると、二人とも残っていたウイスキーを綺麗に飲み干した。

それから千葉は事務室に書類作成に向かい、樽木は班員が脱走していないかを確認しに行った。

一九九八年一〇月一五日 〇七時四六分

帝国陸軍相馬原駐屯地 一一号隊舎前

第二機械化歩兵連隊第三中隊 朝礼場

澄み切った青い空と遠くに見える白い雲。

遠くに見える蒼い稜線。

近くには紅葉の彩りが鮮やかになり始めた榛名山の麓。

綺麗な秋晴れの空と、都会にはない清浄な空気。

山から吹き下りる爽やかな風が気持ち良い。

それが山の麓に位置する日本帝国陸軍相馬原駐屯地を吹き抜ける心地の良い朝。

そこに駐屯する各部隊の朝礼場と言っても特別なものがあるわけではない。

中隊の人間が整列できるだけの場所があり、中隊長が上がるちよつとした朝礼台があれば事足りる。

今、相馬原駐屯地には多数の——その半数以上は徴兵された軍人が溢れるほどいて、各中隊の朝礼場にすら困る有様だ。

朝礼時は大体戦闘服を着込み、その後の作業や訓練に適した服装で来るのが普通。

だから、徴兵された新兵もほとんどが迷彩柄の戦闘服を着込んでいた。

その朝の清々しい雰囲気全てをぶち壊すように響いたのは千葉の怒号だった。

「——馬鹿野郎ツ!! テメエら、一体、今何分だツ!!」

今にも殴り掛かりそうな劍幕と誰もが振り向いてしまう怒号に鬼気迫る形相。

朝礼場に集まっていた新兵どもが一斉に千葉を見て、そして目を逸らした。

千葉の目の前には、彼の部下となつた八人の新兵が硬直したように直立不動の姿勢を取っていた。

その彼らに逃げ道がないということを誇示するように樽木が侮蔑の表情と共に周りをゆつくりと歩く。

「俺は昨日、ここに〇七四五に集合完了と指示したよな!? どうして、たつたそれだけの事が出来んツ! 幼稚園児以下だな、貴様ら!! 三歩歩けば記憶を無くすか!? それとも最初から覚える気が無えのか!? どっちだ! この屑ども! 答えろツ!!」

彼の班員は誰も答えない。

むしろ答えると、どんな目に遭わされるか分からないので怖くて喋れない。

だが、答えなければ、さらに悪い結果になる。

そう分かつていても、あまりの千葉の剣幕に新兵どもは唇を真一文字に締めていた。千葉が全員の顔を舐め回すように睨み付けると、その反応は三つに別れた。

先に——つまり時間内に来ている自分は怒られる筋合いはないという表情を浮かべる東野、笠原、胡桃沢。

時間内に来ることが出来なかつた遅刻組は俯くようにして視線を逸らすか、怒られてどうしようかという表情を浮かべる田淵と高井。

さらに遅れていないが、遅刻はそんなに怒られるような事ではないと不満顔をしている坂上、三輪、真木野。

「どうやら基本的な躰が出来ていないらしい。」

怒鳴りながら各人の様子を分析した千葉はまず全員を横一列に並べた。

「——東野ッ!! テメエ、先輩としての自覚あるのか!?!」

「はいッ! 有りまッ——!?!」

突如、骨がぶつかり肉を打ち付ける鈍くて低い音が響く。

東野の口元を打ち抜く鋭い千葉の右正拳。

あまりにも自然に、そして視認できないほどの速さで殴るので何も対応出来なかった。

訳が分からず呆然とし、打撃の痛みに痺れ、殴られた口元を押さえながら崩れ落ち始める東野二等兵。

だが、前のめりに崩れる東野の膝が地面に付くことはなかった。

千葉が彼の頭をまるで足下に飛んできたボールのように真横に蹴り飛ばす。

背筋が凍るような鈍い打撃音とともに、人が人形のように転がった。

今までの常識からは信じがたい光景に、大きく目を見開く千葉の部下たち。

他の部隊の新兵たちも目を見張る中、その光景を下士官達がニヤニヤしながら楽しそ

うに眺め続けた。

千葉の足下で意識朦朧と「あ…ああ…：…つ、…がつ」と呻く東野をつま先で転がしながら言い放つ。

「クソガキ……。何が、『はい』だ。先輩である teme が何で後輩を指導していねえんだよ！ それを全然理解をしていないから、こんなに遅れるんだろうが。この、役立たずがつ!!」

罵声を浴びた東野が睨むように千葉に視線を向けた瞬間、彼は「——うぎゃ!!」と小さい悲鳴を上げて再び転がった。

東野が両手で股間を押さえながら悶え苦しむ。

金的への容赦無いつま先蹴り。

声さえ出せないほどの激痛ですすり泣きと苦悶の呻きが重なる。

それを見て東野を助けようと動いた三輪を、樽木は何も言わずに軽く蹴飛ばした。

女だから手加減したとはいえ、蹴りを受けてたじろぐ三輪をさらに押すように蹴り飛ばして——文字通り芝生に転がしてから、樽木は静かに言った。

「勝手に動くくんじゃねえよ、ボケ。次はお前をああするぞ」

静かな私刑^{リンチ}宣告に三輪の端正な顔が青ざめる。

今まで通っていた大学では想像出来る訳がない光景。

彼女にとっては商店街の裏路地で運悪く犯罪現場に出来くわしてしまったかのようなものだ。

そんな周りを完全に無視して、千葉は股間を押さええうずくまる東野の襟首を両手で掴むと、力任せに引きずり起こした。

「なに生意気に睨んでんだよ、クズ。さっさと立てよ、クソガキ。俺はまだ寝ると命令してないぞ。なんだ、根性無し。このまま完全に金玉潰してやろうか？ 童貞野郎」

突然振るわれた容赦ない暴力。

さらに生命の危険すら感じる急所攻撃を受けた東野に反撃の意志は既に無い。

もつとも、これが彼に出来る最善の行為だった。

仮にまだ反抗の意志有りと示せば、千葉はそれが完全に消えるまで休むことなく殴り続けるだけだ。

新兵への教育は教育であって教育ではない。

実際は犬をしつけるのと変わらない作業だ。

一方的に暴力を振るわれた東野は泣きながら口と鼻から血を流して股間を押さええたままで、生まれたての子鹿のように両足の力が入らない。

急所を蹴られた東野が立つことなんて出来るわけがなく、千葉が手を放すと彼は再び頭から芝生の上に崩れ落ちた。

まるでゴミを捨てるような千葉の動作に班員の視線が集中し、直ぐさま離れた。余計なとぼつちりなど誰も受けたくない。

樽木に蹴り倒された三輪も慌てて立ち上がり、直立不動の姿勢を取った。

その程度は千葉も樽木も待つ。

それから千葉はまず坂上の正面に立った。

身長は千葉の方が高く、体格に至っては言わずもがな。

体重はおそらく二〇キロ以上違うだろう。

千葉は威圧するように見下ろし、視線を合わせて聞いた。

「なにか言いことはあるか？ 先生」

わざとらしく強調したその一言で、坂上の顔色が変わった。

気色ばんで異を唱える。

「東野君には殴られるような理由がない！ いくら何でも、これはやり過——」

そう言っている坂上の顎先に、千葉は右裏拳を叩き込んだ。

先ほどとは全然威力が違う——かなり手を抜いた一撃ではあったが、脳震盪と体格差のため坂上は崩れるように尻餅をついた。

「東野は先輩でありながら、後輩のお前達を指導せず、結果、示された集合時間に一分も遅れた。殴るには十分すぎる理由だ」

呆然と見上げる坂上を見下して、次に千葉は三輪の前に立った。

負け犬のように千葉から視線を逸らした三輪の足下に唾を吐き捨てる。

目を逸らしたのは彼女にとっては自然すぎる、いや本能的な動きだった。

立場も、権力も、腕力も何もかも勝てない、暴力的で危険な上官。

一刻も早く、この状況が終わらないかと願わずにはいられない。

その内心を見透かしたように、千葉は小声で「屑だな」と言い渡す。

言われたことなど無いだろう侮蔑の言葉に、身を小刻みに震わせた彼女をしつかりと確認してから四人目に向かう。

次の田淵は既に顔を引き攣らせて脂汗を浮かべていた。

ぼつちやりした顔と同じように贅肉のついた腹。

身長一七〇センチほどの丸っこい体格。

普通にしていれば愛嬌があるのかもしれないが、今はガクガクと痙攣を起こしたように震えている。

明らかに先ほどから振るわれている暴力に怯えている。

無理もない。

遅刻した張本人の一人はこの少年だ。

千葉は敢えて田淵を無視した。

何も言わず、殴らず、表情すら変えない。

何も信じられないように目を見開いて驚く田淵を無視して、次に進む。

千葉は彼の存在すら無視して、事を進めた。

その事実の行き着く先を素早く理解したのは坂上と三輪だけだったが、千葉の冷酷な部分をはつきりと感じて認識を改めた。

時間に遅れる人間などいらぬ。

そんな部下は元々存在しない。

ここは学校ではなく、軍隊。

千葉は教官ではなく、指揮官なのだ——。そう二人に知らしめる。

胡桃沢の前に立つ。

元公務員は緊張した面持ちで全身を強張らせながら直立不動の姿勢を保っている。

今までの流れを見て考えたのか、胡桃沢が千葉と恐る恐る視線を合わせた。

——だが、次の瞬間。

千葉は胡桃沢の首が折れるのかと思うほどの勢いで、その左頬に平手打ちを叩き込んだ。
だ。

無様に——まるで回転が止まる直前の駒のように、よろめきながら倒れる胡桃沢に対して千葉は吐き捨てた。

「——気合い入ってねーんだよッ！ 根性無しが!!」

理不尽極まりない一撃に部下達——樽木以外の全員が凍り付く。

胡桃沢に至っては、酷い仕打ちに衝撃を受け、激痛で泣きそうな表情のまま千葉を見上げるだけだ

だが、その程度では千葉の暴力は止まらない。

「笠原！ どうしてお前は三人が遅れないように手助けしなかった?」

千葉が野球少年の前に仁王立ちとなり睨みを利かすと、それでも笠原は声を張り上げて答えた。

「はい！ 準備を手伝って、全員で早く集合すべきでした!」

徴兵されて一月も経っていない新兵としては上出来すぎる受け答え。

必死になって声を振り絞る笠原の額に脂汗が浮かぶ。

東野と胡桃沢の惨状が、自分の未来の姿とダブって怯える。

必死になってそう答える笠原の姿に満足した千葉は、不気味な笑みを浮かべ、皆の生け贄となった少年に宣告した。

「ならば、次からは必ずそうしろ。そうでなければ、次はお前の番だ。お前が失敗しようが、成功していようが関係ない。この班の新兵の誰かが失敗したら、必ずお前を殴る。いいな?」

「——え!？」

笠原には一瞬、言葉が理解できなかつた。
無理もない。

他人が失敗したら、自分が殴られるなんて聞いたことがない。

「——え!?! じゃねえよ、クソガキツ! 今度からお前が手伝うのдарろ!?! テメエ、さつきの言葉は嘘か!?! 答えろ!!」

「う、嘘ではありません!」

そう返事はしても、笠原の声は震えていた。

千葉がその言質を意地悪く悪用する。

「お前が失敗しないように手伝うのなら、誰も失敗しないよな? 失敗するってことはお前が仲間を見捨てたからだよな? 違うのか?」

「……………」

「なんだ、返事をする気も無いらしいな、クソガキ——殺すぞ」

「——ヒッ!」

静かに響く死刑宣告に、息をのむ音が隣にいる者にさえ聞こえる。

屁理屈で脅す千葉と青ざめる笠原。

班員の後ろに立つ樽木は、必死になって笑いを堪えた。

「ここで笑つてしまつては、千葉の演技が全て水の泡となつてしまう。

「返事はどうした！ 笠原ツ!!!」

「はいッ！ 手伝います!!!」

「ここまでくれば、ただの脅迫である。

野球少年が涙目で答えてから千葉は移動した。

残つた二人は女だつたが容赦しない。

「真木野、テメエは何で遅れた？」

「私は遅れてません！」

そう答えて真木野は氣丈に千葉を睨み付けた。

どうせ目を逸らしてもピンタが来るなら、睨んだ方がマシだと腹を括つての行為だつた。

千葉は内心、真木野の評価を上げた。

実はこいつ、使えるのかもしれない。

「——ああッ!!? お前ここに何分に來たと思つているんだよ、答えるッ！」

「七時四五分です！」

実は彼女たち全員が揃う前から、千葉と樽木はこの朝礼場で新兵達を待ち構えていたのだ。

下手な嘘は吐けないので真木野は素直に答えたが、それに対する千葉の言葉は彼女の想像外だった。

「七時四五分—四秒だ、この間抜けがッ!!」

——え？

真木野は余りにも思いがけない反論に呆気にとられた。

思わず唇が動きかけたが、それよりも千葉が繰り出した右手の方が遙かに早い。

「——きゃっ!」

バチンと頭の中にまで響く衝撃と空気が破裂したような打撃音。

揺さ振られる視界と顔の左側面全体から広がる痛み。

千葉に平手で叩かれた所為だと思ふ間もなく殴り倒された。

一気に広がってくる痛みと鼓膜にまで響く衝撃で耳鳴りがする。

耳と頬に強烈な一撃を食らったのだと理解するには少し時間が必要だった。

叩かれたところを押さえながらも、必死になつて零れ落ちそうな涙を堪える。

屈辱感と敗北感、そして何よりもその理不尽さに耐え切れない。

「——このッ、……!」

と、言つて、真木野が腰を落としたまま抗議し掛けて——息を飲んだ。

驚きのあまり、動きかけた桜色の唇が止まる。

音もなく同じ視線の高さまで腰を下ろし、凄まじく不機嫌な表情のまま睨み付ける千葉。

何か言おうとしたが、本能的な危険を察して口を噤むが遅かった。

一瞬、黒い影が霞んで見えた。

顔のど真ん中に食い込む千葉の右拳。

そのまま吹き飛ばされて後頭部を芝生にしたたかに叩き付け、彼女の視界は青い空で一杯になった。

その衝撃と暴力に意識が打ちのめされ呆然としてみると、鼻の奥から鉄の匂いが漂い始め、どろりとした血が真木野の喉に流れこんだ。

あまりの出来事に疑問と困惑が頭の中を駆け巡り、身じろぎ一つ出来ず空を見上げた。

——なんで…、どうして？ 私、…：何か、した？

ただ、訳が分からない。

「二四秒も遅れて、よくもそれだけ生意気な口が叩けるな、この売女。娑婆の常識、言つてんじゃねえぞ」

——私が何をしたっていうの？

どうして殴られなければならないの？

「さっさと起きろ、間抜け。拳でその顔、整形するぞ」

——まだ、四五分だったでしょ？　なのに、どうして……!?

理由が分からない。

納得が出来ない。

殴られる理由が分からない。

耳鳴りがする。

口の中を切った。

鼻と眉間が痺れて痛い。

今、顔がどうなっているか鏡を見るのも怖い。

「所詮、口だけか……。殴って整形するよりも難民街に裸にして捨てた方が、物覚えがよくなるか？」

鼓膜に響く、その言葉の意味に寒気がした。

そして、この新しい上官は本当にそういうことをしかねないと戦慄した。

千葉が真上から無理矢理、真木野の襟首を両手で掴んで引き上げると、彼女は男が発する怒気に耐えきれなくて悲鳴を上げた。

「——ひっ！　やー！　いやッ！」

おぞましさに目を逸らし、無我夢中で身を振った。

だが、そんな行動すら千葉は嘲笑うように鼻を鳴らして、真木野を放り捨てた。

「悲鳴だけは一人前か、このドブス。もう一度、俺に生意気な口聞いたら二度と鏡を使う必要がない顔にしてやる」

恐怖に打ちのめされて呆然と涙を流す真木野を無視して、最後の一人である高井に向き合う。

ここまで来ると、千葉が振るつた暴力の数々は十二分に効果を表していた。

顔中に浮かぶ脂汗、表情を引き攣らせ、それでも必死になつて直立不動の姿勢を取る高井。

きつと彼女にしても、千葉が女にここまで暴力を振るうと思っていなかったに違いない。

普通の男は美人に弱い。

女の顔にビンタは普通の男でも出来るが、拳で殴る男はそれほど多くない。

出来る人間は、ほぼ間違いなくサディストか格闘経験者だ。

たった一四秒遅れて、一言二言言い掛けた真木野でさえ、あれだけ理不尽に殴られたのだ。

一分も遅刻した自分が、真木野より軽い処罰だとはとても思えず高井は怯えていた。

目を合わせるのが怖い。

合わせなければ、胡桃沢のように平手打ちを食らうのかもしれないが、真木野が顔面に打ち込まれた拳よりはまだマシ。

そんな事よりも何よりも、高井は純粹に千葉に対して恐怖が湧いた。

千葉は間違いなく自分が皆より強いことを自覚している。

その上で手加減無く暴力を振るっている——これは高井の勘違いであるが、だがしかし、高井にはそうとしか見えない。

僅かな遅刻を容赦なく論い、あげつち全ての行動に免罪符を得たかのように振る舞う軍人。

嫌われる軍人像そのものが目の前で暴力を振るっている。

そして、次にそれが自分に来る。

どのような痛みが来るか、どんな風に殴られるかと、嫌な想像が高井の脳裏を駆け巡る。

元モデルの真木野でさえ殴られたのだ。

自分がどのように扱われるか、想像出来ない。

そう、怯える高井。

そして、その高井の顔色が面白いぐらい青くなるのを、しっかりと確認した千葉は田淵と同じように高井を無視した。

ただ、少しだけ理解しやさいように一言だけ付け加えた。

「お前は怒鳴る価値もない小心者だ」

ぼそりと言ひ捨てて列の中央——並べた部下達が一瞥できる地点に立つ。

怒鳴る価値すらない人間という宣告に高井が衝撃を受けているが、そこは敢えて無視する。

叩き潰しすぎて新兵どもが這い上がってこないようでは、それはそれで千葉たちが困る。

樽木がさり気なく、殴られた者達を立ち上がらせる中、千葉は再教育を兼ねて宣言する。

その一つ一つの動作に周囲の新兵——ほとんどが徴兵された者たちが注視し息を飲む中、千葉の低く、そして、よく通る声が朝礼場に響き渡った。

「良く聞け！ 二度も三度も言わん！ お前達は軍人だ！ そして俺の部下だ！ 俺に言われたことは言われたとおりにやれ！ 示された時間までに朝礼場に集合する程度の事は、実行不可能な事でも何でも無い！ 俺は命令された事をきちんと実行した者を殴らない。だが、それが出来ないのであれば、お前達が出来るようになるまで殴り続ける。それだけだ！ 以上。以後、注意しろッ！」

凜とした態度。

毅然とした口調。

迷いの無い信念。

先ほどの怒気を嘘のように消し、そう言い切る千葉。

彼は暴力を振るうことを恥と思わない。

軍人として、最低限のことを出来ないことの方が恥なのだ。

「――返事はどうした？ 声すら出せんか？」

「はい」「……わかりました」「――はいッ!!」

はつきりとした声で返事を返したのは笠原のみ。

少年は必死になって声を張り上げた。

この班での失敗は、全て彼の責任になってしまふ。

そう彼の班長が決めて、宣言したからだ。

無論、笠原以外も返事はしているのだが、口籠もるような返事や呟くような声では大した意味はない。

それをかき消してしまおうと笠原は声を張り上げたのだが、残念ながら少年の意図は空回りに終わった。

「樽木、残念だが俺が言ったことをちゃんと理解しているのはごく少数のようだ。まあ、言われた事を今すぐ治せるような優秀な奴等でもない。朝礼が先だ。整列させろ。朝礼終了後はお前が優しく指導してやれ。今日の昼までに結果が出ないようならば、また

俺が手を出すだけだ」

「了解。——朝礼隊形に整列！ 急げ！」

樽木は先ほどまで嘯み殺していた笑いが嘘のように真面目に受け答えると、キレのあ
る敬礼を行った。

彼は痛みと恐怖で泣く真木野や東野を手慣れた手つきで立たし、背の高い者から縦一
列に並べてから、少し離れたところに立つ千葉の元に駆け寄った。

並ばせた班員達には見えないところで、顔を寄せてひそひそ話を始める。

「昨日言ったことと全然違うじゃないですか！ 初っ端から飛ばしますね〜！ 俺も飛
ばしちゃって良いですか？ 良いですよ？ いや、でも、俺、あんな真似出来ないで
すけど。マジ、真木野の顔面にグーパンかますなんて、超鬼ですね！ メツチャ鬼です
わ！」

言葉も口調もどこか楽しそうな樽木。

同期達と経験したシゴキでも思い出したのだろうか。

その艱難辛苦な経験を他人に味合わせるのは一種の快樂だ。

「まあ、……なんだ。その場の流れてヤツよ。——とか、言う割には楽しそうだな、お
前。俺が鞭なんだから、ちゃんと飴になれよ」

「今さら飴なんて必要なんですか？ あれだけやっておいて。もう飴なんて無くてもど

うにかなるんじゃないですか？」

「お前なあ。これでもお前に飴役をさせるから、わざと高井は殴らなかつたんだぞ。しかも、あれだけ手を抜いて撫でただけだ。大したことじゃない。有り難く当初の予定通り、優しく頼りになる兄貴役を演じる。高井は他の中隊の奴等も目を付けているんだ。さっさと落とせ——なんだ、それとも俺が頂こうか？」

「悪い冗談止めて下さいよ。こんな美味しいチャンスを逃すほど、女に恵まれちゃいませんよ」

「だったら、俺らも並ぶぞ。もうすぐ中隊長が来る」

「ういっす。あとでキツチリとケアしてから、扱しじいておきます」

一体、あいつらをどこまで戦力として仕上げられる？

何時まで、出撃しないで訓練が出来る？

俺と樽木と部下達が生き残る可能性を、どこまで引き上げることが出来る？

負けるわけにはいかない。

死ぬことも許されない。

今の俺は戦友達の骸の上で生きている。

誰がなんと言おうと戦わなくてはならない。

どんなことがあろうと勝たなくてはならない。

これは生き残った代償ではない。

これが俺の責務だ。

絶対に投げ出してはならない運命だ。

とりあえずのリミットは五日間。

残り約一二時間。

——余裕がないな。

そう、千葉は小さく呟いた。

第8話 お金で買えない玉の輿

一九九八年一〇月一六日 ○九時一六分

帝国陸軍相馬原演習場内 レンジャー訓練塔

第二機械化歩兵連隊第三中隊第三小隊第一班 班集中訓練二日目

昨日の朝、千葉の蹴りから始まった第二機械化歩兵連隊第三中隊第三小隊第一班の班集中訓練は予定を大幅に狂わしながらも二日目に突入した。

前日の訓練は訓練らしい訓練にならなかった。

それはある意味、千葉の予想通りでもあった。

彼が宣言した『出来ないようならば、もう一度殴る』は、その日の午後にはもう実行する羽目になっていた。

朝礼後、田淵と高井を除いた全員が腕立て伏せで腕が痙攣するまでやらされ、その後銃の分解結合訓練を行った。

今までの彼らは、ただの歩兵となるための訓練だけを受けてきた。

だが、今までの部隊を離れ、新たに第二機械化歩兵連隊に配属された瞬間から、彼ら全員が強化外骨格を身に纏って戦う機械化歩兵となった。

昨日までは六四式自動小銃だけを扱えばよかったが、今日からは違う。

人間の数倍を超える力をいとも容易く生み出す強化外骨格で戦うのだ。

当然、それに装備されている武装は兵士一人では決して扱えない武器も多い。

戦車級を僅か二、三発で撃ち殺す事が出来る12・7ミリ重機関銃は、生身ならば三人一組で運用する武器であるが、強化外骨格では一人に一丁の割合で装備される標準的な武器に過ぎない。

本来ならば——BETA日本上陸以前、強化外骨格は主に下士官達に与えられる装備であり、軍隊の号令や命令、ましてや戦い方自体を碌に知らないような徴兵されたての素人に与えられる兵器ではない。

同じような兵器としては戦術機がある。

この危機的状況にも関わらず徴兵されたての新兵に戦術機が与えられることは絶対に無い。

最低でも六ヶ月の訓練期間が——戦術機の価値を考えればこれでも短すぎるぐらいだが——維持されている。

しかしながら人的損耗が激しすぎ、戦線の構築自体が難しくなっている現状を鑑みれば、手元にある兵器は例え素人であろうが使う方が現実的というものだ。

だが、様々な兵器を与えたとしても、使用者たる兵士が扱えなければ意味がない。

豚に真珠、猫に小判とはという例え。

東野以外の二等兵たちが正にその状況である。

故に第二機械化歩兵連隊第三中隊長である遠藤大尉は班長である千葉に集中訓練の命令を下し、千葉と樽木はその訓練を実施しているのである。

兵器としての強化外骨格は歩兵が扱う武器や道具のそのほとんどを扱うこと、または装備することが出来、白兵戦に置いてもBETA小型種とならば渡り合えるため、戦力の底上げを容易に成し遂げる強みがある。

東野を始めとする徴兵された千葉の新しい部下達は強化外骨格を身に付けた経験が今まで一度もない。

それに装備されている兵器も使ったことがない。

何から何まで、強化外骨格に関する全てを一から教えなくてはならない。

このような状況では、多種多様な武器を扱い、強化外骨格の汎用性を引き出すような技量を彼らに求めるべきではない。

そのため、千葉らは彼らの強化外骨格に装備させる武装を決めてから教育を始めた。

その手始めが12.7ミリ重機関銃であったが教育は難航している。

強化外骨格に取り付け終われば誰でも簡単に射撃出来るが、弾詰まりを起こした際の対応、弾切れした際の給弾の手順、銃身が加熱しすぎた場合の銃身交換の方法等々が出

来なくては、戦場では故障一つで命を落としかねない。

それらを一応『やったことがある』というレベルで経験させるだけでも、素人八名が行うと多大な時間が掛かる。

それでも一回の経験で覚えると、千葉が半ば暴力で脅迫しながらの教育訓練。

東野や坂上などの男でも精神的にきつい状況であり、真木野や高井に掛かるストレスはかなりのものになっていた。

初日の朝は東野が這いつくばり、真木野が泣いた。

その日の午後。またも遅れた田淵が殴られ、別件で言い訳した三輪が千葉に文字通り右腕一つで吊し上げられ、投げ捨てられた。

その結果、千葉の宣告通りに笠原も殴られ、朝の原因を作った高井は坂上と三輪たちから非難されて泣いた。

こうなってしまうえば、八人の新兵はお互いに仲の良い少人数のグループだけで会話するようになる。

そんなバラバラな心理状態——千葉と樽木の想定内——で、集中訓練二日目の朝の訓練は始まっていた。

二日目最初の訓練は、強化外骨格を着用しての高所からの着地。
なんてことはない。

言葉だけで言えば、高いところから飛び降りて着地するだけである。

飛び降りる場所はレンジャー塔。

厳しい選抜試験を合格した兵士が、強さの象徴であるダイヤモンドを冠するレンジャー徽章を目指して肉体の限界に挑むレンジャー課程や、ヘリコプターからのリペリング等の訓練で使用される大きな物見台のような塔である。

今回、千葉達が使うのはその中段の広い台で、高さ約一一メートル。

人間が最も恐怖を感じる高さでもある。

その高さから強化外骨格で飛び降り、そのまま着地する。

強化外骨格のセンサーと姿勢調整機構を自動連接させれば、特に問題無く出来る動作であり、また機能的に限界に近い高さからの着地であった。

これ以上の高さから、何もしないで——重力に引かれるままに落下すると、自重と加速の関係で強化外骨格の装着者の背骨や脊椎等に重大な損傷が発生する確率が高くなり始める。

千葉の目論見としては強化外骨格による自動着地の限界を、新兵たちに体感させるための訓練である。

だが、彼の目の前にいる部下八名は誰一人として飛ぶことが出来ていなかった。

レンジャー訓練塔の中段、地上十一メートルの高さにある広場は強化外骨格一個班一

○名が乗ってもまだ余裕がある程の広さであり、一〇メートル四方以上のサイズがある大きなものである。

手本は強化外骨格を装着した樽木が——ただ落ちるだけのことであるが実演した。

その彼はついでにと、見本として跳躍ユニットのロケットモーターで中段の広場に戻ってきた。

既に落ちる順番も指名した。

帝国陸軍の迷彩服を着込んだ千葉は、強化外骨格を生まれて初めて装着した部下たちを指名した順に飛び降り場所に並べたまではよいが、その状態から一分経過したが何も進んでいなかった。

皆が下を眺めては、『高い』だの『無理だ』だとほざいている。

結果として千葉が内心決めていたタイムリミットである一分は、文字通りあつという間に過ぎ去った。

ここからはスパルタ教育の時間だ。

「東野ッ！ 飛べ！」

容赦なく怒鳴る。

この第三中隊第三小隊第一班で千葉ら下士官二名を除けば、東野二等兵が最先任者となる。

と、なれば、何をするにしても東野にはリーダーシップの発揮が要求される。それが先任である者の義務だ。

リーダーシップとは、多くの場合、言葉ではなく行動で伝わるものだ。

当然そのようなことは千葉も承知しており、東野二等兵が兵卒の中ではたった一ヶ月の差とは言え最先任者である以上、東野から実施しなければリーダーシップを発揮できない。

一瞬、東野は怯えた表情で千葉を見た。

無言の問いに対する返答は、怒気だけを込めた鋭い視線。

飛び降りなければ、殴られることは分かりきっている。

が、飛び降りるための一歩がどうしても出ない。

激痛と、死んでしまうかもしれない痛み。

言うまでもなく普通の人は『激烈に痛くても、生きている方を選ぶ』。

東野はもう一度地面を見た。

高さ十一メートルは地上三階建てと大差ない。

昔、通っていた学校で見下ろしたことがある高さ。何気なく見慣れた高さ。

だが、普通に落ちれば人が死ぬ高さ。

死への本能的恐怖が動きを止める。

恐怖が躊躇いを生み、身体を縛る。最悪の結果が脳裏をよぎれば、人の思考は取り止めもなく同じ思考を繰り返す。

動悸は速くなり、呼吸も浅くなる。

手の平にはうつすらと汗が滲み、腰が引け、足に力が入らない。

これが、人が恐怖に震えると言うことだ。

当然、千葉も樽木も経験し、克服済みである。

そんな恐怖に震える東野の視界が急に揺らいだ。

同時に来る背中からの衝撃と僅かな音。

足場を無くす両足。

真下に見える青い芝生。

東野本人の意志に関係なく、宙に浮く身体。

無言で東野を背後から蹴り落とす樽木。

思いもよらぬ光景に声すら出せずに驚愕する七人の新兵たち。

鋭い視線のままの千葉。

「——う！ あああああああああつっあああああああ——！！！」

直後、響き渡る東野の絶叫は尾を引きながら小さくなり、あつという間にズドンという着地音とともに途切れた。

悲鳴だけを残して落ちた東野だったが、強化外骨格は高度計と連動した自動機構により素人を最適化された動作で強制的に着地させていた。

その結果、膝を深く曲げて着地した東野の強化外骨格が両手を付くようなことは無く、両足で立ち上がる——強化外骨格は特に装着者からの入力がない限り、着地後は基本姿勢である立ち姿になる。

が、それも僅か一瞬。

東野は膝から崩れ落ち、両手を付いた。

「——はあ、はあ、はあ、はあ……」

一向に収まる気配がない東野の荒い息が強化外骨格内蔵の無線機を通じて班員の耳に響き渡る。

配属前は粹がっていたのかもしれないが、最早今さら彼が生意気なことを言ったとしても仲間にも広がる悪影響は薄いかもしれない。

そうすることも、千葉と樽木の狙いでもある。

しかし、二人は東野を自分たちに次ぐナンバー3に仕立て上げようとしている。

よって、彼が跪いたままでは意味がない。

そして、他の班員達も己の未熟さを体感して貰わなくてはならない。

時間の無い中でこれ以上のスケジュールの遅延は許されない。

樽木が蹴り落としたことなど忘れたような笑顔で、ヒヨコのような部下達に声を掛ける。

今の出来事は彼にとって記憶しておく価値すらない瑣事である。

「さっさと立ち上がれ、東野ッ！ みんな、分かつただろ？ 着地を自動にするだけでいいんだ！ 次は高井だ！ さあ、行くぞ。強化外骨格があれば絶対に死なないから」

「——で、出来ません！」

反射のように発した叫び声で高井は樽木の指示を拒絶し、その一言で千葉は怒鳴った。

「いいからやれ！ 馬鹿野郎が！」

半ば殺気を込めた視線で睨む。

竦み上がり、怖ず怖ずと、逃げるように行き場を探す高井はとても憐れで、そして弱々しく見えた。

無理もない。

普通の人は命令一つで戦うようには出来ていない。

兵士は幾度も訓練を繰り返して、そうなっているだけである。

それなのに、ほんの三週間前まで幼稚園で保育をしていた若い女性が戦えるだろうか？

見た目通り、優しそうで穏やかな笑みがよく似合う高井が戦いに向いているわけがなく、何かの物語みたいに都合良くその身に隠れた才能があるわけでもない。

事実、高井桃花に戦いの才能は一切無く、彼女は子供に囲まれて過ごす方が似合う女である。

そして、その方が間違いなく子供たちのためにも良いことである。

母性本能溢れる優しい保母さんと過ごす日々は幼子たちの良き思い出として、色褪せることない記憶となるだろう。

それでも千葉は罵倒と叱責と命令を一つに混ぜ合わせて怒鳴る。

女子供、老人赤子、病人怪我人、誰であろうと容赦できない。

戦場では足手纏いが他人を殺す現実がある以上、訓練の場で無闇に庇うことはただの害悪である。

「む、無理です！ 出来ないです！」

懇願にも似た高井の悲鳴を無視して、千葉は冷たく言い放った。

「だったら、お前だけで死ね」

静かに告げた一言は、半ば本気。

足手纏いを助けるために自分が死ぬ気はないし、部下も死なせる気はない。

かと言つて、『今は』見捨てる気もない。

訓練は欠点を克服し、技量を向上させる為のものだ。

しかし、一切の遠慮や配慮無しに放たれた鋭い言葉の刃は高井だけでなく、残りの班員たちの心にも様々な傷を付けた。

あまりにも弱者を突き放した物言いに、班員たちが動揺するのも無視して千葉は高井を睨み続ける。

その殺気に怯えた高井がさらに一步後退ると、さり気なく樽木はその背後に回って千葉に目配せした。

千葉が視線を微妙に逸らして分かりにくい了承のサインを送ると、樽木はわざと張り切っているような声を上げた。

高井の降下順が二番目なのは別に彼女を虐めているわけではない。

ここで少しでも能力的に皆と変わらないことを示しておかなければ、彼女の班内での力関係は最低なものになる。

それは彼女自身のためにも、あまり喜ばしいことではないのだ。

よって、この状況下で樽木が無理矢理にでも高井を降下させるには多少の演技が必要だ。

「はいはいはい。高井みたいなお嬢ちゃんには、ちよつとお手伝いが必要ですよね、班長」

樽木はそう言いながら強化外骨格の胸部装甲を跳ね上げて素顔を出した。

そのまま陽気な調子で高井の脇に立ち、強化外骨格ごと片腕で抱き寄せた。

その上、彼女に向けてウインクまでしてみせる。

残念ながら天然パーマの色黒男がしても、それほど様になっていない。

むしろ絵に描いたような三枚目の出来上がりだ。

「……え？ あ、あの……」

「好きにしろ」

「——じゃ、遠慮無く」

腰に手を当て溜息混じりに言う千葉と、急な展開——殺気を感じるほどの千葉の視線から、樽木からのナンパのようなウインクと目まぐるしく変わる状況について行けない高井と、爽やかな笑顔を頑張つて作る——それでもしないとにやけてしまいそうな樽木。

「は〜い。じゃ、飛ぼうか」

「はいッ!？」

まともな返事も待たず、樽木は高井を抱き抱えたまま宙に飛んだ。

「ひっ!! ——いいいいいやあああああああああああ——っ!!」

高井の悲鳴が真木野たちの耳で残響する中、あつという間に二人は着地した。

ドスンと響く低い音とその後続く無音の数秒。

坂上、三輪、胡桃沢、田淵、真木野、笠原、誰もが一瞬、黙り込む。

そんな部下を無視して、何事もなかったように千葉が高台から下を覗き込む。

座り込んで泣き始めた高井とそれをあやす樽木が見えるが、無事に着地さえしていれば後はどうでもいい。

千葉は残った六名に向きを変えて、顎をしゃくつた。

「高井ですら飛んだぞ。——で、お前らはどうなんだ？」

何気ないその仕草と声音は、紛うことなく脅迫そのものだった。

一九九八年一〇月一六日 二二時四五分

帝国陸軍相馬原駐屯地 一三号隊舎5Fのある女性隊員用居室

二等兵 真木野玲および高井桃花と三輪貴子

「玲ちゃん。もう、電気消すね」

「あ、お願いします。桃さん」

ちよつとした遣り取り。

Tシャツとジャージのズボンというラフな服装の高井が壁に在る照明のスイッチをオフにする。

暗くなった居室の中をサンダルで歩き、高井は自分のベッドに潜り込んだ。

それは新兵の訓練期間中にあるような見窄らしい二段のパイプベッドではなく、比較的まともな外見のパイプベッド。

同じようなベッドが部屋の四隅に置かれた部屋に居るのは、真木野と高井、それに三輪の三人の新兵のみ。

彼女たちがたつた三人で四人以上は眠れそうな部屋を使っている理由は単純明快。

ここは第二機械化歩兵連隊第三中隊第三小隊第一班に割り当てられた部屋であり、班にはまだ女性隊員が三人しかいないからである。

軍隊の部屋に男女の差はない。

男と同じベッドを使い——つまり女性には大きい——同じロッカーを使う。

強いて違いを探すならば、女性兵士が生活することを前提として建築された隊舎などで女性用トイレが多いとか、シャワールームが大きくなっていると、そんな程度の差しかない。

一部の中隊では既に二段ベッドを搬入するような満室状態であるが、再編中の第二機械化歩兵連隊第三中隊ではまだそのような段階ではない。

今の戦況でも前線投入が確定的な機械化歩兵部隊に割り振られる女性の数は腕力等の問題から少ない。

そういった観点から見れば、千葉の元に配属された真木野と高井、三輪はかなり運がない部類に入るだろう。

軍隊はよほどの特殊技能か珍しい適性を持っていないとそれらを考慮しないし、特に頭数が要求されるような状況ではそれらの事を考慮しないことは珍しくない。

そうなる、あとはただの運で配属先が決まる。神社のくじ引きで吉が出るか、凶が出るかのような違いで命運が決する。

そんな状況では、数少ない女性隊員同士が仲良くなることは必然ともいえるものだった。

「桃さん、明日は何をするんですしたっけ？」

今にも寝てしまいそうな雰囲気を漂わす声で真木野が問い掛ける。

月明かりで照らされる無機質で飾り気がない部屋。

生活感がない空間は兵士がただ着替えて、寝るためだけに有るような錯覚を生起させる。

消灯まではあと一五分ほど有るのだが、訓練で疲れ果てた身では一分でも多く睡眠時間が欲しい。

三人とも夜の点呼が終わると同時に毛布の中に直行である。

例え、すぐ眠りに落ちなかつたとしても、疲れた身体を横たえるだけで大分違う。もつとも真木野と違い、三輪は既に静かな寝息を立てて眠っている。

さり気なく、「我が道を行く」を貫く三輪に真木野と高井が恨めしそうな、ついでに少し不機嫌そうな目を向ける。

世の中、人間関係は常に複雑である。

「実弾を使つて、戦闘訓練だつて……」

高井も半ば欠伸混じりに答えるが、その口から出た声は暗かつた。

「——もう気にしちや駄目ですよ！ 班長はただの暴力馬鹿だし、坂上もインテリぶつてるだけのジジイだし！ あんな奴らの言葉を、桃さんが一々気にする必要なんて無いです！」

高井の弱気を吹き飛ばすように喚わめいた真木野が、毛布を飛び退けるようにして上体を起こした。

ベッドの上で胡座をかいて真木野が不機嫌を絵に描いたような表情で高井を見る。

月明かりが照らすモデルらしい無駄肉のない四肢に、女性らしい柔らかさが失われないう程度に引き締まつた腹筋が一際目を引く。

支給品の黒いスポーツブラとショーツだけを身に纏っている姿だったが、真木野には

身につける衣類に左右されないような色香があった。

びっくりした高井がゆっくりと上体を起こして真木野を見ると、元モデルの美女はさらに意識して膨れっ面を作つて唸る。

その余りにも子供じみた仕草にきよとんとした高井だったが、不意に堪えきれなくなつて小さく吹き出した。

穏和な笑みを浮かべて、高井もベッドの上で姿勢を変えて座り込んだ。

「有り難う、玲ちゃん。なんか、大っきな子供みたいね」

そういつてクスクスと笑う高井を見て、真木野の表情も自然に緩む。

「桃さんが真面目過ぎなんですよ。どうせ私たち最初から上手く出来っこないんですから、あんな小うるさいおじさん連中なんて放つておいたらいいんです」

「そうなのかな?」

「そうなんです!」真木野がきつぱりと言い切る。

「思い詰めちゃ駄目ですよ、桃さん。絶対生きて、みんなの元に、子供たちの元に帰らなきゃ……。ううん。絶対に生きて帰りましょう」

瞳に強い意志を宿して、彼女は高井を励ました——自らも励ましながらも。

「……そうね。……そうよね。私、約束したものね……」

そう言いながら瞳を閉じる高井。

真木野も声を掛けるのを止めた。

高井の臉の裏に浮かぶ風景はどのようなものか、彼女は知らない。

だけど、大事な、とても大事な思い出ということは分かる。

テレビもラジオも無い隊舎で兵士の娯樂なんて会話と読書と音楽、そして楽しかった思い出に浸るか、思いつきり羽目を外せる休暇を待ち望む程度しかなく、ささやかすぎる幸福感を壊すほど真木野は冷たくない。

高井桃花の脳裏に浮かぶ多くの人々。

実家で自分を『いつまでも待つている』と言つてくれた祖父母。

『逃げてきてもいいから』と小さく囁いてくれた母。

『実家は俺が守る』と覚悟を決めた弟。

布団の中に潜り込んで泣いていた妹。

仲の良かった高校の同級生と飲んだ最後のお酒。

今となっては礼も言えない専門学校の講師。

世話になった職場の先輩たちと幼稚園の園児たちが手渡してくれた折り鶴は、彼女の宝物であり、そしてお守りでもある。

不器用に折られたそれらを見れば、オルガンを弾く自分の周りではしゃぎ回っていた園児達と合唱した午後の一時の何もかも鮮明に思い出せる。

大事な人たちと過ごした、大切な一時の思い出。そうして、彼女は静かに瞳を開く。

視界に映るのは、月明かりの中で毛布を握りしめる自分の両手。華奢で、細くて、綺麗な指。

ある時はオルガンを弾き、ある時は子供たちを抱き上げた両腕。彼女だつて愚かじゃない。

自分が戦いに向いていないことは分かっている。

自分が強くないことも、不器用なことも分かっている。

それでも高井桃花が逃げ出さない理由。

人類に逃げ場が無いという現実。

戦わなければ殺されてしまう現実。

高井桃花は徴兵されて軍人になったという現実。

自分の後ろに園児たちがいる。

故郷で暮らす家族がいる。

今は人類滅亡という暗い将来しか見えないけれども、遠い未来は再び子供たちが無邪気に笑える、光溢れる場所になるのかもしれない。

辛いけど――。

苦しいけど——。

泣いてしまうけど——。

惨めで——。

見苦しくて——。

無力だとしても——。

逃げ出したら、何もかも無くしてしまふから。

文字通りに、全てを無くしてしまふから。

だからこそ——。

私は——。

「ごめんね。………ううん。ありがとうね、玲ちゃん。ちょっと、いろいろと、思い出せたわ」

そう言って、高井が微笑む。

戦うために、守るために、生きるために、生きる自分を少しだけ誇らしく。

見かけによらず優しい真木野に、ここにはいない人たちに、自分の現在いまに。

例え、強がりだとしても少しぐらいは胸を張ろう。

「謝らないで下さい、桃さん。こんなこと、お互い様ですよ」

真木野も心からの笑みを浮かべる。

それから高井をからかうネタを一つ思い出して少々意地の悪い笑みを浮かべ、その上ククツクなんて一人笑いを始めた。

「……な、なによ、玲ちゃん。その笑いは……」

高井の穏和な微笑みが引き攣った笑いに変化すると、さらにウツシシシツとオヤジのような笑いを続ける真木野。

若干引き気味な高井に対して、猫のように目を弧状に細めた真木野が問い掛ける。

「ねえ、ねえ、桃さん。樽木三曹に思いつ切り狙われちゃっているけど、桃さんはあの人のこと、どう思っているの？」と、言つては、またウツシシシと一人楽しそうに笑う。

「え？ 狙われているって……？ えっ!? ええええーっ!」

驚いて、最後には悲鳴のような声を上げる高井が面白すぎて堪らない。

どこかの噂話好きのおばさんのように左手で口元を隠した真木野が、右手を団扇のように振りながら冷やかす。

「またまた、奥さん、嘘吐いちやつて。あれだけ、その巨乳をガン見されてたら、普通に乳首とか感じちやいません?」

「——やつ! ちよ——ちよつと! う、嘘ツ! 変なこと言わないでよ!」

反射的に毛布を胸元に引き寄せて身を守ろうとする。

なんというか、その仕草自体がごく自然に男を誘うと言つても過言ではない。

「うわっっちゃ。駄目ですよ、奥さくん。もう、それ、襲つて下さいって、男を誘つてますよ。」

「玲ちゃん！ どうして、そんなにオヤジモード全開なのよ！」

真つ赤な顔の高井が、同性でありながらいやらしさを感じる真木野の視線から身を振るようにして逃げようとするが、当の真木野はそれを気にした様子は微塵もない。

瞬時にオヤジ笑いを引つ込めて、表情を引き締めると流し目で同性を見る。

真木野は掛け値なしの美人なので、ただそれだけで何とも言えない迫力がある。

その彼女が熱い溜息を一つ漏らしながら、自分の人差し指を見せつけるようにして舐めて濡らす。

「……うふふ。もう、桃さんって本当は私よりお姉さんなのに、どうしようもないぐらい初心うぶなんだから……。私、本当はバイセクシャルだから、襲たぐちやっついていい？」

「——れ、れれつ、れいちゃんツ!!!」

本気で怯えた高井が悲鳴を上げると、妖艶な流し目で熱視線を送っていた真木野は再び雰囲気を一変させて、また目を細めて『につししし』と笑ってから真顔になった。

「やだなあ、桃さん。本気にしないで下さいよ」

「ほ、本気にするわよ！」

「私、無理矢理は趣味じゃないんで、無理強いはしないでですよ」

「ちよつと、……日本語おかしくない？」

「だから、和姦だと容赦無しに超絶絶技でイカしまくりです」

「——もう！ そんなこと、真顔で言わないでよ！」

顔どころか首まで赤くした高井が枕を投げ付けたが、いとも容易くそれを受け止める。

「どうです？ 本気にしました？」

にやりと笑った真木野が問い掛けるが、高井の方は頭に血が回ったままだ。

「どうせ、私は初心ですよ！ 処女ですよ！ 玲ちゃんが本気か嘘かなんて分からないわよー！」

「あ………」

高井がここまで怒るとは思っていなかったので、真木野は苦笑を浮かべたまま、ポリポリと人差し指で頬を搔いた。

「ごめんなさい。そんなに怒らないで下さいよ、桃さん。一応、それでも役者志望でいろいろとやってみましたから」

ぶうつと頬を膨らまして拗ねる高井と、冷静な真木野では容姿も相まってどちらが年上か分からない。

「役者志望？」

怒ってはいたけども嫌いになつてはいないからか、それとも興味が怒りに純粹に勝つたのか。

はつきりしない微妙な——僅かながらの苛つきと盛大な照れがブレンドされた声音で高井が聞いた。

「私、これでも最終目標は映画俳優なんです。今はまだ駆け出しの劇団員でしたけど、いつかはハリウッド映画に出てみたいんです。——まあ、流石にハリウッドは夢のレベルですけど。面白いじゃないですか、みんなの前で演技するの——」

真木野が語る言葉に籠もった熱を感じて高井も聞き入る。

「役者って立場で演技して見られるのも楽しいし。これ誰の言葉か覚えていないんですけど、『いろいろな人の人生を役者って立場で経験していける』って役者の特権だと思うんです。これって、人生を何倍にもするような事じゃないですか？ そう考えると、余計に役者になりたいなつて思うんです」

多少照れくさかったのか、真木野は微かに頬を赤らめて、はにかんだ。

「今はまだ駆け出しだからモデルやって劇団やって……。だけど、いつか必ず映画のオーディションに受かって映画俳優になりたいんです」

そう言つてから、真木野はくすつと笑った。

元モデルの絵に描いたような明るい微笑みに釣られて、高井も微笑む。

BETAに侵略されている現状では叶わない夢。ただ、この先にある未来まで諦める気はない。

そう、真木野も高井も考えている。

お互い目を合わせて笑い合つてから、真木野は口調と雰囲気ガラリと不機嫌なものに変えて、あからさまな仏頂面を作る。

「だ、か、ら、——私の顔に傷を付けたあの班長は大嫌いです」

確かに映画俳優になるという大きな夢があるならば——それも彼女ならば完全に無理な夢でない。

彼女には生まれ持った美貌というアドバンテージがある——容赦なく顔面に拳を叩き込んだ千葉班長は、〃それは、とても憎まれるだろうな〃。と、高井も納得する。

真木野は千葉の名字も名前も口にしない。

あくまでも『班長』とだけ口にする。

そのことについては、千葉個人を認めたくないからだろうと高井は推察している。一頻りムスツとしていた真木野だが、また思い出したかのように表情を変えた。

彼女の表情と雰囲気は本当にころころと万華鏡の光の様に変わる。

それを眺めているのも、高井にとつては面白い。

「で、桃さん。樽木さんと付き合う気はないですか？」

表情だけでなく話題もころころ変えた真木野が、緩い放物線を描くようにして枕を投げ返したが、質間で硬直した高井の頭に柔らかく当たってポトリと落ちた。

それから一拍以上の間を置いてから――。

「え、ええええええええええーっ！ そんなの考えたことない！ 第一、どうして玲ちゃんか、さつきからそんなことばかり聞くのよ！」

再び首まで真つ赤にした高井が喚く。

「だって、樽木さんに頼まれたからですよ。脈があるかどうか、探ってくれって」

あつけらかんと種明かしをする真木野。

いつの間にか、樽木のこととも階級を外して『さん』付けである。

「ど、どうしてよ?」

「いやだなあ、もう、分かっているくせにく。樽木さんが桃さんにラヴラブだからに決まっているじゃないですか」

真木野もストレートの直球しか投げ込まない。

一つ年上の高井の方が色恋沙汰に疎いものだからと容赦無しである。

「だっ、だっ、だっ、だっ――まだ出会って五日目よ！」

「一目惚れってヤツです」

「わ、私、あの人と碌に話したこと無いわよ！」

「恋に時間は無関係です」

「わたし、何にもしていないし……、泣いてばかりだし」

「男と女は存在するだけで愛に落ちるのです」

何かの悟りを開いたかのように言葉を棒読みにして返す真木野。

演技で無表情を保ちながらもちやつかり楽しんでる彼女に、軽く逆ギレ気味になる

高井。

「玲ちゃん！ 楽しんでないで真面目に答えてよ！」

「やつぱり、男は泣いている女に弱いからじゃないですか？ あと、桃さん、巨乳だし」

高井の抗議を軽くスルーして返す真木野の言葉はある意味真実。

そこら辺の事については真木野の方が圧倒的に経験豊富だ。

「むう……。なによ、それ。フォローにもなっていないよ。結局、私じゃなくて、おっぱい

が好きなんじゃない……」

大きな胸を隠すように枕を抱えて唸る高井は確かに可愛い。

というか、枕ごとときには隠しきれない豊満な胸が形を変えてはみ出て見えるのは反則

だ。

女の自分が見ても、何となく卑猥。

と、思ってしまう真木野だけでも、この一言で納得がいった。

高井は言い寄られた経験がないのではなくて、言い寄られすぎたから恋愛から逃げた。

それも大きな胸を目当てに来る男たちに辟易していたのだ。

なに？ この分かりやすさ――。

こんな御時世にまともに恋愛したこと無いなんて、可哀想どころか憐れすぎる。

恋愛こそ、女の華。

『命短し恋せよ乙女』

この言葉は嘘じゃない。

女の賞味期限というか、売れ時は短いのだ。

異性との恋も愛も知らないで人生を生きるなんて虚しすぎる。

今まで面白半分で樽木に頼まれてやっていたことが、真木野の中で行うべき事に入れ替わった。

「桃さんッ!!」

「――は、はい!?!」

ウジウジといじけるような高井を一喝する真木野の呼びかけで、一瞬で空気が固まるかのような錯覚が巻き起こる。

「樽木さんと付き合いなさい!」

「え——、な、なんで!? どうして命令形なの!」

狼狽える高井を無視して真木野の説教もどきが始まる。

「いいですか、桃さん。あなたは今まで、いろいろと、様々に、無自覚に、間違いを犯して、自ら貴重なチャンスをドブに捨てていたんです」

「え? え? なに? なんなの?」

「桃さん、いえ、高井さん。いいですか? 古来より延々と続く男女の営み。その切っ掛けは心ではなく、まずは外見から。見た目や仕草から、物語は始まるのです」

「なんで!? いきなり!? 説教モード!」

「確かに、樽木さんは桃さんの巨乳に惹かれてアプローチを掛けてきましたが、彼に罪はありません。これは男として当然のことであり、桃さんが女性として魅力的であるという事実を裏付けるものなのです!」

「え……。えくくくと、玲ちゃん……。私の声、聞こえてる?」

「樽木さんが桃さんの巨乳に惹かれてきたからといって、門前払いをしては駄目なのです! 人は見た目だけじゃ中身までは分かりませんッ! 心と心でお付き合いするためには、まず会話! 相手を理解するためには会話と時間が必要不可欠なのです!」

真木野の震える拳をグツと引き寄せ、言葉に力が籠もる。

そんな状況に高井の心は置いてけぼり。

「……あ、あの、真木野さん。これって……お芝居の練習？ それとも……本気？」

——神様、仏様、この…なんて言うんですか？ 独走？ 妄想？ 大暴走？

高井の目の焦点が遠くに行ってしまうけれども、それよりも遠い真木野の力説。

「スケベだけど優しい樽木さんなら大丈夫です！ 暴力班長と違って家庭内暴力の心配はありません！ まずは明日の朝から！ お付き合いをレッツ・スタート！ 命短し恋せよ乙女ツ！！ 二四時間フル活用して、一緒に歩いて、一緒に食事して、一緒に飲み明かして、デートして、手を繋いで、抱き合って、キスして、ベッドインしてツ！！ それから、やっと、やあ~~~~と、心と心のお付き合いがスタートするのです！！」

「玲ちゃん。私の言葉、聞く気無いでしょ？」

すっかり冷めた半眼無表情の高井が問うと、真木野は自信満々に言い切った。

「これが現実！…これこそが現実！…だからこそ恋愛！…桃さんは明日から樽木さんとお付き合いを始めるべきです！」

月明かりだけが照らす居室に満ちる静寂の時。

すっかり冷静になってしまった高井と、一人で燃え上がるだけ燃え上がった真木野の視線が交わる。

いろいろなものが混ざり合って出来た静寂だけあって、次の第一声はお互いになかなか考えることが多い状況だった。

動きのない二人を再び動かしたのは、第三者の登場だった。

「——二人ともうるさくいい！ 私が眠れないじゃない！」

ガバツと毛布を跳ね上げて、三輪が不機嫌で目付きの悪い顔——当然、眼鏡は外しているので藪睨みの状態で、二人を怒鳴つても当の本人たちには意味はなかった。

「あ、ミワつちが起きた」確信犯的に応える真木野。

「おはよう、三輪さん」天然で応える高井。

二人ともほとんど修学旅行の雰囲気である。

「おはよう」じゃないし、今深夜なの！ 寝る時間なの！ それと、私に「ミワつち」なんて渾名付けるな！」

「いいじゃん、可愛いしいし」

「子供扱いするな！ あなたの方が年下でしょ！」

「年齢なんて無関係。同期の絆ってヤツです。樽木さんの受け売りですけど」

「あく！ もう、ああ言えば、こう言う！ 疲れているんだから、勘弁してよ！」

もはやヒステリックな金切り声で喚く三輪であるが、真木野にとってはからかい甲斐があるいい人だ。

三輪も心の底から怒っているわけではないし、この手の会話も嫌いではない。

とはいえ、就寝前は止めて欲しいのだ。

そんな状況で前触れもなく、コンコンと二回扉をノックする音。

消灯寸前の訪問者に訝しげな表情を浮かべた真木野がベッドから降りて、サンダルを引っかけようように履き、部屋の扉を開けた。

「夜分遅くにゴメンね」

そう言つて苦笑いを浮かべているのは、この隊舎の当直勤務上番中の五十嵐上等兵。後ろ髪を纏めて大きめのバネツトで止めているが、それが特徴的で後ろ姿なら誰でも直ぐに覚える容姿。

少し細目の眼鏡を掛けて理知的な雰囲気がある上、比較的端正な容姿でもあつたが、真木野の前では普通にしか見えない。

「??:」

名前も碌に知らない上等兵が『ゴメンね』なんて、どうして言っているのか余計に訳が分からない。

その考えがストレートに顔に出ているのを自覚する真木野であつたが、『今さら隠しても……』と思つて隠さない。

そんな新兵の表情を見ても苦笑いを浮かべたままの五十嵐上等兵を注視していた真木野は直ぐに気付いた。

——苦笑いじゃなくて、含み笑いを……堪えている?

じゃ、なんで？

そんな疑問が浮くが、五十嵐上等兵が正解を揭示する方が早かった。

「はい。これ、貴女たち宛のラブレター。我が第二連隊女性隊員の話題を独占している
人気急上昇中の人物から。羨ましいけど、玉の輿よ」

「——えっ?!?!」

こんな状況でラブレター？

一瞬脳裏をよぎるのは、二枚目エリート街道爆走中の凛々しい若手士官からの結婚を
前提にしたお付き合いを願う恋文。

——うふふ。地獄の沙汰も金次第。じゃなくて、軍隊生活も美貌かお次第？

帝国軍も捨てたもんじゃないわね。

なんて思いながら、慌てて小綺麗な封筒を素早く開けて、綺麗に三つ折りに折られた
便箋に書かれている文字に目を走らせた直後——若干一九歳の真木野玲は悲鳴を上げ
た。

「——訓練非常呼集!?! 2310までに戦闘服上下、半長靴に着替え、背囊を持って一一
号隊舎前集合。一秒でも遅れたら、死ぬまで腕立て伏せ。——つて! 死んでしまえ!

あの脳筋暴力馬鹿班長!!」

「ええええええええ——っ!! そんな!!」

「嘘でしょ!! 何考えてるのよ!!」

泣き出してしまいそうな高井の悲鳴に、罵声混じりの真木野と三輪の悲鳴が夜の隊舎に響き渡る。

これから就寝直前だというのに告げられた非常呼集訓練。残り時間はあと一分。

「桃さん、起きて! 背囊出来てる!?!」

「もう、信じられない! 馬鹿じゃないの、あの人! 中身は大丈夫よ!」

「疲労回復つて言葉自体を知らないんじゃないの! 義務教育からやり直せ!」

慌ただしくパジャマ代わりのジャージを脱ぎ捨てる高井と、ロッカーを開けて戦闘服の袖に腕を通す真木野、慌てて起きた三輪は足を滑らせて尻餅をつく有様。

当直の五十嵐上等兵は苦笑したまま、ちよつとした優しきで部屋の電気を付けてから

——一分後には軍紀違反となる行為である——声を掛けた。

「——ね? 最高の玉の輿でしょ?」

「嘘吐き!」

「最低!」

「サゲイスト!」

彼女たちの悲鳴にも似た罵声に、毎日二三時になると駐屯地に響く就寝ラツパの音ねが重なる。

高井は今まで寝る前に響き渡るラツパはうるさくて、むしろ安眠妨害じゃないかと常々思っていたのだけれども、今はそんなことを思い出す余裕すらない。

慌ただしく準備を進める三人の言葉を軽く流して、五十嵐上等兵は壁に背を預けた。数分後、声を揃えて千葉を罵りながら着替え、背嚢を背負って部屋を飛び出す新兵たちを見送る。

三人の衣類が脱ぎ散らかった無人の部屋を一通り眺めて、それから電気を消した五十嵐は一人呟いた。

「——お金で命は買えないから、間違ひなく本物の玉の輿なんだけどね……」
そう言い残して、部屋を出る。

彼女の勤務の一つである夜間の見回りは始まったばかりだ。

この部屋を走り出た彼女たちが汗だくで戻って来たのは、それからちようど一時間後のことであつた。

第9話 土下座は一時の恥、童貞は一生の恥

一九九八年一〇月一七日 〇九時〇九分

帝国陸軍相馬原駐屯地 相馬原演習場内 実弾射撃場D地区

第二機械化歩兵連隊第三中隊第三小队第一班一〇名

帝国陸軍相馬原駐屯地には隣接地域に実弾射撃が可能な演習場が存在する。

その事を幸運と取るか不幸と取るかは人による。

ただ千葉の元に配属された八人の新兵たちにとっては間違ひなく不幸だろう。

山間部特有の冷え込みを感じる早朝から始まった訓練は、いつもの起床時間よりも早い時間から始まった。

昨夜の非常呼集を全く考慮せずに始まった早朝からの非常呼集訓練も遂に最終段階クライマックスとなる実弾射撃訓練である。

ただし、そのことは訓練を行っている真木野たち八名には一言も知らされていない。

彼らは昨夜の就寝直前から始まった非常呼集訓練で深夜一時まで腕立て伏せや持続走を行い、やっと寝れたと思ったたら朝の五時から再び非常呼集訓練で叩き起こされ、またもや八九式自動小銃を手に走らされて疲労困憊だった。

だが、それも無理もないことだ。

睡眠時間は容赦なく削られ、朝食は白飯が詰まった缶詰とたくあんの缶詰が二人に一つずつ。

水だけはたっぷりと用意されていたが頻繁に飲むような暇はない。

訓練スケジュールは一切知らせずに、その場その場で千葉が命令を下し、それを実行する度に皆が倒れ込んだ。

無論、比較的体力がある東野や笠原らには、出来ない真木野や高井、三輪ら女性陣の分までも肉体的負荷を掛けさせ、連帯責任で追い詰める。

それでも彼らは簡単には膝を着かなかつた。

普通の男は女が見ていれば、無理してでも頑張る。

そう言った意味では結構粒ぞろいな女性が揃っているこの班では、若い少年たちが実力以上に頑張るのも無理からぬことだ。

この点だけは千葉と樽木にとって嬉しい誤算だ。

しかし、非常呼集から始まった訓練も既に四時間を越えると明らかに皆疲労が表に出てきた。

千葉が大声で怒鳴っているにも関わらず、意識朦朧で聞こえていない胡桃沢や高井。

虚ろな目でふらふらと立ち上がる田淵と胡桃沢。

四つん這いのまま嘔吐を繰り返すが、もはや出すものがない真木野と三輪。

他の者達も五十歩百歩で大差がないが、笠原と東野、そして意外なことに坂上だけが違った。

笠原は今まで運動部でのシゴキの経験からか、まだ十分に生気があり、東野はもう既に体力は尽きているはずなのだが不良少年として突っ張ってきた意地なのだろうか『クソツタレ!!』と悪態を吐いては幾度となく立ち上がる。

坂上は坂上で何かが終わる度に苦しげに呼吸を繰り返し、号令があれば何とか立ち上がろうとする。

が、残念ながら彼の定位置は男性陣の中では最下位。

女の真木野——彼女は劇団で真面目に演技を磨いていただけあって、女性陣の中では体力的に抜きん出ている——に負けていた程であるが、それでも何かの執念なのだろうか必ず立ち上がろうとする。

だが、千葉が仕掛ける訓練はそれらを嘲笑うように彼ら新兵たちを追い詰めていく。

特に訓練が何時始まり、何時終わるのかが全く知らされていない状況で肉体的に追い詰めた場合、精神的に掛かる負担は想像以上である。

終わりが見えないマラソンを続けさせられるような、絶えることのない絶望感に似たものが新兵たちの心を襲う。

さらに加えて、千葉も訓練に『参加』している。それは文字通りの参加だった。

千葉は見せ付けるように新兵たちよりも重い装備を身に付けたまま、真木野たちの腕立て伏せを、より早く、より多く行い、同じ距離を速く走り、怒鳴り、叱責して、追い立て続ける。

千葉として生身の人間である以上、汗もかくし呼吸も荒くなる。

だが、誰の目にも明らかかなほどの余裕があり、真木野たちが弱音を吐くような状況で、時に笑顔を浮かべながら罵声と怒声と暴力で追い詰め続ける。

同じ訓練の中で純粋なまでの身体能力の差を徹底的に見せ付け、さらに追い詰め続ける中でも余裕綽々と同じ内容をこなしていれば、嫌が応にでも、軍人として誰が優れているか誰の目にも分かるうというものだ。

正に、誰が誰の部下なのかを無意識下に教え込むための訓練参加である。

そんな訓練を延々と小休止を挟みつつも四時間あまりも繰り返し、それでも何とか脱落者無しで始まった最終訓練は運動しながらの実弾射撃訓練——前進しながら射撃場にある窪地や倒木の影に身を隠して、伏せ撃ちで戦車級の形をした的に向かって射撃するという訓練である。

意外なことに思えるだろうが、千葉たちにとってはこの射撃訓練が一番気を遣わなく

てはならない時だった。

集中力が大幅に低下した新兵など、ごく簡単なことすら忘れてしまう。

疲れたからと言って、自分の銃口がどこを向いているか碌に確かめもせず、引き金を引こうとする。

それもこれも苦しい訓練が一刻も早く終わって欲しいという苦痛からの逃避に、何も考えずに向かつてしてしまうためだ。

千葉らは決して優しい言葉で指導しない。

実弾一発で人は死ぬ以上、一瞬たりとも気を抜かせてはならない。

訓練中の誤射で死者など決して出してはならない。

「早駆けに——!!」

小高い丘に設置された戦車級の形をした的までの距離は約二〇〇メートル。

秋もそろそろ本格的になろうかというこの季節、紅葉の色が戦車級と同じに見えてしまい、もう秋の紅葉を素直に楽しめない——そう、漠然と樽木が思う中、千葉の号令が澄み切った秋空の下で響く。

千葉の号令で伏せていた真木野ら八名は左腕を胸元に引き寄せ肘を立て、膝を横に突き出すように曲げて、前を——これから走って向かう先を確認する。

正直、樽木や千葉らの職業軍人から見ればその動作は全くなっていないのだが、そこ

はそれ。

BETAと戦う新兵である以上、それほどこの戦闘技術の習得を重視していない。むしろキツイ全身運動で締め上げ、彼らにとって身体的能力的に限界寸前の状態での射撃を経験させることが目的である。

戦場ではこちらが限界でも、BETAは一切斟酌しない。

それでも戦わなければならない状況は頻繁に生起する。

それでも戦おうとするならば、自らの限界はまだまだ先にあるようにしなければならぬ。

何があろうとも諦めずに戦わなくてはならない。

千葉の目的は簡単だ。

実戦に出る前に、自らの限界を超えることが出来たという成功例を『この訓練』で経験させることだ。

だから、訓練メニューは先に明示しない。

敢えて、ゴールが見えないようにした。

この訓練に関しては、戦闘技術の向上ではなく精神修養が主目的である。

「——前へッ!!」

一拍おいて発せられた千葉の号令で八人が右膝を立て左腕を伸ばして上半身を起こ

すと、右足で大地を蹴って走り出す。

……が、その姿と動作には素早さの欠片も無い。

高井は起き上がったのか、それとも立ち上がったのか区別が付かないほどノロノロとした動きで立ち上がり、田淵は起き上がるうとして足を滑らせ頭から倒れ込んだ。

一番元気な東野も走り始めて数歩もいかないうちに千葉に転ばされて、『銃を左右に振って走るな！ 銃口を仲間に向けるんじゃないやねえ！』と木刀で頭を——無論ヘルメットは被っているのだが、容赦なくブツ叩かれている。

三輪は意識朦朧の状態で八九式自動小銃を胸に抱き抱えて歩く始末だし、笠原は安全装置を掛け忘れていたので樽木が素早く止めて指導する。

射撃地点になんとか辿り着いても、坂上は安全装置を外し忘れたまま射撃しようとし、真木野はその細い二の腕が限界に達して突つ伏したまま小銃を構えることが出来ない。

胡桃沢に至ってはただ荒い息を吐き出すだけだ。

新兵たちの泣き言と涙声と浅くて早い荒い呼吸が聞こえる実弾射撃訓練場。

そこに千葉の怒号が響くと、思い出したように小銃の銃声が散発的に響く。

最終目標地点まで約一五〇メートルほどなのだが、足場の悪い訓練場の中で素早く起き上がり走って伏せて射撃するという連続的な行動は思った以上に体力を奪う。

それを理解していながらも、千葉たちは怒鳴り続ける。

三輪が射撃した直後、千葉が目聡くミスを見つけて罵声を飛ばす。

「目を瞑るなッ！ 撃っている間にもBETAは接近してくるぞ！」

「——は、はこ」

「ビビってんじゃねーぞ！ このッ眼鏡ブス！」

侮蔑の言葉に唇を噛み締めて三輪は耐えるが——。

(BETAと戦うならいざ知らず、どうして私がこんな暴力馬鹿に怒鳴られなければならないのよ——!!)

悔しくて、悔しくて、堪えきれない涙で視界が滲む。

だけど、ここで何もかも投げ出して泣き出してしまったら、いけない千葉春久という暴力上官に完全に屈服してしまう。

そう思つて歯を食いしばって、また立ち上がって走る。

あまりの疲労に首に力が入らず、一步踏み出す度に左右に大きく揺れる三輪の視界。酸欠気味で朦朧とする意識。

絶え間なく流れる汗で張り付いた泥まみれの前髪。

彼女は今までの人生でこんなにも運動した経験がない。

いくら休憩があつたとはいえ、もう四時間以上も続く運動。

もともと幼少の頃は、運動が嫌いで読書ばかりしている子供だった。

小中高と彼女は一度も運動部に所属したことがない。

やけに大きく早鐘を打つ心臓の鼓動も、汗と泥で重たくなった衣類も何もかも彼女にとつては初体験に近く、とても不快で嫌だった。

端正な顔には疲労の色しか見えず、眼鏡に付いた泥を拭き取ることすら考えられない。

(あ……と……、もう、す、こ……し)

揺れる視界の中に写る、人が隠れられそうな倒木。

そこに辿り着き、残りの実弾を五発撃つて、この弾倉を空にすれば訓練も終わるはず——と、その一心だけで足を引き摺るように前に動かす。

涙で滲む景色に足元は何も映らず、疲労でふらつく足は必然のように纏れてバランスを崩した。

(——あ！)

今まで経験したことのない激しい疲労で、もはや呼吸のためにしか動かない喉と肺から声など出せるわけが無く、また慌てて手を付こうにも三キ口を越える八九式自動小銃で塞がれた両手に自由など無い。

彼女は為す術無く左肩から倒れ込んだ。

両腕を中途半端に動かした所為で手から離れた小銃が——つまり三キロもの鉄の塊が、三輪の口元に直撃すると唇は容易く切れて口元から痺れるような激痛が広がった。

「……………うっ……………くっ……………」

八つ当たりする相手もない、自業自得の結果。

どうしようもない苛立ちに癩癩を起こし掛けた瞬間、突如感じた人の気配でハッと息を飲んで視線を上げた。

逆光で表情は分らないが、威圧するような視線と雰囲気ですら否が応でも千葉だと分かる。

反射的に身体が強張る三輪。

だが、少しだけ安堵していた。

彼女はいくら小さい怪我とはいえ、転んだばかりの「怪我人なら怒鳴られることもない」。

そんな考えが一瞬だけ脳裏を過ぎった……………が——。

「さっさと撃て！ このド間抜けが！」

「——っ!!」

その一言が、三輪はどうしても信じられなかった。

どうしてこうも人を罵倒できるのか、理解できない。

千葉春久という人物の内面こころが想像すら出来ない。

余りにも今の言葉と出来事が信じられなくて、彼女は見開いた目で上官を見た。

千葉とて、呆然と自分を見上げる三輪の表情を見れば、どれだけ傷ついたか十二分に分かる。

だが、今は無視する。

彼女の心など、この世に存在していないように振る舞う。

この僅かな数秒が実戦での生死を決める以上、安易に優しくできない。
否。

絶対に優しくしてはならない。

「構えろ！ 引き金を引け！ お前もBETAに喰われて死にたいのかッ!!」

叱責と共に彼女の頭を——一応、怪我をしないように三輪が被っているケブラー製のヘルメットごと踏み付けた。

「——ひぎっ！」

踏まれた衝撃で喉から嘔き出した呼気と短い悲鳴が混じり合って、言葉にならない悲鳴が三輪の口から出た後、彼女の動きはピタリと止まってしまった。

「……………うっ……………く……………っ……………」

地面に端正な横顔を付けて突っ伏したまま華奢な肩が震え出すと、小さな嗚咽が三輪

の口から漏れ始めた。

先ほどの千葉の一撃は、彼女の意地を完全に叩き折ってしまった。

(——こんな人と戦えるの!?! BETAと戦えるの!?! こんな事が共に命を懸けて戦う仲間わたしたちにすることなの!?!)

「…………や……だ…………」

小さく聞こえた三輪の呟きを、千葉は徹頭徹尾無視する。

そんな弱音はいちいち聞いていられない。

言ってもしない。

踏んでもしない。

ならば手取り足取りしてでも、撃たせるだけだ。

今も嗚咽を漏らしながら伏せている三輪と銃を挟んで正対するように千葉も伏せると、突つ伏している彼女の頭を力任せに上げさせる。

泣いてぐしゃぐしゃになった三輪の顔。

訓練中は泣いてもいい。

だが、戦闘中に流す涙に意味はない。

千葉は右手で三輪の左手を、左手で右手の上から銃ごと握り、首を振って嫌がる三輪を無理矢理伏せ撃ちの姿勢に持っていかせて再び怒鳴った。

「撃てッー」

引き金だけは自分で引かせなくては意味がない。

引き金を自分で引いて撃つたという経験が重要なのだ。

三輪にだって分かっている。

ここで銃弾を撃ち尽くさねば、この訓練は終わらない。

この苦痛と屈辱はずっと続く。

そう思ったら今の状況から素早く逃げるための行動を起こす。

彼女は碌に構えず、また狙わずに、そして何も考えずに引き金に指を掛けた。

今の状況から逃げ出したい一心で身体を動かす。

千葉はそれを分かっているが、注意するのを止めた。

身体で、その痛みで、射撃というものを覚え込ませればいい。

乱雑に引かれた引き金。鼓膜を突き抜ける銃声。

そして反動で跳ね上がる銃身。

「っ！……くっ……あ……」

三輪の右頬を勢いよく打つ八九式自動小銃。

その思いがけない衝撃に顔を顰めて、痛みを耐えた。

ライフル等の銃は狙いを付けて射撃する際には、銃本体にしっかりと頬を付ける。

そうしないと、狙いを付ける照星——銃身の先にある突起——を、照門——銃の後方にある照星を覗き込むための小さな穴から見ることが出来ない。

その際、しっかりと銃本体に頬を付けていなければ、火薬の反動で跳ね上がった銃が射手の頬を打つ。

当然、千葉はそれを知っていながら注意しなかった。

この痛みで三輪は二度と同じ失敗はしないだろうと思つたからだ。

そうとは知らない三輪は堪つたものではない。

格闘技の経験のない彼女には分からないが、至近距離からのちよつとしたジャブの様な痛みだ。

痛み慣れていない者にはかなりの痛みであり、崩れかけた三輪の意地を壊すには十分すぎた。

「……………う、やだ……………撃ちたく……………ない」

涙とともにこぼれ落ちるその言葉に千葉は何も言わずに無視するだけだ。

彼は先ほどと同じように手取り足取り小銃を構えさせると、再び威嚇するように大きな怒鳴り声で命じた。

「——撃て！ 撃たなければ永久に続くぞ！」

永久という単語に三輪がビクリと震えた。

恐る恐る伏せていた顔を上げれば、烈火の如く噴き出る怒気を纏わせた千葉が彼女を睨み続けている。

挫けた心。

だが、完全に粉々にしたわけではない。

性根の部分はまだまだ余裕を持って残っている。

ただ、彼女は今までこのような経験がないから、自分で自分を負けさせているだけだ。千葉はそう判断している。

太陽と北風の童話ではないが、どんな方法が最善なのかは個人によって違うだろう。

だが、教育者という立場である場合、千葉は今の方法しか知らないし、経験上最も効果がある方法だと自らが経験している。

それよりも何よりも、彼らには時間がない。

ゆつくりと手取り足取り教える時間はない。

何度も見本を見せてやることも出来ない。

既に、あと約六三時間しかない。

彼ら第三中隊第三小隊第一班が実戦や実働任務に駆り出されずに訓練に集中出来る時間はたったそれだけしか残されていないのだ。

この中には睡眠時間や食事の時間、さらには訓練で使用した武器の整備時間等もあ

り、どうしても削ることが出来ない時間も存在する。

さらに言えば、徴兵されて碌に体力の無い新兵の八人にはちゃんとした休養時間も必要だ。

今ここで出来るようにならなければ、戦場でも出来ない。

訓練で出来ないということは、実戦の場でも出来ないということと同じであり、出来ないと言うことは碌に戦えないということである。

そして、碌に戦えないということは彼らが死ぬということ——つまり圧倒的物量を誇るBETAに喰い殺されるということと同義である。

無論、こういった事実三輪や真木野たちには知らされていないし、想像だにしている。

今の三輪に分かることは残った四発を撃ち切らなければ、永遠に千葉に怒鳴られ続け、殴り続けられるという確たる未来だけだ。

しかし、それだけで彼女には十分だった。

涙を流しながら、まともな狙いも付けずに、ただ闇雲に人差し指で引き金を引いた。

上半身が揺さぶられる衝撃とともに、鼓膜を突き抜ける銃声。

眼鏡に付いた泥と涙で歪んだ視界に一瞬だけ火薬の閃光が映り、彼女は本能のかつ反射的に目を閉じた。

「目を開けろ！ ドブス！」

「——アッアアアアアアアッ！」

まともな言葉にならない三輪の声。

それは大した音にならず、遙かに大きい銃声に掻き消された。

だが、叫び続けた。

追い詰められて、絞り出した彼女の本音。

上手く言葉に出来ない感情の爆発。

それに突き動かされ、何も考えずに人差し指を動かす。

その心を埋め尽くすのは、理不尽な仕打ちを繰り返す千葉への憎しみ、理不尽な今を

打破できない自分の不甲斐なさ、困難な状況から逃げ出したい自分。

それら全てが彼女に引き金を引かせた。

二度、三度、四度——。

弾倉内の実弾全てを撃ち尽くし、静寂が戻っても彼女の指は止まらなかつた。

もう引けなくなつた引き金を懸命に何度も引こうとする三輪の人差し指。

千葉はただそれを見届けると三輪から手を放して、彼女が現実をちゃんと見るように

と、右肩を二度ほど強く叩いて破顔した。

「——よしッ！ やれば出来るじゃないか！ 今のを忘れるな！」

そう言うと千葉は三輪がどんな表情になったか確認しないで立ち上がった。彼女は今とても複雑で何かやり切れないような表情をしているだろう——と、想像はしていた。

だが、彼は確認しない。

一瞬だけの躊躇い。

千葉は無言で立ち上がる。

皆に視線を巡らせば他の七人も実弾を撃ち終わり、千葉を注視していた。

疲れ切つて生気のない高井の目。

睨み付ける訳でも無く、ただこちらを確実に捉えている真木野の瞳。

こちらを向いているだけの田淵の目。

片目を瞑つたまま、こちらを見ている東野の目。

恨みがましく視線を向けているのは胡桃沢。

理由は分からないが何故かある種の生気がある坂上の目。

そんな一人一人様々な感情が籠もった瞳が八人分、全てが千葉を見ている。

それは、千葉にとっては十分すぎる訓練成果だった。

実は千葉にとって、部下がどういった理由で己を注視していたかはどうでもいいことだった。

どんな感情でこちらを見ていようがどうでもいい。

尊敬でも、敵意でも、殺意でもどうでもいい。

それぞれにそれなりの対応策というものがある。

部下がいつ何時でも指揮官を意識するようにさせることが重要だったのだ。

それこそが、部下が指揮官の掌握下に自ら入るために必要な最低限なことなのだから。

今回の非常呼集訓練最終段階である実弾射撃も遂に終わった。

だから、最後にと用意しておいた締めくくりの言葉を伝えることに決めた。

「いいか、今日の訓練で良く認識しろ！ お前たちは弱い！ 弱すぎる！ 徴兵されて

武器を手を取ったが、ただそれだけのことだ！ 自分が強くなったと思うのは間違いだ

！ 武器がお前たちよりも強いから、そう錯覚しているだけだ！ 少し走れば息が上が

り、狙い通りに射撃できず、何時間も戦い続けることが出来ない！ だから、協力し合

え！ 一人で戦わず、全員で戦え！ 戦場では、まず目の前の一匹を殺せ！ 皆で助け

合い、それを繰り返せ！ 視界の中のBETAが全ていなくなるまで、それを繰り返し

！ 一人では絶対に生き抜くことが出来ない戦いを協力して乗り越えろ！」

この言葉で午前中の訓練は締めくくられた。

一九九八年一〇月一七日 一九時〇〇分

帝國陸軍相馬原駐屯地内 男子隊員浴場

「くっくっくううううううっ!! 染みるぜ、馬鹿野郎!」

巨大な銭湯を連想させる大きな隊員浴場の一角で、勢いよく頭からお湯を被った東野は戦闘訓練により体中に出来た擦り傷にお湯が染みる痛みで、誰とも無く悪態を吐いた。

「東野さんって本当に、何も考えてないんだね」

「うるせい! 考えても出来ねえ奴が生意気な口、聞くんじゃねえよ!」

その隣で風呂椅子に座って、カランから出るお湯をたらいに入れた田淵は半ばぼやくように間延びした口調で言うと、反射的に東野が怒鳴った。

口調は悪いが本気で苛ついてはいない。

元々品がよいとは間違っても言えないのだから仕方がないのかもしれない。

対する田淵は特に驚いたり、怯えたような様子はない。

見ようによつては実は芯が強いとかそういうこともない。

東野と田淵の関係はある意味では相補性であり、ある意味では舎弟関係でもある。

軍人として僅かに先輩である東野とそれに結構素直に従う後輩の田淵は、出会ってか

ら日が浅い割には結構馬が合っているコンビだった。

「あの班長に勝てない八つ当たりだから気にするなよ」

皮肉に満ちた口調で東野をこき下ろすのは、見た目は純情、中身は猛毒の野球少年の笠原。

ほとんど誰もが騙された——当人にその気はもちろん無い——が、毒舌と皮肉に満ちた少年だ。

彼は自分の見た目の印象を効率よく利用するために、相手によつて露骨なまでに接する態度を変える。

「氣にいらねえんだよ！　口だけ野郎が！　はいはい言つて尻尾振っている負け犬だろ
うが、テメエはよ！」

先ほどとは違う怒気。

明らかに押さえ込んだ衝動で苛つているのが誰にでも分かる声音。

「俺は君みたいに馬鹿じゃないから、無駄なことほしなだけさ。ああ、そうだ、君は自分が馬鹿だと言うことも知らないんだっけ？」

「ああつ!?　ガキが！　生意気な口きいてんじやねえよ！」

田淵を挟んで言い合い、睨み合う。

そんな笠原の隣では、時と場所を考えず幾度となく繰り返されるこのやり取りにウン

ザリしたように胡桃沢が顔を擧めた。

彼としてはゆっくりと静かに風呂に浸かりたいところではあるが、千葉の命令と示された時間がそれを許さない。

入浴という他愛もない安らぎの一時すら管理する千葉に苛つくが、入浴という貴重な時間でも五月蠅く騒ぐガキどもにも苛つく。

とは言つても、同じように喧嘩するのも馬鹿馬鹿しく、注意するのも無駄だと思つて阿呆らしい。

一緒になつて何かをやつていく気にもなれないし、一緒に何かをする気もない。

結果、彼は顔を擧めたまま体を洗い、湯船に浸かることだけを考へて、苛つきながらも無口となる。

大して仲の良いくない彼ら四人が一緒に入浴している原因は千葉にある。

実は千葉が彼らに教育を始めるとき、最初に命令したのだ。

『食事、風呂は全員揃つて行くこと。例外は認めるが、その判断は全て、俺と樽木が行う』その瞬間から、彼ら八人の朝昼晩の三食と入浴は団体行動となり、それは実質的には個人が自由に出来る時間の大半が自由であつて自由でない時間になつた。

それ以外の時間は千葉が彼らを抜き上げているため、彼らが自由に出来る時間は一日に二〜三時間しかない。

その時間内に洗濯や装具の手入れ、共用スペースなど公共場所の清掃などが入れれば、自由時間など無きに等しい。

かといって、好き勝手に動くのもなかなか気を遣う。

バレれば、千葉が鉄拳制裁を下すのは確定的である。

初日にあれだけ叩きのめされると、何事にも反抗的な東野とてそう安々と出来るものではない——彼とて無闇に痛い目を見たくはない。

「ケツ！ テメエみたいなヤツは誰も助けねーよ。さつさと喰われちまえよ！」

「フン！ 君みたいなヤツの助けなんて、必要ないね！ むしろ田淵君に助けて貰えるように頼んでおいたらどうだい？」

「……いい加減、止めなよ。二人とも」

田淵が仲裁に入るが、その言葉は無視したまま東野と笠原は体を洗うことに集中し無言となった。

ようやく静かになったのを見計らい、胡桃沢は聞きたかった質問を田淵に聞いた。

「田淵、センセイは結局行ったのか？」

何気なく聞いた言葉に三人の少年は次々と表情を変えた。

なお、センセイとは坂上の渾名だ。

教師をしていただけあって、彼の呼び名はあつという間に誰が言うともなく決まっ

いた。

「センセイは班長のところに行きました」

もう、何か諦めたような寂しげな表情を浮かべる田淵。

「か〜〜〜ッ！ 物好きだねえ！」

『本当かよ』と言わんばかりの表情を大げさに浮かべた東野。

「まあ、何とも言えないけど……」

微妙に気難しそうな表情で口を噤んだ笠原。

「正直、無駄としか思えないんだけどねえ」

そんな彼らとは無関係に胡桃沢は言葉が続けた。

彼は特に裏表があるというような性格ではなく、自分に関係ないことには無関心な性格であり、坂上の行動はあまり自分に影響があるような行動とは思っていなかった。

仮に坂上の行動で自らにも何らかの被害等が想定される場合には、彼もあたふたといろいろ騒がしかっただろう。

「——自分は、センセイは凄いと思います」

意外なことに、笠原が悔しそうな表情を浮かべて言葉が続ける。

その言葉に田淵と胡桃沢は少し驚いたような表情を浮かべ、東野は無言のまま小馬鹿にした表情を浮かべた。

「あれだけ女性を泣かしていたら、誰だって文句の一つも言いたくなりません」

「今日は三輪さんが大泣きしていたからなあ……」

笠原の言葉で実弾射撃訓練後、『……もう、無理……』と呟いた直後に大泣きした三輪を思い出して胡桃沢が渋い表情で言うのと、田淵も今までの光景を思い出したのか、ぼそぼそと言いだした。

「真木野さんも、高井さんも、みんな泣いてますよ」

しみりした田淵の口調。

「女性陣は美人揃いなのに容赦無いよね、あの班長」

自らも殴られたことを思い出して、嫌悪感に満ちた表情を作る胡桃沢。

自業自得の面があるとはいえ、些細なことで執拗に責め立てられ、殴られるのは決して思い出したい記憶ではない。

「——自分も我慢できません！ 女性は普通、護るものじゃないですか!？」

笠原の言葉に力が籠もる。

いつもの毒舌に似合わぬフェミニスト振りは、他の三人にとつても意外だ。

その勢いに押されたのか、田淵と胡桃沢が「うん」とか「そうだねえ」と相槌を打つたが、東野だけは冷笑を浮かべた。

それでも独白のように笠原の言葉は続く。

「何でもかんでも言われたとおりに出来る訳無いじゃないか！　まだ徴兵されて一ヶ月しか経っていないんだ！」

「なんだ、お前、童貞かよ？」

唐突な東野の一言で、三人の間に一瞬の間が出来た。

驚きで田淵と胡桃沢の口はあんぐりと開き、笠原の口は上手く呂律が回らなかった。

「——なっ!？」

東野は自分の一言で衝撃を受け呆然とした表情を浮かべた三人を見て、満足げな笑みを浮かべ少々饒舌に——まるで演技をするかのように言葉を続けた。

「お前さ、やたら、女性陣の肩持っからよ。格好付けて、モデルの真木野か、巨乳の高井さんと一発やらせて貰いたいだけだろ。いやいや、お前ならインテリの三輪かあ？」

全員美人なんだから、別に誰でもいいだろ？」

「なに言ってるんだ!？　今の言葉を撤回しろ!!」

笠原が激高して嘔み付かんばかりの勢いで怒鳴り、笠原と東野に挟まれた格好の田淵は腰を引いて二人の視線の間から逃げた。

自分の一言で優等生面の笠原が感情を露わにしたことが楽しくて、優位に立ったような気がして高揚する東野の感情。

——ハ、なんだ。こんなことで怒るのかよ。コイツ、チョー単純。

明日死ぬかもしれないのに、何いい子ぶってんだよ、このバカ。

「今さら格好つけんなよ。土下座しながら頼み込めば、一発くらい出来んじゃね？ 頼むは一時の恥、童貞は一生の恥だぜ」

この一言で笠原が切れかかった。

——これから共に命を懸けて戦う仲間を何だと思ってるんだ!?

こういう奴が取り返しが付かない犯罪をしでかすんだ!

「あの人たちを侮辱するな！ 共に戦う仲間なんだぞ！」

笠原の剣幕に怯えた田淵が風呂椅子から転げ落ちるかの様に逃げ、胡桃沢も無言で少し距離を取った。

「バツカじゃねえの？ 童貞のまま死ぬ気かよ」

この期に及んで他人の事ばかり考えて、何の意味があるんだよ。

別に何かしたわけでもないのに、急にいきり立ちやがって。

コイツ、本当のバカだ。

侮蔑と嫌悪を混ぜた視線で約一メートル横にいる笠原を見下すように横目で見る東野。

「そんな事は問題じゃない！」

殴ってしまいそうな衝動を必死になつて笠原は止めた。

こいつは本当に自分のことしか考えていない。

一人ではどうしようもないBETAとの戦いでは一致団結することが絶対必要なのに、自分のことしか考えていない！

本当ににも考えていないじゃないか!?

「何が問題なんだよ、バーカ！ テストしか出来ない坊ちゃんだよ」

東野の価値観と笠原の価値観。

両極に近い二人の考えが、お互いに言葉足らずのままぶつかる。

「お前みたいに何も考えてない奴が、人類をここまです境に追い込んだんだ！」

「何言ってるんだ。バツカじゃーねの？ 俺は関係ねーよ」

笠原の堪忍袋の緒が完全に切れた。

——そうさ！ お前個人は関係ない！

だけど、お前みたいな奴を見過ごしていたら、どんどんみんなは——人類はバラバラになっていくんだ！

それでも、たった一つの命を懸けなければならないのに、どうしてお前はッ!!

次の瞬間——。

激情に駆られた笠原が振り上げる拳より速く、東野の拳が笠原の顔面に打ち込まれた。

第10話 理想と現実の天秤

一九九八年一〇月一七日 一九時〇四分

帝国陸軍相馬原駐屯地内 第二機械化歩兵連隊第三中隊事務室

「私たちをちゃんと人間扱いして欲しい」

「——はあ!？」

中隊事務室に訪れた坂上の開口一番の言葉に千葉は素つ頓狂な声を上げた。

よくある事務机で各種書類と格闘していた千葉が椅子を回して、初めて直立不動の姿勢で言を発した坂上を見た。

坂上は教えられた通りに千葉から二歩離れた位置で直立不動の姿勢を取り、千葉が「どうした?」と発言を促してから会話を始めた。

「ここまでは問題ない。規則通りである。」

ただし、坂上が言った内容が「ぶつ飛んでいる」。

千葉は何も言わず視線を外して、こめかみを右手で軽く揉んだ。

こういう輩が偶に入隊してきて問題を巻き起こす事は、教官・助教たちの間ではよくある笑い話の一つだが、それが今の自分に降り掛かろうとは……。

千葉から溜息が自然に漏れた。

どこから言えばいいのやら——そんな言葉が脳裏を過ぎる。

思わず怒鳴りたくなる衝動を抑えて、質問から始めてみる事に決める。

今の言葉を言ったのが東野や笠原なら問答無用で鉄拳を振るうところだが、言い出したのは坂上だ。

規則上のことはきちんと守った上で、わざわざ他の隊員——無論、新隊員など居らず千葉のようなベテランや他の班長、中隊本部要員数名いる事務室内で言いに来たのだ。

当然、それなりの考えがあつて来たはずで、自暴自棄でも何でもないだろう。

確たる考えがあつて来た。だからこそ厄介で苦勞するからこそ、皆の笑い話になるのでもある。

「どうした？ 何か重大な問題があつたのか？」

こちらとしては十二分に人間扱いしているので、どこが問題なのか分からない。自然と、不明瞭な点を明白にする事から話は始まる。

「とても……今の状況と扱いはまともだと思えません」

始めは言い淀みながらも、ハッキリとした口調。

躊躇いのない判断故にここの来たのだと、聞く者に訴えかける声音と分かり易い言葉。

「それが、俺にはよく分からんな」

視線を戻して千葉が問う。

彼には新兵たち八人に不満が貯まること自体は理解出来るが、軍隊は娑婆より自由が無くて当然の職場であるという認識があるため、坂上が言う『人間扱いしていない状況』とやらが、はつきりと確信を持って理解出来ない。

千葉としては、これでも手心を加えて教育訓練しているのだ。

彼が今まで経験してきた訓練——レンジャー訓練等を新兵の八人に無理矢理実施させたら、冗談抜きに一週間と経たずに半数が死亡する。

四日間一睡もせず山中を行軍することなど当たり前。

その四日間で一〇キロ近く落ちる体重。

背負った荷物は六〇キロを越え、水も飯も碌に無い。

それを何週間も繰り返す日々。

月の明かりすらない闇夜の山中で、藪の中を歩き、崖を登り、沢を渡る。

潜入、偵察、待ち伏せ、襲撃、離脱の一連の行動を不眠不休で行うレンジャー訓練では、選抜された軍人でも滑落等の事故や脱水症状で死者が出るほどだ。

千葉として新兵たちのレベルは理解しているので、そんな無茶をする気はないし、行っている気もない。

それほど意地悪なこともしていないし、厳しすぎることもないと思っている。

それだからこそ、坂上の言葉は理解できなかった。

対する坂上も直ぐに答えるような真似をしなかった。

慎重に言葉を選んで、千葉の問いに答える。

「私たち八人は今までただの一般人でした。私たちが徴兵された理由は理解していません。日本と人類が危機的状況な事も当然理解しております。人類の一人として、戦うべき時であることも分かっております。ですけども……」

そこまで言つて坂上は言葉を切った。一瞬だけ言葉を詰まらしたが、意を決して口を開いた。

「私たちは命令されたからと言つて、急に何でも出来るようにはなりません。幾ら頑張らなくてはならない状況であっても、突然には出来ません。子供たちは体が出来ていませんし、女性は元々力仕事に向いていない。筋肉ですらそのような状況なのに、覚えなければならぬ武器の取り扱い方法も多岐に渡っています。しかし、覚えることの内容と比べれば、訓練の内容は厳しく、時間的にしっかりと覚えることが出来ない状況です」

もう一度言葉を切った坂上を、千葉は無言で促した。

「やれと言われても、出来ないことは出来ません。それと女性に対する指導は、体罰が行き過ぎていると思います」

坂上は背筋を伸ばしたまま、きつぱりと言いつつ切った。

「それは八人の総意か？」

冷め切った眼差しで千葉が問う。

「いえ、あくまでも個人的意見です」

坂上の即答。

「話にならない。帰れ」

怒気を押さえ込んだ千葉の声。

苛立ちを隠さずに眉間にしわを寄せて、坂上を睨む。

「——このままでは戦う前にみんなの心が潰れてしまう！」

思わず荒げた自らの声にハツとなつて、坂上は口を噤んだ。

彼とて、自らが置かれた立場を全く知らぬような馬鹿者ではない。

「今のままのペースでは、覚えられることも覚えられずに、団結も仲間意識も無くなってしまう。今のままで、良い訳がない……」

最後の一言は消え入りそうな声だったが、しっかりと千葉の耳に届いた。

だが、その上で千葉は断言した。

「お前の話は聞くだけ無駄だ」

何もかも否定した答え。

その上、話し合う気もないその対応にもう我慢が出来なかった。

「このままで私たちが戦える訳が……！——信頼し合うことが出来る訳がない！」

「お前たちの信頼などいらん」

坂上の言う『私たち』は千葉を含めてのこと。

一致団結。

戦闘能力が低い新兵が生き残るために、お互いに助け合う信頼関係を構築すべきだと考える坂上。

戦技向上。

一人一人が生き残るためには戦う能力自体が無ければ、団結しようが意味が無いと考える千葉。

十分な時間があれば、お互いの考えは両立できるだろう。

だが、今は日本帝国滅亡の危機。

いや、BETAによる人類滅亡の危機がそれすら許さない。

「私たちは共に戦う仲間ではないのか!？」

坂上が問い詰めるように声を荒げる。

「違う。それ以前の問題だ」

千葉はただ端的に、そして冷徹に告げる。

「——何が違う?! 私も貴方も同じ日本国民で共に戦う仲間ではないのか!」

「同じ日本帝国国民であるが、同じではない。お前は既に軍人で民間人でない。良いか? もう一度言うぞ、お前は軍人だ。そして、お前は俺の部下だ。俺の命令にたつた一つの命を懸ける。それが義務だ」

「貴方は私が上官だったら、死ぬような命令に従うのか!」

「自殺はしないが、飛びつ切りに死ぬ可能性が高い命令には当然従う。残念だったな、俺の部下で」

坂上の皮肉混じりの言葉にも、何の感慨も湧かない。

千葉にとつては今さら考える必要もないことなのだから。

「そんなのは詭弁だ!」

激しく食い下がる坂上に堪忍袋の緒が切れそうで軽く目を瞑り、ボリボリと頭を掻いた。

こうでもしないと、一瞬で切れてしまう。

だが坂上は、それを千葉が凶星を突かれて視線を逸らしたと考えた。

「あのなあ……俺にこれ以上、お前との無意味な押し問答に付き合う暇が有ると思うか? お前と俺の立場が平等の訳ないだろ。お前はゴミ以下のくそつたれの口だけ達者な使いよう無いクズだ。これ以上喋るなら、いい加減殴るしかないな」

「そんな脅しで——!!」

その先の言葉を坂上が言えるわけがなかった。

今まで部下を殴っていたことは全て手抜きだったと、坂上の身体に本能として教え込む一撃。

反射的に身を守ろうと上げた腕ごと打ち貫く右拳。

殴られた本人が視認することなど許さない速度。

殴られた事を認識すら出来ないうちに踏鞴を踏む足。

思考する能力を根刮ぎ奪う衝撃が坂上の視界を揺らして、激痛と恐怖を臓腑に刻む。

素早く椅子から立ち上がった千葉が坂上に放った、有無を言わせぬ打ち下ろしの右正拳。

「おいおい、これでも本気じゃないんだぞ」

そう。

千葉が本気で殴りかければ、坂上は絶対かつ確実に素手で殴り殺せる。

反撃など許さない。

現に本気でない今ですら坂上はガード一つ出来ていない。

だから、今の一撃でも千葉は大怪我をしないようにと手加減しながら殴っているのだ。

余りの痛さと衝撃で床に片膝を付いた坂上が、驚きと苦痛と恐れと失望を混ぜ合わせた顔を上げて千葉を見た。

「言つただろ。まだ喋るなら、殴ると——」

「……………っ!!」

見下ろす千葉の瞳はただ冷たく、苛つきと怒りだけが垣間見える。

坂上にはそれが何かが分からなかったが、身体のコまで響く打撃が千葉の答えであり、絶対に相容れないものであることだけは顔一面に広がる苦痛で察した。

殴り飛ばされた坂上に向けて千葉が静かに一歩踏み出すと、坂上の体はビクリと反射的に——勝ち目がないという事を本能的に察した身体的な反応で震えた。

それでも、坂上とてこうなるだろうということは半ば予想して千葉への直談判に来て
いるのだ。

千葉の右拳で痺れる口を何とか動かして喋る。

そうする口元からは本人も知らぬうちに血が流れ落ちる。

それにも構わずに叫ぶように訴える。

「だつたら——」

みつともなくても構わない。

臆病に手足が震えても構わない。

声音が震えていても構わない。

どうしても言いたかった。

徴兵されて自分たちは出会った。

高校中退の東野と公務員の胡桃沢はこんな事が無ければ出会わない。

高校生だった笠原と田淵だって、お互いに顔も知らない者同士だった。

元モデルの真木野と保母だった高井、それに大学生だった三輪だって顔を合わせることもない。

職業軍人の千葉と樽木に、教師だった自分。

普通だったら皆、出会うわけがない。

それが必然であれ——。

たとえ偶然であれ——。

出会って協力し合うのならば——。

協力しなければ生き残れないのであれば——。

人は一人で生きられないから『人』なのだ。

だからこそ共に戦うのではないのか!?

その為を集まったのではないのか!?

「団結も信頼も必要ないなら、——何で私たちは一緒なんだ?!」

「ただの偶然だ。そんな無意味なことを、俺に聞くな」

腹の底から絞り出すような坂上の叫びに似た問いに、千葉は眉一つ動かさずに突っぱねた。

まるで渾身の力を込めて投げたボールが壁に当たって跳ね返ってくるような錯覚。

呆然とした。その温度差に。価値観の相違に。

千葉の歩みが変わるわけもなく。

その苛つきが消えるわけもなく。

坂上は、再び彼を殴ろうと千葉が指を鳴らしながら近付くのをただ見上げた。

その時間は僅かな時間であつたけれども、二度と忘れないだろうと坂上は確信した。

千葉が今も片膝を付いたままの坂上の一メートルほど前に立つたとき――。

「ちくくばくく、お前もなかなか忙しい男だねえ」

そう、わざとらしく間延びした大きな男の声が中隊事務室に響くと、千葉は特に驚いた様子もなく声の主に視線を向けた。

「すいません、先任。お騒がせしました。すぐに場所を変えます」

「いや、むしろその方が拙いだろう。ここがいい。教育熱心なのは良いが、ほどほどにな」

いつの間に入ってきたのだろうか。

わざとらしく間延びしたまま受け答えたのは、第三中隊先任軍曹である門倉曹長。白髪交じりの角刈り。齡四〇を越えたのにも係わらず贅肉のない身体。

身長一七〇半ばほどののだが、そのような事を感じさせない肩幅。

小麦色の肌に刻まれた深い皺。がっしりした顎。

雰囲気は古き良き頑固親父っぽいのが、その顔に浮かぶのは飄々とした表情。

何もしていないとも下士官の長に相応しい風格が滲み出ているが、それは長きに渡る研鑽の賜物か。

その門倉であるが、今は上下のジャージ姿と首にバスタオルを掛けた格好。

手に持っているのは風呂道具が入った洗面器。

一目で風呂上がりだと分かる出で立ちだった。

そんな彼にとつて、目の前の出来事は些事であつた。が、完全に無視出来ないだけの理由もあつた。

「それとな、千葉。樽木にはもう言つてあるが、お前の班員が風呂場で殴り合い始めたんで仲裁しておいた。原因は知らん。そいつの後でいいから、ケアしてやれ」

「有り難う御座います。しっかりとケアしておきます」

千葉が軽く頭を下げて礼を述べると、門倉は背を向けたまま「気にすんな」と左手を鷹揚に振りながら、事務室内の自分の事務机に向かつた。

彼にとって千葉と坂上のことは大した問題ではない。

それ以上の問題が山積みで残業の毎日である。

その後ろ姿を見送りながら、千葉は両目を瞑り、自らを落ち着かせようと深く息を吐いた。

門倉がいなかったら、盛大に舌打ちをしていたらどうかを自覚する。

今も苛立っているし、深呼吸一つで急に無くなったりする訳ではない。

かといって、無分別に当たり散らすことはしたくない。

その八つ当たりは餓鬼臭い。

千葉は坂上に一言だけ言うことを決めると、坂上の胸倉を掴んで左手一本で力尽くで立ち上がらせた。

いや、それはもはや吊し上げたといった方が正しい。

千葉が襟首を掴んだまま、苛立ちも怒りも隠さず、至近距離で坂上を睨む。

一瞬怯んだ坂上だったが、それでも次の瞬間には意を決して千葉から視線を逸らさない。

むしろ、その双眸に宿る意志の強さは増したようにすら感じる。

千葉には、坂上がそうする理由が分からない。

坂上をそう駆り立てる考え自体が分からない。

そうではあるが、坂上を理解するつもりもない。

だから、千葉は苛立つたまま吐き捨てるように事実を告げた。

「坂上、忘れるな。お前たちはまだ仲間じゃない。ただの足手纏いだ」

それから無言で、坂上の顔を右ストレートで打ち抜いた。

一九九八年一〇月一七日 二二時四八分

帝国陸軍相馬原駐屯地内

第二機械化歩兵連隊第三中隊 営内隊舎3Fの非常階段に設置された喫煙所

東野二等兵 及び 坂上二等兵

帝国陸軍では消灯は二三時と決まっている。

この時間になれば特に許可されていない限り、居室等の生活区域は消灯しなければならぬし、それ以外の場所でも特に必要がない限り消さなければならぬ。

夜の点呼が終わり、消灯するまでの三〇分に満たない僅かな時間は、後はもう寝るだけの兵士たちにとって、何も考えることなく気を抜ける貴重で有り難い時間である。

そして、その貴重な時間は大概の場合、仲間と何かを飲みながら僅かばかりの煙草を吸い、雑談を交わす一時となる。

「先生、アンタ、本当は馬鹿だろ？」

「……？」

非常階段の踊り場に設置された喫煙所で突然、東野から言われた一言。

余りのも唐突すぎたので、坂上は何を言われたのか理解できずにポカンとした表情を浮かべた。

そんな事を無視して、戯けたような口調で東野は一〇歳以上年上の「後輩」に向けて喋った。

東野だけは他の新兵七名に比べ一月ほど早く入隊しているため、年齢など関係なく「先輩」である。

「いや、絶対馬鹿だって」

そう言いながら、人差し指で坂上の顔を指差す。

坂上の顔は中隊事務室で千葉に殴られたため、左頬が大きく腫れている。

それを見ながら心底面白そうに笑って、煙草を一本口に咥えた。

「——未成年が煙草を吸っては駄目だ」

どうして馬鹿だと言われるかが分からなくて半ば呆然としていた坂上だったが、未成年が煙草を咥えると生真面目な性格らしく直ぐに教師だった頃のように注意する。

が、喋った弾みで、殴られて出来た口内の切り傷が痛んで顔を顰めた。

「ほんと、……先生だわ」

その様子を眺めながら東野は苦笑いを浮かべ、特に気にすることなく啜えた煙草にオイルライターで火を付けた。

坂上の腫れた顔を指差しながら笑っていた東野だが、本人の顔も腫れている。

彼の左まぶたの上に来たたんこぶは、千葉の「指導」で出来たものだ。

千葉は東野と笠原の喧嘩に対して訓練時に比べれば、それほど怒らなかつた。

一発ずつ「指導」した後は、腕立て伏せを三〇回——当然、背中には同期を座らせて、実施させただけだ。

最後は潰れた二人に言った言葉は『今のうちに喧嘩しておけ』という、意味深の一言。

正直、その光景に新兵たちは拍子抜けをした。

てつきり、いつものように連帯責任を取らされると思っていたからだ。

その当事者である東野はそんなことは無かつたかのように深く紫煙を吸いながら、遠くの夜景を眺めた。

当然、喫煙所に来るような人間は、そのほとんどが喫煙者なので東野の行動を咎めるような者は坂上だけだ。

今のご時世、そんなこと気にするのは娑婆の世界だけだ。

軍隊の中では誰一人気にも止めない。

その坂上も流石に火を付けた煙草を取り上げるようなことはしない。

今の日本では煙草は高価な嗜好品だ。

何よりも自身が愛煙家であるため、それ以上の行動は止めた。

それよりもジャージのポケットに手をつ込み、クシヤクシヤになったケースから湿気かけた煙草を一本取りだして口に咥える。

すると見計らったように、東野がライターを付き出して火を付けた。

「……ありがとう」

苦笑いを浮かべながら、坂上は火を灯した。

注意しておきながら火を付けて貰うなど、なかなか皮肉が効いていると言わざるを得ない。

もともと東野の行動には皮肉という意味はない。

ただ彼はにやりと笑った。

悪いことを一緒にして、秘密を共有した仲の良い子供たちのように。

それから、千葉という同一人物に顔を殴られた二人は無言で遠くに見える夜景を眺めた。

帝国陸軍相馬原駐屯地から見えるのは、高崎や前橋など街の光。

それは以前に比べれば、かなり疎まばらになったものの今も輝いている。

人が減り、明るい話題も、娯楽も禄にないご時世だが、BETAとの戦いは物量戦の様相を示しており、生産性向上の為に昼夜稼働し続ける各種工場の光は一日中消えることがない。

ましてや、西日本陥落により九州・瀬戸内海・阪神地域の重工業地帯は壊滅している。嫌が応にも、日本国中の無傷で残っている全ての工場——特に軍需工場では二四時間での増産体制が取られていた。

そんな中、不意に東野が口を開いた。

「……俺だって、あの班長に歯向かえばやられちまう。って、ことは見ただけでも分かるぜ」

坂上としては千葉のところに直談判に行ったことは一言も漏らしてはいないのだが、隠せるようなことでもない。

そんなことにも考えが至らなかつた自分に坂上は再度苦笑を浮かべた。

今日の自分は苦笑しか浮かべていないような気がする。

「だけど、あれだけ強いヤツが俺らの頭を張るなら、俺たちが生き残れる可能性が高いってことも分かるだろ。逆らわずにハイハイ言って、やることやってみて、済む話じゃねえか」

「君でもそう思うかい？」

「当たったり前だろ。先生、人を馬鹿にしすぎだぜ」

そんなこともちゃんと考えていたのか。

と、素で驚いた表情を浮かべた坂上に少々憤慨気味に東野が応ずると、彼は素直に詫
びた。

「失礼だった。僕もそう思うよ。だけどね、世の中には譲れないものもあるんだよ」

遠くの光を見詰めたまま零れた、はつきりとした強い意志。

子供ではなく、社会人として扱う口調。

東野はそれに驚き、一瞬目を見開いて、それから納得した。

坂上は厳格な上下関係が存在することを知った上で——無論、殴られることも覚悟し
ての行動であるが、それでも直談判に行く前から持っている人物だ。

当然、その程度の気合いは軍隊に来る前から持っている。

東野はそうであるからこそ、喫煙所で会話していることに気付いた。

こうやって『元』ではあるが、教師と会話するなんて小学生低学年以来であることも
思い出した。

あの頃は何も考えずに笑っていた。毎日が意味もなく楽しかった。

大きくなればなるほど下らなくなっていく。

やりたいと思ったことが出来なくて、面白くなかった。

身体が大きくなるにつれて、それと同じように不満だけが溜まっていった。

だから、教師は嫌いだ。学校も下らない。日常も退屈だ。

BETAって何だよ。

俺が生まれる前に地球にやって来た化け物って何だよ。

世界中のお偉い学者や先生が束になっても一体何なのが分からない化け物。

ただでさえ面白くない現実なのに、そいつらの所為で夢も希望もありやしない。

一部の人たちが念仏のように繰り返して言い散らす、人類滅亡の危機。

節制、節制、また節制。全ては戦争の為。全ては生き残るため。

『欲しがりません、勝つまでは！』

半世紀近く前のスローガンが大新聞に再び踊る。

大人たちの多くは徴兵され、子供たちがこなさなければいけない雑用だけは増えてい

く。

苛立ち混じりに煙草を吸った。

酒も飲んだ。

そうすれば子供でも大人と同じだと、すぐに大人になれると思った。

そんな中学の頃に覚えたのはバイクの運転。

当然のことながら、無免許の違法運転だった。

警察に捕まって説教食らったりしたのは、一度や二度では済まない。

教師はヒステリックに怒鳴り散らすし、母親は泣き出した。

だけど、どうしても止められなかった。

あの風を切って進む爽快感。

エンジンの振動を身体で感じながら操る一体感。

何もかも忘れてスピードの世界に埋没して感じる充実感。

あつという間にバイクの虜になった。

それが大好きで、工業高校を希望した。

入学から一月もしない内に、夢は徐々に崩れ始めた。

確かに機械関連の授業は多い。

実習も多い。

クラブ活動だって機械弄りが多い。

最初は内燃機関の実習でディーゼルエンジン。

次はガソリンエンジン。

そのまま順調に進むかと思われたが、急に銃の整備が授業に入ってきた。

それからは次第に武器を整備する授業が増えた。

面白くなかった。

高校を卒業したら徴兵されると噂されているのに。

人生で最後の自由時間を台無しにされたようで悔しかった。

だから、止めた。

高校を中退した。

自分の我が儘を出来るだけ、やってみようと思った。

一八歳になれば、本人の意志に関係なく男は徴兵されてしまうのだからと開き直った。

そうやって生きてきたのだから、教師と話すことが久しぶりなのは当然過ぎることだった。

「考え事かい？」

煙草を啜えたまま無口になった東野に坂上が声を掛けると、まるで夢から醒めたように応えた。

「……ん、ああ、まあな。昔のこと思い出してた」

長くなった煙草の灰がポロリと落ち、指に当たると碎けて散った。

「大したことない思い出、思い出してた」

「そうか……」

お互いの微妙ないたわり。

無言の間。

「先生の譲れないものって何だよ？」

また、唐突に東野が坂上に問い掛けた。

千葉に殴られても譲れないと言ったものは何なのかと。

「信念」

たった一言の力強い即答だったが、東野が理解するには言葉足らずだった。

「……正気かよ？ 命掛かってんだぜ。何の得にもならねえよ」

東野が信じられないものを見るように、目を剥く。

それには即答せずに、坂上は煙草の灰を灰皿に落とした。

一拍の間を置く。

「人はただ生きているだけじゃ駄目なんだ。生きる目標と未来があつてこそ、人は生きていけると言えるんだ」

「口先だけじゃ話にならねえよ。今は生き残るのが最優先だろ」

東野自身、坂上の言葉で湧き上がった感情を上手く説明できないので、そんなことしか言えなかった。

「それも大事だけど、これも大事なんだよ」

坂上の一言に、自分の何かが引つ掛かる。

それが分からなくて、彼は何かを放り上げるように上を向いた。

「……訳分かんねえよ……」

澄み切った空気に満たされた、雲一つ無い秋の夜空。

煌々と輝く憂愁の満月。

視界一面に散りばめられた無数の星々。

その空に、二人の紫煙は立ち上ると、不意に吹いた風で掻き消えた。

第11話 誰かが誰かのために

一九九八年一〇月一七日 二三時一六分

帝国陸軍相馬原駐屯地内とある公衆電話ボックス内

三輪二等兵

「……うん。……そっか、叔母さんも疎開したんだ。……うん、これで関東にいる親族は全員疎開完了だね。——お母さんたちも早く疎開してよ。——場所なんて選んでられないんだからね——」

消灯の時間が過ぎ——それはつまり寝ることが出来る時間であるにも係わらず、三輪貴子は隊舎を出て、少し離れたところにある公衆電話ボックスの中にいた。

帝国陸軍の迷彩柄の戦闘服の上着を着て、ジャージのズボンを履いて、頭には迷彩柄の戦闘帽を被ったラフな格好。

仕事以外の帝国陸軍軍人のよくするジャー戦と呼ばれる、ありふれた格好。

三輪の格好では、今の時間帯は結構寒い。

相馬原駐屯地は山の麓にあるので、山から吹き下ろす夜風の寒さは洒落にならない。

季節が秋ということもあり、昼間は陽が出ていれば暖かいのだが、夜になれば結構な

寒さになる。

それに山地特有の風が合わされば、体感温度は相当低めだ。

そんな中でも、彼女はそれを気にも止めずに電話していた。

電話ボックスが風を遮ってくれるところというのも大きい。

本当は無料で掛けられる公衆電話が隊舎の各階に三台ずつある。

ただ、みんなが電話を使うので——訓練の関係上使用する時間は夜間に集中しやすいので、一人当たりの使用時間は決められていて一日五分となっている。

それ以上、電話を掛けようとするれば駐屯地内の各所にある有料の公衆電話を使用するしかない。

それですら一杯になりやすく、順番待ちはよくあることだった。

深夜に実家への電話。

らしくないと、三輪自身が思っている。

『貴子、ちゃんとご飯食べてる？ 貴女は小食だけでも、お腹一杯食べなさいね。運動しているんだから、食べないと身体が持たないわよ』

「……うん、大丈夫だよ。ちゃんとご飯食べてるよ」

受話器から聞こえる母の声。

娘を心配している母が矢継ぎ早に繰り出す質問の数々。

それに頷くように言葉を返す。

彼女が一言も挟めないようにそれが続く。

微苦笑を浮かべながら、追加の十円玉をまた一枚入れた。

きつと、徴兵される前の三輪なら『私にもちよつと話させてよ』とでも言っていたに違いない。

そういうことも、自覚してしまうほどの心境の変化。

環境の変化が強制的にもたらした心境の変化には、三輪自身が驚いている。

今まで、こんな事をしたことはない。

する必要も無いと思っていた。

半ば儀式的なものだと割り切っていたところも無いわけではない。

親元を離れ一人暮らしを始めた頃も、そんな経験はない。

あの頃は通い始めた大学が楽しくてたまらなかった。

広葉樹の緑が眩しい、広々とした大学の敷地。

今まで過ごした歴史を感じさせる大きな校舎。

図書館に入れば、天井まで届きそうな高さの本棚が視界を埋め尽くす。

階段上の大講堂で受けた政治学の講義は、今まで考えたこともないものの見方や知識で知的好奇心を満たしてくれた。

口達者になりたいと思つて入つた弁論部の活動だつて面白かつた。部活の仲間て酒を飲み交わしながら、夜が明けるまで語り合つたことも楽しかつた。楽しくて楽しくて、あの当時は母親の事なんてほとんど忘れていた。けど、今は違う。

以前は煩わしささえ感じた、心配性の母親の気遣い。

それが懐かしく、そして嬉しく感じる。

また一枚一〇円玉を入れる。

もう何枚目かは数えていない。

実家はここから一〇〇キロメートル以上は離れているので電話料金は結構掛かり、積み上げていた一〇円玉はあっという間に消えていく。

『本当？ あと、ちゃんと寝てる？ 訓練で眠れないとか無いの？ 大丈夫なの？』

「……………うん。大丈夫だつて……………。寝てるよ。睡眠時間もちゃんとあるよ」

懐かしく感じてても、そのまま甘えることが出来ない。

母親は厳しい訓練で怪我とかしていかないかと、心底心配している。

その母親の想像は間違つてはいない。

今日も訓練で千葉の罵声を浴び、踏まれ、泣かされた。

そんな事はとてもじゃないけど言えなかつた。

正直に言ってしまったら、心配性の母親が眠れなくなってしまう。

『本当？ 正直に言っつていいのよ。愚痴ぐらいいつでも聞くからね。自分のことを大事にしなさいね。格好良くなんて、考えなくて良いから……。無事に帰っつてきなさいね』

「——そんなに心配しないでよ。……大丈夫だから……ね……」

不意に言われた最後の一言。

必死になつて嘘を吐く。

——帰っつてきなさいね。

それで三輪の目尻に涙が滲んだ。

込み上げた感情で喉が詰まった。

焦つて口を噤む。

涙声が聞こえないようにと努力する。

呼吸を落ち着けようと、息を止める。

本当は甘えたくて、電話を掛けた。

優しい声が聞きたくて、わざわざ公衆電話にまで来た。

挫けそうだったから、一人になった。

情けない姿なんて、誰にも見せたくなかつた。

だけど………。

だけど——!!

『お願いだから……無茶だけはしないでね』

その嘘は母親に全然通用していなかった。

母親は何もかも見通していた。

それが嬉しくて——。

本当の自分を分かってくれる人がいることが——。

母親が自分を理解していてくれることが嬉しくて——。

その人と遠くにいることが悲しくて——。

涙が溢れて、足下に落ちた。

「……………うん……………」

涙声になったけど、隠しきれていないけれども——。

三輪は素直に応えた。

母親も微妙に涙声になっていき、最後にはお互い涙声になった。

今はまだ会話が出来る。

お互いに生きているから……。

けど、実戦で自分が死んでしまったら、もう話せない。

徴兵される前に、何度も夜更けまで語り合った。

酒の力も借りて、悔いを残さないようにと話した。

——はず、だったのけれども……。

言いたいことが、まだ胸の内に——胸の奥底にまだまだ埋もれている。

もしかしたら、既に言ったことなのかもしれない。

だけでも、もう一度言葉で伝えたい。

何度でも伝えたい。

ありがとう。

生んでくれて、ありがとう。

育ててくれて、ありがとう。

私を——。

私を『三輪貴子』に育ててくれて、ありがとう。

ありがとう。とは言える。

だけど、その一言だけでは心の全てが伝わらない。

それがもどかしくて、胸の内を伝える言葉を探す。

いろいろ勉強したはずなのに、この感情を余すところ無く伝える言葉が見つからな

い。

伝えたいこの気持ちに纏まらなくて、もどかしくて、胸が苦しくて、悔しい。

用意した十円玉はもう無い。

あと十数秒で料金切れになる。

伝えたい気持ちを伝えきれないまま、電話が切れてしまう。

「もうすぐ切れちゃうけど、また電話するね。……お母さん、ありがとう」

『——ううん、貴子。私こそ、貴女が私の娘に生まれてきてくれて、あり——』

母親が言い終わらないうちに通話が切れた。

ツーツーツと電話のトーンだけが三輪の耳に響く。

最後まで聞くことが出来なかった母の言葉。

その最後を気にしながらも、名残惜しげに受話器を戻した。

後悔の念で受話器を固く握りしめた指が離れない。

あと少し話していたかったと思う。

そう思うのであれば、私はどうしてもっともっとたくさんの十円玉を用意しておかなかつたのだろう。

そんな、何かを引き摺るような後悔が胸に残る。

「……ありがとう……」

夜の電話ボックスの中で小さく呟く。

今はもう私の声が聞こえない母親へ——。

母親が伝えてくれた言葉を心に染み込ませるように――。

本当にさつき大泣きしてしまいそうだった。

優しい母親の気遣いで涙腺が緩んだ。

もつと泣いてしまえば楽かもしれない。

声を出して泣いても母親に心配を掛けないで済むから――。

もう、我慢しないで素直に涙を零す。

「……………お母さん……………、あ……………り……………が……………、……………とう…………………………」

込み上げた悲しみに胸が一杯になる。

伝えきれないこの思いで胸が苦しくなる。

もう、しゃくり上げる嗚咽は止めようがなかった。

電話ボックスの中にいるという密閉感が拍車を掛けて、感情の籬《たが》が外れる。

何度も何度もしゃくり上げて、細い両肩が震えた。

ぎゅつと閉じた両目からは、ぼたぼたと涙がこぼれ落ちて止まらない。

いつもなら理知的な雰囲気気を纏う端正な顔は、くしゃくしゃになり、紅潮した頬には

涙が伝う。

「……………あり……………が……………とう…………………………」

最後に一言呟いて、感情のままに、ただ泣いた。

何も考えず、嗚咽を零して涙した。
死ぬときは――。

BETAに喰い殺されるときは一人。
そう思うと悲しくて。

明日はもう声を聞けるか分からなくて不安に震える。

そんな感情が彼女の体内でうねるように駆け巡り続けた。
それから数分後。

（――もう何分、たったのかな……）

やっと泣き止んだ彼女はそう思いながらも、腕時計を見なかった。

今は時間の事なんて考えたくなかった。

眼鏡をずらして指で目尻の涙を拭う。

顔を上げて下唇を噛み締める。

鼻を吸って顔を戦闘服の裾で拭う。

深呼吸して呼吸を整えた。

（――もう……寝よう）

そう思い、心の迷いを振り払うように迷彩柄の戦闘帽をかぶり直して、電話ボックスの外に一步踏み出した直後、ギョツとして足が止まった。

全身が萎縮し、慌てて直立不動の姿勢を取ると、素早く右手を挙げて敬礼の格好。彼女の口からは反射的に言葉が出た。

「——お、お疲れ様です！ 樽木三曹」

電話ボックスから数歩離れたところにひっそりと立っている樽木を見つけて、一瞬でさつきまでの感傷が吹き飛んでしまった。

三輪の背中に冷や汗が浮かぶ。

消灯後に勝手に隊舎外を出歩くのは規則違反だ。

寝るのも仕事と言われ、徴兵以来ずっと厳しく指導されていれば、彼女の背にも冷や汗の一つや二つは簡単に浮かぶ。

よくて反省——と、言う名の腕立て伏せによる懲罰だし、悪ければ寝ている仲間全員が叩き起こされての連帯責任。

即座に懲罰が下されるなら、今まで千葉が散々行ってきたように有無を言わせず殴られる。

樽木が少し不機嫌な表情で、何も言わずに近付いてくる。

思いがけないことに、逃げることも言い訳することすらも思い浮かず、身体が硬直し思考が止まった。

皆に迷惑を掛けてしまうと思うと、皆に掛ける迷惑とそれにより仲間から糾弾される

ような視線を向けられるであろう自分を想像し、その恐怖で身体が震えた。

「——三輪」

樽木の何気ない一言で、何故か千葉の姿が蘇る。

千葉の姿を思い出して、さらに込み上げる暴力への恐怖感。

喉から零れかけた悲鳴を必死になって止める。

泣いていたことも、みつともない顔であることも、全て吹き飛んでしまった。

そんな彼女の視界の中で樽木が右腕をゆくりと上げて、彼女に近づける。

一瞬後にはその身を襲う衝撃と苦痛に怯えて目を閉じ、「ひっ」と小さい悲鳴が絆創膏を貼った口元から零れ出た。

肩を竦めて全身を硬直させた三輪に、樽木は——。

「……ばーか。くだんねえこと、気にしてんじやねえよ」

「……っ！」

ただまっすぐに延ばした右手で三輪が被っている戦闘帽のつばを指で摘んで、その泣き顔が隠すように一気に引き下ろして彼女の顔を隠した。

殴られないことに驚き思わず顔を上げたが、樽木が下ろした戦闘帽のつばで樽木の表情が見えない。

樽木のいつもの騒がしいような陽気さは無いが、思いも寄らぬほどに優しい口調で語

る。

「高井に感謝しろよ」

「——え!?!」

驚いて、帽子を上げる。

目に映ったのは迷彩柄の戦闘服を着込んだ樽木とその後ろに立つジャージ姿の高井。

樽木の斜め後ろにひっそりと立つ高井が、三輪に控えめに手を振った。

当の三輪は驚いた表情のまま固まり、声も出ない。

「隊舎当直には一報入れてある。一緒に帰るぞ。あゝゝゝ。……あとな、三輪……。お前な、こんだけな、ストレス一杯、不満一杯、我慢限界、明日無き絶望に満ちた男たちが、この相馬原駐屯地に閉じ込められてるんだぞ。もっと女らしく身の危険を感じて、予防策を取れよな……。まったく、お前は、よゝゝゝ」

最後にはハッツと深い溜息を吐きながら、いつもの口調で語り掛ける樽木。

最後は大げさな口調とともに顔を逸らす。

何とも言えない恥ずかしさ。

飴役とはいえ、いつもはちゃんと教官面しているので、こんなに大げさに心配している自分は見られたくない。

「……ありがとう、さびびびます……」

今までは想像も出来ない樽木の一言だったが、ぎこちなく謝意の言葉を返す。

三輪は教官たちにこんな風に——優しく扱われるなんて思いも寄らなくて、また不意に涙腺が緩む。

再び涙が彼女の頬を流れ落ちる。

樽木の影からひっそりと近づいた高井が、呆然と涙を流しながら立ち尽くす三輪の涙を取り出したハンカチで優しく拭う。

優しくしてくれる高井になんと云えばいいか、三輪は一瞬声が詰まった。

『高井に感謝しろよ』

リフレインする樽木の言葉。

自分が知らないだけで、高井はちゃんと見ていた。

居室ではみんなとの会話を最小限にして素早く寝ていたのに、勝手に部屋を抜け出した自分を気に掛けて高井が樽木を動かしたのだ。

樽木も怒るでもなく本当に心配していて、行き先を告げずに彷徨《うろつ》いた自分を探し出している。

自分は大してみんなに気を掛けていなかったのに——。

高井や樽木は自分を——。

「やい、帰りましょよ」

高井が優しく語り掛け、三輪の震える両肩に手を置いた。

「……はい……」

嬉しかった。

私は一人じゃない。

その事実を実感して、心底嬉しかった。

そうして三輪が俯いたまま答え、高井の手に触れて——ハツとなって慌てて顔を上げた。

「——っ?! ……桃さん!!」

三輪はひんやりと冷たくなつた高井の両手を、優しく、いたわるように自らの両手で包み込んだ。

自分の手より遙かに冷たくなっている高井の手が痛くないようにと注意しながら両手で包み、少しでも暖かくなるようにとさすつた。

そんな三輪がなにか言い掛けた機制を制して、高井は微笑みながら促した。

彼女は何も言わない。

ただ、優しく微笑んで促すだけだ。

「さ、早く寝ちやいましょう。冷えちやうわよ」

樽木と高井は待つていたのだ。

この肌寒い山風が吹く中で愚痴も文句も何も言わずに、母親との電話が終わるまでの間、ずっと三輪を見守っていた。

三輪の心に染み渡る、高井の優しさ——慈愛に包まれるような暖かで心地よい気持ち。

電話で感じた母の優しさ。

今まで気にも止めていなかった自分の狭い視野。

いろいろな感情が三輪の胸中に渦巻く。

その事を感じ取っているだろう二人は何も言わずに微笑むだけだ。

私も、もっと頑張らないと——。

同じ境遇の仲間が、私のために心配しないでと微笑んでいるのだ。

私だって変わらないはず。

私にだって出来るはず。

そう決意して、前を見た。

満月と無数の星の光に照らされた駐屯地の夜道。

それはまるで人類、そして自分達の行く末のようにさえ見える。

寿命が尽きるまで生きられることは、もはや有り得ない彼女の人生。

BETAと戦い続ける、半ば死が約束された彼女たちの将来。

だけど、進む。

この人たちと一緒に進む。

この人たちとBETAと戦う。

共に歩み、共に戦い、共に生きていく。

また弱気になってしまいかもしれないけども、また頑張る。

みんなも頑張っているのだから、自分も頑張る。

「——はい。もう帰って寝ます。……ありがとうございます」

涙声で心を伝えて、これからの第一歩を今、踏み出す。

流れ落ちる涙はもう気にならなかった。

ただ高井に、これ以上寒い思いをさせたくなくて足を進める。

（桃さん、貴女と一緒に良かったです——）

樽木に聞かれるのが何となく恥ずかしくて、高井への言葉は心の中だけにとどめた。

高井と横並びで歩き出す。

三人は高井を中心に寄り添うように——。

まるで支え合うように——。

星明かりで照らされた夜道を女性用隊舎に向けて歩き始めた。

一九九八年一〇月一七日 二三時四四分

帝國陸軍相馬原駐屯地 第二機械化連隊第三中隊事務室

千葉一等軍曹 及び 樽木三等軍曹

ほとんどの者が就寝し、日付が変わりそうな深夜二三時過ぎ。

この時間まで残業しているのは流石に限られる。

そして今日は千葉だけだったが、その手は動いていなかった。

彼の事務机の上に書類は広げられてはいる。が、ボールペンが動いていた形跡は僅かだ。

今日も疲れた。

千葉として生身の人間。普通に疲れもする。

それも体力的な疲労より、精神的な疲労が主だ。

怒鳴り続けるのも思ったよりは体力を使うし、些細なミスも——今日の实弾射撃のよ
うな訓練では誤射の可能性も否定できない——見落とさないようにと、自らも緊張させ
る。

そんなのが訓練中続き、新兵が休む間に自分のトレーニングを行い、夜遅くに事務室
で残業をする。

さらに新兵どもの教育は思った以上に気を遣う。

怪我をしないように、脱走させないようにと、訓練スケジュールとの擦れを修正しつつ、なんとか訓練しているというのが教官としての千葉の本音だ。

それでも当初のスケジュール表と進捗状況表を見れば頭が痛くなる。

「——千葉一曹、見送り終了しました。三輪は無事ですすよ」

「……そうか。一安心だな」

事務室に入ってきた樽木が開口一番に言うと、千葉はリラックスしたようにありふれた事務用椅子の背もたれに体重を掛けて背を伸ばす。

パキパキパキと背骨が鳴る音が身体の中から低く響く。

それから、大きく溜息を吐く。

三輪が無事だったら、それでいい。

千葉が特に彼女に怒ることは無かった。

本当は怒るべきなのだろうが、今回は不問にした。

一応、癖になっても困るので次にやったら厳しく怒らなければならないが、今日はいい。

そう思いつつ背もたれに身体を預けたまま、千葉は樽木の方を向いた。

「高井との深夜デートは上手くいったか？」少しにやけて問い掛ける。

「いやあ、まあ、その、なんて言いますか？ 三輪が直ぐに見つかつたんで、そこそこ語り合つてですね……つて、今それは脇に置いて——」

樽木がいつもの戯けた口調と大げさな仕草で受け答える。

「三輪のやつ、どうだつた？」

千葉としては直接見ていないので樽木の報告を受ける以外、三輪の精神状態を知る術がない。

これでも千葉としては気を遣つたのだ。

心配性の高井がこの事務室に内線電話で連絡してきたのは消灯直後。

ある意味、運悪く千葉が電話を取つた。

慌てた高井が電話を切ろうとしたが、それを一喝して止めさせた。

なかなか口を開かない高井に『最悪、三輪がレイプされるぞ！』と脅した。

もつとも高井自身もその可能性が否定出来ないから深夜にも係わらず事務室に電話を掛けてきたのだ。

その彼女の計算違いは樽木ではなく、千葉が電話を取つたということだけだ。

昨今の帝国陸軍駐屯地内で発生する犯罪というのは冗談話ではなく、千葉らにとつては本當の心配事だつた。

BETA上陸により絶望的な状況に陥つた中で、無理矢理徴兵された人々が駐屯地に

閉じ込められているのだ。

大なり小なり、犯罪が起こらないはずがない。

犯罪に対して厳罰で対処しているとはいえ、規律を碌に教える暇もなく、何よりも徴兵された人々には明日がないというある種の絶望感が満ちている。

無論現実を見据え、それでも生き残ろうと頑張っている人々が大多数だが、死刑になるのもBETAに喰い殺されるのも大差がないと開き直った人間が容易く犯罪に走る。

人目が多い昼間は問題があまりないが、寝静まった夜間はどうかなるか分からない。

そんな状況であるので、各部隊は対応策として憲兵隊とは別に独自に不寝番ふしんぼんと呼ばれる夜間の見張りを数名立てて、自らの装備品や貴重品を守っている。

つまり、身内に泥棒がいるという前提で構えていなければならぬほどの状況である。

そのような状況なので、駐屯地内とはいえ夜間に女一人で人気がないところを歩くのは本当に危険なのだ。

千葉は直ぐさま樽木に呼び寄せ、高井と一緒に三輪を探すことを指示した。

自分が行っても、三輪が余計な緊張をするだけだ。

ここは飴役である樽木に捜索を任せた。

当然、樽木を信用しての行動である。

それから日夜駐屯地を見回る警衛隊に一人で歩いている女性兵士を発見次第、連絡をして欲しいと一報入れて事務室で待った。

あともう少し遅かったら、班員全員を叩き起こして搜索しようかと考えていたが、杞憂に終わってホッとしたというのが今の千葉の心境である。

「かなり派手に電話ボックスの中で泣いてました。電話相手は母親ですけどね」

「そうか……」

樽木にしては珍しく沈んだ声。

良くも悪くも彼は優しいところがある。

千葉もいろいろ思うことがある。

が、それが顔に出ないようにと努めた。

「……明日四時からの非常呼集訓練、止めた方がいいと思います」

樽木が、班員たちが想像したことすら無いような控えめな口調で、千葉に意見具申した。

これは彼が高井と一緒に三輪を搜索していた最中から、言おうと決めていたことだった。

「……もう、限界か？」

千葉は視線を樽木から、机の上に置いた訓練スケジュール表に移した。

何度も赤字で書き込まれた注釈の数々。

今まで一言も千葉と樽木は班員たちの前で言わなかったが、訓練スケジュールはもはや相当の無理をしないと取り戻せないところまでずれ込んでいた。

樽木とて助教役である。

そのことは重々承知で口を開いた。

「限界だと思えます」

きつぱりと言いつつ樽木は、それ以上何も言わずに千葉の返事を待った。

「彼奴ら全員目の下にクマが出て来ているし、風邪気味だと真木野と田淵が報告してきているしな……」

独白のように千葉が呟くと、樽木は肯定する為に首を小さく縦に振った。

徴兵された八人は新兵そのものだ。

軍隊に入ってからまだ一月も立っておらず、肉体的にも精神的にもまだまだだ。

その上、真木野や高井、三輪は女。当然、筋力は男に劣る。

限界に追い込むように訓練しているが思った以上に早く、それが来た。

千葉が一瞬坂上の顔を思い出して、不機嫌そうに顔を顰める。

彼とて新兵たちはちゃんと観察し、目を配っている。

そうでなければ、とうの昔に新兵たちは訓練中に事故を起こしているだろう。

不慣れな新兵に詰め込み式の訓練を朝から晩までやらせているのだ。

怒声で無理矢理緊張させ、操作に間違いがないかを事細かに目を配らせて事故を未然に防ぐ。

端から見れば、怒鳴って揚げ足取りをやっているようにしか見えないが、千葉たちが怒鳴るといふことはそういった目的がある。

その上で、彼らの健康状態にも気を配って訓練をしている。

倒れて訓練出来ない状況では本末転倒だ。

樽木の一言に、流石に悩む。

真木野たち八人が上手く訓練が出来ず、また彼らが時間を守る事が出来ず、当初の計画通りに訓練は進んでいない。

千葉が叱責したりする時間も正直多すぎるが、ミスをしたらその場で矯正しなければ間違つたまま覚えてしまう。

ただでさえ時間はないのだ。やり直す時間の方が勿体ない。
体力は無く、技術も無く、要領も悪い。

どれも新兵であるならば、ある意味致し方のないことだ。
だが、このまま戦場に行けば確実に死んでしまう。

皆で力を合わせようが、ゼロ足すゼロはゼロにしかならない。

そのゼロをせめて一にして、皆で協力し合って生き残ろうと考えているのだ。

何が何でも戦力になって貰わなければ、本当のお荷物だ。

このままでは仮に千葉の元を離れ、別の部隊に行こうが、部隊が彼らを見捨てるだろう。

最低限の戦闘技術を身に付けなければ、そんな扱いを彼らが受けてしまう。

最悪の場合は、真っ先に使い捨てられ、無駄死するだけだ。

だが、戦う前に戦えなくなるのでは訓練の意味が無い。

一瞬だけ躊躇ったが、結論を下した千葉は大きな溜息を吐き出した。

「——早朝の非常呼集訓練は中止。午前中の跳躍ユニットを使用した降下訓練塔からの降下訓練と緊急離脱訓練も中止。実技は明後日にずらして、明日は跳躍ユニットを含めた強化外骨格の座学をやろう。どうせ、強化外骨格自体も使いこなせていないし、理解も不足している。明日は持たせる武器の取り扱いを教えて、強化外骨格自体の習熟に重点を置く。——集中力の無い状態で跳躍ユニットを使っても……。ミスしたら、墜落してしまうしな……」

「自分もその方がいいと思います」

ホツとしたように樽木も賛同する。

千葉が急ぐ理由も分かり、樽木も基本的には同じ考えではあるが、もう危険な状態だ

と判断していた。

それが受け入れて貰えて、本当にホツとして胸をなで下ろした。

「——さて、もう少し書類を片付けたら、寝るか」

「ういっす。俺も手伝います。訓練スケジュールの変更報告と射場使用申請を書き上げておきます」

「悪い、頼む。俺は整備小隊への作業依頼書を書き上げる。が、切りのいいところで切り上げて早く寝よう」

「了解」

そう言つて二人は書類作成に取りかる。

結局、彼らが寝たのはいつものように日付が変わつてからだつた。

第一班集中訓練、残り二日。

第12話 第一戦術機甲連隊第三中隊、移動開始

一九九八年一〇月一八日 〇八時五四分

帝国陸軍練馬駐屯地 第一戦術機甲連隊第三中隊作戦室

一〇〇〇年を超える歴史を持つ旧帝都・京都を失った日本帝国の新たな帝都は、昔は江戸、今は東京都と呼ばれる巨大都市。

東京はBETAによるユーラシア陥落以前から、万が一の帝都機能移転を考えられて都市整備が進んできた巨大都市である。

第二次世界大戦後は、古くから発展してきたため土地の余裕がない関西と違い、さして開発されていなかった関東平野に新興企業が次々に進出。

東京に一大経済圏を作り出すに至った。

その新たな帝都・東京を守護する帝国陸軍第一師団の中核部隊の一つ、精鋭と名高い第一戦術機甲連隊が駐屯することになった帝国陸軍練馬駐屯地。

その一角にある第一戦術機甲連隊第三中隊の作戦会議室。

照明を落としカーテンを閉め切った比較的広くて殺風景な会議室。

そこに中隊の衛士一二名と同伴する整備中隊からの派遣隊一二名、本部要員六名の合

計三〇名が帝国陸軍の戦闘服に身を包みながらパイプ椅子に腰を下ろし、スクリーンに投影される様々な時程表等を見ていた。

静かな熱気が籠もる室内に作戦説明や連絡事項が響くたびに各人が必要事項を手持ちのメモ帳等に記入していく。

先ほどまで喋っていた本部要員が食事や宿営場所等の各種伝達事項を言い終わると、マイクとスクリーンを照らす赤外線ポインターを力強い眼差しが印象的な女性士官に手渡した。

ここから作戦会議を進めるのは副中隊長兼第二小隊長の柏葉中尉。

女性にしてはかなりの長身、乱雑に後ろで編み上げた長い黒髪、キリツとしてどちらかと言えば太めの眉毛とはつきりとした口元。

女性特有のよく通る甲高い声に強い意志を感じさせる瞳。

どこかの女性秘書のような顔立ちながら、その言動はアグレッシブ——ある意味、ガラが悪いとも言える——そのもの。

スタイルもそれほど悪くないが、強化装備を着込むと目立つのは綺麗なほどに割れた腹筋。

手足も一見細く見えるとはいえ、それは鍛え上げて筋肉が引き締まった結果。

戦うために自ら鍛え上げたとはいえ、近頃は風呂場の姿見で見る己の身体に幻滅する

二四歳。

ただ今、彼氏募集中。

その彼女の声がまた狭い会議室に響く。

「——今回の任務は新潟、群馬、長野を守る第一二師団隷下第四八戦術機甲連隊への増援。これは我が連隊が中隊規模のローテーションで、当分の間受け持つことになる予定の任務だ。細かい日程は不明だが、少なくとも、工場から新品の不知火が連隊に納入され、再編成が完了する一月半ばまでは続く。なお、ワンローター一週間の予定」

そう言ってから手元のキーボードを叩き、スクリーンに映る時程表を作戦図に切り替ええた。

フルカラーの衛星写真上に各種記号が踊る。

そこに映るのは、上は日本海に浮かぶ佐渡——“HIVE21佐渡島ハイヴ”——から、下は横須賀まで。

左は静岡から、右は千葉までの広大な地域。

地図に幾つかある赤い丸印の上には“BETA”と記載されている今現在確認されているBETA群であり、そのサイズでBETAの規模を表している。

地図上に映る巨大な赤い丸印は三つ。

佐渡島ハイヴを表す一つと、関東に向けて東海道を東進中の二つ。

特に関東を目指していると思われるBETA群の規模は軍団以上であり、実数は測定不能。

もはや推定値しか出てこない有様である。

柏葉中尉は東海道のBETA群を示す赤丸を右手で持つ赤外線ポインターで指すと、言葉を続けた。

「この二つのBETA群の今現在、進行速度が大幅に低下している。この群れに対しては富士山麓に展開している第三師団と太平洋に展開している海軍の第一・第二艦隊、米海軍第七艦隊が間引き作戦を実行中。砲撃戦主体の為、大きな戦果は見込めないが着実に間引きしている。その間に増強第一工兵団が箱根防衛線を二四時間体勢の突貫工事で構築中、今現在約四〇%の進捗状況だ」

「ふくん……」

椅子にだらしなく腰掛けた若い男が誰に言うでもなく呟いた一言が静かな会議室に響く。

それをミーティングに対する興味が無いという、あからさまな侮蔑と感じた柏葉が声を荒げて声の主を睨んだ。

「——加藤中尉！ 黙って聞け！」

「お、怖い怖い」

柏葉に怒鳴られた男——加藤祐介はおどけながら首をすくめて口笛を吹く。

男としては長髪の部類に入るボサボサの髪。

いつも絶やさないうようにしている女性向けの笑顔。

中背中肉ながら、しっかりと鍛えてある肉体。

何よりも特徴的なのは、誰が見ても感じる、遊び好きだと全身から醸し出す雰囲気。

人をおちよくり笑うことと、ナンパとセックスが大好きな二三歳。

だが、その双眸の奥に隠されているものは得も言えぬ狂気。

死体で埋め尽くされた戦場で戦術機を駆り、BETAを殺して遊ぶ、

不謹慎極まりない帝国陸軍衛士。

彼をよく知る者たちは皆『破廉恥』『クレイジー』と言い表す。

彼は柏葉と同階級の後輩であり、旧帝都・京都で一ヶ月以上に渡り繰り広げられた京

都防衛戦をも生き抜いた猛者。

そして、この帝国陸軍第一戦術機甲連隊第三中隊第三小隊長でもあった。

「……だったら、最初から黙ってる」

「はいはい。Yes Sir! Mam, Mam!」

加藤が喋れもしない英語で適当に応じる。

その上、戯けているくせに敬礼までして生真面目そうな表情だけを作る。

半ば呆れ、半ば苦虫を嘔み潰したように、遣りづらくて堪らないといった風情で柏葉が小さく呻く。

が、加藤は全く意に介さず。

二人の遣り取りで、会議室を満たす皆の控えめな笑い。

作戦説明の厳格さはどこへ行つたのかという雰囲気。

今月始めに北海道から転属してきたばかりの柏葉にとつては本当に遣りづらい相手である。

彼女よりも実戦経験が桁違いに多く、同じ小隊長である加藤の扱いは本当に困る。

無論、加藤が柏葉よりも実戦経験豊富ながら序列・役職が低いのは、日頃の言動に対する正当な評価故に、である。

それよりも質が悪いことに、加藤の行動にはほとんど悪意がない。

ただ、重苦しい雰囲気嫌いだからと、大した考えも無しやっているとただけだ。しかも、中隊生え抜きの衛士だから、連隊ではこれで普通の状態だと思われている。

柏葉は助けを求めるようにチラリと中隊長を見た。

だが、中隊長は腕組みをしたまま、無言で先を促した。

加藤を注意せず、柏葉も助けない。

一人でやれ。と、突き放す。

(……どうして何も注意しないのよ……)

ちよつと失望にも似た気持ちだが広がるが、同時に自分が今も試されているということ
を思い出す。

彼女はまだこの中隊で確たる実力を示していない。

「——私語は厳に慎むように！」

柏葉が加藤をキツと睨み付けて念を押す。

「了解」

再び加藤が肩を竦めて答える。

その仕草が癪に障るが、ぐつと我慢。

彼女は無言でキーボードを壊れそうな勢いで叩き、スクリーンに映る画面を切り替え
た。

「四八戦機甲は妙高高原防衛線における決戦戦力ではあるが、損耗著しく実働は二個大
隊強という状況だ。それを補うための我が中隊の派遣であり、我々は同連隊の予備兵力
として長野県飯山に展開する」

そう言いつつ、彼女は分かり易いようにとまず地図上の新潟県上越市——戦国時代、
自らを毘沙門天の生まれ変わりと公言した事で名高い武將の有名な城下町である高田
をポインタで示し、それからさらに南に位置する妙高山の麓にある関山演習場を示し

た。

「言うまでもないが、妙高高原防衛線は日本海側にいるBETAの関東侵攻を防ぐ重要防衛拠点の一つだ。任務の概要だが、まず、第一段階として囿専任の戦術機部隊が関山演習場とその向かい側にある高床山に構築されたKZ《キルゾーン》にBETA群を誘い込む。ここで第一三機械化歩兵連隊を主力に第一五六歩兵連隊、第一五七歩兵連隊と第一二戦車連隊隷下の二個戦車中隊で攻撃。またこの二カ所は地下陣地化されており、ここで可能な限りBETAを——特に小型種を足止めする」

「うっわ。一千人がただの消耗品かよ」

誰もが言いかねる事実を、加藤が明確に呟く。

そう。小型種を帝国陸軍が望む場所に足止めするために、関山演習場と高床山に地下陣地を構築し、三個歩兵連隊を貼り付ける。

彼らは大型種が踏みつけようとすれば地下に潜り、張り巡らした地下トンネルから這い出て小型種と戦い続けるのだ。

BETAとて、自らを殺そうとする者には攻撃してくる。

そうすれば、侵攻してきたBETA小型種は関山陣地と高床山陣地およびその周辺の陣地で足が止まり、徴兵された人々と戦う。

正に、身を挺しての足止め。

命が続く限り機能する時間稼ぎ。

それが彼らの任務。

三桁の番号を持つ連隊と師団はその大半が徴兵された人々で編成されている。

当たり前ではあるが、職業軍人だけで構成された部隊と比べれば、戦力として比較にならない。

生き残る能力も、戦う能力も何もかも劣る。

その彼らを前面に押し出して、BETAの勢いと数を削ろうというのだ。

BETAの骸と共に、徴兵された人々の死体が折り重なることは目に見えている。

この損害を前提とした上での関東防衛計画。

柏葉もその事実が胸が痛むが、今は無視する。

小型種——特に戦車級を関山と高床山で足止めしようとする理由は、自分たち戦術機部隊の損害を最小限に抑えるために採用されている戦法だからだ。

捨て駒になるときは自分たちにも差はない。

あるのは、切り捨てられる可能性の大小だけだと割り切ろうとする。

「次に第二段階として、進撃速度が落ちたBETA群を野尻湖周辺に展開する砲兵部隊と戦闘ヘリ部隊で打撃を与え、それでも突破してくるBETA群は上信越道沿いに構築された数線の防御陣地で可能な限り撃破。その間に我々を含めた増強第四八戦術機甲

連隊団が周囲の山間^{やまあい}を利用してNOE（匍匐飛行）で接近。BETA群の側面から一気呵成に突撃して殲滅する。なお、この最終段階では関山陣地と高床山陣地は共に支とう点として機能する。二つとも戦車さえ格納出来るほどの巨大な地下塹壕もある上、重要防護施設は一五五ミリ砲弾の直撃にも耐えるという話だ。突撃の際は敵味方識別装置^Fを必ず入れておき、乱戦であろうと決して切らないように。傍目には誰も生きていないように見えても、地下には歩兵がいる。友軍相撃には細心の注意を払え」

そこまで言つて、柏葉は一同を眺めた。

「細部に関しては、現地での補足命令により補完する。他に何か質問はあるか？」

「はいはい！ はいはい！」

わざとらしい声音と、白々しいまでの加藤の挙手。

うんざりしたような表情を露骨に作つてから、柏葉が睨む。

蛙の面に小便と言わんばかりの加藤が笑顔のまま挙手し続ける。

きつかり三秒後、渋々と柏葉は発言の許可を与えた。

「加藤中尉、どうぞで」

「飯山に混浴温泉はありますか？」

「はあ。」

思わず柏葉の思考が止まった。

自らの耳を疑う。

当然そんな柏葉の心理など、加藤には関係ない。

「いや、せっかく近くに温泉あるんだからさ、楽しまなきゃ損じゃね。田舎でナンパなんて出来そうにないし……いやいや。待てよ。今なら女子高生だった学徒兵をナンパすりゃいいか？ ん、近くに駐屯地無いからやっぱ無理だ。結局、混浴しかないなあ」

呆然とする柏葉を無視し、一人勝手に喋りまくる加藤に同僚から冷やかしのヤジと罵声飛び。

「お前のナンパに引つ掛かるのは婆さんか、小学生だけだろ！」

「なんだ、それ！ お前のセンズリネタなんぞ、言うじゃねえよ！ 気色悪い！」

「うっせい！ 俺の下半身に女はみんなメロメロになるんだよ！」

「——黙れ！ 犯罪者！」

柏葉の罵声と共に投げ付けられた赤外線ポインターを、口笛と共に加藤が軽やかに躲す。

その挑発的行為により、さらに怒髪天を突く。

激情のまま、柏葉が怒鳴った。

「このセクハラ変態野郎！ テメエのイチモツ、切り落とすぞ！」

思わず、地が出た。

彼女としてはたつた二週間とはいえ、今までしつかりと隠してきた本性だけにハツとなつて口を嚙み、口元を手で覆い隠した。

が、驚いた者は誰も居らず、加藤に至つては上機嫌だ。

「Oh! Yeah! 中尉のお口で息子が噛み千切られるなんて、もう、サイコー!! やべっ! 想像したら、勃起してきた! うひよほしくいっ!」

微妙に妄想を交えた加藤が腰を突き出し、フラダンスの様に腰を回す。

柏葉は何も言わずに全身全霊最速最小のモーションで右手に持ったマイクを、その邪悪な股間目掛けて投擲。

これも口笛と共にひよいと躲される。

投擲されたマイクはそのまま壁に当たつて塵一つ無い床にコロコロと転がった。

「女の敵め! 絶対にセクハラで憲兵隊に突き出してやる!」

「んんんん! 怒つた顔もせ・く・しい・しい!」

唸り声を上げて睨み付ける柏葉と、奇声を上げて腰を振り続ける加藤。

笑いと罵声とヤジが溢れ始める会議室。

もはや何のために集まっているか分からない状況で、一人の男が音もなく立ち上がった。

この騒ぎの中で一言も発せず、ただ立ち上がっただけの男に、真つ先に気が付いたのはなんと騒ぎの元凶たる加藤祐介。

その彼が大げさな動作で黒い戦闘靴の踵を派手に打ち鳴らすと、背筋を伸ばして直立不動の姿勢を取った。

加藤の行動が意味するところを察して柏葉以外の全員が——つまり、その男と生死を共にした経験がある者たち全員が口を閉じ、視線をただ一人に向けた。

号令も無く、ただの一瞬で部屋が静まる。

柏葉にとってはあり得ないような変化で、異様としか感じられない空気。その為だろう。

彼女はぎこちなく後ろ——加藤の視線の先に目を向けた。

全員の視線が彼らの長に集中する。

男の容姿はある意味、とても特徴的だった。

三〇代半ばとはとても思えぬ程に隆起した筋肉を纏った体躯。

いかなる高Gにも耐えられるようにと鍛え上げた太い首。太い眉毛にがっしりした顎。

何もかも睨むだけで縫い付けるような鋭い視線を放つ双眸に、達磨の如き面相。

帝国陸軍第一戦術機甲連隊第三中隊長 帝国陸軍大尉 村田延英。

二九人がその一手一挙動の全てを注視する中、その男は何事もなかったように会議室の中央を目指してゆつくりと歩く。

まるでそれに合わせるように、誰かが照明を付け、スクリーンのスイッチを切った。

その村田が歩きながら柏葉に声を掛ける。

「柏葉、力むな。最初から地を出しておけ。戦場では化けの皮なぞ、厚化粧よりも早く落ちる」

「~~~~~っ!!」

事も無げに自分の本質を見抜かれていたことを知り、柏葉は心の中で地団駄を踏んだ。

——こんな場所で厚化粧なんて言わないでよ!

顔が真っ赤になったことを頬の熱で知った。

「加藤、からかうのも程々にせい。戯れが過ぎるぞ」

「Yes, Boss!」

眼光鋭く注意する村田に加藤がまたも喋れもしない英語で答える。

が、柏葉の時と違い、その口調に明瞭なまでの真剣味が籠もる。

「ですが、楽しくなった。とは思います」

「——ふっ。確かにな」

お互いに口元を歪めた。

それに気付いた柏葉は、今度は悔しきで真つ赤になって歯ぎしりした。

結局、加藤は自分を見くびっているから大人しくしていないのだ。

そう思うと腹の底が怒りで煮えくりかえる。

副中隊長という役職を軽視するな！——と、いきり立つ。

村田はいつものように背筋を伸ばし、部下達に正対する。

その佇まいと仕草は見る者に武士を否応なしに連想させる。

彼にはそれだけの覚悟と信念があつた。

「皆、遺書は書いてあるな？」

「「はい！」」「「ハッ！」」

部下からの様々な返事を聞きながら、村田は部下一人一人の目に視線を向ける。

「死に仕度はよいな？」

「「はい！」」「「ハッ！」」

遺書のみならず、形見分けや私物の整理まで既に出来ているかと彼は問う。

同じように部下達が答える中、柏葉一人だけが言い表せぬ疎外感を感じる。

彼女はただ周囲に流されるように返事した。

「死ぬ覚悟は出来たか？」

柏葉だけが応えを返せない中、皆が「「おう！」」「「はい！」」「「ハッ！」」と雄叫びのように仲間たちが問い掛けに応じる。

彼女にはまだ分からない。

村田が問い掛ける、その真意を理解できない。

無闇に死を恐れ、己だけがと逃げだす事こそが、仲間の死と人類の敗北を近付け、最終的に自分自身の死を呼び込むことを理解していない。

だから、彼女だけはどうしても返事が出来なかつた。

「——ならば、予定通りに本日一八〇〇練馬駐屯地より飯山に向け前進する」

言葉を切り、村田は今一度部下全員に視線を巡らした。

己の覚悟を示し、それが部下に伝わるようにと、腹の底から声を響かす。

「儂の要望事項はただ一つ。『死力を尽くせ』。護るべきものを失ってから悔やむのであれば、戦場いくさばで死して誇れ！——以上、終わり！」

「——き、気を付け！」

村田の言葉に一瞬とはいえ我を忘れた柏葉が慌てて号令を掛けると、二八名の部下が一斉に椅子から立ち上がり、直立不動の姿勢を取った。

「敬礼！」

再び柏葉の号令で、村田と加藤たちがお互いに敬礼を交わす。

満足げな村田が無言で退室し、加藤たちが気合いを込めた雄叫びを上げる。その中で、柏葉だけが感じる疎外感。

一九九八年一〇月一八日　〇九時三〇分。

帝国陸軍第一戦術機甲連隊第三中隊、行動開始。

第13話 強化外骨格概要

一九九八年一〇月一八日 ○九時四一分

帝国陸軍相馬原駐屯地 第二機械化歩兵連隊第三教場

第二機械化歩兵連隊第三中隊第三小隊第一班の九名

教場というものはどこにでもあるもので、基本的な作りはどこも変わらない。

それが軍隊であろうと、大学であろうと、会社の研修棟であろうと、だ。

要は、教える側が必要な黒板やホワイトボードなどの筆記内容や教育内容を掲示する道具があり、教えられる側が筆記しやすいように椅子と机があれば、ほとんど事足りる。

そして、教育に集中させるために余計なものが何も無い部屋は、必然的に殺風景になると相場が決まっている。

帝国陸軍の教場もそういう風になつてある。

第二班集中訓練四日目。

本日最初の訓練は座学——学校と同じように主に室内での学習となつた。

内容は『強化外骨格概略』。講師は樽木三等軍曹である。

一々黒板に細々と書くのは手間と時間が掛かるのでプロジェクターを使用する。赤

外線ポインターを利用し、映し出されている写真を示しながら説明を加えていく。

そして今、画面に映っているのは彼らに配備されている八九式機械化歩兵装甲陸戦型である。

「——で、今までの訓練で既に体感したように、強化外骨格は装着者の動きを Power ed Master Slave 方式、まあ、略して PMS 方式と呼ばれる方法でそのままトレースする。補助として間接思考制御や音声入力等があるが、基本的には自分で動かしたとおりにスレイヴ・モジュール——つまり、強化外骨格の手足が動くようになってる」

そこまで言って、樽木は椅子に座り講義を聴いている面々をさり気なく観察した。

今にも寝てしまいそうに船を漕いでいるのは、昨日千葉に殴られた左脇の傷が目立つ東野と、まだうつすらと目の下にクマが残る胡桃沢。

やる気がない男と、体力がない男のコンビ。

うつらうつらしながらも頑張ってメモを取っているのは、口元に絆創膏を貼った三輪と、東野と同じように左脇に殴られた笠原。

聞いたこともない言葉に頓珍漢な表情を浮かべているのは、何故か今日は機嫌が良い真木野と物凄く眠たそうな高井。

やる気はあるのだろうか、どこまで理解出来ているのか分からないのが、千葉に殴

られ左頬に湿布を貼り付けた坂上。

機械関係だからか、一番興味津々で目を輝かせているのが田淵。各々、かなり特徴的である。

さらに観察すれば、座っている席の組み合わせにも人間関係が見て取れる。

一つの長机に二名座っているのだが、席順に関しては自由にさせた。

指示したことは前に詰めて、二人一組で座っておけと言うことだけだ。

最前列真ん中に陣取っているのは、坂上と笠原。

坂上は分別ある大人として千葉や樽木がいなくときの班を纏めているし、笠原は持ち前の体力と熱意でほとんどの面で皆の先頭に立っている。

彼らが前に座ることはもはやお約束に近い。

真面目コンビの右隣の机に座るのは、真木野と高井。

この二人は出会って直ぐに打ち解けたようで、訓練中も訓練外も一緒に行動していることが多い。

よって、この組み合わせはよく見る。

その女性ペアの後ろに座るのは、三輪と胡桃沢。

この二人は別に仲が良いというわけではない。

三輪は女性陣として真木野と高井の近くにいただけだし、胡桃沢も席が空いていたか

ら程度の理由しかない。

私語も無く、静かなペアである。

最後は真面目コンビの左隣に座るでこぼこコンビ、東野と田淵。

昨夜、殴り合つて笠原との唾つばみ合いが頂点に達している東野は、距離を取つて余計な争いを一応は避けているが、何時また再燃するか分からない。

東野と田淵の関係を的確に言い表すならば舎弟関係。

出会つて一週間程度のはずだが、その関係だけは誰が見ても分かるほどはつきりしていた。

この関係に田淵は不満がないらしい。

東野としても満足なのだろう。

それほど邪険にしている様子も、苛めている様子もない。

そして皆からの距離が、そのまま東野と仲間達との心の距離なのだろう。

そのように分析している樽木も、東野が会話する相手は舎弟の田淵とまとめ役の坂上しか見ていない。

東野は、笠原とは本気で殴り合うほど仲が悪いし、女性陣は言動が粗暴なため近付きたがらない。

他人との係わり合いを嫌う胡桃沢が東野に話しかけるわけもなく、東野自身も自ら人

の輪の中に入ろうとしない。

かと言つて、派閥を作るわけでもない。

彼はあくまでも一匹狼気取りである。

——まあ、どうでも良いけどよ。

と、言うのが樽木の本音だ。

この座学の半分は休憩時間のようなものだ。

負荷を掛け過ぎて、班員達が壊れないようにと昨日の深夜に訓練内容を変更している。

本来ならば、朝の四時に非常呼集訓練をする予定であつたが、班員達の疲労が溜まり過ぎてしていると判断して中止した。

昨日まで風邪気味だつた者や目の下にクマが出来ていた者たちも、体調が悪化しているような気配はない。

消灯ラップと同時に寝た者は丸々七時間は寝れたはずで、それなりに体力は回復しているようである。

「俺たちが使う強化外骨格は正式には八九式機械化歩兵装甲陸戦型と呼ばれるものだ。略称は八九だが、八九式自動小銃も略して八九という。その場合は状況でどっちを言っているか判断しろ。どうせ、大体強化外骨格か、Exoskeleton。略して

E Sとか、エクスケとも言うから気にするな——」

(そんなんじや、どうしようもないよな……)

と、胡桃沢が疲労と眠気でぼんやりした意識でそう愚痴る。

「元々は衛士たちが緊急脱出の際に使用する八九式機械化歩兵装甲の陸戦型に日本独自の改造をしたもので、全身を覆う複合装甲の追加とそれに伴う出力強化、各種兵装の取り付け金具とFCS関連のOSを追加。さらに陸戦における汎用性向上のために腕部モジュールを五本指付きに変更し、脚部モジュールは走破性向上——特に階段等の上り下りのために脚部を延長して足首の関節を強化したものだ。無論、強化外骨格は数が必要な兵器なので俺たちには不要な衛士専用の八七式フィードバック・インターフェイスや簡易型気密ヘルメットを廃止。戦術機用メインコンピューター等の高価な装備ももつと安いのに変えてコストダウンを図っている。これらの改造により衛士用とは全く違う外見となったが、フレーム等の基本設計自体は派生系であり、部品の共有化等により整備性・経済性は確保されている」

もう一度、生徒である八人を見る。

高井と目が合うが、彼女は目をぱちくりとさせるだけ。

完全に言っていることが理解出来ない様子で、隣の真木野は「お手上げ」というジェスチャーをこつそりと示した。

とりあえず、授業を進める。彼女たちには悪いが懇切丁寧に説明する時間は無い。

樽木は画面を切り替え、全身に様々な兵器を取り付けたハリネズミのような強化外骨格を映し出した。

「この写真は、例えるならバーゲンセールで商品を買って漁ったおばさんのようなもので、実戦でこんなに沢山の種類の武器を付けたりはしない。部隊内で役割分担をしているので多くても三〜四個というところだ。サイズさえ合えば、ほとんどの車載兵器・携行兵器を使用できるが、標準的には一二、七ミリ弾を使用した重機関銃を携行または腕に取り付ける。肩部にも取り付けられるが射角の関係で素人にはお勧めは出来ないな。七、六二ミリ弾使用の汎用機関銃を腕部等に着ける場合もあるが、これはもう、BET Aとの至距離戦闘^Bを担当とする人向けだ。今のお前達が考えるレベルじゃない」

三輪^Cが必死にメモを取っている。が、理系の知識も兵器の知識もないから、その運用のレベルまでを理解するには至らない。

「対大型種用に一一〇ミリ個人携帯対戦車弾——通称LAMや、八四ミリ無反動砲——通称84RRを肩に付けたたり、専用アタッチメントを砲本体に取り付けることにより腕部マニピュレーターでも射撃可能だ。他にもTOW対戦車ミサイルや八七式対戦車ミサイルを両肩に取り付けることも出来るが、これも各々専用のアタッチメントが必要になる。また一気に制圧する際に多用される四連装四〇ミリ多目的擲弾発射機^{マルチグレネードランチャー}を取り付

けることもある」

スクリーンに穴が空くほど見ている田淵だが、その彼を見ながらも、射撃の腕を考えると持たすことは出来ないなあ……と樽木は漠然と考えつつ、スクリーンに映る写真を切り替える。

切り替わった画面に映る武器の古めかしさに、坂上が驚きの表情を、真木野は呆れたような表情を浮かべた。

画面に映った複数の強化外骨格が手にしているのは長さ二メートルほどのスーパーカーボン製の日本刀や戦斧や戦槌、さらには長さ三メートルほどの槍だ。

「次に格闘戦用武器だが、まあ、見ての通り、戦国時代と変わらない。BETAを斬って、突いて、殴って、殺す武器だ。長刀、短刀、槍、斧、金槌、棍棒、何でも御座れだ。少し特殊なものとして——」

そう言ってまた画面を切り替えると、今度の強化外骨格には右前腕部に戦パイランカー杭カが取り付けられており、左前腕部には戦術機が持つ多目的追加装甲と同じような盾が装着されている。

その右腕を赤外線ポインターで示しながら、樽木の説明が続く。

「この戦パイランカー杭と呼ばれる火薬で杭を打ち出す格闘専用兵器や、左腕に装着された盾に感圧式反応爆薬などを取り付け、そこで殴ることにより起爆させる多目的追加装甲などがあ

る」

(……へえ、俺向きじゃねえか……)

積極的に頑張る気もないので口には出さないがBETAを殴り殺す武器があると知り、東野は内心喜んだ。

ここに来る前はただの歩兵だったので、BETAとの近距離戦闘はただの自殺行為に過ぎなかった。

だが今度は思いつ切り殴り殺せるかと思うと、それだけでもスカッと出来そうだ。

「——さて、ここで注目ッ！」

樽木は急に大きな声を張り上げ、両手をパンパンと打ち鳴らして、部下達の眠気を吹き飛ばした。

幾度となく繰り返された千葉の暴力指導のお陰か——躩けられた犬のように皆が樽木に注目する。

「ここまで聞けば、良いこと尽くめのような強化外骨格だが弱点も多い。お前達の生死に直結するから、耳の穴をよくかつぽじって聞きやがれ！」

自分の生死に直結するとまで言われれば、東野とて眠気が吹き飛ばぶ。

姿勢を改め、樽木の言葉に集中する。

「構造上、どうしようもないことだが強化外骨格には人間の腹筋に相当する

カーボニック・アクチュエーター
電磁伸縮炭素帯がほぼ存在しない。だから実戦、特に小型種との白兵戦中は絶対に転ぶな！ どうしようもないときは前のめりに倒れる！ そうすれば腕を使って素早く起き上がれる。背中から倒れると引つ繰り返った亀みみたいになるぞ。あと、背筋に相当する電磁伸縮炭素帯も出力が低めで可動域も少ない。注意しろ」

思いもよらない弱点に笠原が天を仰いだ。

（欠陥兵器じゃないか……）

流石に口にはしなかったが、そう思った。

「次に、腕部スレイヴより内側にBETAを近付けるな！ これも構造上致し方のないことだけでも、装着者の腕の運動空間を確保し、生身の腕を腕部スレイヴで潰さないように、一定角度以上内側には動かない。まあ、人間で言えば——」

そう言つて樽木は、皆が理解しやすい様に自分の両肩を両腕で抱きしめるような姿勢を取つた。

「今、俺がしているように右手で左肩を、左手で右肩を触りながら腕を組み、そのまま脇を締めることが出来ない。強化外骨格でこの動作をそのまま行つた場合、腕部スレイヴが生身の腕を押し潰してしまう。万が一、この動作を行つた場合、安全装置が働いてロックが掛かる。このためBETAを裸締めとか鯖折り等の絞め技で括り殺すことがほぼ出来ない。よつて、基本的にBETAとの格闘戦は殴り合いが基本になる」

樽木が言う技の意味が分からず女性陣と坂上は理解不可能な状態であったが、東野と笠原はよく分かったという表情を浮かべた。

「何よりも腕部スレイヴより内側に入り込まれた場合、かなりの高確率で生身の腕が喰い千切られる。操作方法がPMS方式である以上、装着者の腕まで装甲で覆い尽くすことが出来ないからだ。腕部スレイヴの内側に入り込まれた際のBETAの排除は膝蹴りが基本だ。忘れるなよ。今、俺が言っているのは何千何万と死んだ人たちが、俺たちに残してくれた戦訓そのものだからな」

田淵が樽木の言葉の重みを感じて、ゴクリと唾を飲み込む。

無口になった生徒を無視して、樽木の説明は続く。

「お前達に格闘技経験者が居らず、また訓練する時間も十分に無い。よって、お前達が使う武器はこちらで指定した。今後はそれらの武器を集中的に使用して訓練を行う」

誰も抗議の声を上げない。不服そうなのは東野と笠原だけだ。

「固定兵装として右腕に戦バイルバンカー杭、左腕には多目的追加装甲。携行火器は一二、七ミリ重機関銃M2強化外骨格携行型、通称キャリバー50を使用。白兵戦用には短槍。肩には七、六二ミリ汎用機関銃M240を付けるが、数が少ないので装着者はこちらで指名する。どうしても武器を変更したい、と言うのであれば、多少の変更は出来る。今日の午後はこれらの装備を使つての訓練を行うので、その時に希望を言え。以上、何か質問は

あるか？」

皆の顔が一気に引き締まる。

その中には、遂に強化外骨格で戦闘訓練をすることで今まで来てしまったという現実をまざまざと感じている様子。

千葉の方針により訓練期間や日数に関しては何も言っていないが、坂上や真木野たち一部の班員は流石に「今の自分たちの特別な状況」を感じ始めているようだ。

相馬原駐屯地にいる他の部隊や同じ中隊の仲間達が、警戒任務だ、即動待機だ、前線部隊との交代だ、と忙しなく動いている。

彼らは徴兵直後の二週間程度の訓練以外は、ほとんど現場教育——On the Job Training 俗に言うOJTで任務をこなしている。

実戦任務が、そのまま教育訓練である。

このように、猫の手も借りたいほど人手が足りない帝国陸軍歩兵部隊であるにも係わらず、自分たちが訓練のみに集中しているという意味。

千葉の真意を説明していない以上、八名の新兵がこの事実をどう考えるかは分からない。

下手に聞いたら藪蛇である以上、聞く気もない。

ただ、普通に考えれば「今のお前達は弱すぎるから、再訓練中だ」と捉えるのが大多

数の考えであり、そう彼女たちを見下すだろう。

軍隊での「弱い」は「無能」と同意義である。

この事実をどう捉えて、どうするかは彼ら次第だ。

強くなるためにひたすらに努力するのも、別の得意分野で腕を磨くのも手だ。

格闘が下手なら、射撃で頑張ればいい。

格闘も射撃も駄目なら、体力で勝つたり、判断力を磨けばいい。

それも駄目なら、使用する兵器の整備が誰よりも出来るようになればいい。

教官である千葉も、助教である樽木も、その手助けはしている。

みな気が付いていないが、機会も与えている。

だが、二人とも実体験と経験則、そして周りの仲間達を見て思い知らされている事実がある。

最初から他人に頼る奴は成長しない。

強くない。

当てにならない。

つまり、共に戦う仲間として信頼に値しない。

自ら動き出したとき、人は初めて大きく変わり成長する。

環境の問題も、教えてくれる人との出会いも、様々な要因がこの世にはある。

だとしても、自ら動き出さない者に手を差し伸べる奴はいない。

今日を含め、実働任務に出なくて済む日はたった二日。

たった二日で人間が劇的に体力や技能が向上する訳が無い。

だが、二日もあれば人の心は変わる。

心が変わる——つまり、成長する切っ掛けを掴むことが出来る。

千葉も樽木もそれを信じるしかない。

だから、これから告げる事はある意味、賭けである。

このカードを切ったのは千葉。

樽木もそれを信じるしかない。

「これから休憩に入る前に——、伝えておく」

可能な限り、何気なく切り出す。

意に反し、樽木の一言に注目する七人。

樽木は今までわざと曖昧にしていたことを皆に示す。

「東野。千葉一曹と俺が戦死したら、その時はお前が班長だ。第三組長として、この班の指揮を執れ。組編成は午後の訓練開始時に下達する」

教場の空気が凍り付くかのような錯覚。

「え？」

「……嘘でしょ？」

「本気!？」

女性陣が半ば呆然と眩く。

高井は信頼し始めていた樽木を見た。

だが、彼の細かい表情の変化など分からない。

三輪は坂上と笠原と東野を見比べた。

第三組長が誰になるかは彼女たちでも気になっていた。

ただ忙しすぎて、それほど話題になっっていなかった。

下馬評では、坂上が最有力候補であったのだが……。

真木野は天を仰いだ。

よりにもよって。と、表情が雄弁に彼女の心境を語り尽くす。

「……………」

無言で黙ったままの坂上。

彼は樽木を注視したが、樽木が今の発表を覆すような言葉を喋るわけがない。

何も言わない胡桃沢は溜息を一つ漏して両目を閉じ、こめかみをほぐすように指で揉んだ。

舎弟分である田淵さえ驚きの余り口を大きく開けたまま、隣に座る自らの兄貴分を見

た。

樽木が口調を変えずに続ける。

「これから一〇分間の休憩に入る。そのまま、別れ」

「了解」

東野のやる気を感じることが出来ない返事。

笠原が信じられないという表情で浮かべ、その次にハツとなつて、さして驚いた様子もない東野を見た。

彼はいつものままだった。

それどころか、自らは関係ないという表情を浮かべる。

同い年の仲間が示す無責任振りに、笠原は机の下で握りしめた拳を振るわせながら殺気の籠もった視線で睨み付けた。

「……了解……」

ただ一人慥然としたまま、東野は再び小さく呟いた。

第14話 恩師と母校

一九九八年一〇月一八日 一〇時〇八分

新潟県村上市内のある県立高校 職員用応接室

「……本当に、よく生きて……。 お帰りなさい」

「お久しぶりです、先生……」

ジーンズにジャケットをラフに羽織った神流は、高校に通学していた頃に料理部で世話になった顧問の田中寿子と二ヶ月半振りの再会を果たしていた。

神流にとって、彼女は様々な国の料理を教えてくれた恩師とも言える人物だった。

その定年間近になった初老の家庭科の非常勤講師が、連絡もなく突然現れた教え子との再会を喜び、涙声で迎えると、それだけで神流の胸に熱く込み上げるものがあつた。

久しぶりすぎて、ぎこちなく言葉を交わす。

お互いに両手で握手を交わすと、初老の講師は孫娘のように接していた神流を優しく抱き締めた。

神流も田中講師の背に腕を回した。お互いをいたわる緩やかな抱擁の中、お互いの胸で詰まった感情が言葉にならず無言のままだった。

寂れた校舎に授業開始のチャイムが鳴り響き、誰も廊下にいなくなる。少し前までであった尾を引くような少年少女たちの喧噪はどこにも無い。

第二次世界大戦後のベビーブームでは在校生が五〇〇人近くになったこともあったそうだが、今や二〇〇人いるかどうか。

生徒の減少に伴い、教員も減り、残った教員の多くは高齢——徴兵可能な年齢の教員は健康上の問題か、何らかの理由がない限り、軍関係の何らかの仕事に就いた。

約二ヶ月振りの母校。

その敷地に足を踏み入れた瞬間、神流は生徒数が激減しているのを肌で感じた。使用者の名前が剥がされた下駄箱。

三年生の下駄箱では名前がある方が少ない。

校舎の隅に溜まった埃。堆積して取り除かれる気配がない落ち葉の山。

まばらにしか点いていない教室の明かり。

雑草が生え始めたグラウンド。

聞くのが怖くて聞けない問い掛けが、神流の胸の中にある。

だが、ここに来なければ、どうしても知ることが出来ない事柄があり、彼女はその為に母校に来ていた。

「……………田中先生、他の……………」

問い掛けたいが、その先が続かない。
言葉が止まる。

何度も言い掛けようとし、舌がもつれたように声が出ない。

喉を詰まらせ、俯く神流を見かねた田中は無言でその手を引いて応接室のソファに座らせた。

戸惑いの表情を浮かべた神流に優しく微笑みながら、ソファに深く腰掛けさせると田中は少し明るい声で切り出した。

「まだ静岡県産の天然緑茶が残っているの。煎れるから、ちよつと待ってなさい」
職員室へ茶器を取りに行くと言って、田中が出て行く。

一人になった神流は深い溜息を吐くと、ソファに深く腰掛け、背を逸らして真上を見た。

その瞳に映るのは、殺風景な校舎の天井。

薄汚れてしまったアイボリーの色合いと、所々寿命が切れている蛍光灯。

たまにしか掃除されていないのだろう、薄く埃を被った応接セットのソファと机。

それはこの部屋に通された人間が、つい最近までいなかったということの証し。

ただの高校生の頃は、その目に映る様々な事を一瞬で観察し、判断する考察力はそれほど鋭くなかった。

この考察力は神流が戦場で手に入れた——。
いや、違う。

これは千葉春久に叩き込まれた戦闘技術の一つ。
静かに目を閉じる。

唇を少し開け、耳を澄ます。

微かに聞こえる音。

柔らかなゴムの靴底がタイルと擦れて発する、田中講師の足音。
コンクリートの床で響かない、安心できる足音。

それ以外の足音が聞こえない。

蹄がコンクリートを打ち鳴らすような足音はどこからもしない。

その事実を確認してから、神流は目を開けた。

安全なはずの校舎で、BETAがいないかと耳を澄ます自分。

一時除隊から既にもう三週間近く経つが、戦場での癖が抜けない。

その理由は神流自身がよく分かっている。

神流の骨の髄まで染み込んだ、BETAに対する原始的とまで言えるほどの恐怖。

無防備な人々が集まる場所でさえ、本当にここが安全なのかと物陰を凝視し、耳を澄まし、足音を聞き分ける。

理性と知識では分かっている。

本当にBETAが近くにいたのであれば、誰かが武器を持っているはずだ。

そうでなければ、たった一匹の戦車級でも辺り一面を血の海に変える。

たった一匹の戦車級さえ、大人が何十人集まろうと素手で殴り殺すことは出来ない。

なにかしらの武器になりそうな道具を持ち出しても、一匹殺すまでに何十人殺される

か想像も出来ない。

第一、殺せるかどうかも定かではない。

そんな化け物が近くにいたら、みんなが今ここで生きていくわけがない。

だが、感情——恐怖が理性を凌駕する。

心に刻み込まれた数々の惨状が、神流の耳元で恐怖を囁く。

——たった一匹のBETAがいるだけで、みんなが殺される。

何度も看取った友人たちの最期。

絶叫と悲鳴の中、戦車級に喰い殺された親友。

再び出会ったときは、首だけになっていた幼馴染み。

脳裏にこびり付いた恐怖に背筋が震えた。

陰鬱な気分を引き摺るように、気怠げにソファの背もたれに預けていた上半身を起こ

して、応接室の窓から見える自然を眺める。

遠くに見える稜線と澄み切った青い空。

流れる雲は疎まばらで、山々を彩る色彩は広葉樹くれないの紅と針葉樹の緑。

山々を染め上げる紅葉が血を連想させる。

それが嫌で、視線を落とした。

いつの間にか、両手が鮮血で染まる。

手のひらに伝わる人肌の温もり。

手首を伝わり、流れ落ちる他人の血潮。

応接室の床に広がる血の海。

「——っ!!」

反射的に込み上げた悲鳴を喉元で押さえ込み、きつく瞳を閉じた。

恐怖で竦み上がるが、直ぐさま理性が否定する。

ここは学校。

BETAのいない場所。

つい、さつきまで先生と話していた応接室。

そう何度も心の中で呟いてから、神流は恐る恐る目を開けて確かめる。

何もない。

見えるのは小刻みに震える自分の手のひらだけ。

血に塗れた両手も、床に広がる血の海も、存在しない。
全ては幻。

あのバス停で見た“サチ”と同じ。

自らのトラウマが生み出した、ただの幻影。

(……私はこのまま壊れていくのかな……)

漠然とそう思う。

心の奥底から、滲み出るような恐れ。

(——会いたい)

「……千葉さん」

会いたいと思っただけで、愛している男の名が零れた。

「千葉さん……」

いつも手の届くところにあつた、あの背中に触れたい。

見慣れないと分からない、あの微笑みが見たい。

乱暴な口調なのに本当は心配している、あの声が聞きたい。

出会った時から、追い続けたあの人。

「……千……葉……さん」

側にいて——。

慰めて——。

あの時のように、きつく抱きしめて——。

不意に頬を流れ落ちた一筋の涙にハツとなつて、彼女は慌てて顔を上げた。

天井を見て、無理矢理涙がこぼれないようにする。

学校こゝろでだけは絶対に泣きたくなかつた。

下唇を噛み締めて、眉間にもしわが寄る。

何が何でも泣くものかと、神流は天井を睨み付けた。

この学校で出会い、広がった友達の輪。

将来の夢を語り、色恋沙汰で悩み、愚痴もこぼし合つて——。

時に必死に、時にふざけて、時に言い争つて——。

春夏秋冬、移りゆく季節の中で共に過ごごし——。

いろいろな事を語り合つた、ありふれた青春。

みんなが揃つて笑つた、最後の場所。

戻らない、幸せな高校生活。

取り戻せない、友人達の笑顔。

悲しくて、悔しい。

それでも神流は、思い出の場所を涙で濡らしたくなくて、天井を睨み続けた。

田中先生がなかなか戻ってこないことが本当に有り難かった。優しい言葉一つで、溢れ出そうな悲しみが決壊してしまいそうで――。

少女は、ただ天井を睨みながら恩師を待った。

――それから数分後。

「――ごめんなさい。いろいろと用事が入って来ちゃって」

「いえ、気にしないで下さい、先生。全然大丈夫ですから」

神流の気持ちが悪く落ち着いた頃、先ほどとは違い金縁の老眼鏡を掛けた田中が茶器と小さな魔法瓶を手に、そして書類を脇に挟んで戻ってきた。

神流が素早く立ち上がり魔法瓶を持つ。

田中は「有り難う」と言いつて脇に挟んでいた書類を机の上に置き、手際良く茶を入れる準備を始めた。

神流もそれ以上余計なこととはしないで静かに待つ。

しばらくすると、濃い目の緑茶が二人の湯呑みに注がれ、神流は礼を述べ、緑茶の香りを楽しんでから口を付けた。

机に置かれた書類は意図的に無視し、「おいしい」とだけ伝えて、味わい豊かな天然物の緑茶をゆつくりと味わう。

帝国軍でもお茶が出たが、それは全て加工品で、兵士のストレス緩和が目的として食

堂で出されていた。

基本的にそれほど美味しいものではないし、特に香りが少ない。

(……もしかして、軍隊のお茶を知っていたのかな?)

記憶に無いくらい濃く出された緑茶を再び口に含むと、そんな考えが浮かんだが聞く気にはならなかった。

田中講師の夫も、息子も、孫も、戦死している。

教え子も戦死し続けている。

安易に聞けるような気はしなかった。

田中は不意に無口になった神流を訝しむことなく、無言で右手を上着のポケットに入れて銀紙に包まれたチョコレートを取り出した。

既に開封されていた板チョコを二つに分けると「はい」と言っただけで差し出す。神流は慌てた。

「——え!? あ、あの……いいんですか?」

流石にいいえとは言えないけども、素直に受け取るのも躊躇われた。

カカオが手に入りにくい現在では、チョコレートは高騰し続けている食品の一つで、もはや高級品に近い。

「二人で食べる食事は、例えどんなものでも美味しくないとわ」

そう言つて、恩師が微笑む。

優しく、包み込むような微笑み。

その微笑みを直視できなくて、俯きがちに受け取つた。

お礼を言つてから、一口食べた。

ビター&スイート
苦くて、甘い。

「ね、美味しいでしょう?」

「……………はい」

いつの間にか——。

チョコレートからは塩の味がした。

第15話 現場レベルの人事問題

一九九八年一〇月一八日 一〇時三一分

帝国内陸軍相馬原駐屯地 第二機械化歩兵連隊第三中隊 事務室

第三中隊最先任曹長 門倉孝夫 及び 同中隊一等陸曹 千葉春久

千葉春久は今第三中隊の下士官の長、最先任曹長である門倉孝夫の前にいた。

一見いつもと同じ鷹揚な雰囲気を漂わす門倉と、これまた常日頃から一種張り詰めたような空気を漂わす千葉。

門倉はいつものように事務室の椅子に座り、千葉は報告のためにその前に立つ。

二人の会話には、なんとも言えない緊張感があることを事務室にいる全員が感じていた。

茶々を入れることなど、怖くて出来そうにない。

かといって、二人は怒鳴り合っているわけでも、いがみ合っているわけでもない。

言葉に出せない雰囲気、全てを雄弁に語る。

「――本気で第三組長を、東野にするのか？」

門倉の確認。

だが、その本意は認められないとの意向。

「これが最善だと判断しております」

千葉の応答。

自分の考えにしか従わない。と、言わんばかりの口調。

暫し、無言。

「戦場で、あのガキに他人が従うと思うか？」

「二人は従うでしょう」

つまり、残り五人は従わない。

「だったら、意味がないだろう」

門倉が呆れた口調で、苦笑を浮かべた。

「選考基準は、生き残る可能性の高さです」

千葉は選んだ基準を端的に述べた。

「生き残るのも大事だが、命令で動くのが軍隊だ。他人を指揮すると言うことは、俺たちに指揮されると言うことだ。馬鹿は、命令を理解することが出来ないぞ」

「その通りですが、生き残れない奴に命令を言っても無駄です」

千葉もなかなか譲らない。

その堅物さに門倉も少々困り気味だ。

「お前の班は体力的には問題あるが、頭の良い奴が揃っている。どうして、そいつ等を選ばない？」

「……帯に短し、たすきに長し。と、言ったところです」

門倉は暗に坂上が使いものにならないかと訊ねたが、千葉は無理と断言した。

「何よりも頭の善し悪しの前に、余りにも体力がありません。論外です。命令を下すどころの話ではありません。まともな体力を持っていることを最低基準とした場合、候補者は二人に絞られます」

「ほう……。それでも二人いるのか？」

千葉が半ば諦め気味にぼやくと、興味に駆られた門倉は身を乗りだすように問う。

「——結論として、東野と笠原の二人のみとなります」

「面白いな。昨日、風呂場で殴り合っていたガキどもじゃないか」

「共に一長一短。どちらも組長のレベルではありませんが、他に選択肢がありません」

「どちらもお前と樽木が抜けた状態では、班を纏め切れんだろう。纏め切れそうなのは、坂上だけだろうな」

さすがは中隊の下士官全員に目を配る先任である。

門倉の人物観察は鋭かった。

「班長、一番手、共に死ぬような状況では、どうせほとんど死んでいます」

「だが、お前達が不在の際は、二番手である東野が指揮を執らざるをえない。あいつは確実に馬鹿だが、大丈夫か？」

千葉が少し渋い顔をする。

事実である以上、弁護のしようもない。

東野は馬鹿だ。

それでも千葉は東野を押しした。

新兵達の中で実戦経験があるのは、あいつだけだ。

いくら頭が良かろうが、戦いも喧嘩も知らない人間が戦場に行ったら為す術無く右往左往する可能性が極めて高い。

戦場は、ただでさえ確かな情報——信用出来る判断材料が入手できない。

敵の情報は疎か、味方の情報さえ途切れ途切れだ。

独特とも言える極限状況下での戦場心理。

何もかもアテに出来ない状況で、生命の危険に脅かされて、全員が興奮状態に陥る。視野狭窄に陥り、判断ミス、聞き間違い、勘違い、様々なミスが発生する異様な雰囲気にも包まれる。

その為、戦場の空気を既に経験しているというアドバンテージは想像以上に大きい。

あの場所では坂上と三輪の知識も役に立たない。

ほぼ十中八九、彼らも興奮状態——最悪の場合、パニック状態に飲み込まれる。

その結果、物事を落ち着いて考えることが不可能になる。

戦場で率いる者が判断するということは、他人の生死をも左右すると言うことだ。

疲労困窮で刻限が迫る最中、確な情報がなく異常なまでのストレスが心身ともに掛かる状況下で、自分と他人の命を失うかもしれない判断を一身に背負う。

だが、戦場では——。

考え過ぎれば、機を失する。

臆病過ぎれば、好機は来ず。

勇敢過ぎれば、無謀となり。

楽観過ぎれば、不意に死ぬ。

新兵八人に軍人としての素養は見られず、訓練で鍛え上げた判断力もない。

さらに指揮官としての能力は今現在、皆無と言って差し支えない。

BETAに食い荒らされる日本帝国の現実、彼らに指揮官としての能力が身につくまで待つ余裕がない。

そんな余裕があれば、そもそも彼らを徴兵しない。

誰が組長になろうが、ぶつつけ本番。

それも加味しての結論。

千葉の構想では自分を班長兼第一組長とし、第二組長は樽木、第三組長に東野を考え
ている。

「実戦でパニックにならない可能性がもつとも高いのは、東野です」

一瞬だけ――。

本当に一瞬だけ――。

神流の泣き顔が、千葉の脳裏を過ぎる――。

「それ以外の理由はないのか？」

今ひとつ腑に落ちないといった様相で門倉が問うと、千葉は思い出したように付け足
した。

「あとは……、直感ですか」

「それは信用に値するの？」

門倉の視線が鋭さを増すが、千葉は真つ向から受けて立った。

「少なくとも、戦場で俺の命を賭ける程度には」

千葉の覚悟を確認した後、門倉は肩の力を抜いたように言った。

「ならば、構わん。好きにしろ」

覚悟が決まっているなら、それ以上とやかく言うまいと思った。

東野を直接指揮するのは千葉本人であるからだ。

「有り難う御座います」

千葉はそう言ってから、一言付け足した。

「——それと、班集中訓練の方ですが」

「何か問題でも出たか？」

「いいえ、特には。ただ訓練目標の達成率は七〇%程度になります」

「八割まで上げろ。第一、どうして七割程度だ？ あれだけシゴイて、その程度の奴らなのか？」

何気なく言って終わりたかつた事だが、最先任曹長が見逃すわけがない。

「その程度の奴らです」しれっと逃げる。

「それで済ますな」釘を刺す。

逃げ損ねた。

もつとも千葉とて、逃げられるとは元々思っていない。

そうでなければ、最初から報告しない。

報告しない事の方が、問題だからだ。

「原因は何だ？」門倉の語気が鋭くなる。

「安全管理上危険と判断して、実弾射撃訓練と跳躍ユニットによる緊急回避行動訓練の一部を先送りしています」正直に話す。

「甘やかしてないか？」

「いいえ。それは無いと思います」

「まだ寝る時間があるだろ？」

門倉は『部下とお前の睡眠時間を削れ』と、柔らかく指導。

「それに耐えられるだけの体力がないと判断し、訓練の一部を先送りしました」

睡眠時間を削ることは危険との判断を門倉に返す。

「それでもするのが、お前の任務だ」

「ハッ。班集中訓練後、引き続き訓練を継続し実施したいと思います」

千葉はそれでも譲らずに代案を示した。

「……………全く……………」

門倉は溜息を吐いた。

千葉が班員達を指導する様は彼も見ている。

二週間程度の徴兵課程を終えたばかりの新兵に対する指導は厳しい面もあるが、優しい面もある。

むしろ、班員達の体力がなさ過ぎて、千葉自身がやりたい訓練が出来ていないことも分かる。

猛訓練や猛特訓。無意味とは言わない。

自らの限界を超えた経験は、人を大きく成長させる切っ掛けになる。

とはいえ、班集中訓練後は、千葉も部下たちと実戦勤務に就く。

すぐさまとは言わないが、連隊が再編成を完了する前から前線部隊とのローテーション勤務に組み込まれ、実任務兼訓練となる。

実戦の可能性がある以上、事故で頭数を減らしたくないというのも理解できる。

どちらかというと、千葉のことだ。

頭数を減らしたくないという事よりも、単純に怪我をさせたくないようにも思える。

これはきつと間違っていないと、門倉は思っている。

門倉は目を閉じ、こめかみを揉んだ。

千葉が抱える問題。

これは訓練期間が短すぎる徴兵課程の問題点でもある。

所詮、無理なのだ。

素人がたった二週間で一端の軍人になれるわけがない。

何よりも軍人として必要な体力が——どんなことをしようが出来る訳がない。

だが、帝国軍はそれを要求する。細かく言えば、それを現場に要求する。

出来なかつた責任は全て現場の下士官と、一部の士官に集中する。

一等軍曹にもなつて、その現実が分からないほど千葉も無能では無い。

今ここで、訓練事故で一名死ぬのと、実戦で一名死ぬのも、同じ一名の損耗。

それでも訓練の先送りを通してとするならば、何かあった場合の責任は千葉が被ると言うことだ。

ものよつては先任の門倉にも中隊長の遠藤にも余波が来る。

門倉は溜息混じりに千葉への評価を口にした。

「……見かけによらず、甘ちゃんだな」

「否定できません」

苦笑は隠せなかった。

「それでも班集中訓練後、三日以内に終わらせろ。中隊長には俺から打診しておくが、小隊長にはちゃんと自分で報告しろ。それでもやれと言われたら、諦めろ」

「二日以内に終わらせませす。有り難う御座います」

千葉が軽く頭を下げると、門倉は苦笑を浮かべたまま言った。

「お前のところはお荷物が多いしな……」

「やはり、そうでしたか」

これは人事ファイルを見たときに感じていたことだが、やはりそうだと言われると少々疲れる。

「女は可能な限り歩兵以外に配属しているとはいえ、限界があつてな……。要らないと

言っても必ず来てしまう」

「純粹な歩兵の方が良いかもしれませんが、そうであれば、まだ基地や駐屯地の警備等の任務があるので……。機械化歩兵が一番きついような気がします」

門倉と千葉が率直な意見を交わす。

ここで言っても、千葉の班員が変わるわけもない。

ただ、これがお互いの本音と現実だった。

「それでも早く訓練を消化しろ。それがお前達のためだ」

「了解」

千葉自身、歯痒さを感じる報告はこうして終わった。

今度は門倉が思い出したように付け加える。

「ああ、そうだ。千葉、来週には軍属が事務室に入るから書類仕事の一部を申し送れるように準備しとけ」

「やつとですか。助かります。何人入るんですか?」

「三人も来る。ありがたいもんだ」

「まったくで」

二人揃って溜息を漏らすように話し合う。

ここで言われている軍属とは、年齢や健康面で徴兵された際に実戦に耐えられないと

判断され、軍隊の事務要員として半ば強制的に採用された人々である。

半軍人扱いでほぼ戦場に行かなくて済むのでかなり希望者はいる。

が、徴兵されないような人々であるので、年齢的には四〇歳を超えているのが大半。それも女性が多めに多い。

千葉たちの様な軍人が書類整理に追われることなく戦闘と訓練に集中させるために、BETAによる西日本壊滅後は一気に増強され、今では最低でも一個中隊に一名の配属されている。

後方関係の一部部隊ではその事務員だけで中隊や大隊を組めるほどの数である。

業務内容には多岐に渡り、遺族に対する死亡通知と戸籍の処理、遺品の配送から処理。家族からの郵便物を送付などの様々な雑務がある。

他には通信電子関係、原子力発電関係など特殊技術や知識を持つ人たちや、従軍記者らもここに含まれる。

彼ら軍属も軍事行動に欠くことの出来ない重要な戦力である。

戦争は武器を持った人間だけで戦うのではない。

戦いは常に総力戦なのだ。

彼らのお陰で、最前線の部隊は目の前の戦いだけに集中出来る。

千葉と樽木も軍属の事務員が配属されれば、戦いと訓練に集中出来るだけに、口ここ

そ出していなかったが関心事項の一つだった。

門倉が、まだ表に出ていない中隊の動きをさりと伝える。

「来週にはさらに徴兵課程修了ホヤホヤの新兵どもが配属される。それにより二連隊の充足率は約八〇％。頭数を揃えたただけだが、これで再編成が事実上終わる。班員にも覚悟させとけ」

門倉が言う覚悟とは、実戦に出る覚悟。

死ぬ覚悟。

これらのことは、どこかで割り切るか克服しなければ、いくら考えても堂々巡りで結論が出ない。

所詮、大多数の人間はこれらのことを切羽詰まるまで真剣に考えない。

「思ったより早いですね……。改めて、部下に遺書を書かせておきます」

「その方が良いだろう。今夜にでも、そうしておけ。佐渡島でも静岡でも、どこでもBE TAどもは大騒ぎだ。どつちに飛ばされるか、皆目見当も付かないからな」

「俺たちはただ備えるだけです」

「ところで、千葉」

門倉曹長は急に口調を改めた。

己の部下に、一つだけ確認するために真摯に問い掛けた。

「なんですか？ 先任」

「お前の部下は今まで何人、死んだ？」

「五一人です」

即答。

彼らを忘れたことなどない。

思い出そうと思えば、絶対に思い出せる戦友たちの姿。

教育期間も含めて数年間も一緒だった同期もいれば、大陸で臨時編成され、一日後には死んだ名字しか知らない部下もいた。

時が流れれば、今よりも記憶は風化し、いつかは彼らの姿形も朧気になるだろう。

だが、戦死したという事実を忘れることなど出来ない。

戦場での記憶はそれほど優しくない。

何よりも、千葉に忘れるつもりがない。

「そうか……。ならば、大丈夫だな」

千葉の答えに満足したように、門倉はそれで会話を打ち切った。

第二機械化連隊は群馬・新潟・長野などの日本海側を防衛する東部方面軍第一二師団隷下部隊であるが、状況によっては太平洋側にも出撃する可能性がある。

と、門倉は念のためと言うが、千葉にとっても想定内の事であった。

帝国陸軍相馬原駐屯地は、東日本の、それも日本海と太平洋とのほぼ中央に位置する。緊急の際は、予備兵力として即応性が高い——言い換えれば、使い勝手が良い——場所であり、そこに駐屯する部隊は当然のように予備兵力扱いとなる。

ましてや、通称「韋駄天連隊」との名を掲げる第二機械化連隊。

部隊の移動・展開速度の速さを誇り、また、それを認められてきた連隊である。

第一二師団司令部、また東部方面軍総監部がどのように動かしても不思議ではない。千葉も改めて決意を固める。

——BETAに勝つ。

ただそれだけを胸に、無言で右拳を固めた。

第16話 直江神流の親友たち

一九九八年一〇月一八日 一一時二五分

新潟県村上市内のとある県立高校 職員用応接室

授業終了のチャイムが響き、休憩時間に廊下に出る生徒たち。

だが、その姿はまばら。

校舎に響く喧噪も無いに等しい。

原因など、もはや言うまでもない。

BEETAと人類の生存を賭けた戦いは、国家滅亡の危機という形で日本帝国にも覆い被さり、それは地域社会の隅々にまで影響を及ぼしている。

都市や街の明かりが消え、職場や学校の人が減る。健全な者達が徴兵され、軍人となる。

大人と学生たちが戦場に向かい、子供と年寄りが疎開する。

神流とその恩師である田中講師との間にも、重苦しい空気だけが漂う。

「やっぱり、私だけなんですわ……」

俯きがちに、そう力無く消え入りそうな声で呟く神流。

その正面に座る田中も力無く、だがはつきりと断定して答えた。

「——ええ。第一次徴兵者で今も生きていると確認が取れているのは、貴女だけよ。あの行方不明の二名は……」

現実を考えると田中も言葉を濁した。

BETAとの戦いで行方不明になった者は、誰も死ぬところを見ていないという場合の方が多。

戦い終わった後に本人が見つからない。

しかし、誰も死ぬところを見ていない。

このような場合、行方不明扱いとなるが、脱走の可能性が無いわけでもない。

だか、この場合、数ヶ月もしないうちに自動的に死亡扱いとなる。

BETAは捕虜を取らず、言葉も通じない。

遭遇すれば、ほぼ確実にどちらかが死ぬまでの戦いとなる。

恐れも痛みも感じない、鉄をも喰い千切る敵が数万単位で蠢く中で戦い続けるのが、BETAとの戦場だ。

BETAの支配地地域に取り残されてしまった者が生きて帰ってくる可能性は、途方もなく低いものである。

だから、もうお互いに行方不明の二名は死んでいると思っている。

現実を考えれば『行方不明』など、役人たちの言葉遊び——万が一の可能性に備えた言葉遣いに過ぎない。

「……本当に一人だけなんですわね……」

「……………」

諦めた様に呟く神流に、田中も掛ける言葉を見つけれない。

応接室のソファで向かい合う二人の間にある低く広い机。無造作に置かれた五部の書類の束。

神流はその一つをめぐり続ける。

『第一次学徒徴兵者名簿』

神流本人の名もある、この高校で徴兵された者たちの一覧名簿。

残りの四部は第二次から第五次まで、二週間ごとに徴兵されていった同校生たちが記載されている。

再生紙に印刷されているのは氏名、生年月日、住所、連絡先、配属先、備考欄等々。備考欄に赤字で書き込まれる項目のほとんどは死亡日時と場所だけ。

意味は特に無いのだけでも、一から目を通す。

ある名前を見つけ、ふとページをめくる手が止まった。

『土谷 君華』

それほど親しくはなかった友人の友人。偶に話す程度の知人。備考欄に書き込まれた文字を目で追う。

『第一九一歩兵連隊配属 一九九八年九月二日頃 上越市郊外で戦死』

諦めたように次を見る。

顔が思い浮かばない名前は読み飛ばす。

見知らぬ人の死にまで悲しんでいたら、心が保たない。

いや、悲しみが多すぎるから、人の死に少々無感動になつてしまった。

神流自身、他人の死に慣れてしまったことは自覚している。

その事実が棘《いばら》のように少女の胸を刺す。

『立花 伊月』

「イツキちゃんもか……」

徴兵されたあの日。

別のバスに乗り、別の部隊に行った同級生。

高校で出会った親友。彼女とは二年生の時に同じクラスだった。

細身でつり目、三つ編みにした黒髪、ちよつと気の強い、早く独り立ちしたがって
た友達。

『第一五六歩兵連隊配属 一九九八年九月二〇日 新潟市内で戦死』

「イツキちゃん、近くにいたんだ……」

「……………」

思い出を懐かしみながら、呟く。

田中が声を掛けようか悩むが、神流はそれに気付かず、独白するように言葉を漏らした。

「イツキちゃんが死んだ日、私も新潟市内で戦っていたんですよ。私たちが市内の中心部を守っていたんで、おそらく南側にいたと思います。きつと一〇キロも離れていないのに——。戦場じゃ何も分からなくて……」

「そうね……」

大した言葉も思い浮かばず、間を埋めるように田中は相槌を打った。

「私は三〇機械化連隊だったから新発田駐屯地に居たんです。同じ新潟市内に展開していたのなら、一五六連隊も近くの学校や公園とかに野営していたのかもしれない。だけど、出会えないものなんです……。この頃、市内は激戦だったんです」

一瞬、涙腺が緩みかけたが直ぐに引き締めて涙はこぼさない。

神流は顔を田中講師に向けて、手元の資料を見続けた。

ページをめくり、名前を確認する。

神流の欄以外ただ一人の例外もなく、戦死と行方不明の文字だけが備考欄を埋め尽く

す。

ただ、応接室に紙をめくる音だけが響き続けた。

先ほどの眩きに対する返事はない。

それでも神流は構わなかった。

今の彼女にとって会話は重要ではなかったし、恩師がそこにいるだけで十分だった。

知り合いが目の前で生きていてだけで十分。と、感じていた。

田中も無理して声を掛けない。

今まで、戦地に旅立つ教え子を何人も見送った。

夫も、息子も、孫も、遺骨一つ遺灰一握りすらない。

そのような経験から、神流の感情の全てが分かるとは言わないが、大方は想像出来るし共感もする。

だから雰囲気で神流が言葉を求めているのではなく、今も生きていて確かな存在を求めているのだということは、何となくではあるが理解できた。

暫くして第一次徴兵者名簿を読み終えた神流は、それを静かに閉じた。

やはり、自分が徴兵されたあの日、あのバスに乗った学徒兵に生存者はいない。

それどころか、別のバスに乗った学徒兵にも生存者はいない。

この高校の第一次徴兵者二八名中、たった一人の生き残り。

神流は無言のまま瞳を閉じた。

そのまま、黙禱を捧げる。

あの地獄で苦しんで死んだのならば、せめて天国では安らかに眠って欲しいと祈った。

走馬燈の様に駆け巡る記憶の断片。

一緒に過ごした日々。

一緒に体験した出来事。

入学式、部活動、体育祭、夏祭り、海水浴、文化祭、初詣――。

共に過ごした時間。分かち合った感情。

臉に浮かぶ親友の顔。

思い出す表情は、眩しいほどの笑顔だけ。

――痛かったよね。

――怖かったよね。

――辛かったよね。

――でも、もう何もないから。

――せめて、安らかに眠って。

――もしも生まれ変わったら、また友達になろう。

——もう一度、みんなが集まろう。

——みんな揃って、遊ぼう。

——私は絶対忘れないよ。

——みんなのこと、絶対に忘れない。

——私が生きている限り、絶対に——。

そう祈り終わると、神流は静かに目を開けた。

無言でポケットの中に入れておいたメモ帳を取り出す。

ごく普通の動作で取り出したメモ帳は、千葉から貰った鶯色の防水紙で作られた軍隊用の一品。

再び名簿を開き、メモ帳に友人の名前と戦死した場所と日付を書き込み続ける。

心配そうな田中の雰囲気を感じ取った神流は「大丈夫です」とだけ伝え、続けて第二

次徴兵者名簿を手を取った。

それも見終わると、新たに第三次徴兵者名簿に移る。

回を重ねることに厚くなっていく徴兵者名簿。

第三次徴兵者名簿は第一次徴兵者名簿と比べると、その厚さは倍近い。

その事実を無視して、作業を続行する。

また見つけた。

メモを取り、先に進む。

また見つける。

繰り返し読まされる、友人たちの死。

時折、まるで心臓が捻れるように痛む。

歯を食いしばって痛みに耐えた。

きつく閉じた唇から、小さく歯軋りが漏れる。

それでも止めない。

自分が徴兵され、戦場に飛ばされた後に――。

親友たちがどのような運命を辿ったのか確かめなくてはならない。

その為に母校に来たのだ。

一時除隊の身である以上、再び戦場に向かうことになるのかもしれない。

そう思うと、こういう事は時間のある内に終わらせなくてはならなかった。

二〇分ほどかけて全ての徴兵者名簿に目を通すと、彼女のメモ帳には八人の名前が記された。

神流が漠然と予想していたとおり、もう、この高校に友人と言える人間はほとんどいなくなっていた。

『横山佐知子 第一一六歩兵連隊配属 一九九八年八月二七日 富山市にて戦死』

『葉月智美 第一一六歩兵連隊配属 一九九八年九月一日 直江津市にて戦死』

『立花伊月 第一五六歩兵連隊配属 一九九八年九月二〇日 新潟市にて戦死』

『貝沼菜々実 第一五六歩兵連隊配属 一九九八年九月二三日 新潟市にて戦死』

『更科瑠美 第一五七歩兵連隊配属 一九九八年九月二九日 上越市にて戦死』

『中村亜矢 第一五七歩兵連隊配属 一九九八年九月一八日 柿崎市にて戦死』

『上村千里 第一六一歩兵連隊配属 一九九八年九月一八日 十日町市にて戦死』

『笹川登喜子 第一五六歩兵連隊配属 一九九八年一〇月三日 新潟市にて行方不明』

最初の二人は徴兵者名簿を見ることなく書いた。

戦死者のほとんどが三桁の部隊番号を持つ連隊ばかり。

徴兵された者主体で構成された付け焼き刃の部隊。

訓練期間が碌にない中で編成された部隊である以上、そんなことは当然であり、それが原因で死傷者数が尋常でないことも、また当たり前の結果だった。

そんな部隊の主任務は防衛線での警戒と迎撃戦や市街地等での掃討作戦が相場であり、死傷者が出ないわけがないものばかり。

神流も最初は第一一六歩兵連隊に配属され、その後千葉に拾われた。

彼女以外、誰も帝国軍の常設部隊に配属された者がいない。

結局、それが運命の分かれ道だった。

初陣からの数戦を幸運にも生き残り、第三〇機械化歩兵連隊に転属。

それにより神流はユーラシア大陸での実戦経験を持つ古参兵ベテランからの手解きと教育を受け、様々な戦闘技術を身に付けた先輩たち——職業軍人に助けられながら実戦を重ねて、戦闘技術を身に付けた。

それが今日まで神流を生き残らせた。

徴兵されてからは異常としか形容のしようがないような密度で時間が過ぎていた事を、不意に思い出す。

「——先生。先生はどこか行きたいとか、何か叶えたいような願い。つて、ありますか？」

唐突に神流が田中に問い掛けた。

「本音で答えるべきなのかしら？」

少しばかりお茶目な笑みを浮かべる田中。

その悪戯するような表情が、神流に童女のような錯覚を抱かせる。

「本音でお願いします」

オウム返しのように答える神流。

今まで恩師が、どのような考えと感情を持って日常を過ごしていたか考えたこともなかった。

だからこそ、今それが知りたいと思った。

自分よりも悲しい思いをしてきた恩師が、どのように今まで過ごして、どのような願いを抱いているのか？

いつも優しく教えてくれた部活の顧問。

定年間際の家庭科の非常勤講師。

神流が見ていたのは、田中の人生の一部だ。

他の生徒や部員に比べれば、神流の方が遙かに田中との付き合いが深く、長い。

だが、意図的に話題にしないことも沢山あった。

深入りしない事に決めていたこともあった。

そうこう気兼ねしている内に、神流は徴兵された。

戦場で、幸せだったと気付かぬ内に日常と友人を失った。

恩師と自分が同じ訳ではない。

けれども、神流は田中と共感できる何かがあるのではないかという確信に似た何かをはつきりさせたいと思った。

そう思わせる自分の感情が分からないまま、勢いで口から吐いて出た問い掛け。

それも見越していたのだろうか。

田中は冗談めかした口調で、叶わぬ願望を口にした。

「家族全員揃つて、BETAのいない世界に行きたいわ」
「……先生……」

想像さえ出来なかつた回答に絶句した神流が擦れた声で呟く。
叶うわけがない願ひ。

もう殺されてしまつた家族と共に有りもしない別世界に行きたい——。
そんな夢物語を恩師が言うとは想像も出来なかつた。

後悔が、神流の小さな胸をゆつくりと染みるように埋め尽くしていく。
とうの昔に、神流の恩師は未来への希望を捨てていた。

ただ、疲れ切つたような笑顔で——。

田中は、未来を必要としていないことを告げた。

「——そんなこと願つても、全く意味がないのね」

天涯孤独となつた老女が、教え子の心情を思い、今度は寂しさを見せない微笑みを作る。
る。

——どうしようもないことだから、貴女が気にすることないわよ。

神流はそんな風に語り掛けられた気がした。

「私は教え子と知り合いが少しでも長生きしてくれれば、もう満足なのよ」

ここれも田中の本音。

自分の未来には期待していない。

せめて今は、知り合いに不幸がなければいい。

吐露した心情に偽りはない。

その口調と表情が、神流にそれを知らしめる。

「ほらほら、そんな泣きそうな顔しないの」

泣き出しそうな表情の神流に、あやすように語り掛ける。

「貴女が無事だったから、十分なのよ」

と、また微笑む。

そう言われても、急に笑えるようになるわけではない。

ただ、泣かないようにと涙を堪える。

田中は優しく、神流の手を握った。

仕事と生きてきた歳月で、皺だらけになった手。

苦労の数だけ刻み込まれたのだろうかと思うほどの皺の数。

皺だらけで、暖かく、柔らかい両手で、神流の手を励ますように握った。

授業終了のチャイムが鳴る。

通っていたときと何一つ変わらない、聞き慣れた音。

田中はチャイムが鳴る終わるまで待った。

神流には、一字一句聞き漏らさずに聞いて欲しいと思つたから。

さきほど神流が思つたとおり、二人とも似たような境遇になつてしまった。

少女は父を殺され、長姉を殺され、友達たちを殺された。

老女は夫を殺され、息子を殺され、孫たちも殺された。

共に大事な人たちはBETAに喰ひ殺された。

似たような境遇に在りながら決定的な違いがあることを、老女は少女に認識して欲しかった。

そうしなければ、教え子の人生に光が無くなつてしまうという確信がある。

「人生をマラソンに例えると、私の人生はもうすぐゴールなの。思つたより長い距離で走り疲れてしまったというのが、本当のところよ。だけど、貴女の人生はまだ折り返してすらいないわ。マラソンとは言つても、走る距離は人それぞれで、ペースも人によつてまちまち。行く先すら、同じ人はいない。そうね。伴走者がいたとしても、配偶者とか、大親友とか、ごく僅かしかないの」

両手で神流の手を強く握る。

その力強さに引かれるように、顔を上げた。

「だけど、これもしようがないわ。人はそのように生まれ、そのように生涯を終えるのだから——」

教師として、人生の先輩として、人生の行く先を指し示せない。

夢を追い掛けない。などと気安く言えない現実が直ぐ隣にある。

戦場に向かう事が普通となった社会で、個人の自由が——職業選択の自由等が保障されている訳がない。

まず個人の前に、国家が、人類が優先される社会。

社会無ければ、個人もない。

個人無くして、社会もない。

その天秤は時代と状況で変化するものだが、今は明らかに社会を優先すべき時代である。

田中自身、そう考えてしまうと家庭科のような授業自体——延いては自分自身が無価値なような気がするときもあった。

だが、今まで生きてきた年月で得た知識も経験も決して無駄ではない。

経験も知識も情熱も、言葉にして伝えることが出来る。

全てを伝えることは出来ない。

全てが必要なわけではない。

そして、全てが無駄でもない。

本当に伝えたいと思ったことを、確実に伝えようと言葉を紡ぐ。

「だからこそ、ね。——神流さん。貴女は、貴女の人生を精一杯走りなさい。今やりたいこと、今やらなければならないこと、全て今直ぐに「ルビ：……」やりなさい。明日があると限らないのは自分だけじゃない。貴女の知り合いも、明日があると限らない。人生という有限の時間の中で、貴女が出来ることは常に限られている「ルビ：……」の。もしも、やりたいことが分からないのなら、目の前のことを片付けなさい。人は動いている内に、^ヤ自分^リにとつての正解^トを見つけるわ」

その言葉に怯えたように身体を震わす神流の手を、震えを止めようかというほどの意志を込めて田中が強く握る。

「確かに、この高校には貴女の友人はもう一人しかいない。けどね、貴女は生きているの。貴女には時間があるの」

瞳が震える。

一人で過ごす時間の寂しさを思い——。

誰もいない中で続く悲しみを思い——。

自分だけが生き残ったことに対する刑罰のような孤独。

まるで友情を裏切り、一人生き残った事に対する代償。

その孤独を思えば神流の心が怯え、それは目尻に滲んだ涙になった。

大丈夫よ。と、田中は言いながら神流の手の甲を優しく撫でた。

田中は、その恐怖に立ち向かいなさいと神流を後押しする。

「それは、貴女自身が、貴女と貴女が選ぶ誰かの為の時間を、貴女自身の努力で手に入れたの。生き残るために頑張った貴女の努力によつて、貴女は何かをするチャンスと時間を手に入れたの」

（何がしたい？ 何をする？ 私が——、何を？）

「だから、無駄にしないで。貴女には、まだ出来ることが沢山あるの」

（——だけど、今さら何をしたらいいの!?!）

神流は心の中で叫んだ。

心の叫びは細切れになり、小さな唇から漏れた音はまともな言葉にならなかつた。

「ですが、先生！ 私！ ……私は！ ……私が！」

（——生きていていいんですか!?!）

叫ぶように問い掛けかけて、口を噤んで、俯いた。

自分が生きていてくれて嬉しい。

と、伝えてくれた人に言うべき内容ではない。

恩師はたった一人生き残った自分を責めない。

悪夢の中で偶に見る友人知人たちのように虚ろな瞳を向けない。

それだけでも十分なのに——。

何を言ったらいいのか、分からなくなった神流はそのまま下唇を噛み締めた。

二人の会話が途切れる。

応接室に流れてくる昼休みの喧噪。

以前に比べれば遙かに静かになったとはいえ、在校生の騒ぎ声が聞こえてくる。

神流が俯き、田中が見守る。

それから少しして神流が田中の手を小さく握り返すと、老女は嬉しそうに微笑んだ。

そして、ある事を思い出し、時刻を確認したのち、彼女は励ますように教え子に語り掛けた。

「——さあ、貴女がしなければならぬ事が、向こうからやって来るわよ。頑張りなさい」

「……?!」

急に変わった話題に付いて行けず、また恩師が言うことが分からず、神流は暫し呆然とした。

神流の瞳に映る田中はニコニコとしている。

それも今までと比べものにならないくらい笑顔だ。

訳が分からない。

先生が笑顔である以上、私にとって嫌なことではないはず。

(……向こうから、来た？ 来るって、何が？ 来るって事は、何か動くもの?)

神流が一瞬目を閉じて、耳を澄ませます。

廊下から聞こえるのは、様々な人の笑い声、はしやぎ声、足音。

その中でやけにはつきり聞こえるのは、走っている事が間違いない忙せわしない足音

——向かってくる。

閃くように連想した事実^{じじつ}に気付いた神流がソファから立ち上がり扉に身体を向けるのと、その扉が叩き付けられるように横に開いたのは、ほぼ同時。

「——神流ちゃん!!」

その姿。その声。その呼び方。

荒い息を吐きながら目の前に現れた人物の名を神流が思い出すよりも早く、応接室に飛び込んできた少女が神流を力一杯抱きしめた。

両の腕できつく——まるで離さないように強く、細身の神流を抱きしめる。

「——よかった……。本当に……。神流ちゃん、生き……て……た……」

神流より少しだけ背の高いポニーテールの少女が神流の耳元で途切れ途切れの荒い呼吸のまま呟くと、神流も彼女の背に両手を回して優しく抱きしめて伝えた。

「……ただいま。絵里……」

「うん。おかえり——」

少女の名前は、沢口絵里。

未だに徴兵されていない、母校でたった一人残っていた神流の親友。

千葉の下にいた頃、神流が手紙を通じて恋の相談をしていた友達。

その彼女の声はもはや言葉にならず、神流を抱きしめながら嗚咽を漏らし――。

神流も抱きしめながら、慰めるようにその背を撫で続け――。

余りにも言いたいことが有り過ぎて、それ故に一言も言葉に出来ない二人はただお互いに抱き締め合った。

第17話 デートの約束

一九九八年一〇月一八日 一二時二四分

帝国陸軍相馬原駐屯地 大食堂

自由を制限された娯楽がない状況下で、誰もが待ち望む楽しみとは何か？

単純明快。

食事以外、存在しない。

美味しい。または美味しく感じる食べ物は軍人にとって——徴兵された人たちにとってには特に——何物にも代え難いものである。

美味しい食事自体が食べた本人を満足させるし、一緒に食事をする事により仲間との会話も生まれやすい。

徴兵され、見知らぬ人たちと共同生活を送らざるを得なくなった場合、ちよつとした事柄や共通の経験から打ち解け話や会話が始まる。

それも考慮しての千葉の命令——班員全員揃って食事をする事——である。

故に、第一班は新兵八人揃って食事を取ることになる。

彼らとて当初から素直に千葉の指示に従っていたのではない。

言われた初日は『無視しても、大したことないだろう』と高を括って、千葉に見つかっている。

当然、彼らの辿った結末は両腕が痙攣起こすまでやらされた腕立て伏せであり、それにより箸すら持てなくなつた彼ら八人は腕の痺れが取れるまで、碌に食事も取れず、一食抜いたような状態に陥つた。

厳しい訓練を続けている最中に食事を抜かれるのは想像以上に堪える。

まして、それ以外、ほとんど食事が出来ないなら余計にだ。

その日一日、彼らはお互いに小言を言い合い、非建設的な感情的な言葉を撒き散らした後、どうにか食事を共に取るために協力することを覚えた。

それ以来、千葉たちから何らかの指示がない限り、彼らが別々に食事に行くことはなくなつていた。

雑踏の中のように混み合う大食堂の中、目敏く一人で食事中的樽木を見つけた真木野が手に持つトレイの中身を溢さないように注意しながら、直ぐ後ろで八人分の空席を探す高井を嚇おそけた。

「——桃さん！　桃さん！　ほら、ちゃんと樽木さんの前に座らないと！」

後ろに並ぶ仲間たちに手を振り、誘導し始める真木野。

こういう時の彼女のリーダーシップは半端じゃない。

「れ、玲ちゃん！……声、大きいよ」

その彼女の背に隠れるように、だけど付いていく高井。

猫背になるとトレイの上の料理に胸が届きそうになるから、膝を軽く曲げて進む。

「高井さん。聞いているこつちが恥ずかしいから、さっさと樽木三曹の前に座って下さい」
「三輪ちゃんまで笑いながら、ひどいよ！」

高井の後ろの三輪が、何食わぬ顔で彼女を追い込む。

その彼女の口元は微かに笑っている。

恨みがましい目線で高井が抗議すると、三輪は微笑みの表情を浮かべた。

どうやら、三輪も高井を樽木の前に座らせる気らしい。

三人の遣り取りと表情だけ見れば、ここは軍隊ではなくどこかの大学ではないかと錯覚しそうになる。

そう、彼女たちの後ろでトレイを持つ坂上は思う。

真木野達三人は色恋沙汰で微笑ましい遣り取りをしつつ、長机の端で一人黙々と昼飯を飲み込むように食べている樽木のいる場所に向かい、残りの坂上たち五人の男たちが彼女たちの後を付いて行く。

そして、坂上に続くのは笠原であり、最後尾はいつものように東野だった。

「お疲れ様です！」

元気よく明るく、媚びない程度に魅力的な挨拶をしてから、樽木の斜め前の座席を選ぶ真木野。

モデルとして撮影時は、いつも浮かべていた表情はもはや癖どころか、真木野の顔に張り付いたもう一つの皮膚と言つて差し支えない。

「——お疲れ様です」

高井の後ろにいたはずの三輪が、高井を追い抜くようにして真木野の正面——つまり樽木の隣に陣取りながら座つた。

三輪がいたずらつ子のような目線で高井を促す。

『桃さん。諦めて、座つて』

(——う~~~~~う~~~~~)

真木野と三輪に抗議したいけど出来ない高井が心の中だけで呻き声を上げた。

彼女は頬に感じる熱で赤面していることを自覚して、俯きがちに樽木の正面の席に座つた。

「お、……お疲れ様です！」

少しどもつて慌てて何気ないように音量を上げた高井。

だけど視線はさり気なく外してあつて、彼女の視線は食べかけの食事が載っている樽木の食器トレイに向かう。

「ういっす、お疲れ〜」

樽木の陽気な笑顔が、さらに明るくなったように感じる。

赤面した高井の微妙な視線が外れていることは、樽木も確認済み。

彼は普通に高井の顔を見ているので当然である。素早く真木野に目を向ける。

以心伝心。

真木野が高井の死角でこっそりと親指を立ててサムズアップをしてニヤリと一瞬だけ笑い、樽木が箸を持つ右手の親指を一瞬だけ立てた。

意地の悪い笑顔は二人とも共通。

もちろん、それも一瞬で消え去る。

（——なんというか。……ある意味、人身御供を差し出しているような感触よね）

二人の仕草を見てそう思うのは傍観者であり、また、さり気なく高井の退路を断つ三輪貴子の感想だ。

無論、三輪も真木野が『恋愛のチャンスがあるなら、玉砕覚悟で突撃するべき』という思考の持ち主であることを、一昨日の夜に安眠妨害の形で聞かされている。

それを自ら実施しようとは思わないけど、高校生ですら異星人との戦いのために徴兵される時代だ。

少しでも攔める幸せがあるのであれば、それを応援したくなる。

優しい桃さんには、少しでも、一時でも、幸せになって欲しい。それが三輪の本当の気持ちだ。

ただ、まるでどこかの純情女子高生のような高井の反応も可愛らしくて、それを見て楽しんでいっているというのも本当のところ。

結果、彼女は樽木と高井の恋の応援者であると同時に、小悪魔的愛キュービッドの使者に為らんとしている真木野の協力者となっている。

他の班員も各々座り始め、第一班の八名は「頂きます」の言葉と共に食事を始めた。

今日の昼飯は、玄米ご飯にわかめの味噌汁、大豆で作られたハンバーグに飾り付けのように添えられた刻みキャベツと一切れのトマト。

今の一般家庭に於ける食事に比べれば、優先的に食料が供給されている軍隊の食事は遙かに豪勢で、空腹でなくても箸が進む。

もつともそれは戦場で命を賭ける代価であり、また強い兵士を育て上げることにより、BETAに勝利するという人類存亡のための合理的判断と当然とも言える資源の傾注でもある。

「樽木三曹、そう言えば、出身はどこなんです？」

樽木に質問したのは、赤面した顔のまま俯きがちに食事する高井ではなく真木野。

どうせ高井から会話するわけもないと見切り、樽木から話しかけても高井とでは会話

らしい会話にならないと踏んだ彼女のリード。

なんと言つても、高井は男に対する警戒心が強い。

樽木に対しては他の男性よりは警戒心が弱いとは言え、真木野に言わせればまだまだ警戒心が強すぎる。

まずは、樽木という人物がどんな人間なのか見せてしまおう方が早い。

そう考えると、樽木に話しかけるのは自己紹介的な会話からスタートするのも無理もない。

「——ん？ ああ、石川県。生まれも育ちも石川オンリー」

樽木にとつても真木野のリードは少々予定外。

一瞬の間を置き、それでも素早く答える。

「その割には、あんまり方言が出ないですよね？」

真木野の意識しなくても出る笑顔。

ちよつと意外。と、感じた事を示すように見開く瞳。

もちろん言葉のイントネーションにも変化を付ける。

そして、微かに浮かべたいたずらっ子のような笑み。

流石に公衆の面前では、あのオヤジ笑いは出さない。

「いや、な。今思うと若すぎるっーか、なんというか……。入隊直後に助教たちに馬鹿に

されたから、ムカついて直したんだな、これが」

いつもの調子で樽木が返す。

「え、なんか、いじめられっ子みたいじゃないですか」

「そりゃ、そうさ。俺たちが新兵の時なんて、お前らの比じゃないくらい扱かれまくってたから、そりゃ、もう必死だよ、必死。どんな些細な事でも『反省』のネタにされたくなかつたからなあ」

樽木が遠い昔を思い出しながらぼやくように言うのと、隣に座る三輪が驚いた。

「——今より酷いって!? 一体、どんな世界ですか!？」

「どんな世界って言われても……、なあ……。まあ、毎日血尿が出て、怪我して医務室に行ければ、『この怪我は神と仏様が下さった御褒美』だと思えるような、ちよつとだけハードな日常かな」

「……そ、それは、凄い……です、ね」

そう答えて最後は「ニヤツ」と陽気に笑う樽木に、高井が絶句し、三輪がなんとか相槌を打った。

三輪には今よりも酷い新兵訓練があるとは思っていなかったから、ちよつと衝撃的だった。

「近頃じゃ、みんないろいろ居なくなつたし、教える側も人数足りないし、時間は無いし、

詰め込み型の訓練にするしか無かったりする訳なのよ」

「あ、やっぱり詰め込み式なんだ」

真木野の確認。

別に隠すことでもないの、樽木も素直に答える。

「そりゃ、そうさ。昔の新兵訓練なんて半年近くあつたのが今じや一ヶ月無え状態だし」
「正直言うと見本をあんまり見せてくれないから、そんな感じがしたんだ」

真木野の少しフランクな口調に坂上たち男性陣がギョツとするが、女性陣は気にせず
に会話を進める。

当然、樽木は怒っていない。

真木野は彼にとって極めて重要な協力者なのだ。

非常識なことをしない限り、特に怒る気もない。

今の樽木は軍紀よりも恋愛優先。

元々上下関係に厳しくない性格も、これに拍車を掛けている。

さらに付け加えれば、彼は飴役だ。

彼らが話しやすい相談相手になる必要もある。

「覚える」とはまだまだ、まだま〜く〜だ一杯あるさ」

事も無げに言う樽木に女性陣が慌てた。

「とりあえず、今のペースでお腹一杯です」苦笑いの真木野。
「無理です」きつぱりと三輪。

「……それは、ちよつと」やつと喋った高井。

「そういえば、高井はどこ出身なんだ？」すかさず話題を振る樽木。

「——え！ あ、あ、その、……群馬です」

（玲ちゃんの馬鹿。巨乳好きとか変なことばかり言うから意識しちゃうじゃない……）

大した質問でもないのにドギマギする高井。

胸の中だけで真木野に抗議の声を上げる。

深夜に居なくなつた三輪を樽木と二人で捜していたときは、三輪が心配でそんなことを思いつかなかつたが、こうやって改めて話すと緊張で考えが纏まらない。

何よりも真木野と三輪が近すぎて、自分と樽木の会話を聞かれているかと思うと恥ずかしい。

「なんだ、ここが地元なんだ。よかつたじゃん。実家近いし、食べ物美味しいし、温泉あるし、浅間山もあるし。今食べているキャベツで思い出したんだけど、群馬の特産品でキャベツつて無かつたけ？」

「ええ……と、孀恋村の特産です」

「この季節って、キャベツ採れた？」

樽木の素朴な質問。

「いえ、群馬だと夏から秋にかけての間だけで……。今年はまだ寒いから、出荷は無いと思いますけど」

「そっか。美味しいからてつきり地場産かと思っただけだなあ……。結構詳しいけど、実家が農家？」

「え、いいえ。園児たちの親御さんはやっぱり農家の方々が多かったので自然に覚えた、というか、なんというか……」

「俺の実家はただの——。ん？ ああ、そうか、高井って保母さんなんだよな」

「は、はい。今は、もう……軍人ですけども……」

自分で言つて、ちよつと悲しくなる現実。

（うわっ！ なにそれ！ ちよつと、ちよつと！ 今さらそんな質問内容、白々しくない！ そんなこと、どうでもいいから、ちやつちやかちやつちやか、さつさとデートの約束でも取り付けなさいよ！）

特に何もなく進む二人の会話に無性に苛立つ真木野の内心。ただ今、男としての樽木の評価低下中。無論、表情は変化無し。にこやかな笑みのまま。そこら辺の事に関して腐つても役者の卵。

(——まあ、場所も場所だし。……無難な会話よね)

これまたにこやかな表情で食事を進める三輪の内心。

彼女から見れば、高井の警戒心を、会話を積み重ねることで低くしていこうとする樽木の判断は妥当なものだ。

見せ物と考えれば物足りないが、真面目なお付き合いをして欲しい三輪としてはそれ程悪くない出だしである。

そうこうしながらも皆の食事進む。

二人の会話だけだと、怪しまれるから真木野は会話相手に三輪を選んだ。

一口、ハンバーグを食べながら聞く。

「ミワっち、このハンバーグ、本物？」

「大豆から作った合成モノでしょ。あと、私をミワっちって呼ぶな」

きつちり答えて、冷たく突き放す。

右目を瞑り、左目で睨んで、真木野を観察。

なかなか器用。

「え〜っ！……可愛いのに〜っ……」

真木野の未練がましい視線。

コケティッシュな雰囲気と口調、そして少々大げさな表情の変化。

無論、これも演技。

男にはとても気付けそうにないほど、自然に見える仕草。

「貴女の美的センスを疑うわ」追い打ち。

「ほら、私美人だから、それでも困らないのよ。美人過ぎて、ね」打ち返し。

「自分で言うな」再攻撃。

「あら、否定は出来ないでしょ？」開き直り。

年齢に不釣り合いな妖艶な微笑みと引き込まれるような流し目。

同性でさえ、ぞくつと背筋に寒気が走るほどの色気。

「うぐぐぐぐつゝゝゝ」手詰まり。

容姿関連だけは逆立ちしても勝てそうにない。

「うふふふつゝ」勝利宣言。

小憎たらしいはずの笑みすらも魅力的。

そう言う遣り取りもしつつも、彼女たち二人の耳は高井の会話に集中している。

この遣り取りは『桃さんの会話なんて聞いていませんよ』というジェスチャーであり、

高井も実は気付いている。

(樽木さんの事、嫌いじゃないけど……みんなに聞こえる場所じゃ恥ずかしいよ!!)

真木野が聞いたなら、『一体、どこの小学生よ!?!』と言い出しかねない高井の本音。

恋愛関係色恋沙汰から、ひたすら逃げてきた彼女の心理。別に男性が嫌いな訳じゃない。

みんな彼女の豊かすぎる胸を注視して、碌な会話もしないうちにデートに誘う。

高井自身の人格は無視して、肉体関係ばかりを求められている気がして駄目なのだ。

一言で言い表せば、自分を見る目が『嫌らしい』。

被害妄想のように感じる嫌悪感が彼女を恋愛から遠ざける。

仮に高井が男女関係を楽しむ性格だったならば——例えば真木野のような性格だったならば問題ない手順なのだが、奥手の高井には警戒心と拒絶感を生み出す。

そんな彼女が男との会話になれているわけがない。

保育園に来る男なんてほぼ既婚者に決まっているので、それほど怖くない。

むしろ夫が色目を使ったという理由で八つ当たり気味に嫉妬する妻の方が怖い。

樽木の陽気でさっぱりとした雰囲気は嫌いじゃない。

高井自身がそう感じている。

自覚もしている。

もつと話したいとも思っている。

どんな人か知ってみたい気もする。

だけど、ここじゃ恥ずかしい。

真木野とも三輪とも仲は悪くないけど、今の状況は気恥ずかしい。かといつて、二人つきりになるのも何となく、さらに恥ずかしい。

第一、そんな時間も碌にない。

三輪を捜したように睡眠時間を削るかしなければ出てこない。

まだ、そこまでする気はない。ちよつと微妙な雰囲気と流れ。

女性陣三名の心の内とは無関係な坂上ら五名の男性陣は黙々と食事中。

偶に彼女たちの会話が耳に入らないわけではないが、気にしていられない。

目の前の食事を胃に詰め込むことの方が大事である。

みんなの様々な考えが渦巻く食堂の一角で、樽木は何気なく会話を続けた。

「別に無理して、軍人らしくする必要なんて無いぜ」

「え!？」樽木の思わぬ一言で高井の唇から声が漏れ——。

「へっ!？」真木野の仮面が綺麗に剥げ落ちて——。

「!？」三輪が喉にご飯を詰まらせ——。

「——なっ?」国防の使命に燃える笠原が驚き——。

「……………」坂上は次の言葉を待った。

軍人が、新入りとはいえ、徴兵されたとは言え、既に軍人である者に対して言うべき言葉か?

樽木は皆の驚きを知りつつも、言葉が続ける。

ちやんと説明しないと余計な誤解が生まれそうだ。

「軍人がよくする動作を覚えれば、誰だって軍人っぽく見える。今の御時世、軍服身に付けて銃持っていりや、どんなガキだって徴兵された新兵さんに早変わりだ」

間を置いた。

樽木は高井を見た。

きよとんとした顔の元保母さん。

そして、彼は視線を他の七人に向けた。

「軍人らしさとか、見てくれなんて、最低限でいい。少なくとも俺や千葉一曹は上から命令されない限り、見た目の良さなんて要求しない。そんなのに、俺は意味を感じない。TPOをきっちり守ってくればそれで十分だよ」

別に全員に聞かせる話でもない。

そう思い、声量は上げないまま、樽木は喋った。

聞きたい奴だけ、聞こえた奴だけ、俺の独り言を聞けばいい。

そんな思い。

「戦つて生き残る技能を身に付けて、軍人としての最低限の常識を身に付けてくれれば——共に命を賭ける他の部隊の仲間や同期に迷惑を掛けない程度の軍人になってくれ

れば、俺はそれで良いんだ。そこら辺は、きつと微妙に千葉一曹と違うだろうけどな。別に心の中まで、とやかく言う気はない。今までの人生で積み上げてきたモノまで捨てなくていいんだ」

樽木は高井に視線を戻した。

彼女は樽木の言葉を聞き漏らしていない。

視線を合わす。

高井の瞳に浮かぶのは戸惑いの色。

「戦う組織の一員として、規律を守り、戦う技能を身に付けなくてはならない。こればかりはどうしようもない。義務だ。だけど、お前たちは軍隊の事だけ「ルビ：・・・」を考え続ける義務は無いんだ。これから先もBETAと戦い抜く人生を選ぶんなら、また別の話だけだな。だけど、過去を捨てる必要もないし、未来を諦める必要もないんだ」

そこで樽木は一息吐いた。

視線を高井から外す。

高井には分からなかった。

樽木は何を伝えたかったのか。

その疑問は顔に出た。

それを視界の片隅で知りながらも、樽木は答えない。

隣の三輪の唇が動きかけて止まった。胸にわき上がる問い掛け。

——もう、私たちの運命は、それこそ人生そのものが戦う以外、何も無いじゃない!? BETAに勝つか、負けるか?

負ければ、四肢を千切られ、頭蓋骨を噛み砕かれ、内蔵を撒き散らして、喰い殺される。

勝てば、明日という日を手に入れるであろう。

なんと自分の悪い賭け。

掛け金は命。

手にするのは明日。

この賭け事、^{ギャンブル}黒星の数、五〇億。

結果、ユーラシア大陸に人類はほとんどいない。

——未来? 私たちが掴めるような未来があるのか?

坂上は樽木をさらに注視した。

彼の言葉を——樽木個人の考えをもう少し聞きたいと思った。

樽木が言う過去を捨てるなどは?

続けて言った未来を諦めるなどは?

徴兵されてまだ一ヶ月も経っていない自分には分からない。

坂上らは東野以外、まだ実戦にすら出ていない。

彼らとは比べものにならないほどの実戦をくぐり抜けた樽木の言葉は、彼の意に反して重い。

高井は今一度、樽木を見た。

目の前の男の言葉を反復する。

—— 未来を諦める必要はない？

改めて考える。

自分の未来がどこにあるのか分からない。

明日を諦めた訳じゃない。

それは真木野にも話した。

母と弟妹と祖父母と子供たちと友人たちに誓った。

彼らには言っていないが、心の中で誓った。

諦めないと——。

だが、具体案は無い。

戦場に出たことすらない高井には対処の方法を具体的に想像出来るわけがない。

その事実と問題点と、その解決案を欲する気持ちが胸に湧き上がると、飢えにも似た

渴望感が高井を襲う。

心配が変わつた高井を見て三輪は目を見張つた。

大きく見開いた瞳。

今までの高井からは決してみることがなかつた生への執着。

何かを身に纏つたような雰囲気で、高井の毛が逆立つたかのような錯覚さえ感じる。

「樽木さん……そう!」

「どうした?」

さん付けで呼びかけて、慌てて言葉を繋げて階級にした。

そんな高井に気にするなど、樽木は軽い口調で言外に語る。

「未来つてあるんですか? 私たちが手にすることが出来る将来つて存在するんですか

!?!」

高井が食い入るように樽木を見る。

突き刺さるような視線を感じつつ、彼は事実だけを、注意深く言葉を選んで、静かに

告げた。

「確実な未来なんて、誰にもない——」

一目で分かるほどの高井の落胆。

そんな彼女を見てみると、死刑宣告でもしたような気にもなる。

この結果は目に見えていたが、嘘を吐くほど不実に成りたくなかった。

「この世にBETAが居ようが、居まいが、確かな未来なんて誰にもない。どんな人でも明日必ず生きているという絶対の保障はないんだ。結局は、今をどう生きるか。これだけだ。日常の中の、一瞬一瞬。それが積み重なって未来に成る。だから、まだ来ぬ明日の死に怯えて過ごすのは止めるんだ。俺は高井が何をしたいかは詳しくは知らない。だけど、高井は今ここで何が出来るか、出来ないかを考えて行動すべきだ。そうしないと、目の前の未来すら無くしてしまう」

静寂。

賑やかな大食堂の中で、樽木と高井を中心に広がる小さな沈黙の輪。

落胆する高井に掛ける言葉を思い浮かべられない三輪が苦慮し、真木野も言葉を探す中、樽木はその沈黙を打ち破るように、パンと手を叩き合わせて「ごちそうさま！」と今までの暗い話題全てが嘘のように明るい声を発した。

樽木は自分で言った。

一瞬一瞬を大事にしろと。

だから、諦めないことを体現するように元気な声を出す。

『皆を励ますのは、この俺だ』と、言わんばかりに笑顔を作る。

「高井、下ばかり見ても何も無いぜ」

ハツとして顔を上げる高井。

目の前の樽木は腰を上げ、食べ終わって空になった食器トレイを右手で持ち上げた。思わず、目が合った。

樽木はもういつもの陽気な笑みを浮かべていた。

高井が付いて行けないくらい切り替わりが早い樽木に、彼女の思考回路は半歩以上送れている。

高井が樽木を見上げた。

樽木がより一層笑みを深くした。

それに半ば釣られて、高井も力なく微かに微笑んだ。

「未来は自分で作るんだぜ。少なくとも、俺の未来は俺が作るつもりさ。まあ、そう言うわけで——」

樽木は言葉を切った。

高井は彼の言葉を待った。

そんな遣り取りに真木野と三輪、坂上と笠原が注目する。

東野は無視した。

彼はそこまで他人に関わりを持ちたくない。

「——高井。今度の休み、デートしようぜ」

「……はい？」

にっこり笑って何気なくのたまう樽木と、言葉を聞き違えたかと首を傾げる高井。
余りの脈絡のなさに絶句する坂上と笠原。

「いや、だからさ、何時になるか決まってるけど、今度の休みにデート。待ち合わせて、茶でも飲もう。まあ、きつと実家に帰るだろうから、半日程度のデートにしよう。地元なんだから？ 美味しい店でも一緒に行こうぜ」

「え、え……ええ。えつ、————ええええええええええええええええつ!!! デ…デデ、デートをおつ！——つ!!!」

酔っ払っているみたいに、思わず素で叫んでしまった。

ハッ！ と、自らに集中する周りの視線と自らが上げた声の大きさに萎縮するように、高井は肩を竦ませて縮こまった。

「……あ、あの、そういう事は……人前で、言わないで…欲しい……のです…が……」
顔を真っ赤にして俯きながら、それでもなんとか上げる抗議の声。

「——ん？ ああ、わりい。だけどさ、こうでもしないと俺たちは時間が無いんだぜ。嫌じゃないなら、それで行こう」

「そ、その、嫌とか、そうじゃないか……とか……」

高井は迷った。

ただでさえ余りにも恥ずかしいこの状況で頭が一杯なのに、さらに恥ずかしいデートの約束。

にこやかな笑みのまま、強引な約束を取り付けようとする樽木に徐々に首をもたげ始める心の中の不信感。

樽木がいい人だと言うことは、深夜共に三輪を捜した時によく分かっている。

三輪が母親に電話しているとき、寒空の下だったにも係わらず終わるまで待つと言ったのは樽木だ。

彼女も頼むつもりだったが、それよりも先に樽木が決断していた。

探す時だつて真剣だったし、素早く対処してくれた。

悪い人ではないと分かっているが、恋愛に臆病な心が高井を足踏みさせる。

樽木はぼそぼそと喋った高井の声をしっかりと聞きつつ、それでも簡単に諦める気はない。

とはいえ、食堂という場でしつこすぎるのも確かに余り良くない。

最後に一言言つて離れようとしたとき――。

「樽木三曹！ 私も一緒に、お邪魔していいですか？」

元氣よく右手を挙げてアピールする真木野。

彼女の左手は今も俯いて膝の上で両手を握りしめている高井の小さな拳に伸びて、そ

して励ますように高井の手を握った。

ビクンとする跳ねた高井の身体。

彼女は恐る恐る握りしめられた手を見た。優しく包み込むように自分の手の甲を覆う真木野の細い左手。

そのまま視線を真木野に向けると、それを待っていたかのように彼女と視線が合う。

真木野は小さく頷いた。

その瞳に浮かぶのは絶対的な自信。

任せてよ。と、言わんばかりの表情が高井を後押しする。

掲げた右手はそのままにもう一押し。

「——問題ないですよね？」

樽木に向けて、にっこり笑顔。

演技じゃない本当の笑顔。

きつと、絶対、楽しいデートになるから、待ち遠しくて堪らない。

まるで遠足を楽しみにしている子供のよう。

「ああ、人数多い方が楽しいしな！」

真木野の提案に異論などあるわけがなかった。

樽木が笑顔と共に了承する。

高井を無視して決まるデートの約束。

恥ずかしくて堪らない。

ここから逃げてしまいたい。

だけど、本当は嫌じゃない。

きつと楽しいだろうとも思う。

そう思いつつも、余りにも恥ずかしくて、また彼女は下を向いた。

結局、拒否はしなかった。

「じゃ、午後の訓練に送れるなよ」

「了解〜！」

「はこ」

「了解です」

「ういっす」

「……はい」

最後に一言だけ皆に言って立ち去る樽木と、それに答える班員達の声。

去り際の一瞬に交わす、樽木と真木野の親指を立てたサムズアップのサイン。

「……よくやるわ……」

三輪は高井に気付かれずに見事な連携を見せる二人に、微笑みながらも呆れたように

溜息を漏らし――。

「…………青春だねえ…………」

坂上はそれ以上何も言わずに味噌汁を啜った。

にんまりとした表情を浮かべた真木野は樽木の評価を心の中で上げ、高井は自分の胸に手を置き早鐘を打ち続ける鼓動に戸惑い続けた。

三々五々思い思いに昼食を取る中で――。

笠原は何かに耐えるかのように握りしめた拳を振るわせ、それに気付いた東野は嘲笑うかの如く暗い笑みを浮かべた。

第18話 ソ連の銀狐

一九九八年一〇月一八日 一三時一三分

ソ連海軍軍港ペトロパブロフスク・カムチャツキーから約二〇〇〇キロメートルの洋上

第一〇〇揚陸艦旅団 イワン・ロゴフ級大型揚陸艦 “アレクサンドル・ニコラーエフ” 甲板上

ソ連海軍太平洋艦隊ペトロパブロフスク・カムチャツキー基地から約二〇〇〇キロメートル離れた太平洋上を進む小さな船団。

大型揚陸艦数隻、それと随伴の駆逐艦と補給艦が各二隻ずつのこの小さな艦隊は、アリューシャン列島沿いに一路日本帝国に向け航海中だった。

この季節にしては少し不気味な穏やかな海と、透き通るような青い空。

微かに吹く冷たい風だけが秋という季節を実感させる昼下がりに、船団の中央に位置するイワン・ロゴフ級大型揚陸艦 “アレクサンドル・ニコラーエフ” の甲板上に佇み、遠くを眺める一人の美女。

見た目二十代後半の美女が、身に付ける衣装には皺一つ埃一つ無い。

顔が映るほど磨き上げられたパンプス。

女性らしい脚線美を強調させるようなカーキ色のタイトスカート。

その対となる上着では、彼女の豊かな胸には苦しそうにすら見える。

襟元までしっかりと締めたネクタイ。そして上着の左胸には今までの功績を讃える数々の賞章と衛士徽章が彩りを添える。

この姿を教条的な將軍たちが見たら、その着こなしを軍人の見本として讃えるだろう。

ただし、無造作に袖を通したコートを見なければの話だが――。

彼女の完璧と言つて良い軍服の着こなしを台無しにするのは、本物の黒ミンクの毛皮で作られたハーフコート。

美女はそれをただ無造作に着こなし、両手をそのポケットに入れていた。

新兵ですら分かるほど、明らかに軍服着用時には規則違反となるコート。

だが、この艦で――いや、この小さな艦隊でそれを注意するような命知らずは誰一人いない。

別に、彼女に直接殺されるわけではない。

ただ、彼女の敵になろうという無謀極まる蛮勇の持ち主はそう滅多にいない。と、いうだけの話だ。

特にそのコートの送り主を知っているならば余計に、だ。

潮風に靡き、日の光を煌びやかに反射する絹のように細くて長い銀の髪。

降り積もった新雪よりも白いと感じさせる綺麗な肌。

ワイシャツがはち切れてしまいそうなほど豊満な双胸と、抱き寄せれば折れてしまいそうなほど細い腰。

水着か何かのモデルにしか見えないほど高い頭身と細い手足。品の良さと優しさを感じさせる碧い瞳。

いかなる男でも欲情させるほどの美貌と体型。

それでいて身に纏う雰囲気はロシア帝国時代の貴族の令嬢かと思わせるほどの気品と、今にも消えてしまいそうな儂げなさを漂わす。

美女の名は、アナスタシヤ・ユーリエヴナ・モロトヴァ。

彼女の肩書きは、その美貌からは想像出来ないが、れつきとしたソ連陸軍大尉。

この艦隊で輸送されている一個戦術機中隊の指揮官である。

その彼女は輸送艦が進む方向に——新たな任地、日本に思いを寄せていた。

彼女にとつて、この日本行きはもうこれ以上は望みようがない程のもの。

この任務が成功したならば、ソ連共産党は諸手を挙げて喜ぶだろう。

成果によっては、草木どころかシベリアの凍土すら貪り食われた祖国の一部を取り戻

せるかもしれない。

そして何よりも、この任務はアナスタシヤが夢でしか見ることが出来なかつた願望を
実現させるだけの可能性がある。

佐渡島にハイヴを作られた日本帝国は、今滅亡の危機に瀕している。

それにより、この千載一遇のチャンスが彼女の下に転がり込んできた。

見た目の静かさとは裏腹に、彼女は興奮しきつていた。

彼女の瞳は青い空と海を映していながら、既にそれを見ていない。

脳裏に浮かぶのは、膨大な映像資料で見た日本の街並みと自然の景観。

共に戦うであろう日本帝国軍の主要部隊と装備品に關しては既に丸暗記済み。

主要な地名も施設も覚えた。あとは実際に現地を見て、距離感と土地勘を掴むだけ
だ。

彼女の頭の中で様々な場面を想定したシミュレーションが組み立てられては消えて
いく。

そんな彼女のシミュレーションは可愛らしい二人の呼びかけにより中断された。

「——ママ！ 大丈夫!？」

「——ママ！ こんなところにいたの!？」

完全に同調した声が響き、一九歳の双子の美少女がアナスタシヤの両脇に駆け寄つて

きて、両腕に抱きついて頬擦りする。

うり二つの容姿を持つ双子の美少女。

同じ造形の顔、同じ表情、同じ髪、同じ瞳、同じソ連陸軍の軍服、同じ少尉の階級章、同じ衛士徽章。

顔の造形も身体のサイズも身に付ける服装まで、ほぼ全て同じ。

僅かに違うのは左右に分けた前髪的位置だけ。

腰まで届きそうな白金の髪。
ブラチナブロード

透き通った青い瞳。

健康的な肌色。

まるで何かの人形のような容姿。

アナスタシヤより幾分背は低いが充分過ぎる身長と、彼女よりも健康的で抜群のプ
ローション。

双子の姉。

ソ連陸軍衛士、ヴァレーリヤ・グレボヴァ・ベシカレヴァ。

愛称はヴァーシヤ。

双子の妹。

ソ連陸軍衛士、マリーヤ・グレボヴァ・ベシカレヴァ。

愛称はマーシャ。

余りにも綺麗過ぎる双子の美少女。

無機質な軍艦の甲板上で、風に靡く銀の周りを陽の光を浴びて輝く白金が舞う。

「ヴァーシャ！ マーシャ！ 落ち着きなさい。くすぐったいわ」

アナスタシヤが優しい笑みを浮かべながら、抱きつかれた両腕を外す。

それから双子を両脇に優しく抱き締め直すと、二人の美少女は天使のような笑みを浮かべた。

陽の光で反射する白金の髪と二人の笑顔が眩しくて、見慣れているはずのアナスタシヤにさえ、まるで本物の天使のように思えた。

「だって、ママが黙っていなくなっちゃうし！ こんな男しかいないところでママを一人なんて出来ないわ！ せめて、ヴェロニカと一緒にいて！」

そう彼女の身を案じていたのは、双子の姉のヴァーシャ。

「ママ、どうしてここにいたの？ 何が見えるの？ 何を考えてたの？」

きつと同じ理由で探していたのだろうが、姉が先に自分も感じていた不安を言ったので咄嗟に質問を変えたのが、双子の妹のマーシャ。

「ヴァーシャ、マーシャ、心配してくれて有り難う。何でもないわ。何を考えてたかというとな、日本帝国のことを考えてたの」

「日本？ 何か考えるような事って有ったかな？ マーシヤ」

「ううん。任務上必要なことは特には無いと思うけど、ヴァーシヤ」

仲良く首を傾げる双子に、アナスタシヤが語り掛ける。

確固たる確信。

揺るがない自信。

見た目を裏切る、アナスタシヤの決意。

「滅亡の危機に瀕する日本帝国という戦場は、正に私のためにあるような戦場なの。今回の日本派兵で家族〔ルビ・わたしたち〕の誰も死なせない。私たち全員生き残って、必ず未来を掴むの」

だが、その決意と行動のためには彼女以外の実行者が必要であった。

「……ヴァーシヤ、マーシヤ、ごめんなさい。貴女たちも少し手伝って。今回は、私一人だけでは出来ないわ……」

愛おしい娘達への謝罪を口にする、彼女は余りにも悲しくて目を伏せた。

アナスタシヤ一人では絶対に不可能な任務と、その現実。

もしも仮にその身を二つに引き裂いて、アナスタシヤが二人になれるなら、彼女はそれを選択するだろう。

本当ならば、その苦痛を受け入れてでも双子に協力させたくない。

そう思つて、いかなる策を弄しても、出来ないものは出来ないのだ。

今の彼女は双子に頼るしかない。

娘たちに苦難を強いる不甲斐なさで、アナスタシヤの腕の力が弱まる。

双子たちが母の解けそうな抱擁を無視して、阿吽の呼吸でアナスタシヤの細い腰を左右から同時に抱き締めた。

驚く母に、娘が決意を示す。

「謝らないで、ママ。むしろ、ママが私たちを頼つてくれるなら、何があつても大丈夫。

私たちは、私たちがママを守ることが出来るのなら、それに勝る幸せは無いの」

「私たちは二人いるけど、ママは一人だけなの。そして、私たち全員のママはママだけなの。ママだけが傷付いて、苦しんで、私たちが無傷でも嬉しくもなんともないの。お願い、ママ。私たちが必要なら、必ず言つて。必ず頼つて。私たちはそれが嬉しいの」

天使のような美貌と揺るがぬ決意を宿した瞳で、慈愛と悲哀を併せ持つ儂げな母を励ます。

「ヴァーシヤ、マーシヤ。二人とも、ありがとう」

そう言つて双子を抱き締めるアナスタシヤに指揮官としての表情はない。

ただ、母の顔があるだけだ。

お互いにお互いを確かめ合うように抱き合う三人だったが、不意にヴァーシヤはその

抱擁を解き、継るようにママの腕を掴んだ。

ヴァーシヤはアナスタシヤを見つめ、何かを言い掛けて止め、その直後、何かを振り切ったように声を絞り出した。

それは、まるで痛みに耐えかねて上げる悲鳴のような懇願。

「——ママ、もう止めて！ 任務なら……任務なら、どうしようもないけど……！ お願
い！ 私達のために無茶しないで！ 傷付かないで！」

姉の声に同調するように、妹のマーシヤはアナスタシヤを両腕で力一杯抱き締めた。
それはまるで、自らの身を顧みず炎の中を進もうとする母を止めようとする娘の姿。

「私からもお願い！ もう止めて！ 私達を使って！ 躊躇わないで！」

妹の声も姉の声と変わらない。

泣き出しそうな双子の願いがオホーツク海に流れて消える。

アナスタシヤは隠し事すら上手く出来ぬことに自嘲した。

彼女の頬に浮かぶ微笑の表情。ただ、彼女はそれすらも美しい。

「家族の為なら、安すぎるわ」

そう言って、彼女はまた微笑む。

アナスタシヤの一言で打ち拉がれたように落胆する双子を、彼女は再び強く抱き締め
た。

その豊かな胸で赤子をあやすように抱き締めて双子の滑らかで絹のような髪に頬擦りする。

柔らかな感触に目を細める双子に、瞳を閉じたままアナスタシヤは囁いた。

「あの真新しい^{ラーストチカ}燕^カは貴女たちの翼よ。Su^グu^チ37^ルターミネーター^{ナー}に競り負けたとは言え、ミコヤム・グルビッチ設計局がこの世に送り出した最後の^{ラーストチカ}燕^カは準第三世代機に相当するM型。思う存分、使いなさい」

「……ママ」

小さく囁いたのはヴァーシヤとマーシヤ、どちらだったのだろうか？

それとも二人同時だったのだろうか？

「今回の派兵では直協の砲兵がいらないわ。要望は上げているけども、今のところ派兵される見通しはないし、第一、日本帝国も仮想敵国の大部隊は直ぐには受け入れにくい。私達が国連軍に参加していたとしてもね。だからこそ、^{ブライミヤリサ}炎の狐^サも手に入れた。AIM-54が祖国から来なくとも、今ならアメリカ海軍の空母戦闘群から国連軍経由で入手できる。本来ならば三個中隊で行う連携を三個小隊規模に縮小して行う全局面TSF^{ドクトリン}戦闘教義に基づいた戦術機運用。異機種混成の中隊で最初は戸惑うかも知れないけど、安心して。戦闘間に於いてのみ、艦船を含め戦闘団全ての指揮権は私にあるわ。

私達は生き残るわよ」

アナスタシヤはゆっくりと目を開け、その白く華奢な指で双子のきめ細かい白金の長髪をあやすように撫でた。

涙を浮かべる双子に彼女は自らの意志を示す。

声は小さく、囁くよう。

だが、それに含まれた決意はシベリアの永久凍土よりも固い。

「Москва слезам не верит. (モスクワは涙を信じない)」

アナスタシヤが呟いた言葉は、昔ロシア大公国が税の軽減を訴えた嘆願者を殺した事に由来する諺。

それが意味するところは『泣いても、現実が変わらない』。

ロシア帝国はソ連連邦に変わり、都市としてのモスクワは異星人の胃の中に消えた。

だが、この諺だけは残った。

そして、彼女たちの間では「モスクワ」はソ連共産党本部と同義である。

彼女らを始めとする現場の苦労を、もはやアメリカに土地を租借している有様のソ連連邦共産党が考えることはなく、同情することもない。

BETA大戦初期における稚拙な対応で全人類を滅亡の危機に追い込んだ片割れ。

しかしながら、未だに選民意識と民族差別、尽きることはない権力闘争を繰り返すソ

連共産党。

それは滅び去ったロシア大公国すら上回る愚行。

アナスタシヤの瞳が艦隊の針路を睨むように見つめる。

まだ見えぬ新たな戦場——日本を見据える。

「——もう、私には祖国すら見えないわ」

アナスタシヤは言葉と共に流れ落ちた涙を隠そうともせず、さらに双子を抱き締め
た。

ヴァーシヤとマーシヤは、アナスタシヤの肩に頭を預けて抱き締め返す。

三人が三人を必要として支え合う。

徐々に強く、冷たくなるシベリアからの風に抗うように双子は顔を上げた。

銀と白金の長髪が絡み合うように潮風に靡く。

その視線の先、水平線の遙か向こうに日本帝国がある。

彼女たちは無言で抱き締め合い、自分たちの運命を決する戦場に思いを馳せた。

第19話 神流の親友

一九九八年一〇月一八日 一五時二五分

新潟県村上市内の某所

「——そっか、神流ちゃんは新潟市内に居たんだ」

「うん……。新潟と新発田を行ったり来たりしてた」

夕暮れが迫る中、田舎のたんぼ道を二人で歩く。

神流は今、沢口絵里と共に母校から帰宅途中だった。

遠くに見える山々の稜線。

流れる雲と刈り入れが終わって寂しくなった田んぼ。

無数の赤とんぼが冷たい風と共に二人の近くを舞う。

高校入学から今まで、繰り返し過ごした季節と眺めた景色。

親友たちとよく歩いた、お馴染みの道。

学校近くのバス停に乗り、その道中もお喋りをして、各々の実家に一番近いバス停で降りていく。

仲良しグループの中でもっとも家が遠かったのは神流。

続いて、横山佐知子と坂本智美。

そして、沢口絵里。

彼ら四人は時間的余裕さえあれば、この道を歩いて帰った。

共に過ごすためにバス停一〜二箇所分の距離を歩く。

ある意味、この道を通ると言うこと自体が道草であり、一人の時は決して通らない道でもあった。

昼休みに再会した時、彼女たちは一緒に帰る約束を交わした。

未だ高校生の絵里に喫茶店に行くような経済的余裕はほとんど無いし、何よりも食料配給制への移行が噂されている現状では開いている飲食店も以前より遙かに少ない。

自然とお金の掛からない、そして、長く会話が出来る徒歩での帰宅となった。

だがお互いの意に反し、二人の会話の出だしは微妙だった。

戦場で辛く悲しい出来事の連続だった神流に気を遣い、どの話題から言い出しているか分からずに戸惑う絵里。

戦死した親友たちのことを聞きたいけれども、絵里を悲しませてしまうのではないかと遠慮する神流。

既に再会してから結構長い時間を過ごしているにも係わらず、二人の会話はお互いに欲する出来事に至らずに、当たり障りのない内容で流れていった。

二人して、そういう流れになっているという自覚はあった。

時間が無くなっているという事も——つまり、もうすぐ自宅近くになるという事も分かっている。

この雰囲気の中で、先に動いたのは絵里の方がだった。

神流にも、絵里にも、お互いに様々な理由がある。

まるで、それが絡み合うかのように——だが目には何も映らず、時だけが進む。

「神流ちゃん、髪型変わったんだね」

脈絡の無い絵里の質問に少し驚いたが、神流は二ヶ月ほど前を思い出しながら答えた。

「——うん。やっぱり、あれだと長すぎたからね」

そう答えて少しだけ悲しげに目を伏せた。

が、それも一瞬。

右手で梳くように少し長めにした前髪をかき上げる。

「これはこれで、似合っているでしょ？」

今の神流の髪型は前髪を長めにしたウルフカット。

実戦に出るときは邪魔にならないようにヘアピンで要素要素を止めていた。

今の髪型からは想像も出来ないが、徴兵される前の神流は腰まで届きそうなほどの長

髪だったのだ。

当然、絵里が最後に見た神流も長髪だった。

「うん。似合ってるよ。いいなあ、私が短くしたって絶対に似合わないのに」

神流の視界の片隅で、絵里のポニーテールが揺れる。少し羨ましかった。

「こんなに短くしたのは生まれて初めてだけどね……」

今思い返せば、あのPXの床屋にいた名前も知らない理容師には感謝している。

命令でバツサリ切られた髪を取っておいてくれただけでなく、シヨックで髪型の希望

すら言えなかった自分に似合う髪型にしてくれた。

あの人物が今どうしているかは分からない。

彼女が徴兵され、初めて足を踏み入れた帝国陸軍関連施設は新潟県の南に位置する上

越市の高田駐屯地。

残念ながら、その高田駐屯地も九月始めにBERTA侵攻により壊滅している。

今では、もうその人物が生きているかどうかすら分からない。

そんなことを考える神流に絵里は躊躇いがちに問い掛けた。

「……だけど、神流ちゃん。結納の時は絶対自分の髪で結い上げるって言ってたじゃん。

もう、残ってないの？」

「大丈夫だよ。切った髪は少し残してあるから、付け毛《ルビ・エクステ》出来るよ。流

石に全部は取っておけないから、今付けると細長い尻尾みたいになっちゃうんだけどね」

「……」

「そんな顔しないでよ、絵里。今さら気にしたってしょうがないもの」
神流は出来る限り、明るく振る舞っていた。

自己暗示でも掛けるかのように、自分自身を励ます。

たった一人生き残っている親友にPTSDで苦しんでいるところなど見せる気はない。
い。

そんなこと抜きに、久しぶりに親友と話せるだけで神流は嬉しかった。

その口調と雰囲気は、母親も主治医も見たことがなくくらい明るい。

だが、その心理は恐怖への裏返しでもある。

この一時の幸せ。

まるで徴兵される以前に戻ったかのような錯覚。

さりげない日常に隠れていた幸福。

昔と同じではないけれども、あの当時の幸せが、確かにここにある。

「——そういえば、ねえ！ 神流ちゃん、あの人とはどうなったの？」

ふと思いついた明るい話題に絵里は顔を綻ばせた。

戦場から届く神流の手紙の中で、たった一つの明るい話題は恋愛相談だった。

こちらから返せる話題も明るいものが少なく、自然と恋愛相談に関する事柄を多く書き込んだ。

あの当時は『一回りも年上の男性を好きになった』という内容の手紙に物凄く驚いたけれども、少し経ったら神流なら当然のことだなとも思った。

高校入学当初の頃から、神流は可愛いというよりも美人と感じさせる大人びた容姿を持っていた。

かなり良い運動神経とスリムなプロポーション。

頭だつて悪くない。

成績が飛び抜けて良いとは言わないけれども、それよりも、どちらかといえば機転が利く方だ。

在校中、彼女がラブレターを貰ったことは一度や二度では済まない。

一ヶ月に一度や二度、下手すれば他校からも来た。

ちよつとでも男子生徒と仲良くなれば、直ぐに付き合い始めたとか根も葉もない噂も立った。

やつかみ半分の噂だったが、そう信じさせるぐらい神流は誰かと付き合うとか、恋愛関係になるということが無かった。

その理由は単純明快。

本当の理由は、親しい友人だけが知っていた。

『——子供になんて興味ないの。同じ年の男の子《ルビ：：：》をあやしたって、意味無いじゃない』

これは神流が高校二年生の時に言い放った台詞だ。

幼い頃から結婚願望が強く、彼女なりではあるが、真剣に結婚相手を吟味していた神流にとつて同じ年の男の子たちは「頼りない男」に過ぎなかつた。

精神年齢は女性の方が早く成長するとは言え、彼女のそれは早熟すぎた。

子供たちに囲まれ、夫の帰りを待つという専業主婦を夢見る——それは両親がいる家庭を経験したことが無い為の、幼き頃からの憧れ——神流にとつて、ちゃんとした定職を持つているということは絶対に譲れない最低ラインの条件であり、それが確定していない同級生は論外なのだ。

女手一つで自分を含む四姉妹を育てている母親を見れば、なおさらだ。

まして、神流は父親を知らない。

その為か、包容力のある年上の異性に強く憧れていた。

下らないことではしやぐ同じ年の男の子など、異性として対象外である。

絵里にとつて年上の男などただの「おっさん」に過ぎないのだが、彼女の親友はその

“おっさん”が恋愛対象だったのである。

そのくせ、年上なら誰でも良い訳でもない。

絵里たちが『いいお兄さん』とか『格好いいおじさま』とか思うような年上でも、神流は『趣味じゃない』とか言つて見向きもしない。

彼女の男を選ぶ基準は、いまいち理解できなかった。

その為、『何時になったら、恋愛できるのよ?』と、ツツコミを入れた回数は数え切れない。

かといつて、恋愛に臆病でも奥手なわけでもないらしい。

『惚れた男性は絶対^{ひと}に落としてみせる!』

神流に何度この言葉を豪語されたか分からない。

全く根拠も実績もない言葉なのだけでも妙な迫力と説得力を持つていて、神流が結構勝ち気ということもあり、なかなか説得力のある反論がしづらかった。

そんな彼女が惚れた男性がどういふ人物なのか、絵里は興味津々だった。

我ながら明るい話題を思ひ出したと喜色満面の笑みを浮かべた絵里だったが、彼女の予想は見事に裏切られた。

「……分からないの……」

神流の暗く沈んだ声音と表情が、その事態の深刻さを物語るようにしか見えない。

絵里は慌てた。

神流が言う『分からない』は普通に考えれば、生死不明だということだ。

片思いの相手が部隊の上官だと言うことは手紙で既に知っている。

同じ部隊にいて親友が無事なのだから、片思いの相手も無事だと思い込んでいた。

最悪の地雷を踏んでしまった。

そう思った絵里は慌てて言葉を続けた。

「……………ごめん！ この話題無し！ 無し！ 止めよ！」

「——違うの！ 生きているの！ 絶対に生きてるの！」

「っ!!」

絵里が今まで聞いたことも無い、甲高い悲鳴のような声。

絵里が言外に千葉春久が既に死んでいると思ひ、謝罪したからこそ出た言葉。

その考え自体を否定する神流の叫び。

首を激しく振って否定する神流の姿は、片思いの相手が死んでいるという想像すら振り払おうとしているように見えた。

「あの人は絶対生きてる！ あの戦闘の後、確かに無事だったの！ 私を抱き締めてくれたの！ だけど！ ……だけど！」

「……………か、神流ちゃん！ 落ち着いて！ 大丈夫！ 大丈夫だから！ 大丈夫だから！」

訳も分からず絵里は神流の両腕を掴んだ。

自分で言った言葉に矛盾を感じつつも、神流を落ち着かせようと必死だった。

親友の今まで見たこともない、狼狽にも狂乱にも似た有り様。

縋り付くように絵里の腕に神流の指が、きつく食い込むように爪を立てる。

その痛みに微かに顔を顰めながらも、絵里は優しく神流を抱き締めて、その背を撫でた。

「——分からないの！ どこにいいのか、分からないの！！ あの人はどこにもいないの

！！ 部隊にも！！ 駐屯地にも！！ どこにもいないの！！」

感情の爆発。

そうとしか言い様のない、神流の叫び。

「——大丈夫、大丈夫だよ。神流ちゃん。絶対……、絶対、大丈夫だから……」

落ち着かせるために自らの声のトーンは落とし、親友の背を優しく撫で続ける。

大丈夫とは言うものの、それはただ神流を落ち着かせようとするだけの根拠の無い言葉で、絵里には真実など知りようがない。

絵里の目の前にいる神流は深く俯き、その表情は見えない。

何かに耐えているような身体は細かく震え、それは次第に絵里の身体に伝わり、そして小さな嗚咽が聞こえ始めた。

ただ親友に落ち着いて欲しくて、絵里は何度も大丈夫と言い続け、その震える背を撫で続けた。

五分ほど経った頃だろうか、神流の震えは止まり、俯いていた顔をゆつくりと上げた。「……ごめん。もう……大丈夫……」

先ほどの叫びが嘘のように落ち着いた声で、そう言った神流の目尻には涙の跡が見えた。

絵里は無言でポケットからハンカチを取り出すと優しく拭き取った。

その間、神流は何も言わずにされるがままに任した。

涙を綺麗に拭き取った絵里は、ポケットにハンカチを戻しつつ詫びた。

「ごめん。私、無神経なこと言った」

「ううん。……私こそ、ごめん。取り乱してちゃって……」

絵里はゆつくりと神流から手を放した。

神流も絵里の腕から指を放す。

「……あのね……。私で良ければ……。話、聞くよ。話せば、それだけで、違うよ……」
恐る恐る、聞いた。

見て見ぬ振りは出来なかった。

絵里にとって、神流はたった一人の生きて帰ってきた親友。

神流はその言葉にぎこちなく頷いた。

「……時間、掛かるけど。……いいい？」

「うん。少し歩きながら話そう」

絵里はポツリポツリと過去の出来事を語り始める神流に相槌を打ちつつも、この先のどこかに座れる場所がないかと視線を巡らした。

第20話 帝国軍情報本部

一九九八年一〇月一八日 一六時三二分

帝国陸軍相馬原駐屯地 第二機械化歩兵連隊第三中隊 事務室

第三小隊長 陸軍中尉 竹中恵三 及び 同小隊 一等陸曹 千葉春久

——思いも寄らぬアクシデントだ。

千葉は足早に歩く廊下で、一人毒づいた。

素直にそう認めざるを得ない。

それは僅か三〇分前、千葉と小隊長以外誰もいない中隊事務室での出来事だった。

「——対BETA防衛計画のデータを頂けますか」

それは千葉が発した何気ない一言だった。

西日が差し込む事務室には千葉と小隊長である竹中少尉だけが残って、事務仕事を片付けていた。

お互いの事務机で書類を処理している最中のやり取り。

千葉は小隊長がどのような書類を処理しているかは知らなかったし、興味もなかった。

今の彼には真木野ら新兵八名を鍛え上げるので一杯一杯に近い。目の前の事に集中していた。

とはいえ、どうしても片付けておく必要があるものもある。

それが今、千葉が希望したものだ。

当然、彼とて自分の中隊が一体どのような任務を帯びているかは理解しているし、目も通してある。

だが、まだこの中隊に来て日が浅い。

一応、非常時の行動等は知っているが、理解しているとまでは言い難い。

自らの中隊が日本海側防衛線で果たすべき役割は、その想定された状況により違う。

大きく違うことは余りないだろうが、いざというとき一々資料を見ていたのでは間に合わない。

デジタル資料で防衛計画を何時でも何処でも閲覧することが出来る。

新兵たちの世話で時間が思うようにとれない千葉にとっては、ちよつとした時間で見ることが出来るようになる。

そう思つての一言。

まして、対BETA防衛計画のデジタルデータ。

今の日本の状況下では、一般国民に漏らさなければいけないだけの保全レベルである。

むしろ可能な限り多くの軍人が対BETA防衛計画を知るべきであり、その方針に基づき、これらの資料の多くは『注意』や『部内限り』に指定されて配布されている。

無論、国家戦略等に重大な影響を及ぼす対BETA防衛計画に関しては『秘』や『極秘』等の高い秘密区分が与えられ、許可された者しか閲覧できないようになっており、無条件で配布しているわけではない。

千葉が欲しがっているのは、そんな国家レベルの御大層なものではなく、戦場で必要なレベルの情報——各関連部隊の行動予定、部隊間の取り決め、部隊ごとに割り当てられている周波数、後方支援部隊の展開地域、奇襲により司令部が壊滅した際の対処計画等であり、それらはほとんどが『部内限り』『注意』レベルに過ぎない。

BETAの人間への諜報活動等は確認されていない故に、対BETA防衛計画の機密レベルは低いのだ。

だが、それに対する返答は予想外だった。

事務室に竹中少尉の乾いた声が、重く、低く、響く。

「駄目だ。お前には渡せん」

怪訝な表情を浮かべた千葉に、小隊長である竹中は硬い表情のまま告げた。

「お前には前科がある」

千葉は自らの目付きが変わったのを自覚した。無論、悪い方にだ。

視線に殺気に似たものが宿る。

空気が凝縮されるような気配。

殴り掛かりたい衝動を消してから、今一度向き直る。

そう言われてしまつては仕方がない。

少々大げさに肩を竦めて、ゆっくりと首を横に振つた。

「やれやれ」

わざとらしく聞こえるように言つて、呷く真似事をしながら視線を外す。

そう、真似事だ。

単に激情に駆られていないことを示す為だけのアピールだ。

今下手に小隊長を見たら、さらなる殺気が視線に籠もる事は間違いない。

千葉とて一応、穩便に済むなら済ませたいところである。

確かに今まで碌に話したことがない小隊長だった。

千葉もそれは忙しい所為だと思つていたが、どうやら、否。

それはただの勘違いだった。

竹中小隊長自身が、千葉と話す気がなかったのだ。

「冤罪も」まで来ると非道いものです」

そう釈明してから視線を竹中に戻すが、千葉を見る目は依然厳しいままだ。

埒があかないと判断した千葉は、もう一度肩を竦めてから、言葉と態度をガラリと変えた。

「では、閲覧は？」

「……………今、出す」

そう言つて竹中は椅子から立ち上がった。

壁面書庫の鍵を開け、厚さ一〇センチ以上はあろうかという分厚いファイルを二冊取り出すと無言で近くの事務机の上に置いた。

「これで十分だ」

気に入らないが、時間を無駄にする気もない。

千葉は荒く鼻を鳴らし——だが、物音一つ立てずに立ち上がった。

不遜な態度を隠しもせずに歩く。

俺を信用しないならば、別にそれでも構わない。

ただ、このご時世に小学生レベルのこんなくだらねえことする以上——。

殴り掛かれれば確実に届く距離まで近づき、竹中恵三と目を合わせてから、千葉春久は言い放った。

「中国の言葉でしたっけ？ 『上に政策有れば、下に対策あり』。幸いな事に、俺が貴方のために命を賭けることは一生無さそうだ」

そう言つて、嘲りと殺意を込めて笑う。

紛う事なき殺意を、何一つ隠すことなく浴びせる。

千葉の猛獣のような笑み。

戦場で生き残る強い兵士は、お前ではなくこの俺だ。

そう視線で語り、態度で示す。

竹中の右足が半歩後退つた。

一瞬だけ浮かぶ怯え。

だが、それもすぐ隠す。

竹中も指揮官。

士官としての矜恃がある。

千葉は無言で防衛計画のファイルを手に取り、席に戻る。

味方であり、上官と部下であり、人間同士ではあるが、敵であることがいま千葉の心の中で決まつた。

——ああつ！ クソツタレが!!

三〇分ほどの事務室でのやり取りを思い出して、再び心の中で毒づいた。

今さら遅いが、少々感情的過ぎた。

そんな事を後悔する自分にすら苛立つ。

千葉は荒々しい足取りで人気がない廊下を進み、目的の部屋へと向かう。自分が思った以上に複雑な立場に置かれていることを自覚せざるを得ない。

だからこそ竹中小隊長には苛つくが、感情を落ち着けて冷静に判断しなくてはならない。

今の遣り取りこそ重要なサインだ。

——誰かが警戒していやがる。

小隊長である竹中少尉が警戒しているのは、千葉が万代橋を爆破していることを知っているからだ。

竹中は千葉が信用ならない部下であると警戒している。

だが、どうして竹中が知っている？

中隊長である遠藤大尉が、竹中に警戒を命じたのか？

その可能性を否定出来ないが、それほど高くない。

遠藤大尉は千葉が「札付き」である事を知りながら受け入れた。

不安に思うなら、最初から千葉を取らないだろう。

最先任の門倉曹長か？

いや、門倉曹長は『S』の上杉准尉の同期で仲もいい。

上杉准尉が門倉曹長に千葉の立場を詳しく説明しており、それも引つくるめて門倉曹

長は遠藤大尉に千葉を推薦したのだ。

二人が千葉を警戒している可能性は低い。

では、それより上の指揮官か、士官か？

連隊長が警戒している？

馬鹿な。

千葉は戦闘技能が抜きん出ているとはいえ、ただの一等軍曹だ。

補充で来たばかりの下士官を気にするわけがない。

もし仮に連隊長が気にしているとしても、連隊長が中隊長である遠藤大尉を無視して、直接竹中少尉に何か命じる可能性は低い。

じゃ、竹中少尉の個人的人脈か？

否定出来ないが、千葉にとつてはそれが一番困る。本人に来るデメリットなど大したことではない。それ以外が問題なのだ。

既に四の五の言っている余裕は無い。ありったけの人脈を活用して情報入手するしかない。

千葉は迷彩柄の戦闘服の胸ポケットからくたびれた手帳を取り出し、忙《せわ》しく鶯色の防水紙をめくりながら、誰もいない当直室に入り込んだ。

夜になれば当直が常駐するが、夕方ならばまだ誰もいない。

殺風景な部屋の片隅に置かれている事務机の上にある内線電話の受話器を手荒く掴むと、手帳に書かれた内線番号を見ながらボタンを押した。

約一年振りにダイヤルした番号は、新兵の頃、寝食を共にした人物が所属する部署。その人物は帝国軍情報部のとある部署に所属する千葉の同期であり、年に一度は酒を飲み交わす仲である。

慎重にダイヤルを押して、呼吸を整える。例えどんなに急いでいようが『この手の事』は正しい手順と仁義を忘れるな。と、同期に口酸っぱく言われたことを思い出しながらダイヤルを押す。

内線番号を押し終えると、二コールもしないうちに相手が受話器を上げた。

これから電話で話すこと自体がギャンブルなのかもしれないのだ。否が応でも緊張する。

「999です」

応答した知らない男性の声は千葉が押した内線番号の一部だけを告げ、それ以上は何も言わず千葉の言葉を待った。

「二連隊三中隊所属の千葉一曹といえます。保坂二曹は居りますでしょうか？」

同期の名を出すと対応が変わった。

「少々お待ち下さい。確認致します」

そう言われて待つこと数秒。保留されていることを伝える電子音だけが千葉の耳に届く。

「——よう。どうした、千葉？ 久し振りだな」

電子音が唐突に途切れ、代わりに聞き慣れた声が響いた。

言葉とは裏腹に驚いた様子を微塵も感じさせない同期の声が千葉の鼓膜を振るわす。

「おう、お前こそ元気がよ？ どうしたとか言う割には全然驚いていないじゃないか」

砕けた口調で心に沸いた疑問をそのまま述べる。

お互いに遠慮する仲でもないのでストレートに会話が進む。

「まあ、な。九月二十七日にいきなり呼び出されて、お前のことを散々聞かれたからな。」

そういう状況に居ることは理解している」

保坂は一瞬で核心を突いた。

『九月二十七日』。

その日に、千葉は『S』の上杉准尉に万代橋爆破装置のパスワードを伝えた。

『呼び出されて』。

つまり、保坂と千葉が同期であることを知っている。

『散々聞かれた』。

その際に、千葉の個人情報収集済み。

『そういう状況』。

それは、「警戒されている」と感じる現在の状況。

あの時の事を全く話していない——それどころか、一〇〇キロ以上離れた場所にいる同期が、今の千葉の状況を正確に把握している。

同期との僅かな遣り取りで、千葉は首の後ろにヒヤリとした——まるで鋭利な刃物を押しつけられた様な感覚を味遭わされた。

それに連動したのか。何かが覚醒したように意識が集中する。

じわりと首筋に汗が浮かぶ。

何気なく投げ付けられた同期の言葉は、千葉を慎重にするには十分すぎた。

今の発言をまるで噛み砕くように一語一句考えながら言葉を探す。

もう既に、同期が発する全ての言葉は一字一句に至るまで計算し尽くされている。

そういう事をするのが仕事だ。

と、保坂から仕事内容を教えられていたことを思い出すと、千葉の背中で一筋の汗が流れ落ちた。

千葉は返事の一言を選ぶだけで五秒ほど必要だった。

「……………どこまで知っている？」

意に反して、擦れるような声が口から漏れた。

無様と感じながらも探りを入れる。

この同期が、自分にとって敵か味方か確信が持てない。

心の動揺が千葉の判断を鈍らす。

個人的には、同期であり戦友でもある保坂武司を信用しているし信頼もしている。

だが、彼の部署は日本帝国と帝国軍に仇為す者達に一切の容赦斟酌をしない。

今、千葉の側にはあの少女は居ない。

だが、あの少女の人生を決めたのは千葉だ。

言い表すことが出来ない不安が脳裏をよぎる。

自分が今、どちら側に仕分けられているかが分からない。

電話した先は『S』とは別組織である以上、上杉准尉達の人脈は碌に機能しない。

特殊部隊であるとはいえ、彼らとて万能ではないのだ。

予期しない形で思いもよらぬ死線を踏んでいることに、たったこれだけの遣り取りで思い知らさせられてしまった。

だが保坂にとつては千葉の対応も想定内に過ぎない。そして、幸いなことに彼は敵ではなかった。

保坂はわざとらしい溜息を吐き、口調を変えた。「安心しろ」と苦笑しながら、冷酷な事実を端的に告げた。

「全てだ。——『全て』知っているよ。千葉」

——俺は死線を踏んでいるのではない。もう既に踏み越えている……。

同期のこの一言で、千葉は帝国軍内における危うい己の立ち位置を強く認識させられた。

——それから数分間、保坂は千葉に様々な注意事項と、竹中少尉と彼の部署は無関係であると伝えたのち電話を切った。

「アイツはお人好しすぎる……」

保坂はそう呟いて受話器を元に戻す。

左手で疲労のため凝り気味の右肩を揉んだ。

思いつきりやると痛くて堪らないのでゆっくりと軽く揉む。

彼がいる部屋は、国防省のとある一画にある少し大きめの事務室。

事務室の入り口には名札も無ければ、部署名を記した札もない。

廊下側の扉に窓はなく、外が見える窓にはブラインドが下ろされ、外部から中が見えることはない。

さらには、そのサッシ自体が対盗聴用に特殊処理された特注製。一部の企業を除い

て、一般には決して販売されない一品だ。

部屋は事務室である割には殺風景だった。

綺麗に片付けられて、書類がほとんど見当たらない机の上。

一人につき一台割り当てられている防衛ネットワークの個人用端末のパソコン。

多くの資料が詰まっているだろう壁面書庫はこれまた一つの例外もなく閉じられて

おり、掲示物等は見あたらない。

月間スケジュールが書き込まれているホワイトボードには、一見訳が分からない数字と文字の羅列が踊っている。

だが、注意深く見ればその文字は英語と中国語とロシア語が主であることが分かるだろう。

一見、そこはまるで国防省の高級官僚である事務官や技官のためだけの部屋に見える。

実際、この部屋で勤務する者の中には文官もいた。背広を着ているので分かりやすい。

残りの三分の一は武官——軍服を着込んだ帝国軍人である。

しかも陸軍だけでなく、海軍、航空宇宙軍と全軍揃っている。

そして最後に残った三分の一は背広を着た軍人だった。

特徴らしい特徴もなく、ただの事務官に見える。保坂もその一人だ。なんてことはない。ここは国防省内で情報を取り扱う一部門。

情報本部関連の、とある部署である。

そこに属する保坂は自分の机の上に乱雑に置いた資料に目を落としたり。

それは帝国陸軍の人事資料であり、五人分ある。

しかもその内の二名——千葉と松元は古くからの顔見知りで、彼が情報本部関連に転属する前は同じ駐屯地で勤務して、仕事が終われば明け方まで飲み歩いた仲だ。

だからこそかもしれないが、千葉は——そして保坂も極めて難しい状況に放り込まれた。

まず、何よりも基本的なことから正しく認識しなくてはならない。問題点を洗い出すための土台作りだ。

第一特殊作戦団歩兵中隊先任曹長である上杉准尉と、腕は立つが特に珍しくもない下士官の千葉が接触したというスタート地点から分析する必要がある。

保坂は無精ひげがまばらに生えた下あごを無意識に左手でさすった。

何度も親指と人差し指で頬を挟むようにさする。

考えが纏まらない。

知らないことが多すぎる。

(……結局、自力で探るしかないか)

情報員としてのセンスがそう囁く。

今、手元にある資料は大した資料ではない。千葉達の基本的な事柄が記載されただけの人事資料のコピーである。

だが、それが自分に渡された。

まず、この事実を正しく認識して裏を取らなければならない。

通常では有り得ないことが続いている。

当たり前のように怪しすぎる。と、彼の本能が警報を鳴らす。

全てを知ることとは決して出来ないのだ。

情報活動とは足下すら見えない濃霧の中で捜し物をするようなものだ。

僅かな差異も見落としてはならない。そう自らに言い聞かし、緊張した面持ちのまま、保坂は上唇を舐めた。

手始めに事実関係を列挙し、相関関係を明らかにしなくてはならない――。

まず、第一に通常の任務で担当者の友人知人または親族等を調査対象とした場合はその担当者はその任務を行うことがない。

当たり前である。

調査対象との間に様々なしがらみがある人物が調べた情報が客観的事実に基づくかどうか、まずそこから疑わなければなら無くなるような情報や報告書にどのような意味があろうか。

第二に、これほど明確な問題点があるのに、それが調査対象の関係者である自分に回されてきたこと。

人が足りない？

いや、それならば担当業務を変更すれば事足りる。

動き出しは少々遅くなるかもしれないが、当てにならない情報が来るよりは——最悪、調査対象とグルだった場合は偽情報を掴まされるよりは遙かに安全確実である。

第三に、第一特殊作戦団との関係である。

特戦団と情報部は帝国軍が秘密戦を遂行する為に必要不可欠な両輪であり、常に良好な関係を保ち、各種任務の際は協力することなど珍しくもない。

それなのに、それに関係した協力者五名分の資料が今になって情報部に回ってきた。つまり、これは過去の終わった出来事では無く、現在進行中の何かなのだ。

第四に、第一特殊作戦団が千葉に接触したという事実だ。

以前に読んだ資料——万代橋爆破により発動した日本海側の一大反攻作戦である『ユキツバキ』に関する非公開の報告書では、千葉が知っている万代橋爆破装置を起動させ

るのため暗証番号の入手が必要だった。

無論、彼の上司らも知っていたが、あの当時千葉達が所属していた第一二師団司令部及び第三〇機械化連隊の上層部は『ユキツバキ』の発動を強硬に反対しており、事実その為に第一特殊作戦団は暗証番号を正規のルートで入手することが出来なかつた。

だが、彼らはそれでも『ユキツバキ』を推し進め、実行させた。

この事実から特戦団が千葉に接触したこと自体が、暗証番号入手の為の工作だ。

だから本来はもう千葉は、特戦団からすれば既に用無しだ。

第五に、千葉らに対する憎悪や復讐に対処するための可能性。

確かに千葉らに復讐心や憎悪を抱いている人物は当然いるだろう。

特に第三〇機械化歩兵連隊には多そうだ。

彼らには千葉が裏切り者に見えるはず。

さらに知ることが出来たならばの話だが、佐渡島から脱出した避難民の中にも、千葉らを恨んでいる者達はあるだろう。

親族が軍隊にいて、さらにそれが三〇連隊にいれば——千葉らの事を知っている可能性は低いが否定は出来ない。

帝国軍は人事上、基本的には可能な限り出身地の部隊に配属しようとする。

その方が、部隊としての団結が意図せずにも出来上がりやすいからだ。郷土意識を利

用した連帯感で部隊の団結力が強固になる。

あの日、『S』と千葉らが『ユキツバキ』を発動させなかったら、既に佐渡島で戦っていた一個大隊規模の戦術機部隊と駆逐艦数隻を犠牲にすることで、少なくとも一万人以上——旅客船三隻分の人員は、佐渡島から無事に脱出出来たと見積もられている。だが、復讐を防ぐのであれば千葉らを保護すればいい。

それは憲兵の仕事だ。情報部の仕事ではない。

何よりも彼らに命令を下したのは、内閣総理大臣である榊是親。

別に国防省だけでなく、内務省管轄である警察を動員することすら容易い。

しかし、その動きは絶無。

それでも、新潟攻防戦を生き残った五人の資料が保坂の手元に来た。

つまり、状況により『何か』に『化ける』のを、どこかの誰かが警戒している。

よって——。

不安材料は、これか……。

そう確信した保坂は二人のファイルを手にとると表紙をめくり、記載事項を穴が空くほど見詰め、一字一句暗記するために読み始めた。

誰が書いたか知らないが、あらすじのようなものが見えたような気がする。

この資料を情報部《おれたち》に回したヤツは、途方もなく用心深い慎重すぎる悲観

論者かもしれない。

だからこそ、油断はならない。

ここに人事資料を送った人物は、保坂が知らない情報を持ち、それで何かしらの判断を加えたから、この決定を下したのだ。

今このときも、確実に状況は動いている。

ここで俺が片付けられない場合、六人も消えることになるかもしれない――。

その可能性を胸に刻み、背筋を襲う緊張感に身震いしながら、保坂は口元を酷薄そうに歪めた。

第21話 情報統制の残滓

一九九八年一〇月一八日 一七時〇七分

新潟県村上市内の某所のバス停留所待機室

沢口絵里は神流との会話でまた言葉に詰まった。

未だに続く、絵里と神流との会話。

どう話を続けられればいいか、迷いながら相槌を続ける絵里。

神流の方は絵里の返事をそれほど期待していないのか、淡々とした口調で呟くように今までの出来事を独白している。

神流と共に下校中し、思い人についての話を切り出した。

神流の返答で、片思いの上官が死んだものと勘違いしたが、それは激しく否定された。

それから、今まで片思いの相手と一体何があったのか、カウンセリングでもするかのように聞き始めた。

何か出来なかったとしても神流の話を聞くだけで、少しはその苦痛を軽くすることが出来るのではないかと思ったからだ。

最初は歩きながらそれを聞き、バス停を見つけてからはそこにあるベンチ——田舎の

バス路線は数が少ないため、利用者のために待合室として小屋が設置されていることがある——に腰を下ろして、話を聞き続けた。

独りぼっちになった神流と千葉との出会い。

千葉と過ごした時間の断片。

そして——。

新潟市内で練り広げた、BETAとの激しい攻防戦。

片思いの相手のことも、BETAのことも、驚くことがありすぎて、何をどういつて言いのかと逡巡する。

例えば、まずBETAのことだ。

BETAに関しては日本では情報統制が行われており、軍人や政府関係者及びそれらと関係が深い一部企業や組織しか正しい情報が届いていない。

当然、絵里はBETAの姿形を知らないし、それは神流も徴兵されるまで知らなかった。

絵里が知っているBETAに関する情報なんて、噂話程度しかない。

曰く、BETAは気持ち悪い姿形をした宇宙から来た異形の生物。

曰く、BETAは鉄をも噛み砕き、戦車さえ食べる。

曰く、BETAは大きな生物で、大きいものはビルよりも大きい。

曰く、BETAは何十万という途方もない数で押し寄せる。

曰く、BETAは目に見えぬ速度で飛ぶ砲弾すら撃ち落とす。

どれもこれも地球の生物では有り得ないことばかりで、生物という常識の範疇から大きく逸脱している。

だから、絵里も噂話だと思っていた。

BETAの写真が新聞の紙面を飾ったことはない。

無論、雑誌にもだ。

TVでBETAの姿が映ったことも絵里の知る限りでは一度もない。

だが、絵里の親友である神流はその噂話は全てを正しいと断言した。

鉄を喰らい、人を喰らう地球外生物が存在すると。

ビルよりも大きい異形の生物が視界を埋め尽くし、津波のように押し寄せると。

目から光線を放ち、小山のようなサイズの巨大なBETAもいると。

彼女の親友が、それら全てが真実だと語った。

呆然とする絵里に神流は「……一応、言うけど誰にも言わないでね。これでも秘密なんだから……」と、自嘲気味に語った。

それから「徴兵されると、無理矢理ビデオを見せられるから……」と呟いた。

実戦を潜り抜けた神流は、こういうことは広く知らせるべきだと思う。

一般社会でパニックが起きるかもしれないが、実戦でパニックになって死んでしまうよりは良いと思う。

次に絵里が驚いたことは、千葉の事だ。

妻帯者で子供もいた、一回りも年上の男性。

口が悪く、暴力的。

そして、たまに優しい直属の上官。

圧倒的な戦闘技能を持ち、好戦的で大雑把な性格。

絵里ならあまり近づきたくないタイプの人物。

だけど、神流はそんな人物にぞっこん。

先ほどの神流の取り乱し様を見れば、冗談でも冷やかしの言葉は口に出来ないと思っただ。

絵里の立場で見れば、千葉は孤独な神流に手を差し伸べ、生き残る術を叩き込んだ、謂わば、親友の命を救ってくれた恩人でもある。

冷やかしたり、小馬鹿にするような事は口が裂けても言えない。

そんな人物が神流に行き先も何も伝えず、いきなり音信不通になっていると言う。

ちよつと訳が分からない。と絵里でも思った。

話を聞く限り、千葉という男性は間違いなく神流を大事にしている。

千葉の行動は保護者そのもので、黙っていなくなるとは絵里でさえ思えない。ところがある戦闘の後、千葉は完全に音信不通になった。

神流が所属していた第三〇機械化歩兵連隊に電話しても、千葉は行方不明だという返事しか戻ってこないという。

それどころか同僚たちの安否を確認しても、行方不明者が数人いる上、誰とも連絡が取れないという。

「別の任務で——」と、絵里は言い掛けたが、その言葉は途中で止まった。

神流の反論がそれを遮ったからだ。

「だって、中隊本部は千葉さんが『九月二七日の戦闘で行方不明になった』って断言した。

あの日の戦闘の後、私の目の前にちゃんといたのに……、絶対にいたのに……」

「……………」

「あるとき千葉さんが、私の名前を呼んでくれて、抱き締められて……」

思い出す、あの時のこと——。

耳元で自分の名を呼ぶ、あの低い声。

折れるほどきつく抱き締められた、あの痛み。

密着した身体に伝わる、あの体温。

あの時のことは、今でもはつきりと思い出せる。

絶対の確信を以て、神流は呟いた。

「——あれは。あれは絶対、夢じゃない。千葉さんは必ず、どこかで生きてる」

「……神流ちゃん……」

言えない——。

呟く神流を見て、絵里は咄嗟に自分が推察したことを言っただけならならぬと判断した。

今の話を聞くと、仮に千葉が死んでいたとしても時間的に不思議ではない。

確かに、神流が目を覚ましたときは生きていたのだろう。だが、神流の話では、それは先月の話だ。

その後に、出撃しないということがあり得るのだろうか？

もしかしたら、部隊の人が言った日付だって間違いがあるのではないだろうか？

断片的ではあるが、神流の話ではその片思いの相手——千葉という人物も親友のことを悪く思っていないようだが、だったら何故今も神流に連絡しない？

「……神流ちゃん。……あのさ、市役所で、その人のこと安否確認した？」

地雷をまた踏むのかもしれないと思いつながら、絵里は慎重に言葉を選びながら聞いた。

「市役所で、安否確認？」

キョトンとした表情で神流は親友を見た。

絵里は内心、安堵の息を吐き出した。

「あのね、人によつては西日本や京都に親族とか居るじゃない。そういう人たち用に親族とかの安否確認を市役所のデータ端末で可能なんだよ。完璧って訳でもないし、その人が何処にいるのかとかも全然分かんないけど、生きてるかどうかがぐらいは分かるよ」

「え、けど、西日本とか……関係ないけど……」

「データ端末が設置された当初は西日本に親族がいる人たち専用だったんだけど、帝都が落ちて——九月上旬から、身分証さえあれば、簡単な使用手続きだけで誰でも使えるようになったんだよ。ほら、私のお母さん、市役所で働いているでしょ。それで教えて貰ったの。誰だつて行方不明の親族とか居れば安否確認したいけど、京都が落ちてから国内はもうぐちゃぐちゃだし……、市役所にどうにかしてくれって頼まれても、どうにも出来ないし。それで、もうどうしようもないって、安否確認用に内務省が戸籍データの一部公開を許可したらしいの……。もう、それ以外、全国規模での行方不明者の安否確認手段がないって。名古屋より西なんて誰も調べに行けないし、国も避難所に来た人たちに確認を呼びかけているって」

「だけど、それ、軍隊関係ないじゃない」

僅かに滲む神流の苛立ち。

絵里はそれに怯まなかった。

「私が何で神流が無事だと知っていたと思う？ 田中先生に教えて貰う前から知っていたんだよ。帝国民の戸籍データだから、軍人のだって普通にあるのよ。——私でも、戦場に行ったみんなのこと」は、一応だけ確認できたの」

「——本当なの？」

ちよつと信じられなかった。神流が徴兵された頃、こんなシステムはなかった。

「うん。細かい事は何にも分かんないけど、生きているか、死んでいるのか、それとも行方不明なのかだけは、分かるよ。ただ、完璧な情報でもないから、鵜呑みにしちゃ駄目っただけで——。だけど、徴兵された親友みたちのデータは正しかったよ」

その言葉と共に絵里の表情が翳った。

神流は今日自分が行った作業を、絵里が日常的にやっていたことを、それで確信した。

「絵里……」

「あんまり、役に立たないだろうけどさ……。それでも、少しは分かるかもしれないから、やってみる価値あるんじゃないかな？」

もしかしたら調べない方が良いのかもしれない。

そんな思いが絵里の脳裏を掠める。

彼女自身調べた結果、味わった悲しみが多すぎる。

「……分かった。明日、病院行った後にでも調べてみる。ありがとう、絵里」

神流は頷きながら礼を言った。本当は不安だ。恐怖もある。もしかしたら——。と、続く想像。

そんな、止めようがない恐れ。

だけど、あの人が死んでいるとは絶対に思えない。

『——BETAは不死身じゃない。ちゃんと殺せる。ただ数が多いのが問題なんだ——』

あの人は常にそう言っていた。

唐突に思い出したあの人の教え。

あの人がBETAに負けるわけがない。

新潟のあの戦いですら、死んだ思ったあの時でさえ——。

千葉あのはもとさんは私の前に帰ってきてくれた。

その臆気な事実が神流の心を支える。

「神流ちゃん、あのさ、その後で良いんだけどさ——」

新たな決意をした神流に、絵里も新たな決意を持って語り掛けた。

「なに？　絵里」

「明日も一緒に帰ろう。市役所で調べ終わった後で良いからさ……。どうしても、明日中に渡したいものがあるんだ」

そういつて、沢口絵里は微笑んだ。

その微笑みは優しくて――。

優しすぎて――。

「……絵里……」

神流に、その先の質問を躊躇らわせた。

第22話 五十嵐上等兵と真木野たち

一九九八年一〇月一八日 一九時二〇分

帝国陸軍相馬原駐屯地 女性用浴場

真木野二等兵、高井二等兵 及び 三輪二等兵

「うわっ！ もう、ヤダ！ シャワーからお湯が出ない！」

カランに付いているシャワーから出るぬるま湯に衝撃を受けた真木野に――。

「湯槽ゆぶねの湯を使おう！ まだ温かいよ！」

たらいでお湯を汲んで素早く浴びる高井と――。

「サイテー……。お風呂一つ満足に入れないじゃない」

不平不満を隠さず呟きながらも、高井を見習い、たらいでお湯を汲む三輪。

ただ今、一九時二〇分。

浴場が閉まるのは一九時三〇分。

入浴可能時間、あとたったの一〇分。

戦闘服も下着も脱ぎ散らかして、三人は身体に巻き付けたタオル一枚で浴場に駆け込んだ。当然、こんな状況は彼女たちが望んだことではない。

原因は、千葉だ。

あと三〇分ほどすれば今日一日の訓練が終わると思つた直後、事務室から戻つてきた千葉が彼女たちの前で「気合いが抜けている」とたつた一言呟いた。

そう、たつた一言。

されど、一言。

千葉の呟きで追加の訓練が一瞬で確定。思わず上がる不平不満のうめき声。

「良い度胸だな、テメエら」と、千葉がドスのきいた低い声で呟く。

皆の前で仁王立ちしながら、ニヤリと不敵な——どちらかと言えば、残忍とも見える笑みを浮かべた。

そんな姿と声が目の前にあれば、誰だつて呻き声すらピタリと止める。

楽しみにしていた夕飯は飯盒はんごうで受け取る羽目になり、その直後から始まる体育訓練。

駐屯地の外周を走つて走つて、最終的には六キロほどの持続走。

それが終われば、腕立て伏せに腹筋、背筋、スクワットの定番メニュー。

当然、みんな汗まみれでくたばつた。

時間すれば一時間半ほどだったとはいえ、予想外すぎて目茶苦茶に疲れた。と、言うか、今からさらに疲れる。

食堂は閉まり、浴場も閉まる寸前。

ついでに言えば、彼女たちは食事はまだ取っていない。洗濯しなければならないし、食事も摂らないと行けない。

「ただ、一日の終わりである消灯時間は変わらない。

「——全く、あの筋肉班長！ ただの嫌がらせじゃない、こんなの！」

真木野が千葉への文句を言いつつ頭からお湯を浴びて、素早くシャンプーを付けて髪を手荒く洗う。

本当は丁寧に洗いたいのだけでも、そんな時間があるわけもない。わしゃわしゃと無理矢理泡立てる。

「もう、ただでさえ時間がないのに……。どうして、さらに時間が無いようにするのよ……」

高井も手早くシャンプーを泡立てる。もはや髪全体を綺麗に洗うのは諦めて、頭皮の部分だけを洗う。

手早く洗い終わると、これまた素早くお湯を浴びて流す。

「絶対、八つ当たり！ それ以外、考えられない！ あんな楽しそうな表情浮かべるなんて、絶対サデイスト！ 変態！」

三輪も同じように髪を洗うが、彼女が最も髪が短い。

さっさと終わると、化粧のボディスポンジに石鹸を擦り付けて、直ぐさま身体を洗い

始める。

「本当、あの班長さえ居なければ、もう少ししつともな生活できるのに！ 最悪！」

頭から勢いよくお湯を浴びて、シャンプーを洗い流す真木野。

髪の水を払ったり、拭いたりもせずに身体を洗うためのタオルに石鹸を擦る。

「明日も絶対、筋肉痛……。回復どころじゃないよ」

ぼやきながらも身体を洗い始める高井。

巨乳の彼女は左手で左乳房を持ち上げて、その裏を——胸と胴体の密着部分を手早く洗う。

そうでもしないとそこにあせもが出来て、結構辛い。

今使っているブラジャーが官給品のスポーツブラなので、余計にどうしようもない。

本当はまともなブラジャーを使いたいのだけでも、激しい運動と洗濯のしやすさを考えると、どうしてもスポーツブラになってしまう。

「……………。——っ!! ——私もですよ！ 腕も脚もカチコチに固くなって、

お風呂入ってマッサージしても全然消えないし」

近頃は見慣れたとはいえ、高井の胸のポリウレタンに引き込まれた三輪が内心慌てながら止まってしまった手を動かす。

ちよつと自分の胸と他の二人を見比べる。

(……いくら何でも、ちよつと不公平じゃない……)

高井は保母をしていたというイメージ通り、穏和な笑みが似合うそこそこの容姿に形の良い巨乳。

真木野はモデルしていたという言葉を裏切らない見事なプロポーション。腰とか手足とかは細いけど、実は筋肉質。けれども、痩せすぎでもない。その上、ちゃんと出るところはバツチり出ている。

三輪だつて自分自身の容姿やスタイルが悪いと思つていないけど、なんだかんだと真木野の方が胸はあるし、腰は細いし、容姿も良いし、外見はどうしたつて敵わない。

「あれ、三輪ちゃん。また、難しい顔をしてる。皺寄りすぎだよ」

「——べ、別に難しい顔している訳じゃありません。あの脳味噌まで筋肉で出来た単純ゴリラにむかついていただけです」

無理して作つた澄まし顔に、ちよつと照れ気味の言動、そこに少々の不機嫌さ。

そうすると、今の微妙に難しい表情を浮かべながら身体を洗う三輪貴子が出来上がる——ええ。ミワつちの視線、桃さんの胸に釘付けだったじゃん。ミワつちのが、小っちゃいからつて気にししちゃ駄目だよ」

言葉と共に「にししししつ」と、いつもの親父笑いを浮かべて目を細めて笑う真木野。言外に匂わす、あからさまな勝利宣言。

敢えて言葉にするならば、『桃さんより小さいからって気にしちや駄目だよ。私よりも小さいけども。くすっ』って、そんな感じ。

「そんなこと考えてないわよ！ 全く、どこをどう邪推したら、そんな結論出てくるのよ！」

「邪推も何も、事実じゃん」

そう言つては「うししししつ」と再び上げる親父笑い。

そのくせ、にんまりと両端を上げた口元で、目を細めた猫のように笑う表情が結構可愛い。

それすら、真木野は似合う。

三輪はふいっと顔を逸らした。

「そんな胸のサイズとか、自分ではどうしようもないこと、私が気にするわけ無いじゃない！ これでもCはあるんだから、十分よ」

正直、ただの負け惜しみにしか聞こえない。

「三輪ちゃん、大きすぎても肩こりして邪魔なだけだから、気にする必要ないわよ」

苦笑を浮かべる高井。

彼女にとってはこの悩みも結構辛い。何もしていなくても肩こりが酷くて、酷いときには首筋まで痛くなる。

ふて腐れた三輪に真木野がさり気なくアドバイス。

「だったら、ミワっち。その胸、男に揉んで貰えばいいじゃん」

「れ、玲ちゃん!!」

「——ぶっ!!」

素で吹いた三輪とさり気ない一言で仰天した高井が、恐る恐る真木野に視線を向ける。

「何、そんなに驚いてるのよ」

と、言いながら、真木野は言葉が続けた。

「セックスすると女性ホルモン増えるし、どうせ一人でウジウジしたって大きくならな
いし、気持ち良いし、悪いこと無いよ。あ、避妊は忘れちゃ駄目だよ。ゴムだけはちや
んと付けなないと。後悔する人、多いしね。あ、アフターピルは止めといた方が良いよ。
不確定だし」

CMにでも出てきそうな営業用のソツのない笑顔のまま、真木野の可憐な唇から生々
しい忠告が溢れ出てくる。

「玲ちゃんはどうして、そんなに露骨なのよ!」

どこをどう言っているやら、悩むことすら出来なくなつた高井が喚く。

もう悲鳴のような声で、真木野の羞恥心の少なさに嘆く。

が、当然、真木野は気にしない。

「え、だって、隠しても意味ないじゃないですか。セックスしない人間なんて、童貞と処女だけですよ」

「それはっ！……そう……、だけど、玲ちゃんは生々しすぎるの！」

ケロツと答える真木野。

モデルだった美貌とプロポーションであっけらかんと言われると、高井はこれ以上の言葉が継げない。

「破廉恥すぎるわよ!!」

首まで真つ赤になった三輪が喚く。

言った真木野より、聞かされた三輪の方が遙かに羞恥心がある。

「あのねえ、ミワっち、別に誰でも良いから胸を揉ませろって話じゃないわよ。さっさといい男捕まえるのが一番良いけど、まあ、『ちよっといいなあ』って程度の男と寝て、そいつをセフレにするのも悪くないって話よ」

「だから、セフレとか、そう言うことをのたまうのが破廉恥なのよ!! 少しは羞じらいなさいよ!!」

ヒートアップする真木野と、それを茶化す三輪に挟まれた高井は自分の両脇で行われる破廉恥な会話を止めようと思った——けれども、具体的な言葉が思い浮かばずにオロ

オロするばかり。

「やってる現場を見せろなんて、下世話な事は言って無いじゃない。何、そんなに怒ってるのよ？」

うししししつと親父笑いを、これでもか。と、浮かべる真木野。

真木野の行動の全ては、確信犯そのものである。

「怒るに決まってるでしょ！ 普通、そう言うことはこんなところで話さないの！ ここは浴場で、他にも人がいるんだから場所を考えなさいって言ってるの！！ TPOよ、TPO!!」

怒髪天を衝く三輪。

短く纏めた髪が猫のように逆立ちそうな気配である。

「なんだ、場所ね。うん、それは気をつける。女しくないとはいえ、ちよつと不注意だったね」

につこりと可愛らしい微笑み。

誰もが騙されそうになる、真木野の綺麗な笑顔。

「……わ、分かればいいのよ」

やたら素直な真木野にドギマギする三輪。

あれ、こいつなんでこんなに素直なの？

「じゃ、この話の続きは宮内に戻ったから、ゆっくり、たっぷり、ねっとりとお話ししましょうね」

色気たっぷりの潤んだ流し目で真木野が三輪の裸体を下から上へ舐め回すように見ると、三輪が怯えたようにその胸元を両手で隠した。

それはもう、なんというか危険に対する動物的な防衛本能に近い。

「どうして、あんたはそんなにいやらしい目付きでこつちをみるのよ!!」

「うふっ……嫌だなあ、貴子。私がバイセクシャルだつてこと忘れたの？ それともベッドの上で確かめてみる？」

真木野が意志の強さを感じさせる綺麗な瞳で見つめたまま、額に掛かった濡れたウエーブの黒髪を掻き上げて微笑む。

見事なプロポーションの裸体と美貌も相まって、まるで映画か写真のワンカットのよなシーン。

同性から見ても、綺麗で決まっている真木野の微笑みとポーズ。

三輪だつて、それには同意見だ。

『貴子』と呼ばれた声音にすら、ゾクツとする。

その前後の卑猥な言葉の数々がなければの話だが――。

「桃さん！ この万年発情猫娘に何か言つて下さい！」

とはいえ、本当に自分を押し倒しそうな視線に悪寒を感じた三輪は高井に泣きついた。

本能的に両手足で身を隠すように縮こまる。が、全ては無駄。

「……私に何か出来ると思う?」

諦め切つて、疲れ果てたような高井の一言。

「ひどい! 桃さん、私を捨てるなんて! まるで私が浮気しているみたいじゃない!」

真木野が何故か三輪が言いそうなことを言う。

「浮気じゃなくて、卑猥なの。冗談でこれ以上、三輪ちゃんを怯えさせるのは止めなさい」

以前ので、真木野の演技に少し慣れたのか、高井がちよつとだけ突き放すと真木野は「非道い」といつて泣き崩れた。

もちろん、それも演技。

そのまま、なんというか、よくあるTVドラマの姑に虐められた嫁のようにポーズを素早く取つて、それからジト目で三輪を睨んで一言。

「ミワっち! 今夜ベッドの上で、悶絶絶頂地獄に叩き込んでひいひい言わせてあげるから、覚悟なさい!」

「だから、なんで私を襲うのよ!!」

もう、何が何やら。真つ赤な顔で三輪が喚く。

「もう、玲ちゃん。悪ふざけもほどほどにしないと、いい加減、湯槽に浸かる時間が無いわよ」

「——じゃ、入りまゝす」

その一言で、真木野は身体に付いた石鹸を素早く流して湯槽に入る。

カラスの行水かと思うほど身体を洗う時間が無いが、如何ともしがたい。

高井も三輪もそれに続き、三人揃って肩まで湯船に浸かる。

「はあ~~~~~っ。……いいお湯。なんか、……幸せ……」

天井を見上げて高井が呟く。

この一時だけは何もかも忘れて良いのだ。

訓練も、シゴキも、罵声も、現実も、何もかも忘れて微睡みの様に心地よい一瞬。

「いい湯ですね……」

三輪もうつとりとした表情で同意する。

石鹸擦り付けてお湯で流す程度しか出来なかつたはいえ、今日一日の汗を洗い流せるだけでも十分に気持ちいい。

「桃さんも、ミワっちも、お風呂の中でマッサージしておいた方が良いでしょう。筋肉痛が軽減できるからオススメ」

そう言った真木野は、足を大きく広げて湯槽の中でストレッチ中。

股関節とかお尻周り、太腿や膨ら^{ふくら}脛の筋肉を伸ばしながら、両手で丹念に揉みほぐす。

「そんなに違う?」

珍しそうに聞く高井。

「……本当に?」

運動音痴の三輪には初耳の情報。

「全然、違いますよ」

少し痛そうだけでも、気持ちよさそうに答える真木野。

「——で、アンタたち、何時まで呑気に風呂入ってんのよ」

突如響く第三者の苛立たしいような、それと同時に呆れたような声。

一昨日の深夜に聞いた、その声に真木野たち三人は半ば反射的に腰を浮かした。

あの碌でもない手紙を持ってきた人物が再び現れて焦る。

細長い眼鏡と後ろ髪を大きな髪留めで止めた髪型で、どちらかという和学校の厳しい感じの女教師という風情が特徴的な上等兵。

「——五十嵐上等兵!」

高井が彼女の名前を呼ぶ。

一昨日の夜、就寝間際の彼女たちに千葉の非常呼集訓練開始の手紙を手渡した実戦経

験六回の上等兵がジャージ姿でデッキブラシ片手に仁王立ち。

その後ろには同じようにデッキブラシを持った三人の女の子たち——年頃はきつと一八歳行くか行かないで、明らかに徴兵された女の子たちがいた。

そんな彼女は右手をひらひらと振りながら、

「別に、今日は非常呼集訓練じゃないわよ」

と、浴槽から既に片足を出した真木野に言うと、自らのデジタルの軍用腕時計を指で示した。

「だけど、もう入浴時間は終了。さっさと出ないと、風呂場の窓を全部開けるわよ。私から、これから浴場清掃しなきゃならないんだから」

「ええくくくつ。そんな殺生な……」

真木野の泣き言は演技でも何でもなく、本音も本音。

秋ももう終わろうかという昨今に風呂場の窓を全部開けられたら、あつという間に外と変わらないほどに冷えてしまう。

「急いで出ましよう。迷惑掛けるわけにはいかないわ」

「そうですね。急ぎましようか」

名残惜しそうに高井が腰を上げ、三輪が最後にと首まで湯に浸かる。

「もう少し、入っていたい？」

「入りたいです!!」

思いもよらぬ五十嵐上等兵の問い掛けに、素直に即答する真木野。

「どうせ訓練が伸びたんでしょ？ あとで一緒に掃除するなら少し延長してあげるわ」

「え、清掃!?!」真木野の我が儘。

「了解です」三輪の即答。

「じゃ、あとのくらい入っていて良いですか？」高井の調整。

二対一の多数決で、三人の行動が決定。

「そうね、あと五分間暖まって良いわよ。出たら、すぐ着替えて更衣室の清掃やりなさい。アンタたちが入っている間に、浴場の中はやっちゃうから」

「「ありがとうございます」」

嬉しくて素直に礼を言う。

真木野たちにも仕事を手早く割り振った五十嵐は、後ろでおどおどしている新兵たちに指示を下す。

「じゃ、アンタは椅子片付けて。そつちは残っているゴミ集め。排水溝の蓋に髪の毛絡んでるから、ちゃんとそれも集めなさいよ。汚い？ 風呂場なんだから、すぐに手を洗えばいいでしょ！ つべこべ言わずにやんなさいッ！ 残ったアンタと私はデツキブラシで床掃除よ。——はい！ 作業開始!」

五十嵐は手際よく指示を下すと両手をパンパンと打ち鳴らして作業を始めさせた。

湯槽に浸かっている時に、周りで清掃されているのは何というか居心地が悪い。

「なんか、思った以上に……居心地、悪いわね……」

「もう、こうなったら入ってた者勝ちです。腹括りましょう、桃さん」

「私たちも清掃するんです。きっちり五分後から頑張ればいいんです」

湯槽の中の三人は肩を寄せ合って、ひそひそと話し合う。

「——で、アンタたちさ」

そんな三人を無視する勢いで、デッキブラシでゴシゴシと風呂場の床を擦りながら五十嵐が話しかけた。

ただし、手は遊んでいない。

丁寧な清掃とは言えないが、手抜きでもないと言った感じの動作。

「何ですか？」

真木野が素早く反応して、五十嵐のいる方へ顔を向けた。

いつの間にか五十嵐はジャージの裾を捲り上げていた。

「一班的第三組長って、あの東野とか言う不良もどきで確定なの？」

五十嵐が少々意外そうな顔で確認してくる。

理知的な雰囲気女性の女性が素の表情を出してくると、そこはかたなく可愛らしさがあ

る。

目下のところ、第一班の新兵たちを悩ます問題に真木野は天井を見上げた。高い浴場の天井。実家のお風呂では有り得ないような高さ。

——私には、まるで手が届きません。

真木野は何故か、そんな当たり前のことを呟きたくなくなった。

天井も——。

人事も——。

どうせ、届くわけがない。

当たり前のこと。

私には関係ない。

ただ自分のものであるはずの、自分の運命すらもこの手にはない。手にすることが出来ないほど、それは遠くにある。

自分のものであって、自分のものでないような、そんな現実。

「まあ、そう、思いますよねえ。………けど、事実なんですよ」

「ある意味、妥当じゃないの」

「へっ?!」「えっ?!」

「至極当然と言わんばかりの五十嵐の返答に、真木野と三輪が驚いた。

「アイツだけでしょ？ そつちの班で実戦経験がある新兵つて。だつたら、別に不思議でも何でもないわよ。まあ、私の予想は外れたけどね。第三中隊第三小隊第二班の予想じゃ、あの不良もどきか教師くずれか、半々だと思つていたのよ」

「そうなんですか……」

高井も驚くが——三人へ特に興味を示すこともなく、五十嵐はデツキブラシを垂直に立てると両の掌を竿の先に当てて、つかえ棒のようにすると頬杖を付くかのように顎を載せた。

「人望か、経験か、どちらを選ぶかつて話で、千葉班長は経験の方を選んだんでしょ。まあ、部外者からは妥当な結末に見えるんだけど、当事者の貴女たち的にはどうなのよ？」

「正直、ちよつと、なあ……つて思います」

遠慮無く、真木野が胸の内を明かす。

「どんなところが問題なの？」

そう訊ねながらも、五十嵐は部下に次の指示を下していく。

「何かを邪魔をするつて訳ではないんですけど、協調性の欠片も感じないし、打ち解けようとしてもしないから、私もまだ喋つたこともないぐらいで……。イマイチ、どんな奴か分からないこと《ルビ……》自体が嫌ですね」

「ふうん、マツキーはそうなんだ」

「——ま、まつきー!？」

「ぷっ! お似合いじゃない」

しれつと渾名を付けられた真木野が不服の意を表すが、五十嵐は取り合わずに小さく吹き出した三輪に向き直った。

「それじゃ、貴女から見たら東野ってどんな奴?」

「……よくクラスに一人や二人はいる人の輪に入ろうとしないヤツ。そんな感じですよ。それに不良というか、なんか無意味に捻くられて、物事を斜に構えているヤツって感じがあります。ほとんど話したことありませんけど……」

五十嵐は少し意外そうに三輪の回答を聞いた。

驚いたのは、三輪が慎重に言葉を選んだからだろうか、それとも東野の人物像に関してだろうか?

「結構、捻くれ者なのね。あの少年《こ》。この御時世、普通の若い男の子だったら目の色変えて女に突っ込んでくるのに、話しかけもしないなんて。もしかして、同性愛者?」
「同性愛者では無いようですよ。女遊びがどうか、男の子同士で話していましたから。ただ、男の子同士でも仲が悪いみたいで、昨夜も殴り合いの喧嘩したらしいですけど」
五十嵐の独り言のような疑問に高井が律儀に応じる。

そんな彼女に五十嵐は「そうなんだ……」というと何か難しそうな表情を浮かべて、口を尖らせた。

「そう言えば、どうしてそんなにうちの班の組長を気にするんですか？」

三輪が、遠慮がちに五十嵐に問い掛けた。

どうして、あの捻くれ者の事を、わざわざ他班の上等兵が気にするのか疑問だった。

だが五十嵐にとっては、自分の真意を理解出来ない事の方が驚きだった。

「ちよつと……。仕方ないとはいえ、鈍いわねえ。そんなんじゃ、戦場で右往左往している内に死んじやうわよ」

「……すいません」

遠慮がない五十嵐の一言は、さり気なく小さく、だが、思わぬほど深く三輪の心を抉った。

こんな些細な事で馬鹿扱いされるなんて、三輪の人生では生まれて初めての経験だ。

千葉の訓練で生まれてこの方、聞いたことも無いような罵倒を浴び続ける毎日だが、あの口の悪い班長だけでなく、少し年上の同性の先輩にまで言われてしまうと思った以上に精神的にきつかった。

当然そんな三輪の心理など、五十嵐は気にしていない。

「まあ、徴兵からまだ一ヶ月も経っていないけど、ぼんやりしていると誰も相手にしてくれ

ないわよ。気にする理由なんて簡単。東野が組長なんですよ？ 千葉一曹がいなくて、樽木三曹もいなければ、次級者の彼と調整して連携取るに決まっているじゃない」

「——え！ いぎつて時は、あいつが私たちに命令するんですか!？」

「玲ちゃん、やつぱり、真面目に考えてなかったのね」

真木野が悪夢だと言わんばかりの声上がり、高井がそれに溜息をついた。

その溜息にさらに溜息を重ねて、五十嵐はこの会話の理由を述べた。

「私も私で、二班の第二組長だからね。うちの班長と第一組長が死んだ場合のことを考えて、他の班の編制ぐらい押さえておきたい訳よ」

「——組長!？」

「すいこ」

「わあ」

三者三様の感嘆。

いくら何でも、ちよつと大げさに言われているようで五十嵐も面映ゆく感じる。

「そこまで驚かないですよ。今や機械化歩兵でも女性の班長が生まれてきているわよ」

——男が死にすぎたから……ね。

その事実は言う必要もないので語らずに、僅かに視線を逸らした。

己が肉体一つで戦場を駆け抜ける歩兵に女性は極少数を除き配属されていない。

だが、機械力のアシストを受ける機械化歩兵には確実に増加し始めていた。

ただ、ここまで何も知らないと同一小隊として共に戦う五十嵐としても不安になる。彼女としても動かざるを得ないと判断した。

無論、千葉や樽木の邪魔にならない範囲でそれを行わなくてはならない。

今の真木野達のように特別な訓練を実施している状況の他班の教育に口を出すなんて、殴り倒されても文句が言えない越権行為だ。

下手にばれたら、千葉は決して容赦しないだろう。

それぐらい、千葉を見ていたら誰でも想像がつく。

「これから余計な世話を焼くわ。いい？ アンタたちは扱かれる側だから分かっているんでしょけど、小隊規模の訓練を未だ実施していない我が小隊は、各班同士の連携も碌に取れない烏合の衆と言っても差し支えないわ。別にアンタたちだけが悪い訳じゃないわよ。私たちの班だって、多少は似たようなものよ。かといって、ただ待っていたら、いつ実戦に駆り出されるか分かったもんじゃないわ」

「……………」

あからさまに自分達が足手纏いだと言われている。

そんな気分になる事実。

そして、五十嵐が言った実戦という言葉の重みが、真木野たちの心にのし掛かる。

真木野らは五十嵐の言葉が無ければ気が付かなかった、ある事実には愕然とした。
そう。

たった一〇人で、数千数万という大群で押し寄せるBETAと戦うわけではないのだ。

皆と一丸となって戦うのだ。

だが、彼ら八人はそれに必要な最低限の技量を身に付けていないから、彼女たちは小隊規模の訓練が出来ない。

小隊の仲間たちと協力することが出来ない自分達がいる。

五十嵐の言葉も口調も優しいが、そう評価されているのだ。

自分達が未熟なために、自らの手でBETAに喰い殺される可能性を押し上げている。

そんな現実が彼女たちの胸を刺す。

「烏合の衆のまま、BETAに喰われる気なんて、私にはさらさら無いの。だから、聞きたいことがあったら何時でも私のところに来なさい。分かること、教えられることは、出来る範囲でみんな教えるわ。もちろん、千葉一曹には内緒。連携不足で死ぬなんて馬鹿らしいし、アンタたちじゃ千葉一曹とかにちよつと聞きづらいでしょう?」

「お願いします」

高井は素直に頭を下げた。

他の二人も彼女に見習う。

確かに何か分からない事があっても、千葉には聞きづらい。

聞いたらすぐに怒るといふわけではないだろうが、怒られるのではないかと思うと、それだけで聞きづらい。

樽木は聞きやすいけども、女性用兵舎にはいない。

訓練後に何か聞くのであれば、五十嵐という先輩はこの上なく心強い。

「——ちよつと話しすぎたわね。もう五分過ぎたから、貴女たちは脱衣所をやつてこつちが終わつたら、合流してさつさと終わらしましょう」

「了解」

「すぐに着替えます」

「はい」

三人は素早く湯から上がると脱衣所に向かったが、彼女らに笑顔は無かつた。

第23話 燻る火種

一九九八年一〇月一八日 二〇時〇一分

帝国陸軍相馬原駐屯地内

第二機械化歩兵連隊第三中隊 兵舎近くのトレーニング場

笠原二等兵、田淵二等兵 及び 胡桃沢二等兵

陸軍の兵舎の近くには、鉄棒や腹筋用の斜度の付いたベンチ、ベンチプレス等がよく設置されている。これは陸軍の兵士は特に強靱な肉体を任務的に必要とするからである。

特に身体が出来上がっていない兵士にとって、肉体的弱点は致命的である。

故に、その点を自覚している者は誰に言われることもなくトレーニング場に足を向ける。

新兵たちは教育期間中、訓練で疲れ果てて不意に寝てしまうか、雑用を片付けるか、それともトレーニングをするかで日々の時間を潰す。

どれも兵士にとっては重要であるが、その時その場所で何をすべきかには優先順位がある。

その観点から考えるならば、徴兵されたばかりの新兵は可能な限り、筋肉トレーニングに精を出すべきである。

だから、同じような結論に至った笠原、田淵、胡桃沢の三人はトレーニング場で腕立て伏せをしている真つ最中だった。

「……6、7、8、9、10——どうして、千葉一曹はあんな判断したんだ」

腕立て伏せの回数を数えながら、笠原が器用に愚痴る。

数える人は一〇回ごとに変わる。

「……18、……19、……20——僕に分かるわけ、……無いよ」

腕をぶるぶると震わせながら何とか二〇回目をこなす田淵。

彼の腕立て伏せは腕が少ししか曲げていない。

それでも辛いのだ。

腕力と体重が違いすぎてペースも遅い。

「……27、28、……29、30——終わり！」

彼らの愚痴には付き合わずに、胡桃沢は三〇回の腕立て伏せをし終わると筋肉の限界が来たようにごろんと芝生の上に寝転んだ。

ぜえぜえと荒い息が彼の意に反して出続ける。

次のメニューは腹筋だ。

軽妙とは言い難い足取りで腹筋用のベンチに向かう。

これも三人揃って回数を数える。

「……7、8、9、10——東野が組長だなんて」

笠原は今まで野球部で鍛えていただけあって、あつという間に一〇回という回数を終えてしまう。

「……18、……19、……20」

田淵にとって一番キツイ腹筋。笠原の愚痴に相槌を打つ余裕もない。

「……28、29、30。とりあえず、俺らにはどうしようもない」

胡桃沢は腹筋が終わると仰向けから俯せに姿勢を変えた。

これからやるのは背筋だ。

「とりあえず、さっさと終わらせよう。冷え込んできたし」

笠原の愚痴に碌に付き合う気がない胡桃沢が二人を促す。

既に日が落ち、十分冷えてきてはいたのだが、もう少しすれば「冷えた」ではなく「寒い」と愚痴を零すことになるだろう。

これには誰も異論はなく、さっさと背筋を行う。

陸に上がった魚がピチピチと跳ねるように三人揃って背を逸らして背筋を鍛える。

これも回数は三〇回。

この背筋がちよつとした休憩だったかのようになり、素早くスクワットを始める。これも回数は三〇回。

腕立て伏せ、腹筋、背筋、スクワット各三〇回を一回としたサーキットを合計三回行うのが、彼ら三人の自主トレーニングのメニューである。

回数が増えるにつれ、彼らの無駄口は減り、ただ回数を数える声だけが聞こえるようになる。

兵舎から漏れる明かりで照らされるトレーニング場には、彼ら以外にも様々な階級の兵士たちがトレーニングを行っている。

中には士官や下士官もいるのだろうが、正規の訓練ではないので服装はみなジャージなどのトレーニングウェアで顔見知りや有名人でもない限り階級など分からない。

階級が分からないトレーニング場という空間というものは、田淵としては居心地がよかった——トレーニングを別にすれば、の話ではあるが……。

自主トレーニングは、既に樽木にやるようにと言われていたし、何時始まるか分からない実戦が確実に控えている以上、生き残りたければやらなくてはならない事だ。

よつて、身体が動かすことが嫌いな田淵も愚痴を吐きつつ行っている。
胡桃沢も似たようなものだ。

彼も田淵と同じで身体を動かすことがあまり好きではない。

ただ彼の場合は年齢と社会人の経験というものが影響しているのだろう。それほど愚痴は吐かない。

もつとも彼は会話自体が少ない。

東野だけが悪い意味で目立っているが、胡桃沢だって仲間との会話が少ないという点では変わらない。

東野との違いは、見た目と皮肉めいた言葉があるか無いかである。

笠原は他の二人とは違う。

野球が好きだけあって、身体を動かすことは好きだ。

彼にとって今日のトレーニングは物足りなかった——千葉が訓練内容を変えたからであるが、無論そんなことは知るよしもない。

トレーニングが好きだけでなく、笠原は目的意識も高い。

その目的意識が、彼を努力させる。

未来のため。

人類のため。

日本のため。

社会のため。

これはBETAという異形の地球外生命体から人類を守る為の戦い。

そのために徴兵された自分。

今積み重ねている努力の全ては、その戦いに勝利するため。

そういう認識を笠原は持っている。

人類がユーラシア大陸を失い、BETAに五〇億人近く喰い殺された。

この状況で戦わないなんて有り得ない。

結末は人類が滅びるか、BETAを滅ぼすか。

二つに一つしかない。

軍隊は人類が作り上げた戦うための組織。

人類同士で戦おうが、地球外生物と戦おうが、今も昔もその点だけは変わらない。

その一員であるという高揚にも似た感情が、彼を突き動かす。

「……29、30ッ!! 終わったッ!!」

腕立て伏せも深く折り曲げることで負荷を掛けていた笠原が声を張り上げる。

これで今日の自主トレーニングメニューも終わり。

彼から少し遅れて、田淵、胡桃沢も終わり、二人は息を切らしながら芝生の上に腰を付いた。

二人を尻目に笠原はストレッチを始めた。

少ししておくだけでも効果がある。

トレーニング終了直後にやっておけば疲労が軽減できる。
笠原は腰を下ろして前屈をしながら、田淵に声を掛けた。

「先生はジョギング？」

「うん、そうだよ。東野君と一緒に走ってるはず」

田淵はまだふうふうと息を切らしながら答える。

「お前もこれからジョギングすべきだな」

胡桃沢が田淵の出っ張ったお腹を指差しながら茶化すように言うと、田淵はさも当たり前のように答えた。

「無理無理。付いていけないから、筋トレにしたのに」

「痩せる気、全くないね」

今まで散々言われてきたのだろうが、この期に及んでも痩せようという気は無いらしい。

「僕は肉塊を助ける気は無いから、いぎというとき痩せていなかったら助けないよ」
ズバツと切り捨てる笠原。

微妙に苛ついているが、田淵には分からないだろうと笠原は思っている。

第一、分かったとしても気にしない。

田淵にそれほど興味がない。

それほど興味を払うような人物でもない。

「肉塊つて非道いよ！ 好きで太った訳じゃないよ！」

田淵の言葉に説得力など皆無。

彼の場合、見た目でその全てを否定される。

「そういうえば、直談判は行つたんだ？」

二人の遣り取りなど大して興味がない胡桃沢が話題を変えた。

彼はあまり他者に注意を払わない人間で、このような事は珍しくもない。

「……門前払いでした」

湧き上がる苛立ちを隠さず、半ば吐き捨てるように笠原は答えた。

訓練が終了下後に直ぐさま中隊事務室へ向かった笠原だったが、千葉は彼に「お前如きが喋るな。まだ喋れるなら、全員訓練再開だな」と発言自体を止めさせ、樽木は樽木で「これは命令で確定事項だから、意見は受け付けない」と彼の意見は聞きもしなかった。

この遣り取りが余計に笠原を苛立たせた。

「理解出来ません。誰がどう考えたつて、先生の方が東野より上じやないですか。人格も知識も。この班を軍人以外で纏められるのは先生だけです。もし、先生が体力がないから駄目だというなら、……体力で選ぶというなら一番体力がある僕が組長になるべき

じゃないですか。まったく、狂ってるんじゃないですか、あの班長」

怒りで拳と声を震わして吐き捨てる笠原はもう二人を見ていなかった。

二人に敵意を向けるわけにはいかないので、意味もなく柵に整頓されているたくさんのダンベルを睨み付けた。

叫びだしたい衝動を、強く拳を握り、殺意を込めた視線を関係ないものに向けて抑え込む。

——こんな非常事態に、なんでこんなに馬鹿な判断ばかりしているんだ。

笠原が漠然と思っていた不満が、ここ数日ではつきりと形になった。

彼の青春の目標は、よくいる野球少年と同じで甲子園だった。

それから先の目標は国連軍に入隊することだった。

それが彼が描いていた人生の青写真だった。

当然、そんなものは破り捨てられた紙切れのように無残に散った。

彼は今まで運良く学徒動員されていなかった一人ではあった——無秩序に国民を徴兵し続けた場合、日本帝国内の経済活動が停止して帝國軍全ての継戦能力が失われてしまう為、徴兵基準に該当するものであっても召集されないことがある。

甲子園は、今年初めに朝鮮半島であった光州事件で諦めていた。

あの事件は帝國軍に大損害をもたらすと同時に、日本国内外に政治的混乱を巻き起こ

した。

最終的には彩峰中將の処刑で幕を閉じたが、BETAの日本上陸寸前まで政局は大混亂していた。

今でさえ、榊首相の強引極まりない政治手腕で反発する人々——政治家、官僚どころか軍人や民衆にまで強い反感がある。

どうせ命を賭けるなら、人類のための方が良いと思つてはいたが、それも叶わぬ夢。国連軍への道は、徴兵され、帝国陸軍に入隊したことによりほぼ閉ざされた。

出向という手段があるが、あくまでもそれは『帝国軍人』としてだ。彼が思い描いていたような『全人類の為』という訳ではない。

それでも頑張ろうと思つた。

易々と死ぬ気は無い。

殺されたくもない。

だが、これは何だ？

（——こんな判断ばかりしているから、人類はBETAに負けているんだ）
本気でそう思つた。

（どうして、第三組長が東野なんだ！ アイツ如きが僕の上なんだ！）
笠原のこの感情は疑問ではなく怒り。

理不尽な事に対する正当な怒り。

彼は己の感情をそう分析している。

不真面目で、捻くれていて、人の和を崩すような最低の人格。

間違つても人の上に立つような人物ではない。

東野が僕より優れているのは喧嘩の強さだけ。

体力だつて大差ない。

不良のくせして不思議と体力あるけど、持久力に関しては真面目に野球で身体を鍛えてきた僕の方が上だ。

射撃だつて僅かな差だが、僕の方が上。

学力に至つては比べる必要がない。

人望だつて比べる必要がない。

万人受けする性格とは言わないけれども、無闇に反感を買うような性格ではないと思つている。

(――せめて先生なら、坂上先生なら納得できたのに……)

確かに先生は体力がない。

それはある意味、仕方がないことだ。

壇上で教鞭を取つていた人物が、今度は小銃を手に取るのだ。

腕力とか鍛えているわけがない。

だが、先生は豊富な人生経験と知識を持っていて、千葉一曹と樽木三曹を別にすれば、この班を纏める事が出来る。

先生なら女性陣も円滑に纏められて、あの東野だつてなんだかんだと言つても指示を聞く。

そう。

坂上の言葉や指示は、徴兵された者たち全員が耳を傾けているのだ。

だつたら、その人物がまとめ役たる第三組長をすべきだと笠原は信じて疑わない。

それなのに、現実はどうだ？

不良くずれの東野が組長で、千葉一曹も樽木三曹も、笠原の意見すら聞きはしない。

坂上でなく東野が選ばれるのは間違いで、せめて自分が選ばれるべきだ。

自分は坂上に劣るところなど無い。

体力も、人格も、頭脳も、優れているのは僕だ。

これが理不尽でなかったら、何を理不尽と言えればいいのだ。

その思いで、その怒りで――。

身体が震え、思考が染まる。

笠原はただ無言で誰もいない、何かを睨み続け――。

取り残された田淵と胡桃沢はお互いに目を合わせて苦笑を浮かべた。

田淵も胡桃沢も、笠原が考えていることなど簡単に想像付く。

この件に関してはどうせ何を言っても聞かないだろうから、二人は関与しないことに決めただけだった。

第24話 Slice of Life

一九九八年一〇月一八日 二〇時三〇分

新潟県村上市内 直江家

「ただいま」

直江君江が職場から帰ってきて、玄關の扉を開けると同時に必ず言う一言。

「おかえり」

君江が二人の娘と交わす何気ない遣り取り。

不意に、彼女の目尻に涙が浮かんだ。

彼女の手元に戻ってきた、ありふれた日常の一コマ。

娘たちと交わす一言。

たつた、それだけの事なのに例えようがなく嬉しかった。

新潟県の北端に位置する村上市。その山間の農村部にある直江家。

今は土地も少なくなったとはいえ、そこそこ歴史のある古い農家。

君江が嫁入りした直江家は豪農の分家と言うことでそれなりの土地と屋敷を持っていたが、夫を失ってからには僅かな農地と屋敷を残して借地にするか売り払った。

そうでなければ、とても女手一つでは四人もの娘を育てることは出来なかつただろう。

他にある収入は遺族年金だけだ。

そこそこ立派とはいへ、もう建てられてから相当な年月を過ごした古い木造家屋。

年期を感じさせる柱や畳は趣おもむきがあるといへばあるが、痛んできているのも事実。

一度、土地を売ったお金で水回りや屋根等を改修しているとはいへ限界がある。

だが、今の日本ではそんなことを気にするだけの余裕がある家庭の方が少ない。

君江もご多分に漏れず、それらの事をたまに思い出すが、どうしようもないので放置するか一番末の娘に修理をお願いするぐらいしか出来ない状態である。

君江はパンプスを脱いで家に上がり、娘たちに見つからないうちに服の袖で涙を拭いた。

こんなことで娘たちに余計な心配は掛けたくない。

そう思う君江の元に足音が近付いてくる。

ぱたぱたと慌ただしく走る音。それだけで君江には誰が来たか分かつた。

「おかえりなさい！ 母さん！」

「望、何、慌ててるのよ？」

涙を気付かれていないことに安堵しながら、君江は僅かに首を傾げた。

娘たちは「おかえりなさい」とは言ってくれるが、仕事帰りの母親の鞆を受け取りに来るようなことはない。

そういうことをしたことがあるのは、次女の律子と三女の神流だけ。それもたまたにだ。

板の間をスリッパでパタパタと音を立てながら走ってきたのは、末娘の望^{のぞみ}。

中学校の制服から普段着として着ているお古のジャージに着替え、もんぺを羽織るのがいつもの格好。

耳元の少し下側で切り揃えた艶やかな髪に真っ白な肌。

別に甘え上手だからと言うわけではないだろうが、実年齢よりも幼く見える容姿。

夫が死んだ後に身籠もっていたことを知ったためか未熟児として生まれ、身体はあまり強い方ではない。

君江の前で急ブレーキを駆けて、僅かな距離をスケートのように滑って止まる。

ぴったり母親の前一メートルで止まった中学三年生の末娘は、母親に顔を寄せ、困り果てたような表情のまま小声で、だが焦りを滲ませた口調で現状を伝えた。

「お母さん、神流お姉ちゃんが、ちよつと……変」

「神流に何かあったの!?!」

大きくなりそうな声をなんとか抑える。

PTSDを抱えた三女は、今も薬剤投与とカウンセリングを継続中だ。

「ううん、パニックとかじゃ無いんだけど……」

望はどう言っているのかしばし悩んだが、良い言葉が見つからない。

自然と言葉を濁す結果になった。

「とりあえず、見て」

「……わかったわ」

望の表情と言葉で、深刻な症状ではないらしいと確認した君江は自らの気持ちを落ち着かせるために、小さく深呼吸した。

吸い込んだ空気と共に、君江の鼻腔を美味しそうな料理の香りがくすぐる。

料理しているのは間違いなく神流だ。

言っただが、末娘と三女では料理の腕は比べものにならない。

神流の料理の腕はセミプロレベルはあるのではないだろうか。

親の鼻目が多分にあるのだろうが、君江が思うほど料理が上手い。

まだ神流の状態を見てもいないのに心配しても仕方がない。

まして、神流が戦場にいるわけでもない。三女が軍隊にいたときに比べれば、遙かに安心できる状況なのだ。

「ご飯持って行くから、掘り炬燵で食べよう」

台所の奥からだろうか、神流の声が響く。

「着替えたら、すぐに行くわ」

神流の声からは深刻そうな雰囲気がない。

だったら手早く着替えてしまおうと、君江は自室に向かった。

仕事着のスーツを素早く脱ぎ、普段着に着替えると居間に向かう。襖を開けた時、丁

度神流が鍋を持って来たところだった。

「おかえり。ご飯出来ているよ」

そう笑顔で、普段着姿の神流が母親を迎え――。

「ただいま。――っ！」

母親もその笑顔にホツとして返事した直後、神流の姿を見て半歩後退った。

「冷めないうちに食べよ。望、茶碗取って」

神流は母親の驚きに特に気付いた様子もなく持つてきた鍋を掘り炬燵の上に置き、腰を下ろした。

「うん」

望は、神流が気付かないように素早く母親に目配せして、姉と同じように腰を下ろすと、何事もなかったように「――はい」と言つて茶碗を手渡した。

君江は神流をもう一度見た。

着ている服装はいつもと変わらない。家ではよく着ている色褪せたスリムのジーンズに、鶯色の手編みのタートルネックセーター、そしてセーターの上から巻いた革のベルトには一振りの大きな鉈。

それは納屋に置いておいたはずの鉈。

滅多に使わないので埃を被っていたはずのそれは、明らかに磨かれて神流の左腰にあつた。

きつと神流のことだ。

刃も研いでいるだろう。出刃包丁から刺身包丁まで一通り扱える神流は自ら刃も研ぐし、この家の台所には大方の包丁は揃っている。

無いのは牛刀などの特殊な包丁だけだ。

「母さんも早く座つてよ」

ご飯を手早くよそう神流に促され、君江も望と同じように腰を下ろして、掘り炬燵に足を入れる。

掘り炬燵を使うには時期的には少々早い、安価な木炭で効率よく暖まるには最適な暖房器具だった。

きつと少ししか炭を使っていないのだろう。炬燵の中は暖かいと言うよりは、生温かいといった感じである。

あつという間に、食卓には玄米ご飯と野菜たっぷりの鴨汁、椎茸の網焼きと野沢菜の漬け物が並ぶ。

「いただきます」

三人揃って夕飯を口にする。

しばし無言で夕飯を口に運ぶ。

ご飯の玄米は柔らかく炊いてあり食べやすく、鴨汁も肉は僅かしかないが、ガラのだしが野菜に染み込んでいて美味しい。

椎茸はきつと裏山に育てているもので、ほどよく焼けている。

君江にはこの料理は間違いなく、神流が調理したものだと分かる。

精神的に何か障害があったとしても、料理は問題無く出来るのだろうか？
そんなくだらない疑問が脳裏を掠める。

「お姉ちゃん、この鴨肉どうしたの？」

あつという間に鴨汁の入ったお椀を空にした望が訊ねた。

「ん、阿部川さんが仕留めた野鴨と鮭を交換したの。半身ずつだけだね」

望がチラリと横目で神流が腰に下げた鉈を見ながら、どうして鴨肉を手に入れられたかを訊ねるのは理由がある。

これから農産物の流通自体が減る冬期と確実に悪化する食料供給事情を考えると、入

手先の確保と、可能な限りの自力調達は文字通りの死活問題だった。

神流は数日前、近くの川で釣り上げた鮭——村上市は江戸時代以前から鮭が名産品で市内の川を鮭が遡る——と、同じ村内の猟師である阿部川さんと食料品の物々交換したのだ。

「この前、釣れた鮭は何匹だったの？」

ここのところ、自力での食料調達は娘たちに任せっきりの君江も聞く。

彼女は質問を通して、神流を観察している。もしもパニックになつて鉈でも振り回されたら、どうしようもない。

神流が自分と末娘に危害を加えるわけがないと信じているが、目に見える実物の鉈とというのは思った以上のプレッシャーだった。

「三匹だよ。下流に網が仕掛けてあるから、滅多に上流には来ないね。釣れたのは塩引きにしてるから、ちよつと待つてて」

少し苦笑しながら神流は答えた。

下流の魚網を逃れた鮭を狙ったのだが、やはり上手くはいかないらしい。

丸一日費やしても三匹。これを多いと見るか、少ないと見るか。

今の神流には病院に行くか、農作業等を行うか、家事をするぐらいしか出来る事がないので一日を丸々釣りに費やすことが出来る。

おかしいところは何もないように感じる。

君江は三女にどうして鉈を持ち出したのかを問うことに決めた。

「ありがとう、神流。……ところで」

「——鉈のこと？」

先読みしていたかのように神流が質問を遮る。

それから彼女は少し寂しそうに目を伏せた。

諦めに似た表情。

妹の望はこのやり取りに少し驚いた。

姉は自分の勝手な想像と違い、ちゃんと自覚症状があった。

だったら、どうしていつまで鉈を腰にぶら下げているのか分からない。

鉈を使うのは農作業か薪割りくらいだ。

「そうよ、鉈のこと。……食事の時にまで持ってくるものじゃないし、第一、今は必要ないでしょう」

「……普通、そうだよね」

そう呟き、苦笑した神流は腰の鉈を外して後ろに置いた。

何故か名残惜しそうに手を放す。

その表情は別れを悲しむようで、君江には訳が分からなかった。

「神流、どうしたの？ 鉦を使うとか、そういう事じゃないけど。今までそんなこと一度も無かったのに、どうして？」

箸を止め、君江は優しい口調で問い掛ける。

神流は何か言おうとして顔を上げ、口を噤み、また俯いた。

望はわざと食事に集中した。

姉にも母にも気にしていないよ。と、演技でする。

暫くして、神流は理由をぼそぼそと述べ始めた。

「ちよつと、ある人の言葉を思い出して……」

とても言い辛そうに言葉を濁し、無言になる。

言うのを止めた三女が再び喋り出すのを、母は無言で待った。

しばらくして、君江は三女が戸惑うのを意に介さずに、自分の心の内の正直に語った。

「今さら多少のことがあつたつて、驚かないし、騒がないわよ。神流が帰ってきただけで十分驚いたし、嬉しかったんだから。大丈夫よ。神流が思っていることを教えて」

「そうだよ、神流お姉ちゃんも帰ってきただけで凄いなだから」

「望!!」

母の声で、妹の顔が一瞬で青ざめた。

「うわ！ ごめんなさい！ 他意はないんだよ、変な意味で言った訳じゃ……」

「『凄い』だなんて、無神経な言葉使して！ 他のご家族のことも考えなさい！ いつもそんなのだから、何気ないときに口を滑らすのよ！ 壁に耳あり障子に目あり！ 役に立たない諺は、諺になって無いのよ！」

「……………ふえええつ……………」

望の不謹慎な言葉を聞き咎め、君江の説教が始まる。

徴兵される前は、いつもの様に聞いていた、いつもの遣り取り。

甘えん坊でお調子者の妹が、母に失言を咎められ叱られる。他愛もない会話。

そんな遣り取りから数秒後、神流は口を開いた。

直ぐさま、君江も望も口を閉じて、神流の言葉に耳を澄ました。

「……………いつも怖かったの……………。一人になると、物陰とかに、……………もしも、BETAがいたら、どうしようって……………」

「神流お姉ちゃん……………」

望が心配そうに呟くが、神流はそれに言葉を返せなかった。

「みんながいるから、大丈夫だつて……………、分かつては……………いるんだけど……………。暗くなったり、物音がしたりすると、どうしても……………BETAがいるような気がして……………、怖くて……………。銃も何も無いから、勝てるわけ無いって分かつているんだけど……………」

君江が心配そうに神流を見るが、俯き始めた神流にはその表情は見えない。

「……だけど、諦めたくなくて……」

神流は諦めたくない。

生きることを諦めたくない。

「——みんなで！ みんなで戦えば、きっと大丈夫だよ！」

「無理よ！ 男の人が何十人いても、素手じゃ絶対に勝てない！ 武器が無ければ、無理なの！ たった一匹すら殺せないのよ！」

励まそうと発した望の言葉を、神流は反射的に激しい口調で切って捨てた。

無意識に滲み出る生還者の切迫感。

それが和やかな食卓の雰囲気を一瞬で塗り替えた。

大の男が一体何人集まれば素手で戦車級が殺せる？

一〇人？ 二十人？ きつと三〇人でも、まだ足りない。

それだけ集まっても、戦車級一匹すら素手では殺せない。

武器になるような道具——斧や包丁を持ったとしても大差ないだろう。

生物単体として見た場合、それだけの格差が人間とBETAの間にはある。

「……お姉……ちゃん、……ごめ……ん……なさい……」

善意で発した言葉は、敵意すら感じる言葉で切り捨てられた。

姉の言葉に傷付いた望は、涙声で小さく謝るだけで精一杯だった。

自分では想像すら出来ない地獄を生き残ってきた姉の言葉は、BETAの姿すら見たことがない望には反論が出来ない鋭さと迫力がある。

望は人間が生きながら喰われるという地獄のような光景を真面目に想像したことがない。

そういう凄惨な光景は想像しようと思つて出来るものではない。

自分が想像出来ないような地獄を生き抜いてきた姉に、掛ける言葉を失つた妹は口を噤んだ。

神流は生きたまま喰い殺された親友の返り血を浴びて、それでも生き残つて此処にいる。

彼女として、妹の真意には気付いている。

だが、現実を知らない発想と言葉に苛つき、反射的に言葉が出た。

「ごめん、望……」

神流が、泣き出しそうな雰囲気ですら望に謝るが、妹は首を振った。

——謝る必要なんて、ないよ。

望の声にならない声。

余計な一言で姉を傷付けたと萎縮した妹は、俯いたまま顔を上げなかった。

神流には垂れ下がった前髪で望の表情は見えない。

ただ、彼女はもう一度だけ「ごめん」と謝った。

「神流……」

君江が三女を落ち着かせようと思つて名を呼ぶが、神流は何も知らない妹に当たつたことを後悔出来るほどには落ち着いていた。

「……でもね、ある人が教えてくれたの。諦めなければ、生き残る可能性があるって……武器になるものは、何でも使えつて、教えてくれたの……。戦えば、生き残る可能性はゼロじゃないって。生き残れる可能性があるって……。その言葉を思い出したら、居ても立つてもいられなくて、家中探して鉞を見つけたの。鉞一本《これ》で勝てる訳ないけど——」

BETAに鉞一本で勝てるわけがない。

その現実には、神流の心身に親友たちの血と悲鳴と共に刻まれている。

「——だけど、何もしないのは、もつと嫌なの！」

神流の心にある生き残ろうとする意志。

誰にでもある生存本能。

神流のそれを、母親である君江が見たことも感じたことも無いほどに強くした『ある人』。

娘が言う『ある人』とは誰なのか、それは直ぐに分かった。

神流が入院した事実を、真夜中に電話で伝えた『あの男』。答えを導き出したのは、母として、また女としての直感だった。

神流は家族に今まで一度も千葉のことを話したことがない。

戦場からの手紙でも千葉という名前を書いたことがない。

気になる人がいるとは書いたことがあるが、詳しいことは一切書いていなかった。

手紙はいつも、生きているうちに母と姉妹に伝えたい言葉の数々で埋まっていた。

それでも、君江はあの不快な人物以外あり得ないと確信した。

「神流にとつて、^{それ}鉦はお守り?」

神流は少しぎこちなく、だが即座に首を縦に振った。

「……分かったわ。持っても良いわよ。ただ、街に行くときは駄目。犯罪者だと思われてしまうわ」

神流は、これにも首を振って同意を示した。

君江は娘のために、ここは妥協すべきだと感じた。

まさか鉦がお守り代わりになるうとは思ってもいなかったが、神流がそれで安心できるならば安いものだとも思う。

明日は神流とともに通院し、主治医に相談しなければならぬとも心に留める。

今日はこれ以上、この件に関して話すべきではない……。

君江は僅かな焦りすら伴って、そう判断した。

下手に戦場のことを思い出しすぎて神流がパニックになってしまつては、一人で出歩くようにまで回復したのが全て無駄になつてしまふ気がする。

主治医にも無意味にトラウマを思い出させるようなことはするなども、釘を刺されて
いる。

だから、もうこの話題に関して何も話させる気は無い。

強引にこの話題を終わらす。

「——あと、神流、望に謝りなさい。言い過ぎよ。望、いつまでもくよくよししないで。ちやんと、ご飯食べなさい。神流がせっかく作つてくれたのに冷めてしまふわ」

「ごめんね、望」

「ううん。私こそ、ごめん」

神流が望の頭を優しく撫でると、望はその手に触れ、ゆつくりと握つた。

お互いに何度か強く握り合つたのち、二人の手が離れる。

俯いていた顔を上げた望が自らを励ますように勢いよくご飯を食べ始め、神流は無言で妹の空になつたお椀に鴨汁のお代わりをよそつた。

多少のぎこちなさはあるものの、食事を再開する三人。

徐々に戻り始める、家族の団欒。

だが、君江は何故か言い様のない不安を抱えたままだった。

第25話 星に願いを

一九九八年一〇月一八日 二二時四一分

帝国陸軍相馬原駐屯地内

第二機械化歩兵連隊第三中隊 営内隊舎3Fの非常階段に設置された喫煙所

東野二等兵 及び 坂上二等兵

点呼が終わり、消灯ラッパ一日の終わりを待っただけの僅かな一時。

思い思いの感情を胸に、今日も帝国陸軍の愛煙家たちが設置された灰皿——と、言つても、小さなバケツのような、空き缶再利用の灰皿——通称『煙缶』の周りに屯する。

その中には、もはや当然のように東野と坂上の姿がある。

意外なことに第三中隊第三小隊第一班の中で喫煙者は少なく、千葉と坂上、そして東野しかない。

東野は未成年だが、坂上が何度注意しても吸うのを止めない。

坂上として、その気持ち分からないでもないが、教師としての性か、注意することが半ば条件反射に近い。

それを無視して煙草に火を付けるのは、東野の不良としての条件反射と言って良いの

だろうか。

このままお約束事にでも成りそうな、会話を交わし、時間が無いことに気付き、お互いの紙煙草に火を付ける。

そして、東野は笑い、坂上が付き合う。

坂上はそんな自分に呆れながらも、今日も喫煙所で煙草を吸う。

煙草は安くはないが、手に入らない商品でもない。

今日一日を頑張った自分に対する御褒美が一本の紙煙草。

許可がなければ酒が飲めない兵舎内では、ストレスはただ無尽蔵に溜まるだけ。

自分で何かしらの発散方法を見つけないければ、ストレスでおかしくなってしまう。

かといって、何でも出来る訳じゃない。

そうなるも自然と、煙草というものが重要になってくる。

そうでなければ、わざわざ国から嗜好品として兵士に煙草が支給されるわけがない。

この煙草の価値というのは嫌煙者には分からないものだろう。

だが、喫煙の価値を知っている坂上と東野は、ある意味それを共有しているが故に、今夜も昨夜と同じように煙草を吸っていた。

見上げれば、今日も満天の星空。

山から吹いてくる肌寒い風も昨日と変わらない。

ただ満月が少しだけ欠け、日付が違うことを形で示している。いつの間にか、喫煙所にいるのは二人だけ。

高校を中退することを選んだ不良もどきの少年と、大学卒業以来教育一筋で生きてきた高校教師。

徴兵されなければ言葉を交わすことがなかったであろう二人が、非常階段の踊り場に設置された狭い喫煙所で紫煙を曇らす。

(ここのうのが運命というべきなのだろうな。絆か……)

坂上はそう思うが口にしない。

(面白れえな、まったく。こんな時でもなければ、こうならねえけどな……)

東野は手すりに身体を預け、煙草を吸う。

無言。

共に無理に話す必要はない。

ただ東野の胸のあることを確かめたいという欲求が彼の口を開かせた。

「——先生。先生は俺の命令をちゃんと聞くのか？」

不意に出た、東野の問い。

唐突すぎる出し。

急に始まる会話に坂上は苦笑を漏らす。

「いつものように唐突すぎるな。東野は本当に普通の会話が苦手だな」

先生と言われているからか、坂上の口調が生徒と接していた時と同じになる。

「いいんだよ、別によ。どうせ二人しかいないんだから、言う必要ねえだろ」

「急に言われても困るよ」

そう言う割にはさして困っていない素振り、坂上は煙草の灰を煙缶に落とす。

「で、どうなんだよ」

東野の僅かな苛立ち。

焦りと不安がモザイクのようになった感情。

それを飲み込むかのように紫煙を肺に吸い込む。

「よほど、馬鹿なことと言わない限りは、ちゃんと聞くけどね」

特に気負うことなく、答える坂上。

一〇歳以上も年下の東野が命令を下すことにさして驚いた様子も、不快な様子もなくあつさりと答える。

「……先生なら、そういうだろうと思ったよ……」

諦めたように、そして半ば呆れたように応じる東野に、坂上は苦笑したまま答えた。

「どうせ、上官には年下が沢山いるんだし……。そんなのに驚いていたら、これからの軍隊生活がやっていけないよ」

三十超えてからの軍隊生活。

去年入隊した青臭いガキさえ、坂上より階級が上だ。

そこには個々の都合は一切無い。

資格も実力も経験も年齢も関係ない。

階級の差があるだけだ。

坂上だつて達観するしかない。

東野が紫煙を深く吐き出す。

「そりゃ、そうだった」

帝国陸軍幼年学校から配属された人間に至つては一八歳で軍曹。

東野の年齢ですら、年下の上官が存在する。

「——やっぱり、気になるかい？ 君でも」

苦笑混じりの問い掛け。

「気になるに決まつてんだろ——」

自棄気味の返答。

苦々しい表情を浮かべ、唇の端から吹き出すように紫煙を吐き出す。

「そりゃ、よ——」

彼とて自覚しないわけにはいかなかった。

徴兵された八人の中で、彼だけがたった一回だけとはいえ実戦経験がある。

その上、徴兵されたのも一ヶ月ほど早い。

階級こそ同じだが彼の方が先輩であり、軍隊では同階級ならば先にその階級に任官した者が指揮を執ることになる。

だから、千葉の決断は規則通りという一面もある。

が、東野はそう思っていないかった。

彼は自分たちをしょっちゅう殴るあの班長が、規則や命令を遵守する人物とは思えないと感じていた。

——間違いなく、実戦経験を最優先してやがる……。

徹底した現場主義。

東野が千葉から感じるのはそれだ。

「——覚悟はしてたさ」

それを投げ出したくて、空を見る。

見上げた夜空で輝く星々。

彼の思いは決して届かない。

東野は無言で星々を見つめた。

たった一回の実戦を思い出す。

視界を埋め尽くす、夜空に煌めく星の光。

誰かの命の灯火のように感じる錯覚。

碌な遺体すら残らなかつた同期たち。

その小銃班でたつた一人生き残つた東野は、頭数を揃えるという理由で、第二機械化歩兵連隊に転属させられた。

本人の意志など関係ない。

それが命令で、それが軍隊だ。

僅かばかりに残っていたはずの仲間との絆は、ぶつつりと切れた。

なんとなく感じる感傷。

哀愁。

だが、東野はその感情をどう言い表すか知らない。

彼にはそんな知識がなかった。

「それでも、もう実戦経験者だしな——」

対BETA戦を怖くないと思うのは無理だ。

もう一度、あの場所に立つ。

ぶつちやけ、怖くてたまらねえ。

そう考えると、あの班長は“化け物”だ。

口にはしないが、そう思う。

現実の恐怖を知らない、あれは分からない。

そう考えれば考えるほど、今のお気楽な仲間たちには反吐が出る。

明日死ぬかも知れない現実を何も分かっちゃいない。

例外は先生だけだ。

田淵は舎弟だ。

あれも別。

先生はどんな筋かは知らないが、それでも、それをあの班長相手に通そうと頑張っている。

田淵は素直にびびってる。

死ぬかも知れない実戦にびびってる。

俺を頼ってくる人間見捨てるほど、落ちぶれちやいねえ。

だから、舎弟の面倒は見る。

他の奴らは、どうでもいい。

興味ない。

笠原のヤローには苛つくだけだ。

どうせ、BETAと一回戦えば半数以上は入れ替わる。

覚えるだけ、無駄だろ。

俺だって、初陣じゃ小便ちびった。

漏らさなかったのは、ただ単にそれ以上出すのがなかったからだ。

勇ましいこと言っていた奴らはほとんど死んだ。

ビビっていた奴らもほとんど死んだ。

仲間が半分やられて、残った奴と逃げながら弾撃つてまくって――。

その途中、砲弾が近くに落ちて、吹っ飛ばされて――。

気が付いたら、みんな終わっていた。

BETAは一匹も生きちゃいねえ。

でかい肉片となって、転がっていた。

仲間もみんな生きちゃいねえ。

細切れの肉片になって、散っていた。

現実感が失せた目の前の惨状に、意味不明の叫び声を上げて腰を抜かした。

目が覚めたときには、戦いはとうの昔に終わっていやがった。

そんな惨劇の中でも軍人達は働いてる。

工兵や衛生兵、それとまだ元気な歩兵がゴミ拾いをするのを呆然と見ていた。

その三時間後には、俺も一緒にゴミ拾い。

何もかも麻痺した中で、誰のしか分からん遺体と囁かれた金属片を拾い歩いて、野積みにしたBETAを燃やす。

涙の一つも出やしねえ。

本当に心には何もなくなつて、それを集めた。

泣いたのはその日の夜、たった一人で寝たときだ。

昨日まで一〇人いたのに今は一人。

無人のベッドを夏の夜空に煌めく星々が照らした。

悩んでも、大した意味は無い。

悩んでも、現実は変わらない。

「——まったく、大したことねえよ」

声に出して、東野は自らに言い聞かす。

視線を夜空から足元に戻す。

長くなった煙草の灰は、そのままコンクリートの床に落として足で散らした。

視線を下に向けたまま、東野は聞いた。

「死守しろつて言ったら、さ……。正直、守る気あるか？」

二本目の煙草を口に咥えた坂上は、急な質問に驚かなかつた。

坂上が口に咥えた煙草を離し、東野は手に持つ短くなった煙草を吸った。

「それが子供の明日に繋がるのならば、喜んで守るよ」
躊躇いの無い、坂上の返答。

その言葉を裏付けるような、坂上の力強い視線。
彼が言う「子供」とは教え子のことだろうか？

それとも血を分けた実子だろうか？

東野には分からない。

ただ、彼は煙草を啜えたまま唸った。

唸りながら、右手でボリボリと荒々しく頭を搔く。

形容する言葉を持たない東野の複雑な感情を示すかのように、低くとも弱々しいとも苛立たしいとも受け取れる唸りは、紫煙と共に彼の唇から漏れた。

その後、肺に残った僅かな空気を溜息として吐き出し、煙草をもう一息深く吸って、三度夜空を見上げる。

昨日と同じ、満天の星空。

遠くに見える工場と、街の明かり。

それらが微かに東野を照らしている。

肺に詰めた紫煙を吐き出す。

「——本当、俺には向いてねえよ。組長なんざ……」

「君なら、出来るさ」

「言うだけなら、簡単だよな」

「……まあね」

東野は夜空を見上げたまま、坂上が肩を竦めたのを感じた。

「だけど、もうみんな一蓮托生なんだよ。君も笠原君も、そして千葉一曹もね。だからこそ、皆で協力し合わなければならぬんだ」

「また、その話かよ……諦めわりいな……」

彼らの会話は、もう暫くだけ続く。

坂上と東野が煙草を吸っていた時、事務室ではいつものように千葉と樽木が残業中だった。

千葉が防衛計画を書き記したメモを見ながらパソコンを打ち込む。

実際に出撃した際に使用する各種情報や必要事項を自らの情報端末で見れるようにする地道な作業。

以前の第三〇機械化歩兵連隊と第二機械化歩兵連隊では、任務や担当地域が違う。基本的事項は変わらないため打ち込まなくていいが、部隊毎に割り振られている周波数や呼出し符号、受け持ち担当地域の地図等などの変更事項もあり、結構な量がある。

小隊長である竹中中尉が千葉にデータを渡さない以上、千葉は睡眠時間を削って打ち込むしかない。

ついでに言えば、樽木も貰えていない。

千葉も一時、他の班長から回して貰うことも考えたが、それはそれで苛つく。

どうせ、自分が使いやすいようにカスタマイズした方が良くと考え、夕方の出来事を思い出しては苛々しながらキーボードを叩く。

「全く、あいつ等本当に根性ねえな」

今日の夕方、八つ当たりと自らの筋トレを兼ねて行つたトレーニングを思い出しながら愚痴を零す。

無論、あいつ等とは真木野たちのことだ。

「流石にそれには同意しかねます、はい」

きっぱりと正面の事務机で作戦地図を広げていた樽木が異議を唱える。

新兵たちは徴兵からまだ一ヶ月も経っていない。

そのことを鑑みれば、充分頑張っているのは事実である。

「以前の部隊じゃ、マンツーマンで教えたんだがな」

『そんな事は理由にならない』と言わんばかりの千葉の口調。

露骨に顔を顰めてみせる。

「うへえ!! その新兵、まさか、自殺とかしていませんよね!」

樽木が素で驚いて心配した。

彼ですら新兵として千葉にワンツーマンで教育を受けるとしたら即座に断る。

「馬鹿言うな。一七の小娘がちゃんと耐えきったぞ!」

驚かれたことに驚いた。と、言わんばかりに千葉が言い返すと、今度は樽木が椅子から腰を抜かして驚いた。

「いや、絶対、その娘がおかしいですよ!」

「——なにツ!!」

間髪入れずに注がれる千葉の怒気籠もる視線と怒声に樽木がびびる。

「——うわっ! ごめんなさい! すいません! いきなり怒らないで下さいよ!」
睨まれる居心地の悪さから、樽木は露骨に視線を逸らした。

用もないのに、事務室の窓から夜空を見上げる。

そんなとき消灯ラッパが鳴り、駐屯地中の灯りが消えた。

千葉が樽木を怒鳴った時、新潟県村上市の直江家では神流が布団の中で寝返りを打つた。

今夜は何故か、目が醒めて眠れない。

退院してから、彼女はいつも実家の二階の和室で母親と一緒に寝ていた。悪夢にうなされる神流のために君江と一緒に寝ることにしたのだ。

そのお陰か悪夢にうなされる回数は以前に比べれば遙かに減り、神流はその他にもいろいろと介護してくれる母に感謝していた。

その母は隣の布団で静かな寝息を立てている。

隣に生きている人がいるだけで安心する。

今日は田中先生と再会し、絵里に励まされ、望と母に助けられた一日。

恩師の優しさ。

友達のいたわり。

家族の温もり。

「——ありがとう」

神流はそう呟きながら、布団の中から夜空に煌めく星を窓越しに見た。

——あの人も……どこかで、この星空を……見ているかな。

同じ空、同じ時、違う場所。

一筋の流れ星が、夜空に流れて消えた。

それは東野と、樽木と、神流の視界に焼き付くように軌跡を残して消えた。

幻のような一瞬の煌めき。
それが彼らの心に残る。

「流れ星か……」

東野が訳もなく呟く。

「何か祈るかい？」

坂上は煙草を揉み消しながら聞く。

「先生こそ、何を祈るんだよ？」

東野に質問を質問で返されたが、坂上は即答した。

「世界平和」

はつきりとした口調。

東野には嘘くさい、信じるだけの価値を見いだせない単語。

自分には信じられないが、だが坂上の言葉に嘘を感じることもない。

だから、彼は何も考えず相槌を打つように呟いた。

「そっか——」

東野はそのまま流れ星が消えた夜空を見つめ続け——。

「——お、流れ星！ 千葉一曹なら、何を祈りますか？」

ちようどいい話題のネタが天から降ってきた。と、言わんばかりに樽木が千葉に問い掛ける。

『何を祈りますか？』

思いもよらぬ問い掛けに、千葉は言葉に詰まった。

走馬燈のように思い出す、さまざまな顔。

中国大陸で共に戦った戦友たち——無数の同期、先輩、後輩、上官、部下。

新潟で散り、新潟で分かれた戦友たち。

舞鶴攻防戦で戦死した弟夫婦。

妻の故郷——舞鶴で死んだ義父母と姪たち。

京都撤退戦で文字通り、塵一つ残さずに蒸発した弟。

自らの決断で突き放した少女^{かなな}。

そして、舞鶴から戻ることが出来なかった最愛の妻と幼い娘。

走馬燈^{それ}は、無理矢理封じ込めた千葉の願望の数々。

だが、千葉はそれを自覚していながらも殺意と憎悪でねじ伏せる。

「——さあな。今さら流れ星に祈ることなど、何も無えよ」

千葉は、今は亡き最愛の妻子に復讐だけを誓い——。

千葉のことを考えてた神流は、感傷に浸るように思いを馳せた。

あの万代橋爆破の少し前に、千葉は神流に告げた。

『直江。今の俺には女房も子供もいないぞ。二人とも先に逝ってしまった』

——あの人には、きつとこの温もりすらない。

神流を包み込む、家族の温もり。

今も忘れていない最愛の奥さんと子供さん。

きつと、あの人が一番大事にしている、護りたくて、失ってしまったもの。

二度と見ることも、触れることも、叶わない現実。

例えようのない喪失感。

千葉と神流が共有する、悲しみの感情。

千葉のそれを思うと、とても悲しくて、切なくて、涙が溢れた。

夜空に現れ、一瞬ひとまたたきする間に消えた流れ星。

もう見えぬ流れ星に神流は祈った。

どうか、あの人に——。

あの人にもう一度、逢えますようにと——。

第26話 第一戦術機甲連隊第三中隊、前哨基地展開完了

一九九八年一〇月一九日 〇七時二九分

長野県飯山市内 帝国陸軍第一戦術機甲連隊第三中隊 展開地

達磨の如き面相と鋭い眼光、そして筋肉質な体躯が特徴的な帝国陸軍第一戦術機甲連隊第三中隊長の村田大尉は、飯山駅近くの公園と駐車場等に展開し終えた自分の部隊を眺め、僅かではあるが安堵した。

彼の視界の中には八七式自走整備支援担架にジャッキアップされ、完全武装済みの不知火一二機が立っている。無論、全機出撃可能状態である。

全長一八メートルにも達する巨大な戦術機を運搬可能な支援車両は特大のトレーラーであり、国内を移動する際には通行可能な道路の関係で交通統制がし易く、スムーズに移動できる夜間に移動する事が多い。

前日の夕方の一八時ちようどに練馬を出発した第三中隊と整備部隊の計一七両の車両が、飯山に到着したのは日付が変わった深夜二時過ぎである。

彼らは到着直後から展開地域で出撃準備——トレーラーに積み重ねられていた一二機の不

知火の跳躍ユニットを取り付け、突撃砲を兵器架に装備させると、あつという間に朝五時を過ぎていた。

続いて、寢床の準備も終わらせ、部下達には逐次仮眠を取らせている。

彼自身と言えば、全般事項を指揮しながら原隊の第一戦術機甲連隊本部と、今回の配属先である増強第四八戦術機甲連隊団本部に出撃準備完了の報告をした。

後は長距離移動で疲れた部下達にちゃんとした休養を与え、心身共に万全の状態に持つて行くことが、彼の義務である。

幸いなことに、近傍のある温泉旅館を休憩所兼仮眠所として帝国本土防衛軍が借り上げているので場所に困ると言うことはない。

一個小隊を即動用に機体近くに建てた指揮所天幕と仮眠用テントに待機させ、それ以外は温泉旅館で休憩させる勤務割りで特に問題は無い。

佐渡島ハイヴから飯山までは結構な距離もあり、旅館で寝ている衛士を起こしてからも出撃は十分間に合う。

そういった意味では、さほど厳しい任務ではない。

——とはいえ、こここのところ佐渡島ハイヴへの間引きがのう……)

村田はそう心の中だけで呟き、無精髭が生えた顎を指でさすった。

九月二六日から九月三〇日までの間、実施された日本海側BETA殲滅作戦『ユキツ

バキ』は佐渡島にいた一般市民約一二万人の犠牲とその救助の打ち切りともに大成功を収めた。

佐渡島にBETA上陸時にいた日本帝国国民は約一五万人。

その内、救助できたのは約三万人。『ユキツバキ』の実行をあと四日延ばせば、少なくとも一万人は救助できたと噂されており、榊首相に批判的な議員は既に議会でその責任を問ひ質している。

しかしながら、佐渡島以外の本州日本海側にBETAがほほいないという状況は、それをマスコミに無視させるだけの価値があった。

では、村田が心配することは何であろうか？

五日間に渡って実施された日本海側BETA殲滅作戦『ユキツバキ』には、綿密な計画の元で始まった作戦ではなく、どちらかと言えば、なし崩し的に始まった作戦である。

確かに統合参謀本部も東部方面軍及び国防省も『ユキツバキ』の計画を了承しており、一〇月一日を以て実行する予定だった。

だが、実際に作戦が発動したのはそれより五日も早い九月二六日。

確かに『ユキツバキ』の主力となる第一軌道降下旅団及び帝国航空宇宙軍は作戦準備を既に完成させており、これらの部隊に関しては問題がなかった。そうでなければ、作戦自体が崩壊していたであろう。

まず、第一の問題は帝国陸軍と日本帝国議会との関係悪化である。

それは帝国陸軍と航空宇宙軍との信頼関係にすら、深刻な影響をもたらしていた。

今回事前に作戦準備を済ませ、さらに『ユキツバキ』を強引に前倒しする為の榊首相の工作を知っていた航空宇宙軍は何ら問題無く作戦準備を完了させていた。

そうでなければ、彼らが『S』からの現地情報で軌道降下作戦を実行したりしない。

だが陸軍の——特に日本海側でBETAと戦っていた主力である東部方面軍第二師団には、その情報の最も重大な部分は伏せられていた。

統合参謀本部が関与していると言うことは、榊首相の工作に関する一部の情報は当然、陸軍参謀本部にも伝わっている。

何よりも、榊首相と統合参謀本部の意向を受けて動いた国防大臣直轄部隊『S』は、陸軍の部隊であるため様々な情報ルートが元々存在する。

つまり、榊首相と統合参謀本部は、帝国航空宇宙軍には十分な情報を与えておきながら、最前線で身を挺して戦う帝国陸軍——特に第一二師団を故意に『裏切った』のである。

第一二師団司令部には『ユキツバキ』作戦開始日を一〇月一日と伝えており、それ以外の情報を一切伝えていない。

この影響は想像以上に大きく、特に最前線である新潟市内で激戦を繰り広げていた第

三〇機械化歩兵連隊長と第一二師団司令部の士官数名が統合參謀本部に猛烈な抗議をした。

第三〇機械化歩兵連隊は本当の作戦を知らないが故に、幾度となく佐渡島からの避難民を守ろうと、新潟市内の「みなとトンネル」から光線級殲滅を目的とした突撃を繰り返した。

その結果、同連隊は多大な犠牲を出し、現在再編成中である。

まして、運任せの出たとこ勝負の博打の為に無駄に部下を死なせたとあつては、その指揮官たちが怒ることは心情的に無理もないことである。

その結果、『ユキツバキ』作戦中に連隊長を含め数名の士官が更迭または異動させられる事態が発生する。

この対応を一言で言い表すならば、過剰反応としか言い様がない。

せめて、『ユキツバキ』作戦後に時間を掛けて対応すべきであつた。

この一方的かつ素早すぎる一連の処罰は、帝国軍上層部に政治家と官僚は今後現場で戦う軍事の専門家達の意見を一切無視するという誤ったサインを送ることになった。

彼らがそう思慮するのも無理はない。

処罰された者たちは、まだ誰も政治家と官僚への直接的な抗議をしていないのである。

だが、処罰された軍人達の直属の指揮官達を無視する形で、国防省内局の官僚達——当然、その背後には榊首相がいる——は処罰を下した。

処罰の理由は文民統制への重大な反抗である。

しかしながら、これ自体も問題を含んでいた。

それは政治家と官僚による政威大將軍が有する帝國軍指揮権に対する侵害である。

軍政を司るのは官僚であり、軍令を司るのは軍人である。

軍人は政策に口を出すことが許されていない。

政策は政治家と官僚が作る。軍人は助言のみである。

つまり、国家戦略を作るのは政治家と官僚であり、軍事作戦を遂行するのが軍人である。

なお、日本帝国の政治家及び官僚には帝國軍の指揮権が無い。

憲法上、榊首相及び内閣、帝國議會は帝國軍を指揮する権限が無い。

日本帝國軍の四軍全てを指揮する権限を有するのは、皇帝の委任を受けた政威大將軍のみである。

政治家に許されるのは、軍人と同様に政威大將軍に助言することのみである。

これは『泥棒が裁判官の振りをして、別の泥棒に裁きを下す』と、例えても言い過ぎではない。

表面にこそ出てこないが政治家官僚に対する帝国軍人の反感は一気に高まった。

彼らとて、己らの命を駒のように扱う政治家や官僚のために軍人になったのではない以上、当然すぎる事である。

政治家と官僚に人望やカリスマの類が無い証拠とも言えるだろう。

第二次世界大戦の敗戦で政治力が大幅に低下した政威大將軍の権限と権威を、政治家と官僚、一部の軍人、それどころか武家と公家までもがそれを蔑ろにし、また都合の良いように特例や通達で前例を作り出し、それを利用して来たのである。

これに半ば反発する形で斯衛軍は増強されて装備品等に独自色が強くなり、帝国陸軍との部品共有に一部ではあるが問題を抱えることになった。

しかし、それ故に榊首相は己の政治的プラン——オルタネイティヴ4に必要な物資等を強引に確保出来るのであり、反対にそれが原因で日本帝国は国力を結集することが出来ず、滅亡の危機に瀕していながらも最前線では無駄に人が死ぬのである。

第二に、不十分な準備で作戦を強行したために発生した各種問題。

これは特に海軍戦艦部隊と陸軍戦術機部隊に発生している補給整備の問題である。

BETAが佐渡島に上陸して二日後の九月二四日当時、日本海にいた三隻の帝国海軍の戦艦全ては弾薬切れであった。

その三隻である大和級の“信濃”“美濃”、それと改大和級である“出雲”は直ちに

青森の大湊軍港に向けて北上。

帝国海軍軍人と軍属、さらには軍需産業関連企業の社員まで動員した昼夜を問わない突貫作業により、弾薬の約六〇％を積載した時点で各艦各個に再出撃したが、もつとも早く作業を終えた「信濃」でも次の日の出港。

他の二隻が出港したのもさらに一日後の九月二十六日。『ユキツバキ』発動当日である。

三隻の戦艦はそのまま日本海側BETA殲滅作戦『ユキツバキ』に投入され、佐渡島への間引き作戦は中止された。

当然のように弾薬を消耗した三隻は再び青森の大湊に帰ることになった。

加えて佐渡島救助作戦の打ち切りは、そのまま佐渡島への間引き作戦の中断を生んだ。

帝国海軍だけでなく、同じようなことは帝国陸軍でも起きた。

新潟市内のBETAを殲滅した帝国陸軍はそのまま新潟県内のBETA群を追撃し戦果の拡大に努めた。

手持ちの砲弾のほぼ全てを撃ち尽くしたが、佐渡島に逃したBETAも多い。

事前の準備が不十分のために、追撃しきれなかったのである。

当然、最低限の弾薬は残してあるが、BETAとの戦いは物量の戦いでもある。

不安が残る結果となった。

本来ならば早急に補給すべきなのだが、太平洋側もBETAに押し込まれ、静岡県を失う可能性が高い現状ではそのような余裕もない。

さら言えば、いくら軽微な損害で殲滅したとはいえ、決して無傷ではない。

西日本と中部日本の重工業地帯全てを失った日本帝国では戦術機一機といえども、その重みは決して軽いものではない。

無理矢理実行したユキツバキ作戦により得たものは大きいのだが、それと同時に補給・整備計画に大きな混乱と日本海側BETA間引き作戦計画の破綻を生んだ。

弾薬に余裕がない以上、間引き作戦は実行できない。

目下、帝国政府——主に外務省は全力で国連と米国に武器弾薬の無償援助を要請している。

この要求はほぼ間違いなく通るが、米国からの弾薬が日本に届き、最前線に運ばれるまでは最速でも一週間は掛かる。

この間、佐渡島ハイヴから想定より大規模なBETA侵攻があった場合、日本海側防衛線が崩壊し、関東平野を蹂躪され、新帝都・東京は為す術もなく壊滅する可能性がある。

これを防ぐために日本海側の帝国軍全軍で戦力回復と戦力の集中に努めている——

真木野たちもその為に徴兵されたが、それは同時に佐渡島ハイヴの拡充とBETAの増殖に直結する。

さらには外交的な問題もある。

それは国連軍内部で暖めていた『ハイヴ建造初期段階での攻略作戦』の全ては実行不可能となったことだ。

これは日本海側BETA殲滅に対するトレードオフとも言えるものであり、一概に『ユキツバキ』を否定できるものではない。

特に日本帝国にとって——自国民を護るためには当然の選択である。

だが、国連は違う。

彼らにとって日本国民の死者数は重大な問題ではない。

むしろ、些細な問題に過ぎない。

新たなハイヴが出来ることの方が、人類の生存可能地域を脅かす大問題なのだ。

BETAがハイヴを建設する初期の段階で手持ちの最大限の戦力を投入することは、最も有効な対処方法と世界中で考えられてきていただけに、それを全く考えない日本帝国軍の作戦は国連軍内部では大きな失望をもたらした。

それは『光州の悲劇』ほどではないが、日本軍の評判に影を落としていた。

これらの問題が、最前線の衛士である村田の耳にも入るのである。下士官であろう

と、耳の良い者たちには既に伝わっている。

日本海側BETA殲滅作戦『ユキツバキ』の成功により事態は好転したとはいえ、問題は今も増え続けていた。

(次に襲来するBETA群は如何ほどの規模になるのか想像もつかん……)

それらの問題を頭の片隅に追いやった村田ではあるが、最前線で迎撃する彼に楽観できる要素は何一つない。

佐渡島ハイヴから溢れ出るBETAを迎撃するのが、彼らの任務である。

個体数が少ない内に継続的に攻撃——つまり間引き作戦を実行するのが理論上最善なのだが、そんなことが出来ない以上、如何ともしがたい。

結局、彼には軍人としてのベスト——戦いでBETAを一匹でも多く殺し、一人でも多く国民を護ることに全力を尽くすしかない。

そう思い、その双眸を閉じる。

瞼の裏に浮かぶのは、炎の海と化した旧帝都・京都。

死地を駆け巡り、その命を玉と散らした戦友達の笑顔。

今も耳に残る彼らの願いはただ一つ。

——日本を頼む。

それは守りたかったものを守れなかった無念。

己の死を目の前にしても、なお託さずにはいられない願い。

彼らは別に日本帝国政府を守りたいのではない。

日本とは、彼らが守りたいものの総称。

日本帝国という国体の中で暮らす愛する家族と郷土と歴史と、何よりもそれらの未来を守りたいが故に戦い、それが叶わぬ故に村田たちにそれを託したのだ。

京都防衛線を戦い抜いた村田の胸に宿るのは、戦友たちへの遺言とそれを受け止めた者としての義務。

信頼してくれている国民への責任感。

戦いに人生を捧げた己の矜持。

（——まあ、よい。儂に出来ることは戦うことのみよ）

己で決めた生き方を静かに確認した村田は、ゆっくりと目を開けながら振り向きもせずと言った。

「どうした、柏葉？ 何かあったのか？」

「——!! い、いえ、特には何も」

村田から近付き難い雰囲気を感じ、声を掛けられずにいた柏葉への問い。

強化装備姿の柏葉に驚きの表情が浮かび、感情はどもりになって表れた。

あまり足音をさせずに近付いたとはいえ、距離はまだ五メートル以上ある。

驚きを落ち着かせながら柏葉は村田に足早に近付いた。

この古武士のような風貌の上官は、どうやら中身もそのものらしい。

上官の隣まで来ると、早朝の微風に彼女の短めの前髪が微かに揺れた。

細身ではあるが筋肉質な柏葉がメリハリのある挙動で村田に敬礼し、女性としては太めの眉毛をつり上げながら報告する。

「各小隊配置につきました。今現在、第一小隊三〇分待機、第二小隊即応待機、第三小隊仮眠中。今後は八時間ローテで交代していきます」

「うむ。ご苦労」

「中隊長、今のうちにおやすみになっては如何ですか？」

「……そうさせて貰うか」

控えめに提案する柏葉に、村田は少しだけ思案したのちそう答えた。

次の即応待機状態になる小隊は村田が直接指揮を執る第一小隊である。

休めるときに休んでおかなければ、長丁場となる支援任務はこなせない。

村田は中隊長であると同時に一人の衛士である。

衛士としての体調管理も重要な任務であった。

彼が指揮する帝国陸軍第一戦術機甲連隊第三中隊の仮眠所となった温泉旅館に足を向けようとして、一瞬踏みとどまり副隊長である柏葉に向き直った。

「そうだ。柏葉、お主に確認しておきたいことがある」

「——何でしょうか？ 中隊長」

肩の力を抜いた口調で問い掛ける村田とは対照的に、ハキハキとした口調で応じる柏葉。

北部方面軍第一師団から来たこの女性衛士は、軍人が模範的とする行動を常に意識して行っている。

柏葉を送り出した原隊は間違いなく彼女に本州で戦うことの出来ない——シベリアのBETAが樺太に來ないという保障は何処にもない——自分たちの分も戦ってきて欲しいと送り出したのであろう。

そして、そのことを充分に柏葉自身が自覚している。

「お主が今まで経験したBETA迎撃戦、どれほどの規模だ？」

「——っ」

柏葉は思わず見栄を張ってしまいそうな唇を何とか押さえ、正直に事実を口にした。

「樺太で経験した連隊規模が最大です」

事実を口に出してから、柏葉の胸に不安が染み出てくる。

柏葉の言葉を聞いたはずの村田は何も言い出さず、少し思案している。

それが余計に彼女の不安を掻き立てた。

副中隊長の力量を持たず、戦力として見なされないのではないのかという恐れ。柏葉としては悔しいことに、実戦経験や戦闘技量は村田に遠く及ばない。

村田どころか常日頃言動と素行に問題があり、帝国軍人であることさえ信じられないような破廉恥行為を繰り返す加藤にすら及ばない。

村田や加藤は師団規模どころか、数個師団規模——推定総数一〇万以上というBETAの群れと京都防衛線で戦い続けた経験がある。

その数分の一の規模のBETAとしか戦ったことがない柏葉では、彼らに幾分気後れするのも致し方がないところもあった。

村田が一息吐き、無精ひげを生やした顎を擦り、また一息吐いてから話す内容を決めたようだった。

「柏葉、お主は加藤と張り合おうとするな」

「——ッ!!」

凶星を突かれ、柏葉の顔色が変わった。

「それはどう言ったことでしょうか……」

彼女の声音も険のあるものに変わったが、それを隠せそうになかった。元より隠す気もない。

「お前は加藤に勝てん」

彼女の怒気など存在しないかのように村田はあしらった。

当たり前すぎることを、論すような口調。

「確かに私は加藤中尉に比べれば実戦経験は少ないです！ ですが、決して見劣りするような腕前ではありません！ 訓練量も、知識も、技能も、私は負けていません！」

柏葉は自らの一生を人類と国民の為に捧げると心に決め、苦しい訓練と実戦を潜り抜けてきた。

その証しの一つが、彼女の肉体だ。

下手な男など比べものにならないほど鍛え上げられた引き締まった肉体は、彼女の弛まぬ研鑽の証明に他ならない。

そして、それは彼女が強さを求め、自ら『女らしさ』を投げ捨てた証しでもあった。柏葉は先天的に身体能力が優れていたわけではない。

BETAという人類共通の驚異に対し、自ら戦うということを決心した時から鍛え上げた肉体と技能。

敵つくなった肩ではもう可愛いドレスは似合わないし、水着を着れば割れた腹筋が浮き上がる。

力こぶが出来る二の腕は、見る者に男のようだという印象しか与えない。

特に才能があるわけでもない女性が男性と互角になるような肉体を作ろうとすれば、

相当な努力が必要なのだ。

柏葉の決意と努力は村田として知っている。

強化装備姿の彼女を見れば、否応なしに分かろうというものだ。

副隊長としてもよく働いている。

几帳面な性格で各種命令の事務処理と関係部隊との調整では、その手腕を遺憾なく発揮している。

関係部隊との調整が問題なくできるということは、それらが必要なことを何度かこなしているということだ。

確かに柏葉は連隊規模のBETAしか迎撃したことがないが、対BETA戦をある程度こなしているという証拠でもある。

だが、加藤はすば抜け過ぎていた。

性格と言動こそあれだが、加藤の実戦経験と戦闘能力は精鋭部隊である第一戦術機甲連隊にあっても頭一つ抜けている。

ある意味、天才的と言ってもよい。

特に戦いの流れを読む能力——状況判断能力に非凡なものがある。

村田の沈黙に、自らの言葉は届かなかつたと肩を落とした柏葉は力なく問うた。

「……私は、それほど駄目なのですか？」

「そうではない。加藤を意識するなど言うことだ。固執しすぎれば、無意識に間違いを犯す。自らの死を呼び込むぞ」

「——ですが！ だったら、なぜ私が副隊長なのですか!? 加藤中尉より優れていなければ、私には上に立つ資格がありません!!」

「思った以上に単純なやつだのう。……ただ単に加藤と同じ土俵で戦うなど言うことに過ぎん」

柏葉の直情に呆れた村田が顎をさすりながら、ぼやいた。

「戦闘能力——特に戦術機操縦技術でお主は加藤に勝てん。仮に勝つとしても五年以上は修行せねばならん。だが、お主が加藤に負けているのは戦闘技術のみ。事務処理能力は比較にならないし、調整能力も格段に上だ。副隊長として重要なのは、むしろそちらの方だから、お主がいる限り、儂は加藤を副隊長にする気がない」

いともあっさり和本音を述べる村田を、柏葉はその目をぱちぱちと瞬きした。

彼女は村田が加藤を優遇していると思っていたので、従える上官の言葉は正直意外だった。

とは言っても、柏葉の考えが急に変わるわけもない。

それは女を捨てた彼女の決意そのものを捨てることと同義だ。

「ですが、私は上に立つ者は優れているべきだと思います」

「少しは適材適所という言葉の意味を考えろ」

意固地な部下に女性特有の強情さを感じながらも、村田は必要事項を伝えたら会話を打ち切ることを決めた。

一々付き合うのも骨が折れる。

「まあ、よい。柏葉、僕は仮眠に入るが何かあったならば即座に起こせ。良い知らせは起きてから聞けばいいが、悪い知らせや怪しい兆候を感じた際は躊躇わずに起こせ。それが、お主の最優先事項だ。分かったな？」

「はっ。復唱します。柏葉中尉は、悪い情報及び判断しかねる兆候があった場合、即座に中隊長に報告致します」

まるで新兵かと思うかのような堅苦しい——つまり帝国軍の規則通り、敬礼したのち復命復唱を行う柏葉。

それを聞き終えた村田は最後に「頼むぞ」とだけ言って、仮眠所となつた温泉旅館に足を向けた。

理想の軍人を具現すべく努力を重ね、理想を元に己を律する柏葉。

その対極に位置する、奔放に振る舞い、時に己の命ですら軽んずる加藤。

武人として戦い続ける人生に価値を見出し、その死生観を元に生きる村田。

彼ら三人を中核として第一戦術機甲連隊第三中隊は戦いに備える。

第27話 藤本中佐

一九九八年一〇月一九日 〇八時五六分

東京都市ヶ谷 日本帝国国防省 帝国軍中央指揮所

日本帝国の大都市である東京の市ヶ谷には、BETAの日本上陸以前から、帝国軍の中枢たる国防省と帝国陸軍及び帝國本土防衛軍の中央指揮所がある。

今は灰燼と化した旧帝都・京都にも無論、国防省の庁舎はあったがそれが全てではなかった。

なぜならば旧帝都・京都には、皇帝と政威大將軍を守護する城内省と斯衛軍があったからだ。

皇帝と政威大將軍を始めとする五摂家の為に存在する斯衛軍は四個戦術機甲連隊を基幹とする約一個師団もの——一部兵科が無いなど、編成上アンバランスながらも強大な戦力を有し、全兵力ではないとはいえ京都に陣取って居たのである。

BETA日本上陸以前では京都防衛に帝国陸軍は不要とまでさえ言われていた。

それで良しとする空気が日本全体にあったことは否めない。

完全編成の戦術機連隊は一個連隊で一〇八機もの戦術機を有する。

それが四個連隊全て完全編成の状態で、帝国各軍から選抜した心技体全て優秀な者たちを揃えているのが斯衛軍である。

帝国陸軍ですら完全編成の戦術機連隊を四つも揃えた師団は無い。

BETAとの戦いが眼前のものとならない限り、そう思う者たちが世論を支配し、また民衆もそう思っていた。

大陸での経験からそれでも足りないことを知っていた帝国陸軍は、大阪を中心とする大都市の防衛のために帝都守備隊の名を冠する精鋭部隊である帝国陸軍第一師団に大阪と京都を防衛する任務を付与していた。

帝国政府はそれ以上の戦力の集中は無駄であるとし、何もしようとしなかった。

折しも日本本土でBETAを迎え撃つよりも、ユーラシア大陸で可能な限りBETAを迎え撃ち、より日本の安全を図る為に帝国陸軍の大陸派兵を決定したのである。

帝国陸軍側も、それ以上の戦力の抽出は不可能だった。

結果的にはいえ、様々な歴史的、政治的な要因により帝国軍国防省と帝国軍中央指揮所は京都ではなく東京にあった。

そして、それ故に大陸からのBETA日本上陸により本土の西半分が一週間で壊滅するという状況下にあっても、帝国軍の指揮系統は瓦解しなかった。

結果、帝国軍の組織的戦闘能力は維持され、継続的な戦闘を可能とし、日本政府の外

交力——いつ滅びるか分からない国との交渉を誰が真面目しようか——を担保している。

日本帝国存続の確固たる可能性が、帝国政府——主に榊首相と外務省の外交力を担保し、それにより国連と各国からの食料支援を始めとする各種支援を取り付けている。

帝国各軍の戦いそのものが文字通り、日本帝国と帝国国民の未来に直結している現実。

その重圧を全ての政府関係機関より受ける場所が市ヶ谷にある国防省。

国防省にいる軍人も無論それを常に感じながらの勤務とならざるを得ない。

その東京都新宿区の市ヶ谷に位置する国防省には大小様々な建物がある。

三〇階を超える高さの本庁舎を始めとする事務官や高級幕僚等が勤務する数棟のビルが建ち、さらには市ヶ谷を警備する歩兵部隊のための兵舎や倉庫が幾つか建ち並ぶ。

その中の一つ、国防大臣室がある本庁舎の地下に日本帝国軍中央指揮所がある。

核兵器にすら耐えるようにと地中に作られた帝国軍中央指揮所は正に帝国軍の頭脳であり、帝国各軍の高級幕僚課程で優秀な成績を収めた選り抜きの士官たちが集められた場所でもある。

数フロアにも渡る巨大な地下建築物は、地中にビルを埋めたとと言っても過言ではない容積を誇る。

そこには帝国四軍を束ねる帝国軍参謀本部があり、陸軍参謀本部、海軍軍令部、航空宇宙軍参謀部も円滑な運用をするためにと同じ建物にある。

その一角にある帝国本土防衛軍作戦課。

帝国本土防衛軍は帝国軍参謀本部直轄の組織で、帝国陸軍、帝国海軍、帝国航空宇宙軍を統合運用する為の組織で直属の実働部隊は僅かな戦術機甲部隊しかない。

作戦に応じて各軍より戦力を抽出し、統合指揮を行う任務部隊的な運用を行うための組織である。

組織の性格上、各軍の上位に位置するものとして扱われることが多く、帝国本土防衛軍に配属されるというのは出世街道の定番コースであり、その帝国本土防衛軍の作戦運用を行う作戦課で重要な要職に就くということは、帝国本土防衛軍の出世レースのゴールでもある。

さらなる出世を求めるのであれば帝国軍参謀本部の要職や、師団等の戦略規模の指揮官の座を求めるのが一般的となる。

空調が行き渡り過ぎるほど行き渡った帝国軍中央指揮所の中で、帝国本土防衛軍所属の藤本貴明は苛ついた雰囲気も露わに、若い部下からの辿々しい口調の報告に耳を傾けていた。

藤本貴明。

帝国本土防衛軍中佐。士官学校を出てから、ほぼ帝国本土防衛軍一筋のエリート軍人である。

齡は既に四二。仕事をしていて最も脂の乗る時期でもある。オールバックにした黒髪に色白の肌。鋭い目と薄い眉毛。神経質そうな顔立ち。長身で軍人としては細身の身体。造形は整っているが美形という印象は受けない。鋭い視線と雰囲気を、隠しもしない佇まい。

彼を動物に例えるならば、蛇。

それも猛毒を持った大蛇。

部下たちが仲間内で彼を示す隠語は「ママシ」。

仮の話ではあるが、きつと華やかな雰囲気でもあれば鷹と言われたのかもしれない。妻子は居るが家庭のことは全て、妻と年老いた両親に投げっぱなしである。

月曜に出勤して、金曜に帰るか帰らないかのような生活をもう一〇年近くもやっていたら、それも当然である。

家庭での会話などほとんど無い。

今や離婚していないことが奇跡的である。

藤本は不機嫌を隠さず、だが部下の報告を遮ることなく椅子に座っている。

その前で直立不動の姿勢のまま報告する若い中尉の額にはうつつすらと脂汗が滲む。

士官学校を出て一年ほど経つ中尉は緊張感故に口が上手く回らないことを自覚していた。

「——第一戦術機甲連隊飯山派遣隊、〇七七一配置完了。増強第四八戦術機甲連隊の実働機数は同時刻を以て、不知火二九機、陽炎一三機、撃震四八機、七四式戦車三六両、九〇式戦車二一両、八七式対空自走砲三両となりました」

「陽炎の稼働機数が一機減つた理由をなぜ報告しない？」

藤本が吐き捨てるように詰問する。

彼は昨日受けた報告と今朝の報告では陽炎の機数が一機違うことを瞬時に見抜いた。

そして、続けて直ぐにそれを述べない部下には無能という判定を下した。

登庁して直ぐに部下達から受ける、この報告が終わつたならば、可及的速やかに人事部長に電話しなくてはならない。

この中尉を左遷し、新たな——「まともな」帝国軍人を部下にする手続きが必要だ。

無能者の勤務評価表に「任務に遂行する能力に乏しく、著しく勤務意欲を欠く」と直筆で記載しなければならぬ等の各種制約事項が煩わしいが、明日もこの辿々しく、要領を得ない報告を聞くことに比べればなんと言うことはない。

仕事は手間の掛かることから片付けるべきだ。

そう。日本帝国の命運を握る帝国本土防衛軍作戦課に、無能者は一人たりとも存在し

てはならない。

まして、自分の部下にそのような無能者はいてはならない。

日本帝国と帝国軍の命運を背負って立つべきである、この藤本に部下の無能を放置したなどという汚点は存在してはならない。

自分をそのように律して生きてきた藤本は、他者にもそれを要求する。

だが、藤本に報告していた中尉には、そのような意識はなかった。

彼の顔に、そこまで報告しなければならぬのかという驚きの表情が一瞬浮かんだが、慌てて素早く隠した。

隠し損ねたことは、ピクリと動いた藤本の眉毛で分かっているが、そのまま出していい結果をもたらすようなこともない。

内心の焦りを必死に押し隠しながら、二時間ほど前の報告の内容を思い出す。

……確か、陽炎の損耗部品が足りず不稼働になったのだ。

「その一機は……、損耗部品が無いために不稼働になっております」

己の不安を誤魔化すように一気に述べた。

それで——それだけで、藤本はキレた。

「このッ！ 馬鹿者が!!!」

怒鳴りながら立ち上がった藤本が、若い中尉に有無を言わず、手加減無し

平手打ちを放つ。

今はまだ静かな司令所の中に、一際高い肉を打つ音が響く。踏鞴たたらを踏んだ中尉が素早く元の体勢を戻す。

そんなことには一切斟酌せずに藤本は怒鳴った。

「分かつていながら報告しないとは！ 貴様、士官学校で一体何を学んできた!!」
何故ここで、こんなことを教えなければならぬ――。

上意下達。以心伝心。

上官に傳くのが部下であり、指揮官に傳くのが幕僚。

これこそがあるべき姿。

これが幕僚の基本であり、出来ない者は無能者だ。

士官学校で習う基本中の基本が分かかっていない。

現に私の要望を理解していない。

正に許されぬ怠慢。

それはつまり、私を見くびっていることに他ならない。

怒りが藤本をさらに苛立たせる。

「しかも損耗品不足で不稼働だ?! 部隊補給に気を配っていない証拠ではないか、この無能者めが！」

藤本の言葉に若い中尉の胸中に驚きにも似た感情が広がった。

補給に関する事項は彼の職務にはない。

また、それに関係することもない。

ついでに言えば、損耗品が不足したことに彼は関係ない。

「——いえ、部隊補給に関することは私の管轄では——」

中尉の不用意な反論は再び放たれた上官のビンタで最後まで言い終えることはなかった。

またも踏鞴を踏んだ中尉を無視して、藤本が怒鳴る。

「貴様！……ここを何処だと思っている！ 帝国三軍を束ねる日本帝国軍の頭脳たる本土防衛軍司令部だぞ！ 我々が日本帝国の命運を担っているというのに、なんだ!? その自己中心的な考えは！ 管轄外だからと言って、何もしないような馬鹿者に任す仕事はここにはないッ!! 即刻出て行け！」

「……ほ、報告は……」

余りの剣幕に飲み込まれてはいるが、せめて実行中の職務だけは果たそうとする中尉の言葉は無駄だった。

「貴様のような愚か者の報告など役に立たつものか!! 今すぐ出て行け！ これが命令だ！ 復唱しろ！ この私が復唱しろと言っているんだ!! 早くしろッ!! さつさと

復唱しろ！ 無能者が！ 貴様が軍人であることすら忌々しい!!」

藤本の罵倒に若い中尉はしばしの間、肩を振るわせたが最後に諦めきつたように力のない声を出した。

「復唱します。即刻退室します」

「今日中に処置は済ませておく。午後に新しい部署を人事部で確認し、明日からは新しい部署に行け。以上だ！」

藤本は言うだけ言うと少し落ち着いたのか、満足げな表情を浮かべながら腰を下ろす。

その姿はまるで自分の権力に満足した王族のようにさえ見えた。

事実、彼は自らを選ばれた人間だと思っている。

いろいろなものを諦めて背を向けて出て行く中尉。

藤本は数時間後には元部下になる若い中尉を眺めて悦に浸った。

彼は悦に浸った自らを感じながらも、その感情を否定しない。

ただ、それを楽しむ暇のない身だということだけは忘れていない。

不愉快な数分間を忘却する為の総括として、藤本は順番待ちをしている部下に教え諭すかのよう——あるいは脅迫のように告げた。

「あの無能者の後ろ姿をよく見ておけ。自分が決して、ああならないように。そして、私

が決して無能者を許されないという事実を、な」

その言葉の最中、若い中尉は部屋を出た。

アイボリーカラーの特殊鋼の自動扉が開き、閉じる。

溜息を吐き、床を見つめた。壁の色と同じアイボリーカラーで、顔が映りそうなほど磨き上げられた床。

常識的に考えれば、異動に一週間は掛かる。主に書類と異動先との調整が必要だからだ。

しかしながら、藤本はそれをほぼ無にするような人脈を持っている。

それは彼の軍歴を見れば一目瞭然の事実でもある。当然、この中尉も知っている。

自分なりには精一杯任務を遂行していたはずだ。そう思っている。

正直言つて、悔しい。

そして、分からない。

努力はした。

結果は駄目だった。

どうしたら、良かったのだろうか？

それが分からない。

迷いと共に諦めも胸中にある。

あの課長と共に任務を遂行していくことは無理だろうと、既に漠然とではあるが思っていたからだ。

下を向きながら、溜息を吐いた。

それから顔を上げた。

これ以上、廊下についても意味がない。

荷物を纏める必要があるだろうから、そこから手を付けよう。

自分自身の全人格が否定されたようでも陰鬱だが、立ち止まっただけでは、さらに事態が悪くなることは士官学校で叩き込まれている。

とりあえず、居室に向かうことに決めた。

近藤忠之。二四歳。

優しげな顔立ちに六四で分けたさらさらの前髪。中背細身ではあるが筋肉質の身体。身のこなしのセンスがもう少しあれば、爽やかな新米士官に見えるだろう。

大学卒業直後に徴兵されて軍隊生活三年目の彼は独身。

市ヶ谷に来てから恋人も作る暇のない日々を送っていたが、これからどうなるか見当もつかない。

近藤自身どこに飛ばされるか想像もつかないし、藤本にも何処に行くか分かっていない。人事部がこれから決めることだ。どこか適当に欠員が出ている部隊の補充要員と

して、異動することになるだろう。

彼の人生は、紙切れ一枚でヒラヒラと舞うように軽い。

それは徴兵されたときも、今も変わらない。

、否応なしに実感させられる現実。

近藤はただ溜息を吐いて歩き出した。

第28話 笠原と東野

1998年10月19日 09時38分

帝国陸軍相馬原駐屯地

第2機械化歩兵連隊第3中隊事務室

「――樽木さ……んそう！ 東野と笠原君が喧嘩してます!!」

「……まったく、何時からここは学校になったんだよ……」

殺風景な中隊事務室に喧嘩を知らせに来たのは真木野と高井の二人組。

呆れながら彼女たちの対応をしたのは、次の訓練で使う資料を取り出していた樽木。

当然、千葉もいる。

それに気付くと、息荒く駆け込んできた二人は背筋を伸ばした。

慌てすぎて、自分たちが最も苦手とする人物がいる可能性を失念していたが、千葉は気にしていなかった。

応接用の安物のソファに腰を下ろしたまま、手元の作業に意識を集中している。

「原因は？」

僅かに呆れたような表情のまま落ち着いた声で問い質す千葉に二人は安堵し、高井が

事情を説明しようと口を開く。

千葉を心底嫌っている真木野が進んで説明するはずがなかった。

「……あの、また……」

高井が言い淀むと、それだけで樽木は理解した。

「組長の件とかで、笠原が東野に絡んだんだろ？」

「は、はい。……そうです」

「全く。ガキどもは何も考えなくて良いから、本当くに気楽だよな」

嫌みたらしく付き合っていられないという表情を大げさに浮かべる樽木が、椅子の背もたれに体重を掛けると耳障りな音が響いた。

樽木は千葉に訊ねた。

「どうします？ 千葉一曹。喧嘩両成敗で両方とも殴り潰します？」

「そうだな……」

千葉は答えたが、そこから先の言葉は直ぐに返っては来なかった。

彼自身思うところがあるようだ。

不意に千葉の手元からガチャンと金属がぶつかり合う音が響く。

真木野がチラリと千葉の手元を見ると、89式自動小銃を整備している最中だった。

よく見れば、彼女たちが使っている物と微妙に形が違ったが、彼女は直ぐに視線を樽

木に戻した。

因縁を付けられたら、また殴られるかも知れない。

些細なことで殴られたのでは溜まらない。

好奇心、猫を殺す。

そんな言葉も思い出す。

彼女が見たそれは、見る者によつては一目で各種カスタマイズが施された八九式自動小銃改だということが分かつただろう。

「10時10分から班のM ミツシヨンミーティング Mを予定していたが、当初二人だけ別メニューにするか」

「——お、直々に潰しちやいますか?」

少しばかり楽しんでるように言う樽木に、高井は微かに眉を顰めた。

あの血気盛んな少年たちの自業自得とは言え、そういうのはあまり見ていて気持ちの悪いものではない。

一緒に三輪を捜してくれた樽木のことは嫌いではないのだけど、軍人特有というか、徴兵されて以来よく目に映る暴力的な表現や行為が、高井の中で微妙なブレーキとなっている。

樽木は悪い人ではないし、真木野も三輪も悪い人では無いと太鼓判を押しているけ

ど、及び腰になってしまっている事は自覚している。

その上、昨日の昼食時に誘われたデートの返事もしていない。

なし崩しの決まっただけでも、高井自身はまだハッキリと意思表示していない。

出来ることなら少人数で——樽木と真木野同伴でまずは少し落ち着いて話しをしてみたいとは思っただけ、そんな時間もない。

そういうことも微妙に影響して、高井は何となく樽木と話しづらくなったような気がしていた。

千葉は微妙な表情を浮かべる高井を横目で確かめつつも、樽木の予想に苦笑を浮かべながら答えた。

「それが一番楽な対処策だが、あいつ等がそれで物事を理解できるようになるのは何年も先だ。今回は説教から入る」

樽木がわざとらしく目を丸くして口元を歪めた。

「どうしたんですか!?! なんか悪いものでも食べたんですか?」

「おいおい。ずいぶん生意気な口訊くじゃねえか? 高井が見ているからって張り切りすぎるなよ」

「ひどっ! このタイミングでそういう切り返しは無いですよ!」

「今さら何言つてやがる」

そう言つて千葉が笑い、樽木が戯け、真木野と高井は驚いた。

千葉としては高井に『さつさと、二人とも付き合いやがれ。高井、樽木の口はこんなだけど根は悪くないぞ』とでも声を掛けようかと思つたが止めた。

彼女は奥手すぎるので、周りがとやかく言いすぎても良くないだろうなと考えたからだ。

とりあえず樽木に喧嘩の対応を伝える。

「どうせ、喧嘩自体は坂上が止めてるだろ。樽木。当初、班MMはお前に任す。予定通り、即動に関して教育しろ。俺は東野たちを説教する。まずはあいつ等を事務室に寄越してくれ」

「ういっす。分かりました。先にMMを始めます」

「おう、頼むぞ」

樽木が資料を挟んだファイル片手に立ち上がり、千葉が銃の整備を切り上げて整備道具を片付け始める。

完全に居ないように扱われている気がして、真木野は高井に目を向けた。

高井も同じような感想だったらしい。

さらに、お互い微かに驚いた表情が残っていた。

二人とも顔を向き合わせて小声で囁く。

「……桃さん、こういう場合は何て言ったらいいんですかね？」

「要件終わり帰ります。で、いいと思うけど……」

「——何コソコソ話してるんだよ？」

「——いっ！ いえ、何でもないです」

「——な、何も言つてません！」

樽木が気配もなく近付き会話に入ってくると、二人は慌てて態度を改め、取り繕った。要がなければ、こんな場所からは一刻も早く立ち去りたい。

新兵にとつて教官・助教がいる事務室とは、いつ何時誰から斬りつけられるか分からない首切り場と大差ない。

真木野の指揮で規則通りの手順で敬礼をして事務室から逃げる

「要件終わり帰ります！」

「じゃ、準備しておきます」

「おう、時間になったら始める。もしかしたら、俺は行けないかもしれん。その時は一人でやってくれ」

「了解です。さっさと終わらせてしまいます」

そのまま樽木と共に中隊事務室を出ると、他の仲間がいる教場に向けて廊下を歩く。

事務室に決して声が届かない距離まで離れてから、真木野と高井は大げさに溜息を吐いた。

その大仰な動作に樽木が目を丸くする。

「おいおい、いきなり溜息なんてどうしたんだよ？ 訳分かんないぜ？」

溜息吐くどころか、二人とも膝に手を付いてがつくりと背を丸めて立ち止まった。

さらに一息吐いてから、真木野が樽木を見上げながら心情を吐き出した。

「班長の前じゃ、緊張しますよ。それに、……だって、樽木さん。あの班長が普通の会話にしているんですよ！ これが驚かずにいられるわけ無いじゃないですか！」

「はあっ？ なんだ。そんなことに驚いていたのか？！ そっちの方が驚きじゃねえか」

半ば呆れ半ば本当に驚いた樽木が高井に視線を向けると、彼女も同意を示すように頷いた。

引き攣った笑顔を浮かべているところを見ると相当に緊張していたらしい。

事務室の中では上手く隠していただけのようだ。

「樽木……さ……ん、それだけで充分驚けます」

高井は物凄く躊躇いがちに『さん』付けで樽木の名前を言うと、微妙に頬に熱を感じた。

『さん』付けに驚いたのか、それとも微かに頬を赤らめた高井に驚いたのか、樽木もまだ

驚いたままだった。

もつとも彼の場合はほとんど表情に出ていない。

既に真木野の言葉に大げさに驚いていたから余計に目立たなかつた。

「そんなに驚くようなことか？ あの人、結構普通だぞ」

さも当たり前のように樽木が言う。

彼にとつては、千葉は基本的には厳しいが結構融通が利くベテラン下士官である。

近頃では、千葉の下に配属になった事は幸運だったとさえ思っているのだが、その千葉から厳しい訓練を受けている——ましてや殴られている新兵たちからすれば、当然その思いは異なる。

「——嘘?！」

高井が思わず大きくなった声を抑えるように口元を手で隠し——。

「……樽木さん、冗談も程々にして下さい」

真木野に至つては半眼で拗ねた視線を向けた上に、尖らせた唇を隠しもせず否定する。

「……いや、ね。……ほら、……ね。千葉一曹もあれが仕事なのよ。仕事。二人とも分かるでしょ、社会人なら」

樽木は千葉との約束事もどこへやら、二人の想像以上に厳しい意見と視線に、上官の

擁護をしてしまった。

本当は良くないことなのだが、異性として気になる高井がいる所為か、それとも元モデルの真木野がいる所為か、口が滑った。

もつとも本当のところは両方なのかも知れない。

それに加えて、彼自身の状況判断もあつた。

千葉と坂上が衝突したことも、その内容も知っている。

お互いに言っていることは間違いではない。

二人の意見の折衷案を採って欲しくもあるが、いかんせん坂上や真木野たちのレベルが低すぎる。

そうなると樽木としては千葉の意見に偏りたくなるが、それだけでは駄目だという思いもある。

かといって安易に坂上の意見を取り入れれば、軍人として、また社会人としての自覚と見識がない新兵たちはただの仲良しグループになってしまう。

特に高校生だった笠原たちには高校の部活の延長線上になつてしまいかねない。

命の遣り取りをどこまで真剣に考えているかで個人差はあるだろうが、いちいちそんな他人の基準を考慮しては、限られた時間しかない現状では訓練が進まない。

「私はあの人が怒鳴っているところしか見たことありません」と高井が呟けば――。

「私にとつては殴られた記憶だけ」と真木野が顰めつ面を作る。

顔面パンチをもらつて鼻血を流した真木野が、簡単にその恨みを忘れるわけがない。樽木もそこはフォローのしようがない。

「まあ、それはそれ。と、置いといて——」

「無理ですね!」

「そうよねえ……」

きつぱりと言いつ切つた真木野に高井も同意する。

殴られたこともさることながら、その理由も彼女たちからすれば厳しすぎると言うことだろう。

普通に暮らしていれば、それが普通だ。

「どうしても?」

「どうしても、無・理・ですっ!!」

少し困つたように樽木が再度訊ねるが、真木野の心は変わらない。

千葉が直接言わない限り、彼女に対して意味は無いだろう。

だが、その為に千葉が真木野に謝るとか優しくすると言うことはあり得ないし、言葉一つで真木野の心情が変わるわけもない。

これらの反感も全て織り込み済みで千葉は訓練を行っているのだ。

坂上とも衝突した。

今さら訓練方針を変えることなど、あり得なかつた。

樽木も顔を逸らし意固地になって答える真木野には苦笑するしかない。

そうなると彼の視線は自然と高井に向いたが、彼女としても千葉に対する感情は真木野と大きな違いはない。

流石に直接殴られたりしていないのが——その分、誰かが身代わりとして酷い目にあつている。

何も辛くないわけではない。それによる精神的^{プレッシャー}重圧感^{シヤイ}は、それほど強くない——人の和を重んじる、穏やかな性格の高井には相当に辛い。

たまに、直接殴られた方が楽なのではないかと思つたりするときもあるほどだ。

「高井は……聞くまでもないか」

「何をですか？」

樽木の心配をあつさり天然呆けで返す。

気を遣うのも馬鹿らしくなってきた。

「いや、高井は千葉一曹のことをどう思っているのかなと思つてね」

いつもの明るい口調で樽木が問うと、高井は彼に向けていた視線を微かに下に落とし

彼女は少し言葉を選んだ。

「……苦手です。悪い人ではないとは思いますが、近付きたくありません」

高井が返す大人の回答。

言葉は慎重。

千葉を断定はせず、自分の意志ははっきりと。

最後はしつかり樽木に視線を戻す。

この意見を覆すのは容易じゃないなあ。と、樽木は心の中でぼやいた。

これ以上、弁明するのは上官の方針に逆らうことになるし、今までの努力も無駄になる。

上官を庇って、高井に嫌われてしまっても困る。

ここまで考えるとこの話題は打ち切って、全く別の話題に切り替えた方が得策だ。

「まあ、しょうがないか。それより、俺としてはデートの約束の方が気になるんだけど――」

露骨に話題を切り替える樽木は正に三枚目といった役どころだったが、真木野と高井はそれを嫌がる様子もなかった。

振られた話題に微笑みと弾んだ口調で応えて、皆がいる教場へと歩いて行った。

——約5分後。

教場で喧嘩していた東野と笠原は樽木の指示で目の前にいた。

剣呑な雰囲気や田淵も協力したに違いない。彼だけでは腕力的に無理だろう。きつと胡桃沢や田淵も協力したに違いない。その上、真木野と高井も素早く中隊事務室に来た。と、いうことは、結果論的にだが、新兵たちは思った以上に団結し始めていると思っ

ろに並び立つ二人の顔を観察した。東野と笠原の顔に目立った傷はない。多少頬が赤いような気がするが、医者に診せるほどでも無いと判断する。どうせ、パンチが入った程度だろう。死んだりするわけ無い。

本当に痛ければ——何か問題があるほどの怪我だったら、後で言ってくるだろうか

ら、その時でもいい。どうやら、思った以上に素早く坂上が二人の喧嘩を止めたようだ。

彼だけでは腕力的に無理だろう。

きつと胡桃沢や田淵も協力したに違いない。その上、真木野と高井も素早く中隊事務室に来た。と、いうことは、結果論的にだが、新兵たちは思った以上に団結し始めていると思っ

ら、その時でもいい。

どうやら、思った以上に素早く坂上が二人の喧嘩を止めたようだ。

彼だけでは腕力的に無理だろう。

きつと胡桃沢や田淵も協力したに違いない。その上、真木野と高井も素早く中隊事務室に来た。と、いうことは、結果論的にだが、新兵たちは思った以上に団結し始めていると思っ

て良さそうだ。

良い傾向だと、千葉は口には出さずにほくそ笑んだ。

そうでなくては嫌われ者に徹する意味がない。

千葉の訓練方針では、部下との心理的な距離は広がることは織り込み済みの事項。

一週間経たずに、まともな兵士にしろと言うのだ。

厳しい訓練になることは当然で、さらに言えば、いくら時間があるからといって優しい訓練だけをしてまともな兵士には成れない。

結果、どうしても厳しい訓練となる。

それを今さら変える気など毛頭無く、ならば嫌が応にも生まれる反感を如何に有効的に活用するか、だ。

坂上や真木野たちには今のところ上手くいつている。

千葉が班員に課す連帯責任を回避しようと、内心は別かも知れないが協力するようになってきた。

顔を合わせて一週間ちよつと他人たち——ましてや新兵であることを考えれば、なかの成果だ。

残るは、目の前に立たせている二人のガキどもだ。

懲罰として二人を殴つても、仲良くなるわけ無い。

今、千葉がしなくてはならないことは二人が喧嘩をして班集中訓練の効率を低くすることを防ぐことだ。

「——さて、一応確認するが、どうして喧嘩した?」

千葉がいつもの調子——ドスの利いた低い声で穏やかに問い質すが、東野と笠原は即答しなかった。

東野はふて腐れたように視線を逸らし、笠原は何か言い掛けたが直ぐに唇をきつく閉じた。

千葉の対応は単純明快だった。

「——がつー!」

突然、笠原が短い悲鳴を上げて膝から崩れ落ち両手を付く。

「——な!? ——ぐつあー!」

驚いた東野が笠原に視線を向けようとして、彼も同じように短い悲鳴を上げて片膝を付いた。

「俺が聞いているんだ。答えろ、クソガキども」

苛ついた口調で、千葉がもう一度訊く。

二人が片膝を付いたのは、千葉が彼らの脛を座ったままとはいえ、蹴り飛ばしたからだ。

千葉が履いているのは半長靴と呼ばれる軍用ブーツの一種で、安全靴と同じように薄い鉄板が爪先と靴底に仕込まれている。

靴底は踵ならば厚さ3センチを超える硬質のゴムで、格闘の際に上手く使えば相手の肋骨など簡単に折れ、重さは片足で1キロは優に超える。

それを適当に——だが、少なくとも青あざが出来る程度の威力で蹴り込んだ千葉は、片膝付いた笠原を見下しながら、再び訊いた。

「もう一度、訊く。どうして、喧嘩した?」

「……それは……くっ」

言い淀む笠原に、千葉は素早いビンタで応えた、モーションを気取らせない、スナツプの効いた速度優先の軽い平手打ち。

苦痛よりも屈辱を目的とした行為。

それほどの威力はない。

今まで繰り返し出したビンタに比べれば撫でたようなものだ。

「もう、お前には訊かん。黙っている、ボウズ。東野、喧嘩をした理由は何だ?」

理解できない蹴りとビンタで呆然とした笠原を無視して、千葉は既に立ち上がった東野に訊いた。

澄まし顔で立っている東野だが、時折ズキズキと疼く脛の苦痛で顔が微かに歪む。

彼が見た目だけでも取り繕うのは、千葉に対しての不良少年らしい意地か、それとも笠原に対する意地か、またはその両方か。

どちらにしる、千葉には関係ない。

だが、その東野の努力は決して無駄ではなかった。

千葉の中で東野の方が、やはり笠原よりマシだなという判断がより増したからだ。

東野は高校の時もそうだったのだろう。視線を逸らしながら答えた。

「笠原が喧嘩売ってきたから買った」

千葉が無言で座ったままの速いだけの蹴りを出し、東野はそれをそのままま・ま・躲・し・も・せ・ずに受けた。

結果、東野はまた顔を顰めたが、無様な声は上げなかった。

無論、千葉もそれには気付いた。

「てめえ、殺されたいのか。ハッキリ答えろ」

「笠原二等兵が、俺が組長だから喧嘩売ってきました。だから、買いました」

今度は顔をちゃんと千葉に向けて言った。

やつとまともな返答が来た。

まだまだ、東野には「教育」が必要だ。と、心に留める。

お互いに生きてさえいれば、その時間は充分にある。

「東野。最後まで殴り合つた場合、勝つたのはお前か？ それとも笠原か？」

笠原が怪訝な表情を浮かべた。

それは今、話すべきことか？

東野は挑戦と受け取つた。

この俺を試している、と。

「俺が勝つに決まっています」

「——なに！」

東野は気色ばむ笠原を一瞥もせず言い切つた。

スポーツや勉強の勝負なら勝てそうにもないが、喧嘩なら別だと態度と言葉で表す。

それに対する千葉の反応は、笠原を驚かせ——そして東野を困惑させた。

「ならば、良い。負けるんじゃないぞ」

「……っ！——ウイツす！」

「はい、だ。ボケ」

「はいッ！」

一瞬なにを言われているか理解し損ねた東野だったが、分かつた途端に威勢の良い返事をした。

単純なヤツだと苦笑混じりに千葉が注意すると、それにも素直に従つた。

てつきり悪者扱いされると思っていた東野には、まともな扱いだったので正直に言う
と嬉しかった。

中退した高校時代を思い出せば、喧嘩したら相手にどんなに非があろうと喧嘩両成敗
で納得がいかなかった。

あの時に比べれば、千葉の扱いというのはある意味では公平なんだと、ふと気付いた。
(……へえ、こんな軍人もいるのかよ。実は結構、まともな扱いじゃね?)

東野がそう思っても、それに客観的な公平さは無い。

彼はまだ徴兵されたとはいえ、軍人となって一ヶ月ちよつと。

それで出会った軍人など、軍隊という巨大組織の中のごく一部だ。

彼の中では意外な対応した人物というのが、ただ単に千葉が最初だっただけに過ぎな
い。

そういった点では笠原も同じだった。

徴兵されて一ヶ月にも満たない彼にとって千葉はある意味、笠原が直ぐに思い浮かべ
る軍人像そのものになっていた。

まして、千葉は彼の上官である。

平等に扱われているとは思えなかった。

ここは普通——笠原の人生経験上では喧嘩両成敗ではないのか？

「笠原、どうして喧嘩を吹っ掛けた？」

「……東野が不真面目だったから、注意したら口論になり、喧嘩になりました」

問い掛けに不承不承答える笠原は、少し言葉を選んでいった。

千葉と東野の雰囲気を見るに班長は不良の味方としか思えなかった。

笠原の心に打算が働き、自分が不満に思っていることは隠して、東野の非を上げることとに徹することにした。

「不真面目とは、具体的にはどんなことだ？」

驚いた様子もなく千葉は笠原に先を促した。

「ばつが悪そうな表情を浮かべた東野には興味を示さない。」

「次のMMの準備をせずに作業をサボろうとしていましたので注意したところ、『テメエには関係ねえ。勝手にやっつけていろ』と罵倒された上、逃げようとしたので、肩を掴んだところ腕に打撃を受け、殴り合いになりました」

笠原が真実を少しだけ大きさに——無論、東野にとって悪い方向に誇張して説明する。

それに反論しようとした東野の口が動きかけて止まった。千葉の威圧感のある視線に負けた形である。

「それはそれで反省して貰おう。だが、笠原、お前の不満はそれだけか？」

「いえ、何もありません」

口調もそれほど変えずに千葉が言うと、笠原は半ば本気に半ば演技で怪訝な表情を浮かべた。

物わかりの良い自分は、上官に不平不満を言うことなどありませんよ。と、言わんばかりの口調。

千葉はだからこそと言つても良いが、そんな分かり易すぎる演技をする笠原を信用しない。

それに笠原が気付くことはない。

時分は上手くやれるし、上手くやっていると思つている人間が自らの行動を顧みることなどほとんど無い。

「そうか。だったら、それで良い。今後は東野の指揮下に入り、東野の命令を素直に聞いて、各種作業を実施せよ。東野、午後の訓練準備はお前が仕切れ。出来なければ、新兵全員で血反吐を吐いて貰う。今から、俺と樽木が指揮する時以外は、お前が第一班の指揮をしっかりと執れ。今までのような半端なことは許さん」

「——なっ!!」

「……マジかよ」

事も無げに千葉が命令すると、笠原は情けない驚きと不満の声を上げ、東野は責任を

投げ出したくて呻いた。

「東野」

千葉がドスの利いた低い声で東野の名を呼ぶと、返事は一瞬だった。

「了解しましたッ！」

腕力では絶対敵わない。

それは単純かつ絶対的なものとして理解しているだけに、こういう点だけは東野の反応は素直過ぎるほど素直だ。

ただし、その先の事とか、具体的にはどうするかなどに関しては彼の思考は及んでいない。

千葉としては、今はそれでも構わないと思っっている。

どうせ徐々にしか出来ないのだ。

怒鳴りつける回数は他の新兵より増えるだろうが、それもどうしようもないことだ。

東野には我慢して貰うしかない。

嫌ならば、早く成長することだ。

そうすれば、班集中訓練初日の朝に宣言したとおり、千葉たちが殴ることも怒鳴ることも無くなる。

「笠原、不満は無いと言ったな。ならば、実戦で俺と樽木が戦死した際は、東野の下した

命令に従え。その命令にお前の命を賭けて戦え。服従しろ。それが、例えお前が嫌いな男の命令であろうとな」

笠原の喉が詰まったような音を立てた。

命令だと言うことは分かっている。

理論的にも、組織的にも、法的にも間違いはない。

だが、納得できるのか？

自分よりも知力で劣り、態度が不真面目で、作業をサボり、やる気の無い者が、戦場で自分の命を左右する命令を下し、それに服従するという現実に不平不満を零すことな
く従うことが出来るのか……。

「……命令には従いますが、納得できません」

笠原が東野の命令に命を左右されることに我慢できるわけがなかった。

「何が納得できない？」

からかうような千葉の口調。

事実、千葉は笠原が激昂することを期待している。

見え透いた挑発であろうと、笠原は我慢できない。

いや、我慢すべきでないとは彼は判断した。

千葉の態度がどうであれ、発言は許可されているのだ。

実戦で東野の命令で死ぬことに比べれば、千葉に怒鳴られようが殴られようがまだ易しいことだ。

「……東野のような不真面目で、自分よりも無能な人間が自分の命を左右する立場に立つことに納得できません！」

あからさまに馬鹿にされた東野が殴り掛からんばかりの表情で笠原の横顔を睨み付けるが、笠原はそれを無視した。

彼は千葉に視線を合わせて真つ向勝負を挑んだ。

が、千葉にとつては笠原の内心や思いなど塵芥。

瑣事に過ぎなかった。

生真面目な少年が大真面目に言ったことをあしらうように鼻で笑った。

「なんだ。いちいちそんなことから言わなきやならんか」

「私にはどこがおかしいのか分かりません！」

顔を怒りで真つ赤にした笠原が、それでも礼節を守って上官に抗議する。

「私が東野よりも劣るとは思えません！」

「だったら、俺にとつてはお前が東野より上だと言うことが分からない。お前はそれ俺に何も証明していない」

やれやれと言うように千葉が告げると、調子に乗った東野が尻馬に乗った。

「俺がお前に喧嘩で負ける訳ねえーだろよ」

「——そんな事ないッ！」

笠原は揶揄する東野に間髪入れずに反論すると、逆に挑発し返した。

「自分は喧嘩でも東野に負けませんッ！」

なにッ！——と、逆上する東野を一切無視して笠原は千葉だけを気迫の籠もった双眸で睨むように見つめると、千葉は唇の右端を意図的につり上げて不敵な笑みを浮かべた。

千葉の視線が鋭くすると、僅かに笠原の上半体が反ったように微動した。

だが、視線は逸らさない。

——こいつは面白くなってきたな……。

千葉は素直にそう思った。

有り体に言ってしまうえば、何も考えずに意地を張るだけの喧嘩は楽しい。

二人の確執を煽ることを即断した。

この流れは悪くない。

むしろ、好ましいほどだ。

今の自分がお世辞でも良い表情を浮かべているとは思えない。

その程度のことは千葉として自覚している。

だが、隠す気はない。

むしろ、見せつける。

千葉春久という人物の中にある、狂気にも似た闘争本能を見せつけるように気配が変わった。

その千葉の殴り掛からんばかりの殺気にも似た気配に素早く反応したのは、意外なことに笠原ではなく東野だった。

彼の視線は反射的に千葉に向いた。

何かしらの打撃がくるのかも知れないと、無意識に上官を見た。

そして気付いたときには、東野の右足は半歩下がっていた。

原因を一言で言い表すならば、恐怖。

千葉から放たれるかもしれない打撃を恐れての挙動。

硬い拳が自分の肉体を抉るように殴る際に生み出される痛み。

極めて動物的で、反射的な行動の流れ。

故にそれを押さえ込むことは、その意志の固さを体現している。

笠原は引かない。

意固地としか見えない持論——自分は東野より有能なので第三組長になるべきだという——その考えを引つ込めない。

「自分は絶対負けません！」

笠原が叫ぶように発した言葉が、東野の足を止めた。

そして、気持ち切り替えさせた。

既に二回喧嘩したが、別に負ける気配は微塵もしない。

笠原は、確かに筋力はある。

が、今まで殴り合いなどしたこともないような人生だったのだろう。

東野が危ないと感じたことはただの一度もない。

初日に千葉に殴られた経験も、その考えを後押しする。

アレに比べれば大したことない。

恐れる理由が微塵も存在しない。

「俺に喧嘩で勝つてから言えよ！ 笠原ッ！」

東野の怒気を無視して、笠原の思考が加速する。

激情に流され、根拠もなく出た言葉。

笠原の心の中にあるのは、東野が組長に相応しくないとという思い。

今までの人生を真面目に努力し続けてきた自分が、東野如き中途半端者に負けているわけがないという意地。

吐き出した激情。引つ込みはもう付かない。

『自分は喧嘩でも東野に負けません！』

根拠はない。

今までの殴り合いは二戦二敗。

今日の喧嘩も坂上に止められていなかっただら、無様に床を這いつくばっていたのは自分のはず。

その事実を素直に認められない。

『自分は絶対負けません！』

ただの負けん気。

そう願っているから出た言葉。

これは東野ではなく、千葉に向けた言葉なのだ。

上官である千葉の前で宣言した、有るわけがない自分の実力。

起死回生の一手を求めて、笠原の頭脳がフル回転する。

宣言したことを証明しなくてはならない。

それも可能な限り早く。

出来れば今すぐこの場で証明したい。

自分が東野に負けていないことを――。

負けているのは何か？

——喧嘩だ。

笠原の頭の中で、何かかがカチリと心の中で填まった。
認める。

追い詰められて、初めて素直に現実を——負けた事実を受け入れる。

負けた理由は何か？

一個人の肉体的戦闘能力だ。

フェイントを掛けられたり、相手の一撃に対応できなかつたりして、一方的に負けた。

これが喧嘩という枠組みの中で負けた。

どうやったら勝てる？

喧嘩で勝つための確定事項はない。

そんなものを持つていたとしたら、笠原が東野に喧嘩で負けるわけがない。

だから、再認識する。

自分は殴り合いで劣っている。

思い出す。

殴られて負けた場面を。

だけど、それで終わりじゃない。

野球と同じだ。

同じ勝負事だ。

相手が勝っていることは良くあることだ。

そんなことには慣れているだろう。

自らを叱咤激励して、己の心の手綱を持つ。

感情を抑え、事実の列挙。目的を確認。

今、必要なことは班長に自らの意見を具体的に示すこと。

野球に例えるならば――。

自分が打者で、東野が投手。

相手は剛速球で三振を取るタイプ。

明らかに自分のバットは振り遅れてる。

試合はまだ序盤。点差は2点。

リードされたままで、得点圏内にランナーはいない。

打てない現状。このままだと押し切られる。流れが変わらない。

――負ける。

それは駄目だ！

負けてはならない！

だから……――。

まず『流れ』を変える。

脳裏に掠める一瞬の閃き。

笠原の背筋を走る衝撃に似た何か。

気付く。

何か、目の前が晴れ渡ったような錯覚。

答えが見つつかれば、決断と実行はあつという間だった。

こうすればいい。

ただ、それだけ。

それだけで気が楽になった。

絶対ではない。

保証もない。

だが、何も出来ないより遙かにマシだ。

笠原の口元がふつと緩む。

少年は間髪入れずに動き出し、千葉はそれを察して目を細めた。

「東野！ くらえ！」

笠原は叫んでから、右拳を大きく振りかぶった。

分かりきった右ストレート。

俗に言う、テレフォンパンチ。

東野の反応は迅速だった。

笠原に生意気なことを言われ、既に彼の方に正対していたのでなおさらだ。

わざわざ殴られる気はない。万全な体勢ではないが、殴られるよりも先に殴り倒そうと素早く右ストレートを放つ。

風呂場でも、今日の喧嘩でも、一撃で勝負を決めた右ストレートの正拳突き。

だからこそ、笠原は叫んでから右拳を振りかぶった。

笠原の左手が乾いた音を立てて、東野の右ストレートを弾き逸らす。

（——なッ!!）

驚きに目を見開いた瞬間、東野の視界が衝撃と共にぶれた。

顎を打ち貫かれ、崩れた体勢を無意識の動作で踏み止まる。

一瞬動きが止まった。

もしも、笠原が喧嘩や格闘技の経験があつたならば、そのまま決着が付いたであろう。

だが、笠原にそれはなく、東野にはそれがあつた。

「——てめえ!!」

「——っ!」

踏み止まり上体を起こす反動と動きをそのまま打撃に繋げ、反撃の右ストレートを放

つ。

反射的に動いた笠原の左手が直撃を防ぐが、その衝撃までは無かつたことに出来ない。

東野の腕力そのものに負けた笠原の身体は踏鞴を踏んで後退つた。

「——止まれッ！ ガキども！」

笠原が思つたとおり、千葉が止めに入る。

様々な理由により止めざるを得ないと推察していたが、その通りになつて笠原が小さく笑つた。

それを見て、自分が馬鹿にされたと思つた東野がさらにいきり立ち、飛び掛かつてき。そうなほどの気配を感じさせるが千葉の抑止力は絶大だつた。

もつとも、こうなるように千葉は初日に東野の金的を蹴り上げたのだ。

機能しなかつたら、千葉は東野をまた殴り飛ばすだけのことだ。

その中で、機先を制する為に笠原は胸を張り高らかに宣言した。

「これで証明できたと思ひます!!」

東野は胸を張つて宣言する笠原を睨みながら、少し呆氣に取られて首をひねつた。

——こいつ、なに馬鹿なことを言い出しているんだ？

千葉は一息吐いた後に、笠原の思惑に思い至つた。

それと同時に呆れた。

——このボウズ、ここまで頑固なのかよ。

クソ真面目な面構え。

高校野球の伝統とも言うべき丸坊主。

幼い頃からやり続けているだろう野球で鍛えた細身だが筋肉質の身体。

日本における真面目を連想させる要素をふんだんに^{ちりば}鏤めた外見。

そんなものが今はただの石か岩にでも見えてきそうだ。

だが、その一瞬後に面白いことを思いつき、千葉は静かにニヤリと笑った。

——悪くない。

笠原は、千葉のその表情を確認して、自らの思惑が成功したことを確信した。

その上で、満足げな笑みを浮かべてもう一度宣言した。

「今見て頂いたとおり、自分は東野に負けていません」

「——はあ!? 何言つてやがる、テメエ!」

「まあ……。一応、その通りだな」

「——へ?」

詭弁に激昂した東野だったが、その詭弁を認めたと千葉の一言に不意を突かれて間拔けな声が漏れた。

東野としては理解しがたい二人の会話が続く。

「そうだな。一応ではあるが、今回はまだ負けていないな。無論、勝つてもない」

千葉が小馬鹿にしたように念を押す。

「これからも負けません！　そして、次は勝ちます！」

「ここまでやった以上、笠原としては一步も引けないと思っっている。

その思いだけで返事する。

「……根性だけは認めてやろう」

笠原の企みを見抜いた上で乗ってやる。と、千葉は口にはしないが尊大な態度で示した。

その一言で、笠原は俗に言う『気を付けの姿勢』——つまり直立不動の姿勢を取った。直感的な判断だったが、おおむね間違っていない。

ここまで上手くいったのだ。

下手なことをして、千葉の心象を悪くしたくない。

東野は千葉を見つめた。自分の上官が何を言い出すか、何を思いついたのか、彼には想像も出来ない。

「東野が組長であることが、どうしても納得できないお前のためにチャンスをやる。一ヶ月後に東野と笠原、お前達を戦技で競わせて、それで勝った方を新しい第3組長に

する。それまでは東野が第3組長だ。いいな？」

「——はい——」

笠原は既に博打に勝った気持ちが一杯で、清々しいまでの表情を浮かべ勢いよく答えた。

野球の試合で考えれば、苦し紛れのセイフティバントが成功して出塁した状況だ。

これからは足を使って投手を——つまり、東野を苦しめればいい。

まだまだ我慢しなくてはならない状況だが、今までの絶望的とさえ感じていた事態からは一気に好転した。

あとは、一ヶ月後の勝負で勝つだけだ。負ける気なんてさらさら無い。

「……訳わかんねえ」

東野は擦れた声で、そう呟いた。

彼にしてみれば勝つてたはずの勝負で、急に審判から負けを言い渡されたような気分だ。

正に理解不可能。

千葉とて、その点は理解している。

彼としては、ここで東野を焚き付けて成長を促したい。

他に有効な選択肢がないから東野を第3組長にしているのだ。

結果が出るのはまだ先ではあるが、これも一つの選択だ。

仮に東野がふて腐れ、負けん気を出さず、また努力もせずに笠原に負けるようであるならば、それはそれで良し。

笠原が成長して東野を上回るならば、悩むことなく第3組長を変えるだけの話である。

「一ヶ月後の勝負は幾つかの戦技を行った総合点で判定を下す。が、俺たちは機械化歩兵だ。当然、格闘技は入れる。東野、喧嘩じゃ絶対負けないうって言っていたが、今のままではそれすら危ういな」

半ば茶化すように言ってから、千葉は東野に目を向けた。

「……俺、絶対負けねえすよ」

苛つきを無理矢理に押し殺した東野が、笠原に睨みながらしつかりと答える。

笠原も負けじと睨み返し、二人の間にはそれなりの緊張感が漂う。

その間で千葉は椅子の背もたれに体重を掛けたまま、面白そうに口元を歪めた。

充分すぎる成果だ。

「あとそれから、今から勝負の時まで殴り合いの喧嘩は禁止だ。怪我したら、正確な実力が分からなくなる。異論はないな」

「ありません!!」

「……分かった」

勢いよく答える笠原と、渋々と答える東野。

東野だって、ただの間拔けな馬鹿ではない。

千葉の魂胆は、あのあからさまな態度を見れば大体は察する事が出来る。

彼としては組長としての地位など、どうでもいい。

やらなくて済むなら助かったと思うほど嫌なことだ。

しかし、それ以上に、笠原から馬鹿にされ続けることは嫌なことだ。

両方とも嫌なことで一緒に投げ出してしまえば楽だったに違いないが、それは出来ない相談だということは彼にも分かる。

望みもしない勝負事に立たされて、負けても勝つても嫌なことだけで、明確なメリツトが見えない。

だが、意地もある。

このまま負けるのも、かなり気に入くない。

負けた場合のデメリツト——笠原に馬鹿にされ続けるだろう未来は、特に我慢できない。

結果、東野は渋々と了承の意を伝えることになる。

笠原は喜色満面の笑みを浮かべ——。

東野は苛つきと敵意を隠さず——。
その間で、千葉は一人ほくそ笑んだ。

第29話 ミッションミーティング

1998年10月19日 10時12分

帝国陸軍相馬原駐屯地

第2機械化歩兵連隊第3中隊教場

「——さて、笠原と東野も戻ってきたことだし、ミッションミーティング^Mを始めるか」
険悪な雰囲気を漂わす笠原と東野が教場に帰ってくると、樽木はいつものように陽気な声で第一班作戦会議の開始を宣言した。

彼にとって、笠原と東野の仲が悪いのは織り込み済みのこと。

他人が仲良くさせようとしても、急に仲良くなるようなものでもない。

集団生活を始めた最初の頃にはよくある出来事で、彼自身にも似たような経験はある。
だから、気にも留めずに始める。

戻ってきた二人が座る場所は、いつもの通りだった。

坂上と笠原、真木野と高井、三輪と胡桃沢、東野と田淵の組み合わせ。

一つの長机に二人が座る組み合わせだが、これは自由に座らせているからであって、

千葉と樽木が作り上げた班編制とは関係がない。

樽木の合図で、窓際に近い坂上や三輪がカーテンを閉める。

それと同時に真木野と高井がプロジェクター用スクリーンを伸ばし、樽木はプロジェクターと繋げておいたパソコンを操作し、各種資料を立ち上げた。

白い画面に班編制表が浮かび上がり、それを赤いレーザーポインターで示しながら説明する。

「編成は昨日の夜に口頭で伝えたが、念のためにもう一度伝えておく。第一組、千葉一曹、胡桃沢、真木野、高井」

「はい」

「はいっ」

「……はい」

樽木に名を呼ばれた三人とも、はいと答えてはいるが元気も覇気もない。

むしろ、暗い雰囲気が漂う。千葉の元で戦うという現実に打ちひしがれているのだろう。

一々突っ込んでいられないので、言葉が続ける。

「第二組、俺、笠原、三輪」

「はいッ！」

「はー」

鬱陶しいほどの勢いと元気で答える笠原と、それに驚く三輪。

笠原の勢いには樽木も驚いて、目を見開いた。

班編制で愚痴を零していたとは、ましてそれが原因で東野と喧嘩をしていた少年の返事とはとても思えなかった。

(……一体、千葉一曹は何を吹き込んだんだ?)

そんな疑問が湧き、これは確認しておく必要があると頭の片隅に留めておく。

いくら何でも変わりすぎだ。

「第三組、東野、坂上、田淵」

「……了解」

「はー」

「はー」

対照的に、同じく千葉に何かを言われたはずの東野は不機嫌な雰囲気崩さない。

樽木は千葉が東野に不利で笠原に有利な何か交換条件でも出したのかと訝しんだが確信もない。

考えすぎて間が空くのも間抜けなので、画面を切り替えた。

「今言った組編成は戦場じゃ、基本と組み合わせだ。お互いに四周^{ししゅう}を警戒して、何かあつ

たらちゃんと口に出して言え。今までの訓練で散々言ったが、自分だけがBETAに気付いても意味がない。班の全員に知らせるんだ。特に、千葉一曹や俺には直ぐに言うこと。忘れるなよ」

念を押す樽木と返事をする班員達。

その中でもやはり笠原の大きな返事が目立つ。

野球でもやっているかのような錯覚を抱かせるほどの勢いと元気がある。

樽木としては——いや、上官としては歓迎すべき行動だ。

人は感情の生き物だ。

感情は雰囲気にとりとも容易く流され、それは行動に反映される。

日常的なことならば何ら問題なくとも、命を賭けた極限状況ではそれが顕著となる。

それと同時に人は習慣の生き物だ。

無意識下に慣れ親しんだ行動を取る。

特に考える余裕がない——咄嗟の行動のときは極めてそうなりやすい。

つまり、戦場などの極限状況下ではその二つが生死の分け目に結びつく。

軍人が行う厳しい訓練は、極限状態でも生き残る為の新たな習慣をその身にしみこませるための反復演練である。

それを意識させ、頭の方に染み込ませるためにこのミッション^Mオンミーティング^Mがある。

作戦会議と大仰な名前だが、実際は各種行動の再認識と注意事項が主となる。

ここで最も重要なのが、班員全員の意思の統一。

集団行動では、それが全ての要となる。かなめ

「各組には大まかに言っていると、基本的な役割があり、第一組が支援射撃及び対光線級、第二組が対大型種、第三組がその他の組の援護及び小型種との戦闘。そこところまでは覚えていけるよな？」

樽木が訊ねると、確実に覚えている坂上、笠原、東野が思い思いの声で答え、残りの班員は首を縦に振った。

本来、帝国陸軍の通例では第三組が支援射撃を受け持つのだが、千葉と樽木はそれを変えた。

理由は単純明快で、新兵達の支援射撃など当てにならないからだ。

頭を悩ますところは、役割分担をこなすことが出来ない人員を以て編成しなくてはならないところだ。

どこかで妥協が出る。

第一組を、千葉を含めて四名にすることで支援射撃の火力を上げる。

それと同時に体力的に劣る三人を集中させ、第三組——特に東野の負担を軽減する。

第二組は、いざというときの命綱である対大型種用の対戦車ミサイル等を扱う樽木が

中核の編成だ。

対戦車ミサイルを発射する前後は射手である樽木が完全に無防備になる。

それを援護し、また予備の弾薬やミサイルを運搬するのが笠原と三輪の役目だ。

第三組は東野が率いるが、彼が最も指揮を執りやすい人員で編成した。

東野とコミュニケーションを確立している坂上と、舎弟の田淵。

坂上なら、東野が馬鹿なことをしようとしても歯止めを掛けることはほぼ間違いない、一種の安全弁としての機能を期待できる。

田淵は素直に東野と坂上に付いていくだろう。

土壇場で内部分裂する可能性が最も低い組編成がこの第三組で、その点だけは第一組と第二組よりも安定している。

第一組は千葉以外が戦闘力——特に体力が低すぎ、第二組は樽木が対戦車ミサイルを射撃する前後は素人二名で戦うことになる。

その点が大きな弱点だが、その為に自立心が強く自己判断をある程度出来るだろうと見積もれる笠原と三輪を組ませている。

樽木の言葉は続く。

「俺たち機械化歩兵部隊は至近距離で小型種と戦い、それらの脅威を排除することが求められている部隊だ。市街地戦闘に置いてはビルの谷間などの戦術機や戦車の機動力

が発揮できない場所で戦い、塹壕戦においては戦車等を格納する最も広い坑道の防衛に当たる。味方を撃つてしまいそうなほどの近距離戦闘が多いため、各種格闘用の武器を扱い、必要とあらば、大型種も対戦車ミサイル等で撃破することを求められる」
(実際にはどこまで出来る事なのだろう……)

胡桃沢は目立たぬように欠伸をかみ殺しながら、ふとそう思った。

女性陣の真木野や高井とは違い、彼は千葉と一緒になったことを絶望的だとは思っていない。

ラッキーだったとさえ、思うところもある。

彼は樽木が言っていることは今までの復習だということの流れから分かるので、半ば聞き流しながら、ぼんやりと頬杖をつきながら今後の展望を考え始めた。

千葉と同じ編成になったことで良かったと思うことは幾つかある。

まず、純粋に生き残る確率が高くなったこと。

この班の中では間違いなく最も強く、最後まで生き残るであろう人物は千葉。

この点に疑問を抱く人間はほとんどいない。

しかも有難いことに、第一組だけは人数が一人多い。

物量が凄まじいBETA相手には、こちら側にも物量が必要だ。

そう考えれば、人数の多さは生き残る確率に直結する。

女性陣は確かに非力だが、強化外骨格でその弱点を補うのだ。

それほど見当違いのことを考えているとは思っていない。

次に、東野と違って面倒くさい判断をしなくて済むこと。

徴兵されてまだ一カ月も経っていない。

それでいて、自分の命を他人の命を左右する決断なんて、まともにも出来るわけがない
と思っっている。

その点だけは東野に同情する。東野のような協調性に乏しい不良崩れは、胡桃沢個人
としては好きタイプではない。

むしろ、嫌いなタイプに入る。

しかしながら、東野とてほぼ同じ時期に徴兵された少年だ。

僅か二年ではあるが公務員として社会人としての経験もある。

その手の決断の重みは、自分が高校生だった時に比べれば理解できるようになったと
自負している。

人の生死に絡む決断の重みは、考えれば考えるほど深みに嵌る底無し沼のようなもの
だ。

それでいて、紋切り型の正解など有りはしない。

役所とかにあるトラブル対処マニュアルのようなものが存在しないからだ。

例えば、自分の決断で部下を動かした直後、その人物が死んだとしよう。

自責の念に駆られるだろうか？

死んだのはしようがないからと割り切ってしまうか？

自分が殺したわけではないから、自分の判断は関係ないとも言いきろうか？

そこまであの少年は考えているのだろうか？

そんな意味のない思考が胡桃沢の脳裏で堂々巡りをする。

胡桃沢が、ふと視線を樽木に戻す。

この班でたった一人の重火器のスペシャリストは、プロジェクターに映る地図で第二機械化歩兵連隊の受け持ち区域を説明しているが、そのあまりの広さに、胡桃沢は溜息を吐き出しそうになったが、さすがにそれをしない程度の分別は持っているし、ここでワザと溜息を漏らすほど厚顔でもない。

全滅した金沢の第七機械化歩兵連隊出身の樽木だが、そんなことを感じさせない説明が続く。

「——以前の第二機械化歩兵連隊は、新潟県南部の上越市から中部の長岡市までが受け持ち区域だった。が、今現在みんな知っているとおり、BERTAから上越市は取り戻したとはいえ未だ壊滅状態。うちの部隊も再編中ということもあり、いま上越市を守っているのは別の部隊だ。よって、今現在の第二機械化歩兵連隊は予備戦力として運用され

ており、その際には日本全国どこにでも行くと思つていいほどだ。ま、無料ただで全国旅行できると思えばいいさ」

樽木はそう言つて笑つて見せたが、班員達の反応は無い。

少しだけ肩を竦めて、説明を続ける。

胡桃沢も何も言わなかつたが、樽木三曹も大変だなあ。と、そんな感想だけが思い浮かんだ。

「実際のところ考えられるのは、北は佐渡島ハイヴからの防衛に当たる新潟市と新潟県北部の新発田市付近。南は北上を続けているBETA群の迎撃の為に構築中の箱根防衛線への緊急展開。西では、日本アルプスの隙間から浸透してくる小型種迎撃のための警備任務。ざつと思いつくだけでこれだけの範囲になる。即動出来るように常に完璧に準備はしておくように。今日の午後一番に俺が全員点検するからな」

「——げ！」

「——え!？」

「うわあ……」

一瞬、顔色が変わる真木野、高井、三輪の三人娘。

その理由が分かる樽木は苦笑した。

「どうせお前ら訓練で官品の下着洗つて、私物の下着入れてんだろ？ 安心しろ。お前

樽木は改めて全員の顔を見た。

その視線で胡桃沢は頬杖を外した。

「群馬県相馬原は日本のヘソとも云える場所だ。日本海側にも太平洋側にも行ける中間地点にある。そしてBETAは、太平洋側は静岡、日本海側は佐渡にいる。今現在、再編成中の我が連隊だが、いつ何時非常呼集や緊急出動があるか分らない。BETAが東京まで迫ってきたら再編成だからとか言っていられないのは分るだろう？ それを防ぐためにお前たちは徴兵されたんだ。その時は、戦って生き残れ。全力で——」

ぶつ切りの言葉。

続くであろう、その先。

微妙な間。

樽木には躊躇いがあった。

胡桃沢は僅かに首を傾げた。

急に妙な面持ちになった第二組長。

下ネタを言った時の軽い表情からの余りにも落差に、高井は訳も分らないうちに不安に駆られた。

——？

自分の心が少しわからない。

そんな彼女の隣で、真木野はただ漠然と耳を傾け、三輪は次に告げられる言葉を咄嗟に考えた。

坂上も田淵も、そして笠原も似たようなものだった。

その中で、東野だけが険しい表情を浮かべた。

彼だけは感覚で理解し、また既に経験していた。

「——あと半日だから教えるけどな。今日の夕方、課業終了を以て班集中訓練は終了する。そこから先はもう普通に実戦任務を付与され、班は何らかの任務のローテーションに入ることになると思う。これからはこんな風に一日中訓練をするなんてことは無くなる。良くも悪くも軍隊としての普通の生活が始まる。体育訓練なんて半日程度しかできなくなるだろう。身体は楽になるかもしれないが、雑用も増えるし、気疲れも増える。自分でやる気を出さなければ、体力を維持することすら難しくなるかもしれない。体力は戦場で生き残るためには絶対に必要だ。戦い続けるために……。いや、何よりも逃げるために絶対に必要なんだ。余暇の時間は家族に手紙を書いたり、電話をしたりとなかなか時間が無いことも分かっているが、体力錬成だけは習慣化しろ。一人じゃ無理でも、みんなで声を掛け合えば何とか出来る。一人減るだけで、みんなが死ぬ可能性が高まる。どうせ生き残るなら、全員生き残った方が気分良いだろう？」

最後の樽木の問い掛けには誰も声を出して答えられなかった。

余りにも誰かの死が前提としての話だったので、『自分』がそうなってしまうことを考えると反応が鈍った。

声になるか、ならないかの微妙な感じで答え、首を縦に振る。

元気だった笠原も一瞬、鈍った。

だが、前を見る。

正確には『先』を思う。

生き残る自分を思い描いてから、彼は腹に力を込めて声を出した。

「——はい！それが一番良いです！」

樽木が笠原を見ると視線が合ったが、少年は臆せずに大きく頷いた。

坊主頭の野球少年は生き残るといふ決意を眼差しに込める。

樽木はそれを受け、満足した表情を大きく、意識して浮かべた。

破顔したような笑み。

「おう！全員で生き残ろうぜ！」

明るい口調。確かな発音。満面の笑み。

悲壮感も憂いも欠片も無い雰囲気。

樽木が持つ天性の明るさ。

それが彼を見る全ての者を包む。

引つ張られるように、真木野は笑みを浮かべて声を掛けた。

「ミワっち、桃さん、大丈夫だよ。みんなで頑張ろう」

「……そう、だね。頑張ろう。玲ちゃん」

高井の少しきこちない応答。

だけど、浮かべる微笑み。

「こんなところで、ミワっちって呼ぶな。頑張るに決まってるじゃない」

三輪の開口一番は少し拗ねたような口調で注文。

それからニヤリと笑う。

「樽木三曹の言うとおりですね。みんなで生き残った方が良いに決まっています。何より

も、それが一番楽しいに決まっています。頑張りましょう」

坂上が先生らしい言葉の纏め方で締めると、田淵は何度も大きく頷いた。

何が嬉しいのか分からないが、彼も笑顔になって頷く。

上手く言い表せない一体感に戸惑いながらも胡桃沢も、それを肯定し、支持した。

「みんなで頑張れば、きっと大丈夫ですよ」

胡桃沢自身それが根拠もない言葉だと知っているが、それを信じてみようか——い

や、縋ってみようかと思つた。

樽木が先ほど言ったことだつて、帝国軍人ならばなかなか言えないはずの言葉なの

だ。

彼は確かに『逃げるため』と言った。

体力は戦うためにも必要だが、逃げるためにも必要だと言いつつた。

まだまだ若年で経験も浅いとは言え、胡桃沢だつて公務員だつた。

組織の論理も当然のことながら経験している。

骨身に染み込んでいるレベルではないが、全てを無視することが出来ないことも知っている。

胡桃沢は地方公務員だつた。

言うまでも無く、公務員とは公僕である。

誰もが、公共のための仕事をすると思っている。

新人研修でも、その点は当然教育される。

同じように、軍人は戦うものだと言われている。

逃げることなく敵に立ち向かい、戦い続ける者たちだと思われている人が多い。

事実、徴兵されてからの訓練はその目的に一致している。

それでも樽木は戦うため。と、同時に逃げるためとも言いつつた。

彼の経験がそれを言わせるのかも知れない。

胡桃沢はそれに素直に好感を覚えた。

彼から見れば、樽木という人物は少々型破りな感じのする軍人である。

胡桃沢の先入観では、軍人は規律に五月蠅く、無駄に精神論を重視するというイメージが強い。

それらにはそれを重視するだけの十分に合理的な理由があるのだが、胡桃沢にそれが分かるわけもなく、誰かが丁寧に教えてくれる訳でもない。

ただの一介の公務員であつた胡桃沢が、前触れも無く、BETAの本土上陸により徴兵され最前線に立たされるのだ。

彼にとっては想定外としか言い様のないことだつた。

別に成人男性の徴兵は今に始まつたことではない。

だが、彼はそれを自らの努力と運で——凄まじい倍率を勝ち抜き、地方公務員という職を掴んだ。

それ故に徴兵されていなかった。それは、ある種の特権と言ってもよい。

彼は極めて合法的に徴兵から逃れていた。

その前提条件が数ヶ月前に崩れ去つた。

今や胡桃沢は最前線に立ち、異形の宇宙生物であるBETAと命懸けの戦いをしなくてはならない。

そんなことは、公務員になってから全く考えたことがなかつた。

人類と社会全体の危機としてのBETAの脅威は認識していたが、それを個人の生命の危機であると具体的には認識していなかったのも無理もない。

それはまるで地震などの自然災害に対する、根拠のない樂觀視を元にした心境に似ている。

——自分は大丈夫だ、と。

そう、根拠もなく思い込む。

胡桃沢もそうだった。

実際に、職場で招集令状を上司から手渡される、一ヶ月前までは……。